

玻璃、金屬等ヲ以テ單製作シ或ハ相交テ製作シタル諸品並右各種ト他ノ物質トモリ  
成立タル諸製作品

(廿三) 硫酸無稅輸出差 明治十三年七月廿日御布告第三十八号

本年八月一日ヨリ硫酸無稅輸出差許候條此旨布告候事但課稅ノ節ハ二ヶ月前ニ布告スベ  
キ事

(廿四) 硫黃無稅輸出差 明治十四年四月廿九日御布告第二十七号

明治十四年五月十五日ヨリ硫黃無稅輸出差許候條此旨布告候事但課稅ノ節ハ二ヶ月前  
布告スベキ事

○第六 驛遞之部

(一) 郵便 明治十五年十二月十六日御布告第五十九号  
郵便條例別冊ノ通制定シ明治十六年一月一日ヨリ施行ス  
右奉 勅旨布告候事

別冊

郵便條例目次

|      |            |      |         |
|------|------------|------|---------|
| 第一章  | 郵便物        | 第二章  | 郵便稅     |
| 第三章  | 郵便切手封皮葉書帶紙 | 第四章  | 免稅郵便    |
| 第五章  | 書留郵便       | 第六章  | 郵便物遞送配達 |
| 第七章  | 別配達郵便      | 第八章  | 郵便私書函   |
| 第九章  | 留置郵便       | 第十章  | 貨幣封入郵便  |
| 第十一章 | 郵便沒書       | 第十二章 | 郵便爲替    |
| 第十三章 | 驛遞局貯金      | 第十四章 | 外國郵便    |
| 第十五章 | 罰則         |      |         |

郵便條例

第一章 郵便物

第一條 凡郵便物別テ四種ト爲ス

一 書狀○二 郵便葉書○三 毎月一回以上發行スル定時印刷物及其附録○四 書籍  
帳簿各種ノ印刷物、寫眞、書畫、繪圖、郵紙、營業品ノ見本及雛形

第二條 何品ヲ問ハス此條例ニ牴觸セサルモノハ第一種郵便物トナスヲ得○第三條 封  
緘シタル郵便物ハ第一種郵便物トナスベシ○第四條 第二種郵便物ヲ他種ノ郵便物ト合

第六 驛遞之部

裝スルトキハ總テ第一種郵便物トナスヘシ○第五條 第二種郵便物左ニ記載シタル所爲アルトキハ第一種郵便物トナスヘシ

一 裁斷又ハ破却シタルモノ○一 税額印面ニ文字ヲ書シタルモノ○一 税額印面ニ郵便切手ヲ貼付シタルモノ○一 紙ニスルモノヲ除ク其他ノ品ヲ貼付シタルモノ○一

一 葉ヲ折リ之ヲ全ク糊着シ又ハ數葉ヲ合せ之ヲ全ク糊着シタルモノ○一 表面ニ音信文ヲ記載シタルモノ

第六條 第三種郵便物ハ其發行人ヨリ定時印刷物タルヲ証シテ驛遞總官ノ認可ヲ受ケ驛遞局認可ノ文字ヲ印刷スヘシ但其文字標題番號及發行ノ年月日ヲ見易カラシムヘシ 其附録ハ其本紙ノ標題番號及發行ノ年月日ヲ印刷シ冊子トナサスシテ本紙ニ添付シ且本紙ノ重量ニ超過セサルモノニ限ルヘシ○第七條 第三種第四種郵便物ハ封緘セサルモノトス○第八條 第三種第四種郵便物ニ音信文又ハ暗號隱語ヲ筆書スルトキハ第一種郵便物トナスヘシ○第九條 營業品ノ見本及雛形ハ雙方又ハ一方營業者ト往復スルモノニ限ルヘシ○第十條 營業者ニアラサルモノ、問ニ往復スル見本及雛形ハ第一種郵便物トナスヘシ○第十一條 異種ノ郵便物ヲ合裝スルキハ總テ其種類中高額税ヲ課スヘキ郵便物トナスヘシ但第四條ニ記載シタルモノハ此限ニアラス○第十二條 郵便物ノ重量ハ郵便物ト手封皮帶紙ノ重量ヲ合算スルノモトス○第十三條 第三種第四種郵便物 營業品ノ見本ハ一個ノ重量三百目ニ超過スヘカラス○第十四條 營業品ノ見本及雛形ハ一個ノ重量四十八匁ニ超過スヘカラス○第十五條 郵便物ノ大サハ曲尺ニテ長一尺二寸幅八寸厚五寸ニ超過スヘカラス○第十六條 左ニ記載シタルモノハ郵便物トナスヘカラス 一 毒藥、劇藥、流動物、流動爆發燃燒腐敗シ易キ物、字化スヘキ物、動物、植物、及鋒刃器硝子器、陶器等ノ損傷シ易ク又他ノ郵便物ヲ損害スヘキ物品○一 風俗ヲ害スヘキ文書、畫圖、寫眞、及物品○一 金銀、寶玉、○ 一 貨幣但第十章ノ規則ニ從フモノハ此限ニアラス

第二章 郵便税

第十七條 郵便税ハ郵便物ノ種類ニ從ヒ其額ヲ定ム

第一種郵便物 重量二匁毎ニ亦同シ

第二種郵便物 一葉 一錢

第三種郵便物 一號一個重量十六匁毎ニ滿亦同シ 十六匁未 一錢

二號又ハ二個以上一束重量十六匁毎ニ滿亦同シ 十六匁未 二錢

第四種郵便物 重量八匁毎ニ亦同シ 八匁未滿 二錢

第十八條 郵便税ハ郵便切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納タルモノトス郵便封皮乘書帶紙ハ切手ヲ貼付シタルト同般ナリトス但驛遞總官ト約定アルモノハ此限ニアラス○第十九條 納税ニ用ヒタル郵便切手并封皮乘書帶紙ノ税額印面ハ郵便局ニ於テ消印スヘシ○第二十條 郵便税ニ過納アルモノ已ニ其税額印面ニ消印シタル後ハ之ヲ還付セス○第二十一條 未納税又ハ不足税ノ郵便物ハ受取人ヨリ其額ノ二倍ヲ徵收スヘシ 受取人其郵便物ヲ受取ラズシテ差出人ニ還付スルトキハ其差出人ヨリ其額ノ三倍ヲ徵收スヘシ○第二十二條 未納税又ハ不足税ノ郵便物配達シ能ハス差出人ニ還付スルトキハ其額ノ二倍ヲ徵收スヘシ差出人前ニ係ル未納税又ハ不足税ノ郵便物ヲ差出人ニ還付スルトキ亦同シ○第二十三條 第十三條第十四條第十五條ニ背戾スル郵便物ヲ差出人ニ還付スルトキハ未納税又ハ不足税ノ二倍ヲ徵收スヘシ○第二十四條 人民ヨリ官廳ニ差出ス郵便物ハ郵便税完納ニ限ルヘシ未納税又ハ不足税ノモノハ差出人ニ還付シ其額ノ二倍ヲ徵收スヘシ○第二十五條 未納税又ハ不足税ヲ徵收スルトキハ郵便局ニ於テ郵便切手ヲ郵便物ニ貼付シ其切手ニ未納又ハ不足ノ印ヲ捺シ其証トナスヘシ

第三章 郵便切手封皮乘書帶紙

第二十六條 郵便切手郵便封皮郵便葉書郵便帶紙ハ日本政府ニ於テ發行セシモノタルヘシ○第二十七條 郵便切手封皮葉書帶紙ハ郵便稅納ノ証トシ又郵便切手ハ書留手數料并別配達料納濟ノ証トナスモノトス○第二十八條 郵便封皮ヲ用ルトキ其郵便物ノ重量ニ因テ稅額ニ不足ヲ生スルトキハ郵便切手ヲ以テ之ヲ補フヘシ○第二十九條 郵便封皮ノ價位ハ其印面ノ稅額ニ製造費ヲ加ヘタル額ヲ以テ驛遞總官之ヲ定ムヘシ○第三十條 郵便帶紙ハ第三種郵便物一號一箇ヲ以テ達スルモノニ用ユヘシ但重量十六匁以下ノモノニ限ルヘシ○第三十一條 郵便帶紙ハ第三種郵便物發行入若クハ賣捌人ノ請求ニ依リ驛遞局ニテ賣下クヘシ○第三十二條 郵便切手封皮葉書ヲ賣ルモノハ驛遞總官ノ免許ヲ受ケ郵便切手賣下所ノ標板ヲ掲クヘシ○第三十三條 郵便切手封皮葉書ハ郵便局郵便受取所郵便切手賣下所ノ外ニ於テ賣買スヘカラス○第三十四條 郵便局郵便受取所郵便切手賣下所ハ郵便切手封皮葉書ノ印面稅額ヨリ低價ヲ以テ賣ルヘカラス○第三十五條 郵便封皮葉書帶紙ノ稅額印面ヲ切取リ郵便切手ニ代用スルモ其効用ヲ有セス○第三十六條 郵便切手并封皮葉書帶紙ノ汚斑毀損捺印アルモノ及稅額印面不明瞭ナルモノハ其効用ヲ失フ然レモ其未タ使用セサルモノニ限り二人以上ノ証人ヲ立テ其原由ヲ明瞭ナラシムルトキハ驛遞局ニ於テ定價十分二減ニテ買戻スヘシ○第三十七條 驛遞局及一等郵便局ニ於テハ四枚以上聯續シタル郵便切手并封皮葉書帶紙ヲ其所持人ノ請求ニ依リ定價十分一減ニテ買戻スヘシ

第四章 免稅郵便

第三十八條 郵便郵便爲替及貯金ノ事務ニ關スル郵便物ハ其稅ヲ免除ス○第三十九條 免稅郵便物ハ驛遞局郵便局府縣廳府縣所屬廳郡區役所并以上各廳派出官吏相互ノ間又ハ之ト往復スルモノニ限ルヘシ○第四十條 免稅郵便物ハ表面ニ郵便事務爲替事務貯金事務ノ文字ヲ記載スヘシ○第四十一條 官廳ニ宛テ又ハ官廳ヨリ差出ス免稅郵便物ハ官氏名

名若クハ廳名課名ヲ記載シ派出官吏ニ宛テ又ハ派出官吏ヨリ差出ス免稅郵便物ハ官氏名ヲ記載スヘシ○第四十二條 人民ヨリ差出ス免稅郵便物ハ宿所氏名ヲ記載スヘシ○第四十三條 免稅郵便物ニ他ノ音信文或ハ暗號隱語ヲ記載シ又ハ有稅郵便物ヲ附シタルモノハ相當種類ノ郵便稅ヲ徵收スヘシ

第五章 書留郵便

第四十四條 書留郵便物ハ郵便局ノ帳簿ニ登記シ遞送配達ノ受授ヲ証スルモノトス○第四十五條 書留手數料ハ郵便物ノ何種ニ拘ラス六錢トス○第四十六條 書留郵便物ハ郵便稅手數料共前納ニ限ルヘシ○第四十七條 書留手數料ハ郵便切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納メタルモノトス○第四十八條 書留郵便物ヲ差出ストキハ其表面ニ書留ト記載シ郵便局若クハ郵便受取所ニ於テ之ヲ主務者ニ交付シ印刷シタル式紙ニ郵便局若クハ郵便受取所ノ印及主務者ノ印ヲ捺セル受取証書ヲ受領スヘシ○第四十九條 書留郵便物ノ配達ヲ受ケタルモノハ其差出人及受取人ノ氏名配達ノ年月日ヲ記シタル受取証書ニ調印スヘシ本人不在ナルトキハ其代人記名調印スヘシ○第五十條 免稅郵便物ハ書留手數料ヲ納ムルニ及ハス

第六章 郵便物遞送配達

第五十一條 郵便物遞送配達ハ郵便局ニ於テ之ヲ管スルモノトス○第五十二條 郵便局ノ廢置ハ驛遞總官新聞紙ヲ以テ之ヲ公告スヘシ○第五十三條 郵便物ハ其宛名ノ家ニ配達シ二名以上ニ宛タルモノハ其内ノ一名ニ配達スヘシ肩書寄宿所ノ類以アルモノハ其肩書ノ家ニ配達スヘシ○第五十四條 完納稅郵便物宛名ノ家ニ於テハ其配達ヲ拒ムヘカラズ免稅郵便物亦同シ但市外別配達料船料貨幣遞送配達賃ニ追納アルモノハ此限ニアラス○第五十五條 未納稅又ハ不足稅ノ郵便物受取人ニ於テ其稅ヲ納メサルトキハ之ヲ受取ルヲ得ス○第五十六條 郵便物ヲ開封シ又ハ其帶紙或ハ結束ヲ脱シ或ハ音信文ヲ讀過

第六 驛遞之部

ナルトキハ之ヲ受取リタルモノトナスヘシ但第百十五條ノ郵便物ハ此限ニアラス○第五十七條 郵便物配達ヲ受ケタル肩書ノ家ニ於テ其受取人移轉シタルトキハ直ニ之ヲ其配達人ニ還付スルカ或ハ其郵便物ニ加記又ハ附箋シ再ヒ郵便ニ出スヘシ但受取人ニ達スル爲メ其家ニ留メ置クモ日數三十日ニ過クヘカラス○第五十八條 其家ニ属セサル郵便物ノ配達ヲ受ケタルトキハ其由ヲ附箋シ速ニ之ヲ郵便ニ出スヘシ 其郵便物ヲ誤テ開封シタルトキハ更ニ封緘シ其事由ヲ副書シ速ニ之ヲ郵便ニ出スヘシ○第五十九條 配達シ能ハス或ハ未納稅又ハ不足稅ヲ受取人ニ於テ納メサル郵便物ハ之ヲ其差出人ニ還付スヘシ但二名以上ヨリ差出シタルモノハ之ヲ其内ノ一名ニ還付スヘシ○第六十條 第十三條第十四條第十五條ニ背戾スル郵便物ハ之ヲ差出人ニ還付スヘシ○第六十一條 差出前ニ係ル郵便物ハ差出人ノ請求ニ依リ之ヲ還付スルコトアルヘシ○第六十二條 第四種郵便物ハ次便ヲ以テ遞送スルコトアルヘシ○第六十三條 遞送及集配ノ途中ニ係ル郵便物ハ其郵便物ノ受取人ヲリトモ受授スヘカラス○第六十四條 郵便局所在地ニ於テハ集配人ニ郵便物ノ差出方ヲ委託スヘカラス又集配人ハ其委託ヲ受クヘカラス○第六十五條 郵便物ハ差出人ノ爲メ郵便局ニ於テ之ヲ秤量テ成サス○第六十六條 郵便物ノ損害紛失及其損害紛失又ハ遲達ヨリ生シタル損失ハ驛遞局之ヲ償フノ責ニ任セス○第六十七條 書狀ハ郵便局ヲ經由セサレハ之ヲ送達シ又ハ送達セシムヘカラス但左ニ記載シタルモノハ此限ニアラス

一 送達料ヲ拂ハス臨時ニ親族朋友雇人ノ類ヲ以テ其發信者ヨリ受信者ニ直ニ達スルモノ○一 郵便ニ依ル能ハサル事故アリテ臨時ニ特使ヲ以テ其發信者ヨリ受信者ニ直ニ達スルモノ○一 貨物ト共ニ發スル無封ノ添狀送狀

第六十八條 軍艦及海軍所屬ノ船舶ヲ除キ凡内國各地ニ往復スル船車ノ所有主若クハ其代理者ハ驛遞局又ハ郵便局ヨリ左ニ記載シタル運送賃額ヲ以テ郵便物ノ運送ヲ托スルト

キハ之ヲ拒ムヘカラス但別段ノ約定アルモノハ此限ニアラス

一 第一種郵便物ハ一個一錢ニ超過セサル額○一 第二種以下ノ郵便物ハ一個五厘ニ超過セサル額

第六十九條 郵便物運送ノ約定ヲ爲シタルモノ或ハ運送ノ托ヲ受ケタルモノ其出發ノ日時ヲ定メ若シハ既定ノ日時ヲ變更スルトキハ速ニ之ヲ其地ノ郵便局ニ届出ツヘシ○第七十條 時期ヲ定メテ郵便物運送ノ命ヲ受ケタルモノハ其期ヲ變更スヘカラス○第七十一條 郵便物ノ運送ヲ爲スモノハ其郵便物ヲ安全ニ保護スヘシ○第七十二條 郵便物ヲ積載セル船舶ハ到達地ニ於テ其郵便物ヲ陸揚セシ後ニアラサレハ他ノ積載セル貨物ヲ陸揚スヘカラス○第七十三條 郵便物配達又ハ還付ヲ受ケタルモノ郵便局ニ於テ調査ノ爲メ其郵便物ノ封皮帶紙又ハ葉書ノ交付ヲ求メラルトキハ之ヲ拒ムヘカラス但郵便切手貼付アルモノハ其儘交付スヘシ

第七章 別配達郵便

第七十四條 別配達郵便物ハ書留郵便ニ限ルモノニシテ通常配達ノ例ニ拘ハラズ別ニ急速ノ配達ヲナスモノトス○第七十五條 別配達別テ二類トス

一 市内郵便局 別配達 一 市外郵便局 未設地 別配達

第七十六條 市内別配達料ハ東京京都及大坂ハ十錢其他ノ市内ハ六錢トス○第七十七條 市外別配達料ハ配達ノ郵便局ヨリ受取人ノ住所ニ至ル路程ニ應シ十八町毎ニ六錢トス十八町未滿亦同シ○第七十八條 別配達ハ郵便稅並別配達料共前納ニ限ルヘシ○第七十九條 別配達料ハ郵便切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納メタルモノトス○第八十條 市外別配達ハ配達地ニ到リ路程ノ差違ニ因テ其料ニ不足ヲ生スルモ其料六錢以上納濟ノモノハ仍ホ別配達トシテ取扱ヒ受取人ヨリ其不足額ヲ徵收スヘシ○第八十一條 市外別配達料不足額ヲ徵收スルトキハ郵便局ニ於テ郵便切手ヲ郵便物ニ貼付シ其切手ニ

不足ノ印ヲ捺シ其証トナスヘシ○第八十二條 船舶ニ達スル別配達ハ其船舶ノ碇泊所ニ從ヒ別配達料ノ外相當ノ解船料ヲ受取人ヨリ徴収スヘシ○第八十三條 市外別配達料不足額又ハ解船料ヲ受取人ニ於テ納メサルトキハ其郵便物ヲ受取ルヲ得ス 其郵便物ハ差出人ニ還付シ其額ヲ徴収スヘシ○第八十四條 別配達郵便物ヲ受取リタルモノハ市外別配達料不足額又ハ解船料ノ納付ヲ拒ムヘカラス○第八十五條 別配達ハ各郵便局ノ配達區域ニ拘ハラサルモノトス○第八十六條 甲郵便局所在地ニ達スルモノヲ乙郵便局ヨリ配達スルトキハ市外別配達トナスヘシ○第八十七條 市內別配達ハ其郵便局ノ表面ニ別配達ト記載スヘシ○第八十八條 市外別配達ハ其郵便物ノ表面ニ何地郵便物ヨリ別配達ト記載スヘシ若シ其郵便局ヲ定メ難キトキハ單ニ別配達トノミ記載スヘシ○第八十九條 別配達トノミ記載セルモノハ各郵便局ノ配達區域ニ從ヒ其地ノ郵便局ヨリ配達スヘシ○第九十條 別配達郵便物受取人移轉シ其移轉先ニ達スルトキハ別配達トセスシテ配達スヘシ○第九十一條 免稅郵便物ハ別配達料解船料ヲ納ムルニ及ハス

第八章 郵便私書函

第九十二條 郵便私書函ハ郵便局ニ設置シ其開閉ニ供スル適當ノ鍵ヲ渡シ貸與スルモノトス○第九十三條 私書函ノ借受人ニ宛テタル郵便物ハ其住所ニ配達セズ私書函ニ入置クヘシ○第九十四條 私書函貸與料ハ一ヶ月金三圓以下ヲ以テ驛遞總官之ヲ定ムヘシ○第九十五條 私書函貸與期限ハ一ヶ月以上トシ其貸與料ヲ前納スヘシ○第九十六條 私書函借受人ニ宛テタル別配達書留及未納稅不足稅ノ郵便物ハ私書函ニ入レスシテ其住所ニ配達スヘシ○第九十七條 私書函ハ二人以上又ハ二會社以上ノ名ヲ以テ其一箇ヲ借受リルヲ得ス○第九十八條 私書函貸與ノ滿期ニ至ルトキハ速ニ其鍵ヲ郵便局ニ返納スヘシ之ヲ返納セサルトキハ前期ヲ經テ借受ケタルモノトスヘシ

第九章 留置郵便

第九十九條 留置郵便物ハ表記地名ノ郵便局ニ留置キ受取人ヲ待テ交付スルモノトス○第一百條 留置郵便物ハ其表面ニ何地郵便局留置ト記載スヘシ○第一百一條 留置郵便物ヲ受取ルモノハ其受取人タルヲ書面或ハ口頭ヲ以テ証スヘシ○第一百二條 留置郵便物ハ郵便稅完納ニ限ルヘシ○第一百三條 未納稅又ハ不足稅ノ郵便物ヲ留置トナストキハ之ヲ差出人ニ還付シ其額ノ二倍ヲ徴収スヘシ○第一百四條 留置期限ハ九十日ニ限ルヘシ 留置期限内ニ郵便物ヲ受取ラサルトキハ之ヲ差出人ニ還付スヘシ

第十章 貨幣封入郵便

第一百五條 貨幣封入郵便物ハ驛遞總官ト約定アルモノヲシテ特別ノ方法ニ依リ之ヲ遞送配達セシムルモノトス○第一百六條 貨幣封入郵便物ハ其重量ニ從ヒ第一種郵便物ノ稅ヲ前納シ別ニ封入ノ金額送達ノ路程ニ從ヒ貨幣遞送賃及配達賃ヲ通貨ニテ納ムヘシ但貨幣遞送賃ハ差出人ニ於テ前納シ配達賃ハ受取人ヨリ納ムヘシ○第一百七條 貨幣遞送賃及配達賃額ハ驛遞總官各郵便局ニ揭示スヘシ○第一百八條 封入ノ金額ハ三十圓ニ超過スヘカラス○第一百九條 封入ノ金額ハ其郵便物ノ表面ニ明記スヘシ○第二十條 貨幣封入郵便物ハ差出人ニ於テ同一ノ印刷ヲ以テ四所以上封印ヲ捺スヘシ○第二十一條 同一ノ差出人ヨリ同一ノ受取人ニ差出ス貨幣封入郵便物ハ一日一個ニ限ルヘシ○第二十二條 貨幣封入郵便物ハ其表記ノ金額及封印ヲ證トシテ授受スヘシ○第二十三條 貨幣封入郵便物ハ差出ストキハ郵便局ニ設ケアル員數證書用紙ニ式ノ如ク記載シ其郵便物ノ封印ニ用ヒタル印刷ヲ捺シ且主務者記名調印セル受取證書ヲ受領スヘシ○第二十四條 本人ノ封印ヲ捺シタル貨幣封入郵便物ヲ代人ヲ以テ差出シ員數證書ニ其代人ノ印ヲ捺ストキハ之ト同一ノ印ヲ其郵便物ニ四所以上添捺スヘシ○第二十五條 貨幣封入郵便ニアツタル郵便物中貨幣封入アルヲ郵便局ニテ見出シ又ハ推察スルトキハ之ヲ貨幣封入郵便トシテ取扱ヒ到

第六 驛遞之部

達地ノ郵便局ニテ其受取人ヲ召喚シ或ハ遞送約定アルモノヲ以テ配達シ受取人ニ開封セシメ封入ノ金額ニ從ヒ差立地ヨリノ路程ニ應シタル貨幣遞送賃及ヒ配達賃ヲ受取人ヨリ徴収スヘシ○第百十六條 貨幣遞送賃又ハ配達賃ヲ受取人ニ於テ納メサルトキハ其郵便物ヲ受取ヲ得ス 其郵便物ハ差出人ニ還付シ其額並還付ノ貨幣遞送賃及配達賃ヲ徴収スヘシ○第百十七條 貨幣封入郵便物配達シ能ハス之ヲ差出人ニ還付スルトキハ更ニ相當ノ貨幣遞送賃及前後ノ配達賃ヲ徴収スヘシ○第百十八條 貨幣封入郵便物ノ受渡ニ屬スル証書ハ証券印税ヲ納ムルニ及ハス○第百十九條 貨幣封入郵便物ヲ受取リタルモノハ其貨幣遞送賃又ハ配達賃ノ納付ヲ拒ムヘカラス○第百二十條 貨幣封入郵便物ニ事故ヲ生シ損失ヲ受クルモノアルモ驛遞局ハ之ヲ償フノ責ニ任セス○第百二十一條 郵便局主務者ノ疎虞懈怠ニ因リ貨幣封入郵便物ヲ失ヒタルトキハ主務者ヲシテ其貨幣ヲ償ハシムヘシ○第百二十二條 貨幣封入郵便物ヲ遞送配達中失ヒタルトキハ強盜難其他災變ニ罹リ看守者保護シ能ハサル實証アルモノ、外約定人ヲシテ其貨幣ヲ償ハシムヘシ

第十一章 郵便沒書

第百二十三條 郵便沒書ハ配達シ能ハス又還付シ能ハサル郵便物ヲ驛遞局ニ没入スルモノトス○第百二十四條 驛遞總官ハ沒書ヲ開封シ其文書ニ就テ更ニ其配達又ハ還付ヲ試マシメ尙ホ配達又ハ還付シ能ハサルモノハ新聞紙ヲ以テ之ヲ公告スヘシ○第百二十五條 沒書ハ公告ノ日ヨリ一ケ年間驛遞局ニ保存スヘシ 沒書中貨幣或ハ諸証書又ハ有價ノ物品アルトキハ驛遞局ノ帳簿ニ登記シ三ケ年間其沒書ヲ保存スヘシ但保存シ難キ物品ハ之ヲ賣却シ其代金ヲ領置スヘシ○第百二十六條 沒書ヲ一ケ年内ニ請求スルモノナキトキ及沒書中ノ貨幣諸証書有價ノ物品又ハ其賣却代金ヲ三ケ年内ニ請求スルモノナキトキハ之ヲ没入スヘシ○第百二十七條 沒書中ノ貨幣諸証書有價ノ物品又ハ其賣却代金ヲ三ケ年内ニ請求スルモノアルトキハ之ヲ還付シ諸証書ハ手数料ヲ徴収セスト雖モ貨幣或ハ

有價ノ物品ハ其價額十分一ヲ手数料トシテ徴収スヘシ但其額ハ五圓ニ超過スルヲ得ス○第百二十八條 沒書ノ受取方ヲ請求スルモノハ其受取人又ハ差出人タルヲ書面或ハ口頭ヲ以テ証スヘシ但驛遞局ニ於テ証人ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムヘカラス

第十二章 郵便爲替

第百二十九條 郵便爲替ハ驛遞總官ノ指定スル郵便局ニ於テ取扱フモノトス○第百三十條 爲替ヲ取扱フ郵便局ハ驛遞總官新聞紙ヲ以テ公告スヘシ○第百三十一條 爲替証書一枚ノ金額ハ三十圓以下トシ端數ハ厘位ヲ限リトス○第百三十二條 爲替料ハ驛遞總官之ヲ定メ新聞紙ヲ以テ公告シ及爲替ヲ取扱フ郵便局ニ揭示スヘシ○第百三十三條 同一ノ差出人ヨリ同一ノ受取人ニ宛テ同一ノ郵便局ニ於テ拂渡スヘキ爲替ノ振出一日金額三十圓ニ超過スヘカラス○第百三十四條 爲替差出人ハ郵便局ニ設ケアル爲替願書用紙ニ式ノ如ク記載調印シ爲替金及爲替料ト共ニ先ツ之ヲ主務者ニ交付シ後ニ爲替証書ヲ受領スヘシ○第百三十五條 爲替証書ハ其差出人ヨリ受取人ニ送付スヘシ○第百三十六條 爲替差出人ハ其振出局ニ爲替金ノ返戻ヲ請求スルヲ得但爲替料ハ返付セス○第百三十七條 爲替受取人其爲替証書ニ記載シタル拂渡局ニテ爲替金ヲ受取ルニ不便ナルトキ又爲替差出人其振出局ニ爲替金ヲ返戻ヲ請求スルニ不便ナルトキハ驛遞局ニ其証書ヲ納付シテ書換ヲ請求シ更ニ爲替金ヲ受取ルニ便ナル局ニ宛テタル証書ヲ受クルヲ得○第百三十八條 爲替金ノ拂渡及返戻ハ其爲替証書ト引換ニ限ルヘシ但郵便局ニ於テ証人ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムヘカラス○第百三十九條 爲替受取人ハ其爲替証書ニ式ノ如ク記名調印スヘシ爲替差出人爲替金ノ返戻ヲ受ルトキ亦同シ○第百四十條 爲替報知書ニ記載セル諸件ヲ明瞭ニ答ヘ能ハサルモノハ其爲替金ヲ受取ルヲ得ス○第百四十一條 代人ヲ以テ爲替金ヲ受取ル者ハ其爲替証書ノ裏面ニ委任文ヲ記載シ記名調印シ且代人ハ第百三十九條ノ手續ヲナスヘシ○第百四十二條 官衙社寺會社ニ宛テタル爲替金ヲ受取ルトキハ

第六 驛遞之部

其爲替証書ノ裏面ニ官衙社寺會社ノ名稱ヲ記シ其印ヲ捺シ且之ヲ受取ル所屬人ハ第百二十九條ノ手續ヲナスヘシ○第百四十三條 官衙社寺會社ノ受取ルヘキ爲替金ニシテ其官衙社寺會社ノ名稱ヲ附記シ其所屬人ニ宛テタルトキ宛名人自ラ受取ル能ハス又第百四十一條ニ依ル能ハサルトキハ第百四十二條ニ依ルテ得○第百四十四條 官衙社寺會社若クハ其所屬人ノ名ヲ以テ差出シタル爲替金ノ返戻ヲ受クルトキモ第百四十二條第百四十三條ノ手續ニ依ルヘシ○第百四十五條 爲替証書ノ効用ハ其証書ノ日附ヨリ百二十日ヲ限リトス○第百四十六條 効用ヲ失ヒタル爲替証書ハ差出人又ハ受取人ヨリ驛遞局ニ納付シ其書換ヲ請求スヘシ○第百四十七條 爲替証書ノ効用ヲ失ヒタル日ヨリ二ケ年以内ニ其書換ヲ請求セサルトキハ驛遞總官新聞紙ヲ以テ公告スヘシ 其公告ノ日ヨリ三ケ年內ニ爲替証書ノ書換ヲ請求スルトキハ其爲替金十分ノ一ヲ手数料トシテ徵收スヘシ 其公告ノ日ヨリ三ケ年ヲ過ルモ尙ホ其爲替証書ノ書換ヲ請求セサルトキハ其爲替金ヲ没入スヘシ○第百四十八條 爲替証書ヲ失ヒタルトキ又ハ汚損毀損シ判明ナラサルトキハ差出人ニ於テ証人ヲ立テ驛遞局ニ其事由ヲ證明シ更ニ再度ノ証書ヲ請求スヘシ○第百四十九條 爲替金ヲ返戻シ又ハ証書ヲ書換ヘ或ハ再度ノ証書ヲ交付スルハ其原証書ニ對スル報知書ヲ取戻シタル後ニ限ルヘシ○第百五十條 爲替証書ノ書換又ハ再度ノ証書ヲ請求スルトキハ更ニ相當ノ爲替料ヲ納ムヘシ但郵便遞送中ニ生シタル事故ニ因ルモノハ更ニ爲替料ヲ納ムルニ及ハス○第百五十一條 再度ノ爲替証書ヲ受領セシ後前キニ失ヒタル爲替証書ヲ見出シタルトキハ之ヲ驛遞局ニ納付スヘシ○第百五十二條 爲替資金ノ都合ニ因リ爲替金ノ渡方順延スルコトアルヘシ○第百五十三條 爲替証書又ハ報知書ニ失誤アルカ或ハ其報知書未達ノトキハ爲替金ノ拂渡ヲ延引スヘシ○第百五十四條 爲替金ノ受渡ニ屬スル証書ハ証券印稅ヲ納ムルニ及ハス○第百五十五條 郵便爲替ニ事故ヲ生シ損失ヲ受

クルモノアルモ驛遞局ハ之ヲ償フノ責ニ任セス○第百五十六條 此章ノ規則ニ從ヒ爲替金ヲ渡シタル後ハ其渡方ニ就キ異議ヲ唱フルモ驛遞局ハ其責ニ任セス

第十三章 驛遞局貯金

第百五十七條 驛遞局貯金ハ驛遞總官ノ指定スル貯金預所ニ於テ取扱フモノトス○第百五十八條 貯金預所ハ驛遞總官新聞紙ヲ以テ公告スヘシ○第百五十九條 一八一度ノ預ケ金額ハ十錢以上トシ端數ハ厘位ヲ限リトス 一日ノ預ケ金額ハ五十圓以下トス○第百六十條 一度ニ五十圓以上ヲ預ケントスルモノハ其都度貯金預所ニ設ケアル願書用紙ニ式ノ如ク記載調印シ驛遞總官ノ認可ヲ請フヘシ○第百六十一條 貯金ニハ利子ヲ付ス其利子ノ割合ハ驛遞總官ノ決定メ新聞紙ヲ以テ公告シ且貯金預所ニ揭示スヘシ但十錢未満ノ端金ニハ利子ヲ付セス○第百六十二條 貯金ヨリ生シタル利子ハ毎年六月十二月ニ於テ之ヲ元金ニ加ヘ驛遞局ノ原簿ニ登記スヘシ○第百六十三條 貯金ハ預リタル月ト拂戻ス月ハ利子ヲ付セス但驛遞局ヨリ拂戻証書ヲ發シタル月ヲ以テ拂戻月トナスヘシ○第百六十四條 貯金ヲ拂戻ストキ厘位未満ノ端數ハ切捨ツヘシ○第百六十五條 始テ預ケ金ヲナスモノハ貯金預所ニ設ケアル預ケ願書用紙ニ式ノ如ク記載調印シ之ヲ其貯金預所ニ出スヘシ但印判ヲ所持セサルモノハ引受人ヲ立ツヘシ○第百六十六條 貯金預ケ人ハ貯金預所ニ於テ貯金通帳ヲ受領シ其表紙ニ式ノ如ク記載調印シ此通帳ヲ預ケ金ヲ爲ス毎ニ預ケ金ト共ニ貯金預所ノ主務者ニ交付シ預ケ金ノ記入ヲ受ケ其通帳ヲ所持スヘシ○第百六十七條 貯金通帳ハ預ケ金受授ノ証トナスヘシ○第百六十八條 貯金預所ニ於テ預ケ金ヲ請取ルトキハ通帳ニ其金額及年月日ヲ記入シ貯金預所ノ印ヲ捺シ且主務者記名調印スヘシ○第百六十九條 一ノ貯金預所ヨリ受領シタル通帳ヲ以テ何レノ貯金預所ニ預ケ金ヲナスヲ得○第百七十條 既ニ貯金通帳ヲ受領シ所持セルモノハ何レノ貯金預所ニ於テモ別ノ通帳ヲ受領スルヲ得ス○第百七十一條 貯金通帳金額記載ノ部餘白ナキニ至

第六

驛遞之部

リ更ニ通帳ヲ要スルトキハ驛遞局ニ其通帳ヲ差出シ再度ノ通帳ヲ請求スヘシ○第百七十  
二條 貯金預ケ人ハ滿六ヶ月毎ニ驛遞局ニ貯金通帳ヲ差出シ原簿照合及利子記入ヲ受ク  
ヘシ○第百七十三條 預ケ金ヲナストキハ驛遞局ノ原簿ニ登記シ且貯金領収通知書ヲ共  
預ケ人ニ送達スヘシ○第百七十四條 貯金預ケ人ハ預ケ金ヲシタル日ヨリ左ノ期日內  
ニ貯金領収通知書到達セサルトキハ其期日ヨリ十五日內又到達スルモ記載ノ金額並年月  
日ニ相違アルトキハ到達ノ日ヨリ十五日內ニ驛遞總官ニ宛テ其申告書ヲ出スヘシ但申告  
書ハ郵便局ニ出シ其受取証書ヲ受領スヘシ

一東京

十日

一東京ヨリ百里未満

三十日

一東京ヨリ百里以外

六十日

第百七十五條 第百七十四條ノ申告書ヲ出サ、ルトキハ其預ケ金額驛遞局ノ原簿ニ登記  
ナキカ或ハ原簿登記ノ金額年月日ト其預ケタル金額年月日ト符合セサルモ驛遞局ハ原簿  
ニ登記シタルモノ、外其費ニ任セス○第百七十六條 貯金預ケ人ハ何レノ貯金預所ニ於  
テモ其貯金全額若シハ幾分ノ拂戻ヲ請求スルヲ得但未タ元金ニ加ヘサル利子ハ貯金ノ全  
額ヲ拂戻ストキニアラサレハ之ヲ受取ルヲ得ス○第百七十七條 貯金拂戻願人ハ貯金預  
所ニ設ケアル拂戻願書用紙ニ金額其他式ノ加シ記載調印シ通帳ヲ添ヘ貯金預所ヲ經由シ  
テ驛遞局ニ出スヘシ但貯金預所ヨリ通帳ノ受取証書ヲ受領スヘシ○第百七十八條 第百  
七十七條ノ拂戻願書及通帳ヲ驛遞局ニ於テ領収シタルトキハ貯金拂戻証書ヲ拂戻願人ニ  
送達スヘシ○第百七十九條 貯金ノ全額ヲ拂戻ストキハ通帳ヲ返付セス又其幾分ヲ拂戻  
ストキハ驛遞局ニ於テ其通帳ニ拂戻金額及年月日ヲ記載シ官印ヲ捺シ且主務者記名調印  
シ貯金預所ヲ經テ之ヲ返付スヘシ○第百八十條 貯金拂戻願人ハ拂戻証書ニ式ノ如ク記  
名調印シ貯金預所ニ交付シ拂戻金ヲ受取ルヘシ○第百八十一條 代人ヲ以テ拂戻金ヲ受

取ルモノハ拂戻証書ノ裏面ニ委任文ヲ記載シ記名調印シ且代人ハ第百八十條ノ手續ヲナ  
スヘシ○第百八十二條 拂戻金ハ其拂戻証書ノ日附ヨリ左ノ期日內ニ受取ルヘシ期日ヲ  
失スルトキハ更ニ驛遞局ニ其証書ノ書換ヲ請求スヘシ但郵便遞送中ニ生シタル事故ニ因  
ルモノハ此限ニアラス

一東京

十五日

一東京ヨリ百里未満

廿五日

一東京ヨリ百里以外

四十日

第百八十三條 貯金預ケ人死亡シタルトキハ其相續人ニ於テ証人ヲ立テ相續人タルヲ証  
スル書面ヲ出シ且其相續人ハ第百七十七條ノ手續ヲナシ貯金拂戻ヲ請求スヘシ○第百八  
十四條 預ケ金ヲナストキ引受人ヲ立ツルモノハ預ケ願書及拂戻願書其他調印ヲ要スル  
書類ニ氏名ヲ記シ其引受人亦記名調印スヘシ○第百八十五條 社寺會社ノ名ヲ以テ預ケ  
金ヲナストキハ預ケ願書及拂戻願書其他調印ヲ要スル書類ニ社寺會社ノ名稱ヲ記シ其印  
ヲ捺シ且擔當者一名記名調印スヘシ○第百八十六條 二人以上共同シテ預ケ金ヲナスト  
キハ預ケ願書及拂戻願書其他調印ヲ要スル書類ニ其總代人一名記名調印シ且共同者中ノ  
一名記名加印スヘシ○第百八十七條 社寺會社及共同ノ貯金ハ其社寺會社若シハ其總代  
人ヲ以テ一個ノ預ケ人ト看做スヘシ○第百八十八條 貯金預ケ人氏名變換改印轉籍轉住  
スルトキハ其屆書ヲ驛遞局ニ出スヘシ○第百八十九條 貯金預ケ人ノ引受人社寺會社ノ  
貯金擔當者共同貯金ノ加印者氏名變換改印轉籍轉住スルトキハ貯金預ケ人連印ヲ引受人  
ケ人ハ氏名ノ屆書ヲ驛遞局ニ出スヘシ○第百九十條 貯金預ケ人ノ引受人社寺會社ノ貯  
金擔當者共同貯金ノ加印者變更アルトキハ後任者及貯金預ケ人連印ヲ引受人アル貯金預  
ケ人ハ氏名ノ屆書ヲ驛遞局ニ出スヘシ○第百九十一條 共同貯金ノ總代人ヲ變更セントスルトキハ  
前任後任ノ總代及加印者連印ノ願書ヲ驛遞局ニ出スヘシ但前任ノ總代人連印スル能ハサ

第六

驛遞之部

百卅三



ルトキハ証人ヲ立ツヘシ○第九十二條 貯金預ケ人其引受人ヲ解ントスルトキハ印鑑ヲ添ヘ其引受人連印ノ届書ヲ驛遞局ニ出スヘシ○第九十三條 貯金通帳ヲ失ヒタルトキハ速ニ其届書ヲ驛遞局ニ出スヘシ○第九十四條 貯金通帳又ハ貯金拂戻証書ヲ失ヒタルトキ或ハ汚損毀損シテ判明ナラサルトキハ証人ヲ立テ驛遞局ニ其事由ヲ証明シ再度ノ通帳又ハ拂戻証書ヲ請求スヘシ○第九十五條 貯金通帳ヲ失ヒタルトキハ再度ノ通帳ヲ發シタル日ヨリ九十日間其貯金ノ拂戻ヲ請求スルヲ得ス○第九十六條 再度ノ貯金通帳ヲ受領セシ後前キニ失ヒタル通帳ヲ見出シタルトキハ舊通帳ヲ驛遞局ニ納付スヘシ○第九十七條 驛遞局ニ貯金通帳ヲ差出シ又ハ再度ノ通帳或ハ貯金拂戻ヲ請求シタル場合ニ於テ第九十四條ニ記載シタル期日内ニ通帳返付ナキカ又ハ再度ノ通帳或ハ拂戻証書到達セサルトキハ驛遞總官ニ宛テ其中告書ヲ出スヘシ○第九十八條 貯金通帳ハ賣買讓與又ハ書入質入スルヲ許サス○第九十九條 驛遞局又ハ貯金預所ニテ証人ヲ要スルトキハ貯金預ケ人之ヲ拒ムヘカラス○第一百條 貯金ノ受渡ニ屬スル証書ハ証券印稅ヲ納ムルニ及ハス○第一百一條 貯金拂戻方延滞シ爲メニ預ケ人ノ損失ヲ生スルモ驛遞局ハ之ヲ償フノ責ニ任セス○第一百二條 此章ノ規則ニ從ヒ貯金ヲ拂戻シタル後ハ其拂戻方ニ就キ異議ヲ唱フルモ驛遞局ハ其責ニ任セス

第十四章 外國郵便

第二百二條 凡外國ニ差立ル郵便物別テ五項ト爲ス

- 一 書狀
- 二 郵便葉書
- 三 書籍各種ノ印刷物寫眞畫圖
- 四 詞訟上及商用上ノ書類
- 五 商品ノ見本

第二百四條 何品ヲ問ハス此章ノ規則ニ牴觸セサルモノハ第一項郵便物トナスヲ得○第二百五條 第三項第四項第五項郵便物ハ封緘セサルモノトス之ヲ封緘スルトキハ第一項

郵便物トナスヘシ○第二百六條 第三項第四項第五項郵便物ニ音信文又ハ暗號隱語ヲ筆書スルトキハ第一項郵便物トナスヘシ○第二百七條 第三項第四項第五項郵便物ヲ第一項郵便物ト合裝スルトキハ總テ第一項郵便物トナスヘシ○第二百八條 第三項第四項郵便物ハ一個ノ重量ニ(キログラム)凡五百三十二ニ超過ス可ラス○第二百九條 第五項郵便物ノ大サハ長二十「サンチメートル」凡六寸 幅十「サンチメートル」凡三寸三 厚五「サンチメートル」凡一寸六 又其重量ハ二百五十「グラム」凡六十六匁ニ超過スヘカラス○

第二百十條 第三項第四項第五項郵便物ヲ合裝スルニ其重量ハ第二百八條ノ制限ニ超過スヘカラス但第五項郵便物ノ大サ及重量ハ第二百九條ニ據ルヘシ○第二百十一條 第二項郵便物ハ萬國郵便聯合葉書ヲ用ユヘシ○第二百十二條 第二項郵便物第五條ニ記載シタル所爲アルトキハ之ヲ差出人ニ還付スヘシ○第二百十三條 第五項郵便物ハ賣價ヲ付セサル者ニ限ヘシ○第二百十四條 左ニ記載スル者ハ外國ニ差立ル郵便物トナスヘカラス

一 貨幣又ハ高價ノ物品  
一 關稅ヲ拂フヘキ物品  
一 第十六條第一項第二項及第三項ニ記載シタルモノ  
第二百十五條 郵便聯合國ニ差立ル第三項第四項第五項郵便物ハ少クモ其郵便稅ノ一部分ヲ前納シタルモノニ限ルヘシ○第二百十六條 郵便聯合國外ニ差立ル郵便物ハ總テ郵便稅完納ニ限ルヘシ但到達地ニ於テ課スヘキ郵便稅ハ此限ニアラス○第二百十七條 第二百八條第二百九條第二百十條第二百十三條第二百十五條第二百十六條ニ背反スル郵便物ハ差出人ニ還付シ未納稅又ハ不足稅ハ第十七條ノ割合ニ從ヒ其額ノ二倍ヲ徵收スヘシ○第二百十八條 書留郵便物ハ郵便稅書留手數料トモ前納ニ限ルヘシ○第二百十九條 郵便聯合國ニ差立ル書留郵便物ハ受取人ノ受取証書返送ヲ望ムヲ得之ヲ望ムトキハ郵便稅書留手數料ノ外増手數料ヲ前納スヘシ○第二十條 郵便稅書留手數料及増手數料ハ日本國郵便切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納メタルモノトス○第二十一條

第六

驛遞之部

條 郵便稅書留手敷料増手敷料ノ割合郵便物ヲ差立テ得ヘキ國名及郵便爲替小包郵便ニ關スル事項ハ驛遞總官公告スヘシ○第二百二十二條 書留郵便物紛失ノ償金ヲ拂フヘキ約定アル國ニ差立ル書留郵便物ヲ内國又ハ同上約定アル外國ニテ遞送中紛失シタルトキハ天災ニ因ルモノ、外之ヲ紛失シタル國ノ驛遞局ニ於テ差出人又ハ差出人ノ望ニ依リ受取人ニ五十「フランク」一「フランク」ハ若クハ他ノ貨幣ニテ同額ノ償金ヲ拂フヘシ 書留郵便物紛失ノ償金ヲ拂フヘキ約アル外國ヨリ内國ニ到達スル書留郵便物ヲ内國遞送中紛失シタルトキ亦同シ○第二百二十三條 軍艦及海軍所屬ノ船舶ヲ除キ凡内國ヲ發シ外國ニ航スル船舶ノ所有主若クハ其代理者ハ驛遞局又ハ郵便局ヨリ左ニ記載シタル運送賃額ヲ以テ郵便物ノ運送ヲ托スルトキハ之ヲ拒ムヘカラス但別段ノ約定アル者ハ此限ニ非ス

一 第一項郵便物ハ一個二錢ニ超過セサル額

一 第二項以下ノ郵便物ハ一個一錢ニ超過セサル額

第二百二十四條 第二十六條第三十二條第三十三條第三十四條第三十五條第三十六條第三十七條ノ規則ハ此章ノ郵便業書ニ亦適用スヘシ○第二百二十五條 第十二條第十九條第二十條第二十一條第一項第三項第二十二條第二十五條第四十四條第四十八條第五十一條第五十九條第六十一條第六十三條第六十四條第六十六條 第二百二十二條 第六十九條第七十條第七十一條第七十二條第七十三條第一百條及第十一章ノ規則ハ内國ヨリ外國ニ差立ル郵便物ニ亦適用スヘシ○第二百二十六條 第二十一條第一項第二項第二十五條第四十四條第四十九條第五十一條第五十三條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條第六十三條第六十六條 第二百二十二條 第七十三條第九十九條第一百條第一百四條第一項及第八章ノ規則ハ外國ヨリ内國ニ到達スル郵便物ニ亦適用スヘシ

第十五章 罰則

第二百二十七條 第十六條第三十三條第三十四條第六十九條第七十條第二百十四條ヲ犯

シタルモノハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス○第二百二十八條 第五十四條第六十三條第六十四條ヲ犯シタルモノハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス○第二百二十九條 第五十七條第五十八條ヲ犯シタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス○第二百三十條 第六十七條ヲ犯シタルモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス 運送配達ヲ以テ營業トナスモノハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス○第二百三十一條 第六十八條第二十二條第三十三條ヲ犯シタルモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス○第二百三十二條 懈怠故意ヲ問ハス第七十一條第七十二條ヲ犯シタルモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス○第二百三十三條 郵便封皮業書帶紙ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタルモノハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス○第二百三十四條 己レニ屬セサル郵便物ヲ開封シ又ハ毀損汚穢シ或ハ私用賣却抑留隱匿拋棄シ若クハ之ヲ受取人ニアラサルモノニ交付シ及其情ヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲナシタルモノハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 郵便事務ヲ奉スルモノ自ラ犯シタルトキハ官吏傭人約定人ヲ論セス本刑ニ一等ヲ加フ○第二百三十五條 郵便事務ヲ奉スルモノ自己若クハ他人ノ爲メニスルヲ問ハス郵便物ヲ不當ノ方位ニ遞送シタルトキハ第二百三十四條第一項ノ刑ニ一等ヲ加フ○第二百三十六條 疎虞懈怠ニ因テ郵便物ヲ失ヒタルモノハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス 書留郵便ニ係ルトキハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス○第二百三十七條 有稅ヲ以テ免稅トシ其他詐偽ヲ以テ郵便稅ヲ免レタルモノハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 郵便事務ヲ奉スルモノ自ラ犯シ又ハ情ヲ知テ其郵便物ヲ遞送配達シ或ハ自己ノ受ケタル郵便物ノ未納稅又ハ不足稅ヲ免レタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ○第二百三十八條 不良ノ事ヲ行ハシカ爲メ郵便ヲ用ヒタルモノハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六 驛遞之部

行ノ處不長ノ罪重キモノハ重キニ從テ論ス○第二百三十九條 驛遞總官ノ認可ヲ得ス  
 シテ郵便物ニ驛遞局認可ノ文字ヲ用ヒタルモノハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス 郵  
 便物運送ニ使用セサル船車ニ郵便ノ記章又ハ郵便ノ文字ヲ用ヒタルモノ亦同シ○第二  
 四十條 未納稅又ハ不足稅及ヒ別配達料解船料貨幣遞送配達賃私書函貸與料ヲ五日內ニ  
 納メサルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス 郵便事務ヲ奉スルモノ徵収スヘキ第  
 一 條 別配達料解船料貨幣遞送配達賃私書函貸與料ヲ徵収セサルトキ亦同シ○第二百四十  
 一條 郵便事務ヲ奉スルモノ郵便物ニ貼用セル郵便切手ヲ剝取ルトキハ一年以上一年以  
 下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 其未タ消印チナサ、ル切手ヲ剝  
 取ルモノハ刑法竊盜ノ本條ニ照シテ處斷ス○第二百四十二條 郵便爲替事務ヲ奉スルモ  
 ノ郵便爲替金及爲替料ヲ領収セスシテ爲替證書ヲ振出シ又ハ爲替證書ヲ受取ラシテ爲  
 替金ヲ渡シタルトキハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附  
 加ス 驛遞局貯金ノ事務ヲ奉スルモノ預ケ金ヲ領収セスシテ貯金簿帳ニ預ケ金ノ記入チ  
 ナシ又ハ拂戻證書ヲ受取ラシテ貯金ヲ拂渡シタルトキ亦同シ○第二百四十三條 郵便  
 事務ヲ奉スルモノ諸般ノ計數ヲ偽ルトキハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五  
 十圓以下ノ罰金ヲ附加ス○第二百四十四條 郵便物ニ押用セサル印面ヲ變換シタルモノ  
 ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス○第二百四十五條 郵便配達人配達先ニ於テ謝儀ヲ  
 要求シタルトキハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス○第二百四十六條 郵便函  
 郵便行囊其他郵便ノ器械ヲ毀損汚穢シタルモノハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓  
 以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス○第二百四十七條 渡船人郵便物ノ渡津ヲ怠慢遲緩シタ  
 ルトキハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス○第二百四十八條 第二百三十三條  
 第二百三十七條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサルモノハ未遂犯罪ノ例ニ照シ  
 テ處斷ス○第二百四十九條 第二百三十條第二百三十三條第二百三十七條第二百四十一

(二)官報  
 差出  
 取  
 御布達

明治十六年十一月九日御布達第三十六号  
 官報ヲ購求シ更ニ郵便ニ差出ストキハ第三種郵便物ト爲シテ取扱ヒ其冊子ト爲シ又ハ本  
 紙ノ重量ニ超過シタル附録ハ第四種郵便物ト爲シテ取扱フヘシ  
 右布達候事

電 信 之 部

(三)電信 明治七年九月廿二日御布告第九十八号  
 別册 電信條例別册ノ通相定本年十二月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

日本帝國電信條例  
 第一條 此條例ハ日本帝國政府電信寮ニ於テ所轄スル處ノ電機上ニ施行スルナリ○第二  
 條 此條例中ニ用ル電報ノ語ハ百般ノ音信總テ電機ヲ以テ傳送シ又ハ傳送セント欲スル  
 モノヲ指テ言フナリ○第三條 日本政府電信寮ハ日本帝國外ノ各地ヘ又ハ各地ヨリ傳送  
 スル電報ヲ除キ日本帝國中ニ電報ヲ傳送マ及ヒ受取リ取集メ届渡等一切關係ノ事務ヲ取  
 扱フ專任ノ權ヲ有ス○第四條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ電槽器械柱木信線若シハ其線  
 ヲ覆フ匣蓋管筒或ハ支凸腕木架木陶器海底線浮標旗竿号報柱及ヒ電機並ニ其附屬一切ノ  
 物品ヲ毀傷スル者或ハ此電機ニテ通信ノ傳送撈致又届渡シテ如何様ナル仕方ニテモ妨礙  
 スル者其他上件ノ架木支凸腕木ヲ拔取ル者ハ五百圓ヨリ多カラサル罰金又懲役或ハ禁錮  
 第六 驛遞電信之部  
 百卅九

ニ處ス但シ過誤失錯ニ出ル者ハ其損害ノ多少ニ隨テ償金ノミヲ出サシム○第五條 電機掛リ官員及ヒ改役或ハ其他ノ官員又ハ何人ニテモ電信寮ノ事務ニ從事スル際之ヲ攻打シ或ハ粗暴ノ舉動ヲ爲シ其事業ニ妨碍抗抵ヲ爲ス者ハ五百圓ヨリ多カラサル罰金又ハ三ヶ月ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス○第六條 何人ニテモ不法ニ柱木架木海底線信線旗竿浮標其他電機又ハ其附屬一切ノ物品ニ馬又ハ其他ノ獸畜或ハ舟筏等ヲ繫リ者ハ其所行ニ依テ損害ノ有無ヲ論セス○第七條 何人ニテモ柱木信線陶器旗竿腕木架木支凸号報柱浮標其他ノ物品ニ瓦礫若シハ雜物ヲ投擲シ又矢箭火器ヲ彈射スル者ハ其所行ニ依テ毀傷ノ有無ヲ論セス○第八條 何人ニテモ電線ノ近傍ニテ紙鷲ヲ飛シ信線陶器腕木架木支凸其他電機ニ屬スル物品ニ紙鷲又ハ其附屬ノ糸等ヲ引掛ケ電機ノ妨碍ヲ生セシムル者ハ十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ七日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス○第九條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ政府電信寮ヨリ其局々或ハ電線沿道ノ所々ニ取建タル標識揭示等ヲ削剝シ又ハ拔去者ハ五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス○第十條 何人ニテモ不法ニ電機用ノ一部分タル柱木旗竿信線支線支柱ニ攀チ又ハ同標ノ浮標ニ乘ル者ハ其所行ニ依テ妨害ノ有無ヲ論セス○第十一條 何人ニテモ不法故意ヲ以テ柱木浮標日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス○第十二條 電機掛官員及ヒ改役或ハ其他ノ官員又ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス○第十三條 電機掛官員及ヒ改役或ハ其他ノ官員又ハ何人ニテモ他人ニ屈渡スヘキ電報ヲ故意ヲ以テ隱匿シ又ハ電信寮ヨリ電報ヲ屈渡スヘキ命令ヲ怠リ或ハ肯セサル者ハ五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十二日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス○第十三條 電信寮ニ仕官スル者故意怠慢ヲ以テ音信ノ傳送又ハ屈

渡スヲ忘却延延スル者又ハ同標ノ一ニ依テ音信ノ傳送屈渡シテ妨碍延延セシムル者又ハ猥リニ音信ノ旨趣ヲ傳洩スル者又ハ他ノ人民又ハ電信寮ノ官員ト雖モ其場ニ立入ヘキ職務ニ非サル者ヲ電信寮ノ器械室ニ立入ラセ又ハ滯居セシムル者等以上ノ各犯ハ壹百圓ヨリ多カラサル罰金ニ處ス○第十四條 凡ソ此條例中ニ記載シタル箇條ヲ顯然犯サント企ツル者ハ五十圓ヨリ多カラサル罰金又ハ四十日ヨリ長カラサル懲役或ハ禁獄ニ處ス○第十五條 凡ソ此ノ條例ヲ犯シテ電信寮所轄ノ物品ヲ毀傷シ又ハ他人ノ損失妨害ヲ生スル者ハ例ニ照ラシテ處分スルノ外其毀傷損失ノ償金ヲ出サシム但シ工部省所管電信私線ノ分モ總テ此條例ニ準シテ處分ス○第十六條 凡ソ犯人ヲ處斷シ罰金並ニ償金ノ額ヲ定ムルハ總テ裁判官ノ權内ニ屬ス○第十七條 (明治十二年第十八号御布告) 告ヲ以テ本條ヲ削除ス

明治十六年二月十日御布告第五号  
 水底電線路ニ於テ投錨漁業採藻等ノ禁ヲ犯ス者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 右奉 勅旨布告候事

鐵道之部

明治五年五月四日御布告第四百十六号  
 第六十一号布告鐵道略則別紙ノ通改正候條此旨相違候事但開局日限ノ儀ハ治定ノ上遅テ可相違候事

別紙

鐵道略則

第一條 賃金ノ事 何人ニ不限鐵道ノ列車ニテ旅行セント欲スル者ハ先賃金ヲ拂ヒ手形ヲ受取ル可シ然ラサレハ決シテ列車ニ乗ルヘカラス○第二條 手形檢査及ヒ渡方ノ事  
 第六 電信鐵道之部 百四十一

(四)水底電線路ニ於テ投錨等ノ罰則

手形検査ノ節ハ改テ受ケ取集ノ節ハ渡スベシ若シ検査ノ節手形ヲ出サス或ハ取集ノ節手形ヲ渡サ、ル者ハ更ニ最初渡車ノ「ステーション」客ノ乗下リ荷物ノ積下シテ爲ス所ヲ云ヨリノ賃金ヲ拂ハシムベシ尤途中ヨリ乗來リシ者ニテ其確証判然タルハ其乗リタル場所ヨリノ賃金ヲ拂ハシムベシ○第三條 途中「ステーション」ニテ乗組并ニ手形ノ事 途中「ステーション」ニ於テ列車中餘地ノ有無ニ應シテ乗組ムヲ得ベシ若シ其手形ヲ買取シ總人數ヲ容ルヘキ餘地ナキ時ハ其中ニテ最遠キ地ニ赴ク手形所持ノ人丈ケ先ツ乗組ムヲ得ベシ若シ又同里程ノ地ニ赴ク客數人アルハ其手形ノ番号ノ順序ヲ以テ乗組ムヲ得ベシ○第四條 偽欺ノ者取扱方ノ事何人ニ限ラス賃金ヲ拂ハズ列車ニテ旅行セント計リ或ハ遠ニ旅行シ又ハ其拂ヒシ賃金高相當ノ車ニ乗ラスシテ更ニ上等ノ車ニ乗リ組又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キ増賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ至リ遂ニ其賃金ヲ免レント計リ又ハ既ニ拂ヒタル賃金ニテ到ルベキ場所ニ到リナカラ車ヨリ下リ去ルヲ肯セス其外如何ナル仕方ニテモ賃金拂方ヲ逃ントスル者ハ夫々法ニ隨テ罰スヘシ○第五條 列車運轉中出入禁止ノ事 總シテ列車ノ運轉中ニ出入スルヲ又ハ車内旅客ノ居ルヘキ場所ノ外ニ乗ルヲ禁ス○第六條 泡瘡等ノ病人ヲ禁止スル事 泡瘡及ヒ諸傳染病ヲ煩フ者ハ乗車ヲ禁ス若シ此等ノ病人車中ニ在テハ見當次第鐵道掛リノ者ヨリ車外并ニ鐵道構外ニ退去セシムヘシ○第七條 吸煙并ニ婦人部屋男子出入禁止ノ事 何人ニ限ラス「ステーション」構内吸煙ヲ禁セシ場所并ニ吸煙ヲ禁セシ車内ニテ吸煙スルヲ許サス且婦人ノ爲メニ設アル車及ヒ部屋等ニ男子妄リニ立入ルヲ許サス若シ右等ノ禁ヲ犯シ掛リノ者ノ戒メヲ用サル者ハ車外并ニ鐵道構外ニ直ニ退去セシムヘシ○第八條 醉人及不行狀人扱方ノ事 何人ニ限ラス總テ列車乗組中又ハ「ステーション」并ニ鐵道構内ニテ醉ニ乘シ妄狀ヲ現ハス者又ハ不良ノ行狀ヲ爲ス者ハ鐵道掛リノ者ヨリ車外及鐵道構外ニ直ニ退去セシムヘシ○第九條 鐵道ニ屬スル物品ヲ毀損スル時ノ事 何人ニ限ラス猥ニ「ステーション」

「其他鐵道構内」ニ標識揭示セル書附等ヲ剝シ或ハ破リ又ハ列車ノ番号札ヲ取除キ或ハ車燈ヲ消シ又ハ各車ノ諸器械倉庫建築家柵其他鐵道一切ノ附屬品ヲ毀損スル者ハ都テ法ニ隨テ處置スヘシ○第十條 機關車等ニ乘込テ禁スル事 機關方并ニ火夫ノ外ハ其筋ノ許シテ得スシテ機關車又ハ炭水車ニ乘リ或ハ乗ント爲ス可カラズ且ツ車長及車掛リノ者ノ外其筋ノ許シテ得スシテハ荷物車又ハ旅客ノ爲メニ設ケサル車ニ乘リ又ハ乘ラント爲スヘカラス若シ此禁ヲ犯シ鐵道掛リノ者ノ制止ヲ用ヒサル者ハ直チニ其場ヨリ退去セシムヘシ○第十一條 鐵道地所ニ妄リニ立入者取扱方ノ事 何人ニ限ラス「ステーション」又ハ鐵道構内ニ妄リニ立入者ハ鐵道掛リノ者ヨリ即刻構外ニ立去ラシムヘシ○第十二條 旅客ノ荷物紛失毀損取扱ノ事 旅客手廻リ荷物其外所持ノ品タリト總テ之カ爲ニ別段ニ賃金ヲ拂ヒ其請取証書ヲ取置カサレハ若シ紛失毀損等アルトモ政府ニ於テ關係セサルベシトトモ賃金ヲ拂ヒ証書ヲ取置トモ其毀損紛失等ヲ償フハ只旅客自用衣服ノミニ止リ且ツ賃金モ五十圓ヲ過クルヲナシ○第十三條 金高及ヒ大切ノ物品紛失毀損ニ關不關ノ事 金銀貨紙幣郵便切手爲替會社通用券爲替手形約定証書金銀請拂証書地所建築券諸繪圖書畫古器金銀玉石鍍金及諸彫鐫細工物時計類其餘衣類或ハ玩物ノ粧飾ニ混作ノ品類及ヒ硝子器類陶器漆器酒類蠶繭絹布牛熟糸等ノ品物運送方ニ付テハ其品柄并價高等ヲ明白ニ其掛ヘ申立テ増賃金ヲ拂ヒ紛失毀損等請合シ分ノ外總テ政府ニ於テ之ヲ償ハス○第十四條 牛馬獸類運送ノ事 牛馬及ヒ其他ノ獸類ヲ運送スルニ其持主或ハ送り人ヨリ其獸類ノ價ヲ運送掛ヘ申出相當ノ増賃金ヲ拂ヒ請合証書ヲ取置クヘシ若シ増賃金ヲ拂ハス請合ヲ爲サ、ル分ハ如何程高價ノ獸類紛失損害アルモ牛一疋金二十圓以上馬一疋或ハ乳牛一疋ニ付金五十圓以上羊或ハ豚一疋ニ金五圓以上ヲ政府ニ於テ償フコトナシ○第十五條 砲發ヲ禁スル事 何人ニ限ラス車内ハ勿論鐵道線及ヒ其他構内ニテ砲發スルヲ禁ス○第十六條 爆發質アル危害物運輸ヲ禁スル事 鐵道寮ヨリ追テ公告スル迄ハ火藥及ヒ「ビ

トローリヤム「ケロシソナイル」トルメシタイ」石炭油 硝性並ニ爆發質燃焼等ノ物品ハ  
 運輸セサルヘシ○第十七條 荷物目錄ヲ渡スヘキ事 運送ノ諸荷物ヲ鐵道掛ノ者ヘ引渡  
 シ又ハ請取ノ度毎ニハ右荷主或ハ宰領人ヨリ其品柄數量及ヒ姓名ヲ記シテ掛ノ者ヘ差出  
 スヘシ○第十八條 物品並ニ畜類損害償方定限ノ事 鐵道ニテ運送スル物品並ニ畜類紛  
 失損害アリトモ鐵道掛リノ怠惰疎漏ヨリ起リシニ非レハ政府ニ於テ之ヲ償フナシ○第  
 十九條 荷物運送賃金ノ事 何人ニ限ラス荷物運賃ノ催促ヲ受ケ尙ホ拂ハサルキハ其荷  
 物ノ全部又ハ部分ヲ留置キ若シ又其荷物既ニ他所ニ運送セシキハ其後同人附屬ノ荷物鐵  
 道掛リヘ送來ルコアル時ハ之ヲ留置キ同人ヘ告知ラセタル上ニテ滞金高程ノ品ヲ入札公  
 賣シ其滞金ト諸入費トヲ引取殘金殘品ヲ同人ヘ返スヘシ又時宜ニ依リ右ノ取計ヒヲ爲サ  
 ス法官ニ訴ヘテ賃金並ニ入費等ヲ取立ルコトモ有ヘシ○第二十條 規則ニ隨ハサル者ノ事  
 何人ニ限ラス諸事前條ノ規則ニ隨ハスシハ乘車及ヒ荷物ノ運送ヲ許サ、ルヘシ○第二  
 十一條 規則等ノ變革布達ノ事 此規則中變革及加除アルキハ遍シ告達スヘシ○第二十  
 二條 荷物運送引請方ノ事 諸荷物ノ運送ヲ引請ルコトハ列車中餘地ノ有無ニ應スヘシ○第  
 二十三條 此規則ヲ施行スルカ爲メニ夫々法官ニ訴ヘ犯罪人罰シ方等ノ裁判ヲ乞フ手  
 順ハ鐵道頭或ハ鐵道支配人ノ間ニテ其取扱アルベシ○第二十四條 旅客並ニ荷物ノ運賃  
 ハ時宜ニ隨ヒ變革アルト雖モ其變革毎ニハ二週日前ニ告達スヘシ○尤鐵道頭鐵道支配方及  
 ヒ運輸頭取ノ間ニ於テ前條ノ如キ告達ナク臨時常例ヨリ下等ノ運賃ヲ以テ別ニ列車ヲ仕  
 立ルコトモアルベシ○第二十五條 此規則來ル五月七日ヨリ施行スベシ

(五)鐵道  
犯罪罰  
例

右之條々此度確定候事  
 明治六年三月十三日御布告第一百號  
 壬申第四百十七号布告鐵道犯罪罰例別紙ノ通改正相成候條此旨相達候事  
 別紙

鐵道犯罪罰例

第一條 鐵道掛ノ者總テ鐵道上ニ關スル事務取扱ヒ中醉ニ乘シ無狀ヲ現ハスニ於テハ二  
 十五圓以內ノ罰金ニ處ス若シ其職掌怠惰輕忽ニ依リ鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱ア  
 ルキハ其事情ニ依リ五百圓以內ノ罰金又ハ三月以內ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス○第二條 規  
 則第四條ニ記スル處ノ不法ヲ爲ス者ハ二十五圓以內ノ罰金或ハ三十日以內ノ禁獄ニ處ス  
 (明治十二年第十二号御  
 布告ヲ以テ改正セラル)○第三條 規則第五條ノ禁ヲ犯ス者ハ十圓以內ノ罰金ニ處ス○  
 第四條 規則第六條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ沒シ二十五圓以內ノ罰金ニ處ス○第  
 五條 規則第七條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ沒シ十圓以內ノ罰金ニ處ス○第六條  
 規則第八條ニ記スル所行ヲ爲ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ沒シ二十五圓以內ノ罰金或ハ三十日  
 以內ノ禁獄ニ處ス○第七條 規則第九條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ五十圓以內ノ罰金  
 又ハ六週以內ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス○第八條 規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以  
 內ノ罰金ニ處ス○第九條 規則第十一條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以內ノ罰金或ハ三十日  
 以內ノ禁獄ニ處ス (明治十二年第十二号  
 御布告ヲ以テ改正ス)○第十條 規則第十五條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五  
 圓以內ノ罰金ニ處ス○第十一條 規則第十七條ニ記スル所ノ諸荷物物品書其外ヲ故テニ出  
 サス或ハ故テニ欺偽ノ品物書キ出ス者ハ三ヶ月以內ノ懲役又ハ禁獄或ハ其品物壹圓千七  
 ヲ每ニ二十五圓以內ノ罰金ニ處ス壹圓以下ハ十圓以內尤モ一圓ノ罰金高五百圓ニ過キス  
 (明治十二年第十二号  
 御布告ヲ以テ改正ス)○第十二條 鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照ラシ罰科ス  
 ルノ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルコトアルヘシ但シ其償金ノ追徵モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞  
 フ時ハ法官ニ於テ追徵スヘシ  
 明治十六年七月十日御布告第二十三号  
 明治十五年五月第四百十六号布告鐵道略則及同六年三月第一百號布告鐵道犯罪罰例ハ私設  
 鐵道ニモ適用ス  
 第六 鐵道之部

(六)鐵道  
略則及  
罰例  
私設  
鐵道  
ニ適  
用

明治十六年七月十日御布告第二十三号  
 明治十五年五月第四百十六号布告鐵道略則及同六年三月第一百號布告鐵道犯罪罰例ハ私設  
 鐵道ニモ適用ス  
 第六 鐵道之部

右奉 勅旨布告候事

鑛山 之 部

(七)日本 明治六年七月廿日御布告第二百五十九号

今般鑛山其他諸坑業ノ規則別冊ノ通改定候ニ付テハ凡坑物ニ關係ノ事件ハ工部省ニ於テ

總管セシメ候條自今金屬其外諸坑物營業ノ儀都テ同省ニ可申立候此旨布告候事

別冊

日本坑法

第一章 坑物

第一 正理ヲ以テ論スルキハ凡無機物タル者ハ生活ノ機ナキ諸物品ニテ坑業ノ部分ニ屬ス此無機物品質ニ類ニ分ル即チ第一類ハ有鑛質第二類ハ無鑛質タリ凡諸金屬ノ天然本質ヲ以テ出ル者或ハ他ノ物質ト化合シテ出ル者ハ右第一類ニ屬ス燃質物山摺燐酸石炭美石及ヒ玉璽ノ類ハ右第二類ニ屬ス本條舉ル所ノ有鑛質無鑛質トモ總テ是チ坑物ト稱ス坑山坑業坑區坑產等皆之ニ做ヘ

第二章 試掘

第五 試掘ヲ作サント欲スル者ハ鑛山寮ニ願出許可ヲ得テ之レヲ行フヘシ 試掘ヲ行フ

者ハ衆ニ超テ許可ヲ得ヘキ分義アリト然レモ自ラ試掘ノ資本ナクシテ他人ノ學ヲ拒メ或ハ不當ノ價金ヲ貪ラハ鑛山寮或ハ地方官ニテ正價ヲ裁決シテ其地ヲ買上クヘシ

第三章 借區開坑

第九 開坑ハ先ツ坑區ヲ得ベシ坑區ノ廣狹ハ其適實ナル起業ノ目途ニ應シテ之ヲ得セシムヘシ但石炭坑ノ借區ハ壹萬坪以上ニ限ルベシ

第四章 通洞

第十二 通洞ハ坑道ハ縱横ニ小坑ヲ穿テ通常トス別ニ探鑛疎水運輸等ノ我カ借區中ニ

第六 鐵道之部

六尺ヨリ減スベカラズ是ヨリ小ナルハ通洞トセス○第十三 願出ノ通洞ハ鑛山寮官員實地勘踏歸報ノ後許可スベキハ工部全權ノ証印ヲ以テ免狀ヲ附與スヘシ免狀ヲ得ルノ後若シ目論見圖ニ違ヒ方向ヲシ觸或ハ距離ヲ延縮セント欲セハ更ニ鑛山寮へ願出許可ヲ得テ之ヲ行フヘシ○第十四 借區人何レモ自ラ通洞ヲ開クヘキ資本有ニアラサレハ我區中タリト雖他他人ノ舉ヲ拒ムヘカラズ 通洞保全ノ爲メニ其周圍ノ土石ヲ外ヨリ厚サ一間半以内ニ掘入ルヘカラズ然レモ其跡ニ自己ノ入費ヲ以テ支柱ヲ構造シ崩潰ノ患ナカラシムル者ハ此限ニ在ラス 是ハ坑物ヲ得ンカ爲メ一旦土○第十五 通洞ニ因テ諸借區人便利ヲ得ルコトアラハ通洞發起人ニ其謝金ヲ出スベシ若シ之ニ就テ對談穩當ナラスハ鑛山寮ヨリ處斷スベシ 通洞ヲ開ク者ハ借區人未定ノ所ニ於テハ通洞ノ周圍内ヨリ出ルル石ノ鑛石ヲ取ルコトヲ得ベシ他人ノ借區中ニ於テハ此鑛石ノ一半ヲ借區人ニ歸スベシ

第五章 坑業

第十六 都テ坑業ニ付テハ坑物ヲ坑中支柱ノ爲ニ存スベキ所ノ外ハ成ルル丈坑利ヲ遺スコトナク取出スベシ此法ヲ犯シ其他都テ坑ノ利用ヲ害スルモノハ其輕重ニ隨テ罰金ヲ徵スベシ○第十七 試掘開坑或ハ通洞等ヲ企ルニハ舍屋鐵道河流及ヒ道路ノ如キ其害ヲ受クベキ場所ハ度ヲ計テ之ヲ避ケ殊ニ城堡ハ七十間以内ノ地ヲ避クベシ 凡ソ場所ノ主タル者應諾スルニアラサシテ此ヲ犯ス者アレハ城堡ハ其律ニ任シ餘ハ其損害ヲ償復スル一倍ノ費額ヲ取テ本費ハ其主ニ附與スベシ○第十八 凡ソ初發許可ヲ得シ坑物ノ外ニ別種ノ坑物ヲ見出ス者ハ速ニ鑛山寮ニ報知スベシ之ヲ背ク者ハ其坑物又ハ代價ヲ取揚クベシ如此類ノ借區稅ハ第三十一條ニ照準シ高價ナル方ノ例ヲ以テ納ムベシ○第十九 開坑人ハ歲々一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ニ產出セシ坑物量其賣出高並ニ代價及ヒ行業日數工數ヲ具記シテ鑛山寮ニ報知スヘシ 有鑛質ハ坑產量並製出量且製出セシ混淆物二種以上ノ金屬ヲ含有スルハ其試驗ノ割合ヲモ具記シテ賣出高以下都テ前ノ如クスベシ 右量數不正

或ハ開報違期ノ罰ハ金五十圓トス若シ賣出高並代價ヲ減盡スルモノハ其減盡セシ高ノ三賠ヲ徵收スヘシ○第二十 例開坑又ハ廢鑛ヲ採製スルニハ一年間ノ事業ハ地面五百坪ノ下ニ就テ壯健ナル工夫三百日ヲ以テ成セル程ノ工數ヨリ減スヘカラズ若シ之ニ背ク者實ニ百方免レ難ク妨礙判然タリニアラズンハ其業ヲ禁止スヘシ○第二十一 坑業人ハ互ニ隣坑ノ風通シヲ便利ニスヘシ且ツ甲區ヨリ乙區ノ地中ニ水道ヲ通シ地上ニ要路ヲ通セシコトヲ求ムルニ於テハ不當ノ賃金ヲ食ルヘカラズ若シ相對テ以テ決セシハ鑛山寮ヨリ處斷スヘシ 右堀通シニ付テ出ル鑛石ハ其所ノ借區人ニ屬スヘシ○第二十二 凡ソ借區人ハ區上ニ於テ藏庫諸所作事場洗鑛所鑛鑛所通洞等其坑業ニ必要ナル地面ハ地主タル者ニ線メ賃金ヲ辨スヘシ若シ異論決セシハ鑛山寮或ハ地身官ニテ正價ヲ裁決シ其地ヲ買取ルコトヲ○第二十三 總テ坑區ヨリ隣區ニ忠害損傷ヲ被ラシムルモノハ之ヲ償フヘシ若シ償金決セシハ鑛山寮ヨリ裁決スヘシ○第二十四 凡ソ借區人其坑業ヲ年限中他人ニ讓渡ス如キハ前以テ双方ヨリ鑛山寮ニ願出許可ヲ請フヘシ若シ之ニ背ク者ハ其業ヲ禁止スヘシ○第二十五 凡ソ借區年限終リ又ハ法ニ背ヒテ其業ヲ禁止セラレ或ハ自ラ廢業スルニ至ル者アレハ都テ其借區ハ政府ニ還復シ其事業ニ就テ如何ナル負債アリト雖他總テ其坑山ニハ關係セサル者トス此時ニ當テ地中ノ結構ハ坑山ニ屬シテ政府ノ有タルヘシ地上ノ營造ハ其主ノ取去ルニ任スト雖他其跡ノ地面ハ完全ニ修復ヲ爲スヘシ○第二十六 坑業人ハ其坑山地方ノ住民同様トス因テ其地方官ノ諸法令ヲ遵守スヘシ

第六章 廢業

第二十七 坑業ヲ廢セント欲スル者ハ堅坑ノ口ヲ掩ヒ又柵圍ヒスヘシ鑛山寮ヨリ其堅坑ヲ當然ニ堅固ニセシヤ且坑内ノ營繕完全存生スルヤヲ檢査スヘシ若シ疎漏アラハ鑛山寮ニ於テ之ヲ繕治スヘキ費額ノ一賠ヲ徵收スヘシ○第二十八 坑山寮ヨリ疎水ヲ命スルニ背キテ其事ヲ行ハス之カ爲ニ坑中廢沒スルニ至ルモノハ其業ヲ禁止ス

第六 鑛山之部



第七章 製鐵所建鑛  
 第二十九 凡ソ開坑人坑山外ノ場所ニテ有鑛質物ヲ製出セシメ爲メニ建築スヘキモノアラハ先ツ鑛山寮ニ許可ヲ請フヘシ○第三十 己ニ製煉セシ鑛物ヲ精製リ山吹金ヲ純金ニ製スル類スル職業者者ハ起業ヲ鑛山寮ニ報知シ六ヶ月毎ニ元鑛量並製出品量等ヲ具記シ鑛山寮ニ開報スヘシ

第八章 稅納

第三十一 鉄ヲ除クノ外有鑛質物ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪毎ニ一ケ年金一圓ツ、借區稅トシテ毎年一月ニ其年一ケ年分ヲ前納スヘシ○關セズ 借區稅ハ地租 鉄及無鑛質ノ諸物品ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪ニ付前條ノ半高ヲ納ムヘシ即チ五十錢トス但意納者ハ借區稅ヲ取揚クヘシ 廢鑛ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪ニ付常例ノ稅額ヲ納ムヘシ 開坑區面積五百坪廢鑛區面積千坪トニ足ラサルモノハ總テ右而積ノ比例ニ隨テ納ムヘシ 借區初年ノ區稅ハ月割ヲ以テ借區券下付ノ節前納スヘシ 前借區稅ノ外ニ採製セシ金屬及ヒ諸坑物ニ就テ代價百分ノ三ヨリ百分ノ二十マテヲ坑物稅トシテ毎歲一月七月兩度ニ鑛山寮ニ納ムヘシ但稅額ノ儀ハ其坑業者盛衰ニ隨ヒ鑛山寮ヨリ命スヘシ (明治十四年第四十九號御布) ○第三十二 試掘開坑或ハ通洞等ニ付前後諸條款ニ記セル稅或ハ罰金價金等ヲ納メサル其業ニ屬スル所ノ運移スヘキモノ殘ラズ鑛山寮ヨリ入札拂ニシテ代價ノ中ヨリ不納高ヲ引去リ其殘金ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ○第三十三 凡ソ坑法ノ意旨ニ戻ル過失アル者ハ輕重ニ隨テ罰金ヲ命スヘシ若シ事業疎略ニシテ人命ヲ失ハ、國律ヲ以テ論處スヘシ右章款ニ記載スレ方法ハ明治六年九月一日ヨリ施行スヘシ從前ノ法則及舊習等若シ此法ニ矛盾スル者ハ都テ廢停タルヘシ

坑法附示

鑛業及製鑛ノ業ヲ舉行スル者西洋ノ學術及工作ヲ用ヒソカ爲メ一定ノ給料ヲ以テ外國技術家ヲ雇入ル、カ如キハ我坑產損益及所有物ニ關係スルコトナキニ因テ坑法第四款ノ禁ニ觸レズ然レモ之ヲ雇入ル、以前其職業給料及年限ヲ分明ニ記載シ其案紙ヲ鑛山寮ヘ送呈シテ結約ノ許可ヲ可請候事

(書類式樣略之)

明治十一年二月五日御布告第三号

開拓使管内鑛山借區稅ノ儀詮議ノ次第有之當分營業月數ニ應シ月割ヲ以テ徵收候條此旨  
 布告候事

(八) 北海  
 道鑛山  
 借區稅  
 布告  
 御

第七 地所之部

(一) 地所賣買差

明治五年二月十五日御布告第五十号  
地所永代賣買ノ儀從來禁制ノ處自今四民共賣買致所持候儀被差許候事

(二) 地所外國人賣渡禁

明治五年四月十四日御布告第百廿四号  
御國內一般地所ノ儀銘々所持ノ分ナリ共外國人へ對シ賣渡候儀ハ勿論金銀取引ノ爲メ地所又ハ地券等書入致シ候儀ハ決テ不相成候條末々ノ者ニ至ル迄心得違無之様各管内無遺漏可觸示事

(三) 地代店賃ノ制限廢

明治五年八月廿七日御布告第百四十号  
地代店賃ノ儀從來東京府下ヲ始メ間々其制限ヲ立置候向モ有之哉ニ相聞候處以來ハ双方共相對ヲ以取極メ致貸借候儀可爲勝手事  
一諸奉公人諸職人雇夫等給金雇料ノ儀是亦自今雙方共相對ヲ以テ取極メ候儀勝手次第タルヘシ尤諸職人等是迄得意或ハ出入場ト唱ヘ常ニ雇ハレ先キテ極メ置候分雇主方ニテ他ノ職人雇入候節彼是故障筋申掛ノ者モ有之由向後右儀心得違無之様可致事  
右之通相違候條各府縣ニ於テ管内無遺漏可觸示事

(四) 田畑石高ノ稱廢

明治六年六月八日御布告第百九十四号  
田畑石高ノ稱ヲ廢シ總テ反別ヲ以テ換用候條此旨相違候事

(五) 隱田切開切添地等處分規則

明治九年五月十二日御布告第六十七号  
隱田切開切添地等ノ儀ニ付テハ明治五年九月大藏省第百二十六号布達地券渡方規則中第二十一條及明治六年九月第三百十五号ヲ以及布告候趣モ有之候處更ニ左ノ通被相定候條此旨布告候事  
第一條 隱田切開切添地ノ此布告以前ニ係ルモノ該府縣地租改正濟迄ニ申出ル時ハ其罪

(六) 民有荒地處分規則

明治十年一月廿日御布告第八号

民有荒地處分規則左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 一荒地トハ山崩川欠押堀石砂入河原成池成川成海成湖水成等ノ天災ニ罹リタル土地ヲ云フ○第二條 一民有地荒地トナリタル時ハ荒地一筆限帳  
字番号一筆限歩數持主姓名及ヒ荒地ノ名稱ヲ

第七 地所之部

詳記セシ 並ニ荒地繪圖 荒地ニ係ルモノ及接續ノ地形迄ヲ詳細ニテ出サシメテ杭ヲ建サセ  
 ムヘシ 境界ヲ明瞭ニシ其廣狹ヲ丈量シ反別ヲ限リ損害ノ輕重ヲ區別シ該地接續ノ生地圖面ヲモ  
 照合シ免稅ノ年期ヲ定ムヘキモノトス ○第三條 一荒地免稅ノ年期ハ其損害ノ輕重ト起  
 返シノ難易ニ據リ實地ニ應シ損害ノ年ヨリ十年以内ヲ以テ相當ノ年期ヲ定ムヘシ滿期ニ  
 至リ檢査ヲ經テ猶起返シ能ハサルモノハ年期ヲ續クヘキモノトス ○第四條 一川成海成  
 湖水成等ノ荒地ニシテ地主持續シヘキ望アルモノハ十年迄ノ年期ヲ定メ無代價ノ券狀ヲ  
 付與スヘシ但右ノ場合ニ於テ所有主其土地起返シノタメ杭代打連子若シハ簿棚取設ケ  
 サルモノハ他人ノ漁魚採藻等ヲ拒ムノ權ナキモノトス ○第五條 一右年期明ニ至リ原形  
 ニ復セサルモノハ又十年以内ノ年期ヲ續キ猶依然タルモノハ付與スル處ノ券狀ヲ還納セ  
 シメ荒地ノ名稱ヲ除去シ全ク川海湖地官有ニ歸スルモノトス且此布告以前ニ係ル川海湖  
 水成等ノ荒地ハ本年ヨリ 地租改正既濟ノ府縣ニテ荒地起算シ本條ニ據リ處分スヘキモノ  
 トス ○第六條 一池成ノ荒地年期明ケニ至リ假令原形ニ復セサルモ水草魚鳥等ノ權利ア  
 ルモノハ其利益ニ應シ地價ヲ定メ生地ニ組換ヘ池ト稱スヘシ ○第七條 一荒地年期中竹  
 木萱葎ノ類自然ニ生立多少利益アルモノハ年期明ノ際ヨリ敷林地生地等ノ部分ニ組換フ  
 ヘキモノトス ○第八條 一荒地年期明ニ至リ起返ルモノハ荒地起返一筆限帳 荒地一筆限  
 帳ニ並ニ荒地起返繪圖 荒地繪圖ニヨリ之ヲ製シ該地ニ接續スル從來ノ生地ト起返地及チ出  
 スサシメ畝杭ヲ建サセ一筆限リ耕地ノ分ハ畦畔ヲ除キ更ニ實地ヲ丈量シ該地ニ接續スル從  
 來ノ生地及猶荒地ニテ殘ルモノアレハ一々明瞭ニ色分ケヲナサシムヘシ  
 返別價ヲ定メ而シテ地價ヲ調査スヘキモノトス ○第九條 一稅年明ニ至リ其實況直ニ  
 原價ニ復シ難キモノハ五分割以内ノ減額ヲ以テ更ニ五箇年以下低稅年期ヲ附シ其期明ニ  
 至リ原價ニ復スヘキモノトス ○第十條 低稅年期明ニ至リ尙原價ニ復シ難キモノハ  
 近傍ノ地ニ比準シ更ニ相當ノ地價ヲ附スヘキモノトス ○第十一條 免稅年期明ニ至リ地

(七)公用  
土地買  
上規則

目變換セルモノハ現地目ニ組換ヘ近傍ノ地ニ比準シ相當ノ地價ヲ附スヘキモノトス  
 十五年第六号御布告ヲ以テ第九條以下追加セラル

明治八年七月廿八日御達第百三十二号  
 院 省 廳

公用土地買上規則別紙ノ通相定候條此旨相達候事

別紙

公用土地買上規則

第一則 公用土地買上ハ國郡村市ノ保護便益ニ供スルタメ院省使廳府縣ニ於テ人民所  
 有ノ土地ヲ買上ルヲ云但國郡村市ノ保護便益ニ供スル爲メ人民ニテ鐵道電線上水等ノ大  
 土工ヲ起ス時ハ其事業ニヨリ特別官許ノ上此規則ニ準スルヲ得ヘシ ○第二則 公用買上  
 ハ必ス其地ヲ要セサルヲ得サルニアラサレバ之ヲ行ハサルモノトス故ニ人民之ヲ拒ムヲ  
 得ス但其地ニ屬シタル植物建造物等モ亦本文ニ同シ ○第三則 院省使ニテ公用土地買上  
 ヲ要スルルハ左ノ事由ヲ內務省ニ照會シ內務省ヨリ地方官ニ諮詢シテ差支ナキ旨ノ回答  
 ヲ得タル上該廳ヨリ太政官ニ上陳允裁ヲ得ルモノトス 廳府縣ニテ公用土地買上ヲ要ス  
 ルハ左ノ事由ヲ具狀シテ內務省ニ稟請シ內務省ヨリ太政官ニ上陳シ允裁ヲ得ル者トス  
 ・內務省ニ照會又ハ稟請スヘキ事由ハ左ノ如シ  
 一土地ヲ買上ルノ事由 一該地ヲ必需スルノ事由  
 某管轄國郡村市  
 一該地ノ番号 一該地ノ字 一該地ノ地種 一該地ノ地主 一東西何程南北何  
 程 一方積何程但該地ノ實測圖ヲ添ル者トス實測圖ハ近傍ノ地形ヲモ略記スヘシ  
 第四則 公用ノタメ買上ル地價ハ券面ニ記シタル代價タルヘシ然レモ地價相違ヲ生セシ  
 時ハ所有者ト買上ヘキ該廳トノ商議ヲ以テ代價増減スルコトアルヘシ但明治五年二月十四  
 第七 地所之部 百五十五

日以前買地又ハ用地申付爲手當作德米等ヲ渡シ來リタル土地ハ同年ヨリ同七年迄三ヶ年ノ買納石代平均ノ價ヲ以作德米七ヶ年半ノ金額ナ一時ニ下渡シ買上ルモノトス○第五則買上ヘキ土地ニ屬シタル植物建造物等ヲ併セテ買上ルハ地價ノ外別ニ植物建造物等ノ代價ヲ渡スヘシ其代價ハ所有者ト買上ヘキ該廳トノ協議タルヘシ○第六則買上ヘキ土地ニ屬シタル植物建造物等ヲ買上ケサルハ地價ノ外別ニ植物建造物等ノ轉移料ヲ渡スヘシ轉移料ハ所有者ト土地ヲ買上タル該廳トノ協議タルヘシ○第七則土地ヲ買上ヘキ該廳ハ植物建造物等ヲ買上クルコトヲ要セスト雖モ人民植物建造物等ヲ併セテ買上シキ求ルルハ第五則ノ通タルヘシ○第八則土地植物建造物等ノ買上代價及轉移料ノ見込所有者ト該廳ノ間ニ許多ノ差違ヲ生シ熟議ニ至リ難キハ雙方ヨリ評價人各一人ヲ出シ地方官之ヲ折衷シテ内務省ノ決ヲ請ヒ之ヲ定ムルモノトス○第九則地方官土地及植物建造物等ノ買上テ公達シタルハ直ニ買上代價ヲ渡スヘシ○第十則人民買上代價ヲ受取タルハ買上ラレタル土地植物建造物等ヲ三十日以内ニ渡スヘシ然レトモ買上前ニ該廳ト別段ノ契約ヲ結ビタルハ特別トス○第十一則土地買上ノ際事業ノ急施ヲ要スルハ特ニ其旨ヲ所有者ニ達シ三十日以上ノ期日ヲ定メ代價ヲ申出シムヘシ其期日迄ニ代價ヲ申出サルカ又ハ代價ニ付雙方見込相協ハカルトキハ更ニ建物アル地ハ三十日以上建物ナキ地ハ十日以上ノ期日ヲ定メ其期日迄ニ之ヲ引渡スヘキ旨ヲ達スヘシ但各其期日内ニ雙方共現在ノ實況及其見込ノ代價ヲ詳記シ評價人ノ意見書ヲ添ヘ地方官ノ認印ヲ受置クヘシ(明治十六年第五十号御達)○第十二則第十一則ノ場合ニ於テハ所有者ノ請求ニヨリ土地ニ付テハ券面地價十分八ノ金額建造物等ノ轉移料又ハ代價ニ付テハ假定ノ金額地方官定ムル之ヲ以テ改正セラル(明治十五年第六十四号御達)○第十三則(明治十六年第五十号御達)○第十四則(明治十六年第五十号御達)○第十五則(明治十六年第五十号御達)○第十六則(明治十六年第五十号御達)○第十七則(明治十六年第五十号御達)○第十八則(明治十六年第五十号御達)○第十九則(明治十六年第五十号御達)○第二十則(明治十六年第五十号御達)

(八)地所名稱區

明治七年十一月七日御布告第百二十号  
 明治六年三月第百十四号布告地所名稱區別左ノ通改定候條此旨布告候事

官有地

- 第一種 地券ヲ發セズ地租ヲ課セス地方税ヲ賦セザルヲ法トス  
 一 皇宮地 皇居離宮等ヲ云○一 神地 伊勢神宮山陵官國幣社府縣社及民有ニアラサル社地ヲ云
- 第二種 地券ヲ發シ地租ヲ課セス地方税ヲ賦セザルヲ法トス尤府縣所用ノ地ハ地券ヲ發セズ唯帳簿ニ記入シ但此地ニ在ル官舎ヲ貸渡ス時ハ借地料ヲ賦スヘシ  
 一 皇族賜邸○官用地 官院省使寮司府藩縣本支廳裁判所警視廳陸海軍本分營其他政府ノ許可ヲ得タル所有ノ地ヲ云
- 第三種 地券ヲ發セス地租ヲ課セス地方税ヲ賦セザルヲ法トス但人民ノ願ニヨリ右地所ヲ貸渡ス時ハ其間借地料ヲ納メシムヘシ  
 一 山岳丘陵林藪原野河海湖沼池澤溝渠堤塘道路田畑屋敷等其他民有地ニアラサルモノ○一 鐵道線路ノ敷地○一 電信架線柱敷地○一 燈明臺敷地○一 各所ノ舊跡名區及公園等民有地コアラサルモノ○一 人民所有ノ權限ヲ失セシ土地○一 民有地ニアラサル堂宇敷地及墳墓地○一 行刑場
- 第四種 地券ヲ發セス地租ヲ課セス地方税ヲ賦セザルヲ法トス  
 一 寺院大中小學校敎場病院貧院等民有地ニアラサルモノ

民有地

- 第一種 地券ヲ發シ地租ヲ課シ地方税ヲ賦スルヲ法トス  
 一 人民各自所有ノ確証アル耕地宅地山林等ヲ云但此地賣買ハ人民各自ノ自由ニ任ス  
 一 雖モ濫シ地開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス○一 人民數人或ハ一村或ハ數村所有ノ確証アル學校病院郷倉牧場秣場社寺等官有地ニアラサル土地ヲ云但此地賣買ハ其所有者一般ノ自由ニ任スト雖モ濫シ地或ハ開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス
- 第二種 地券ヲ發シテ地租地方税ヲ賦セザルヲ法トス  
 第七 地所地券之部

(十) 社寺等  
附地建物  
物々品  
ノ義

一官有ニアラサル鄉村社地及墳墓地等ヲ云〇一民有ノ用恩水路溜池敷堤敷及井溝敷  
地〇一公衆ノ用ニ供スル道路但共地形ヲ變換スルトキハ管轄廳ノ許可ヲ請フヘシ  
明治九年四月十八日御布告第五十四号  
社寺學校病院等ニ寄附候土地建物其他物品等別段ノ契約無之分ハ寄附主ニ於テ其所有ヲ  
離シタルモノトシ一般ノ讓渡ヲ以テ處分候條此旨布告候事

(十一) 土地賣買  
讓渡規  
則  
明治十三年十二月三十日御布告第五十二号  
土地賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條此旨布告候事但明治八年六月第六号布告并同年十  
月第五十三号布告廢止候事  
別紙

土地賣買讓渡規則  
第一條凡ソ所有ノ土地ヲ賣渡シ又ハ讓渡サント欲スル者ハ(賣渡讓渡)証文ニス券ヲ添ヘ  
其地ノ戶長役場ニ差出シ與書割印ヲ受ケ之ヲ買受人又ハ讓受人ニ附與スヘシ但一筆ノ土  
地ヲ分割シテ與書割印ヲ受ケント欲スル者ハ其分界及坪數等ヲ詳記シタル圖面ヲ添ヘテ  
差出スヘシ〇第二條 戶長役場ニ於テハ像メ土地賣買讓渡與書割印帳ヲ備置キ與書割印  
ヲ請フモノアレハ地所賣入書入與書割印帳ヲ見合セ登記ナキニ於テハ(賣渡讓渡)証文ニ  
與書割印ヲナスヘシ〇第三條 買受人又ハ讓受人(賣渡讓渡)証文ヲ領收スルトキハ地券  
(書換裏書)願書ニ雙方連印ノ土地券ヲ添ヘ戶長役場ヲ經テ管轄廳ニ差出スヘシ〇第四條  
第一條ノ手續ヲ以テ其土地所有權ヲ移轉スルコトヲ得ト雖田地利租并地方稅ハ地券ニ記載  
セル姓名ノ者ヨリ之ヲ徴収スヘシ但地券紛失ノ際下附願出ルモ亦地券ニ記載セル姓名ノ  
者タルヘシ〇第五條 死亡者失踪者ノ家督相續若シハ遺產相續及離縁戶主ノ家督相續ニ  
由リ土地ヲ讓受ケタル者ハ親族(親族ナキモノハ近隣ノ戶主)ト連印ノ上戶長役場ヲ經テ  
地券(書換裏書)願書ヲ管轄廳ニ差出スヘシ若シ家督相續又ハ遺產相續ノ日ヨリ六箇月以

地 券 之 部

内ニ戶長役場迄之ヲ差出サソル者ハ証印稅五倍ノ料料ニ處ス但本條期限内ニ地券(書換  
裏書)願書ヲ差出ス能ハサル事由アリテ之ヲ届出ル者ハ此限ニ在ラス

(十二) 地券裏書  
件下渡  
(十三) 証  
印稅則

明治十二年二月十日御布告第六号  
地所賣買讓與等ノ節ハ總テ地券書換下ケ渡スヘキ成規ノ處自今其券狀餘白アルモノハ管  
轄廳ニ於テ其裏面ニ確認ノ証ヲ記シテ下ケ渡スヘシ此旨布告候事  
明治十四年五月二十五日御布告第三十号  
地券証印稅左ノ通改正明治十四年七月一日ヨリ施行シ從前ノ証印稅則ハ同日ヨリ廢止候  
條此旨布告候事

Table with columns for land value (e.g., 金高拾圓以上) and corresponding certificate fees (e.g., 券狀一通ニ付 三錢). Includes a section for '地所地券之部' with a fee of 百五十九.

代換授與并ニ水火盜難ニヨリ地券書換○荒地其他無代價地券授與書換○荒地起返及開墾下年季明其他一筆地ヲ數筆ニ分裂數筆地ヲ一筆ニ合併等ニテ所有主變換セサル地券書換

租 稅 之 部

(十四)買 明治十年二月十三日御布告第十八号

上地拂 地租改正後買上地拂下地遺地等収稅除稅區分左ノ通相定候條此旨布告候事  
下地價 第一條 民有地ヲ買上ル時其年分ノ稅ハ買上タル前月分迄月割ヲ以テ收入スヘシ○第二條 官有地ヲ拂下ル時其年分ノ稅ハ拂下タル翌月分ヨリ月割ヲ以テ收入スヘシ○第三條 民有地ヲ官ノ許可ヲ得テ川溝溜池道路堤塘敷其他遺シ地トナス時ハ工事着手ノ月ヨリ除稅スヘシ一旦着手スルモ若シ工事ヲ中止シテ六ヶ月ニ及ブモノハ工事ヲ施シタル部分ヲ除キ其中止間ハ除稅ノ限ニアラス但七ヶ月以上ニ涉ルヘキ工事ハ六ヶ月毎ニ其工程ヲ量リ除稅ノ區域ヲ定ムルモノトス

明治十五年第三十五号御布告ヲ以テ改正ス

(十五)地 方稅規 則

明治十三年四月八日御布告第十六号 明治十一年七月第十九号布告地方稅規則左ノ通改正候條此旨布告候事

- 第一條 地方稅ハ左ノ目ニ從ヒ徵收ス
  - 一 限租五分一以內
  - 一 營業稅并ニ雜種稅
  - 一 戶數割
- 第二條 營業稅雜種稅ノ種類ハ別段ノ布告ヲ以テ之ヲ定ム
- 第三條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費目左ノ如シ
  - 一 警察廳舍建築修繕費
  - 一 區町村土木補助費
  - 一 土木費

一 府縣會議諸費

一 衛生及病院費

一 郡區廳舍建築修繕費

一 區町村教育補助費

一 諸達書及揭示諸費

一 勸業費

一 戶長以下給料及戶長職務取扱諸費

一 地方稅取扱費

一 府縣廳舍建築修繕費

一 府縣監獄費

一 豫備費 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

一 豫算外ニ生シタル事件ノ費途

第七條 府知事縣令ハ一周年度間ノ出納ヲ計査シ精算帳及計表ヲ製シ翌年通常會議ノ初メニ於テ之ヲ府縣會ニ報告シ然ル後內務卿及大藏卿ニ報告スヘシ  
○第八條 同上御布告ヲ  
○第九條 明治十四年第八号御布告ヲ以テ廢止セラル

明治十三年十一月五日御布告第四十八号  
今般歲計ヲ節約シ紙幣銷却ノ元資ヲ増加シ併ヒテ地方ノ政務ヲ改良スルノ要用ナルヲ察シ左ノ通制定布告候事  
第一條 本年四月第十六号布告第一條地方稅目中「地租五分一以内」トアルヲ「地租三分一以内」ト改定ス  
第二條 略除ス

(十六)營業稅雜稅及ノ種類及ノ制限

明治十三年四月八日御布告第十七号  
明治十一年十二月第三十九号地方稅中營業稅雜稅ノ種類及ヒ制限左ノ通改正候條此旨布告候事  
第一條 營業稅ヲ課スヘキ種類左ノ如シ但國稅アルモノハ課稅ノ限ニアラス  
第二條 雜稅ヲ課スヘキ種類左ノ如シ  
料理屋 待合茶屋 遊船宿 芝居茶屋 飲食店ノ類 湯屋 理髮人 傭人 受宿 遊藝師 匠遊藝人 相撲俳優 間藝妓ノ類 市場 演劇其他興行遊覽所 遊技場 玉突揚子射的 人寄席 船 舟漁船 川船及五馬車 人力車 荷積馬車 荷積大七 但國稅ノ吹矢ノ類 十石未滿海船 八車 荷積中小車 荷積牛車ノ類 但國稅ノ額ヲ超過スヘカラス 水車 屠畜 漁業採藻ノ類 但漁業稅採藻稅ハ各地從來ノ慣例ニ依リ之ヲ徵收スヘシ若シ其慣例ヲ改正シ又ハ新稅ヲ賦課セントスルモノハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受クヘシ  
○第三條 明治十四年第三号御布告ヲ以テ廢止ス  
○第四條 府知事縣令ハ府縣會ノ決議ヲ以テ第一條第二條條類目中ニ於テ賦課スル者ヲ取捨スルコトヲ得  
○第五條 府知事縣令ハ其賦課スヘキ各業

(十七)地租徵收ノ期限

ノ盛衰ヲ觀察シ府縣會ノ決議ヲ以テ各個ノ稅額ヲ查定スヘシ  
○第六條 明治十四年第三号御布告ヲ以テ廢止ス  
○第七條 同上  
○第八條 第四條第五條ニ於テ確定シタル課目課額ハ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ報知スヘシ  
○第九條 第一條第二條課稅種類ノ外地方特別ノ課稅ヲ要スル者ハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受ヘシ  
明治十四年七月十七日御布告第十四号  
明治十年七月第五十三号市告地租徵收期限ノ儀明治十四年分ヨリ左ノ通改定候條此旨布告候事但市街宅地々租ノ儀ハ該年七月翌年一月兩期ニ其五分宛ヲ收納スヘシ  
地租徵收期限  
畑方及宅地山林原野牧場

|    |            |    |    |
|----|------------|----|----|
| 一期 | 該年七月一日ヨリ   | 同  | 五分 |
| 二期 | 同 八月三十一日限  | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 九月一日ヨリ   | 田方 | 五分 |
| 三期 | 同 十月三十一日限  | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 十一月一日ヨリ  | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 十一月十五日限  | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 十二月十五日限  | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 十二月三十一日限 | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 翌年二月一日ヨリ | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 三月三十一日限  | 同  | 五分 |
| 三期 | 同 三月三十一日限  | 同  | 五分 |

(十八)租稅未納者處分ノ規則

明治十年十一月二十一日御布告第七十九号  
租稅未納ノ者ハ從來總納金ヲ徵シ本人身代限ヲ以テ取立ル等ノ處分モ有之處自今右處分ヲ廢止シ更ニ左ノ通區別相立所分致スヘシ此旨布告候事  
第一條 徵收期限(每期ニ云)ヲ過テ尙國稅ヲ上納セサル時ハ之ヲ賦課シタル財產ヲ公賣シテ徵收スヘシ若シ其財產他人ヘ賣與讓與シタル時ハ之ヲ買受讓受タル者ヨリ完納セシムヘシ但書入質入地所質入ハ其ノ財產ニ未納稅アル時其債主ニ於テ辨納スヘシト申立規則ニ從フ  
第七 稅租之部  
百六十三

ル者ハ其意ニ任セ公賣チ行ハス○第二條 營業稅ヲ上納セサル時ハ其營業ヲ停止ス其製造品アル者ハ之ヲ公賣シ次ニ其器物ニ及ホスヘシ 酒類造石稅モ前項ニ依テ處分ス但酒類並酒造用諸器物ハ自他ノ所有ヲ問ハズ現在品ノ一部又ハ全部ヲ公賣シテ徵收ス(明治十六年第二十五号御布告ヲ)

○第三條 府縣稅民費モ此規則ニ準シテ處分スヘシ但各別ニ財以テ二項ヲ追加ス

產ヲ指定シテ賦課セサル民費徵收ニ付テハ土地家屋ヲ除キ他ノ財產ニ付先取特權アリトス○第四條 凡租稅不納ニ付財產ヲ公賣セントスル時ハ地方官ニ於テ處分シ先ツ公賣ニ關スル入費ヲ引去リ而後國稅府縣稅民費ヲ徵シ剩餘アル時ハ之ヲ本人ニ還付ス若シ不足アル時國稅府縣稅ハ官ノ損失ニ歸シ民費ハ該區ノ損失ニ歸ス但該財產ニ付テ區戶長役所ノ帳簿ニ記載セル債主アル時ハ其殘金ヲ順次其債主ニ給付ス○第五條 (明治十四年第十ノ帳簿ニ記載セル債主アル時ハ其殘金ヲ順次其債主ニ給付ス○第五條 (明治十一年第三テ刪)○第六條 財產公賣ノ際買請望人無之節該財產ハ之ヲ官沒スヘシ (明治十一年第三以テ追) (附則略之)

明治十四年四月十九日御布告第二十四号

區町村會若クハ水利土功ノ集會ニ於テ評決シタル土木費ノ怠納者ハ明治十年十一月第七

十九號御布告ニ據リ處分スヘシ此旨布告候事

但財產公賣ノ際買望人無之節ハ官沒ノ手續ヲナサズ郡區長又ハ戶長ニ於テ之ヲ管掌

シ其處分ハ會議ノ評決ニ任スヘシ (明治十五年第四十号御布告)

ナリ以テ但書ヲ追加セラル

明治十七年二月十六日御布告第四号

根室縣下千島國及ヒ北見國紋別常呂網走斜里ノ四郡ニ於テハ拾昆布稅收獲高ノ現品二割ヲ徵收ス但本年五月

一日ヨリ施行ス

右奉 勅旨布告候事

(十九)土  
木費意  
納者處  
分ニ付  
御布告

(二十)拾  
昆布帆  
立身稅  
ニ付御  
布告

証券印紙之部

(廿一)証

券印紙  
規則

明治七年七月廿九日御布告第八十一号

明治六年二月第五十六号以下追々及布告候証券印稅規則總テ相廢シ更ニ別冊ノ通相定メ

本年九月一日ヨリ施行候條此旨布告候事但帳簿罰則ハ來ル明治八年一月一日ヨリ施行候

儀ト可相心得事

別冊  
証券印紙規則

第一則 綱領

第一條 凡ソ人民財產ノ受授並ニ交際上相用候証券帳簿類ハ都テ此規則ノ通証券(○印紙○界紙)ヲ相用フヘキ事○第二條 總テ規則ノ通証券(○印紙○界紙)ヲ用ヒサル者ハ後日如何殊ノ故障差起出訴ニ及ヒ候共其書類ハ一切取揚ケ裁判不相成候事○第三條 証券(○印紙○界紙)ハ買求差支無之様各府縣管下適宜ノ場所へ賣捌所相設置候條下條ニ掲載セル定價ヲ以テ買取ヘキ事○第四條 賣捌所ハ証券印紙賣捌所ト大書シ官ノ燒印アル看板ヲ掲グル家ニ限ルヘシ其外ニ於テハ一切賣買禁止ノ事○第五條 印紙ノ種類定價左ノ

通候事

淡黑色印紙

青色全

橙黃色全

深紫色全

定價一錢

全 拾錢

全 五拾錢

全 五圓

薄赭色印紙

黃色全

紅色全

深紅色全

定價五錢

全 貳拾五錢

全 壹圓

全 二拾圓

第六條 証券界紙ノ定價左ノ通候事

大判界紙 定價七厘

右ノ界紙ハ大中小判ノ三種アリト雖モ其證書ノ文義長短ニ因リ便宜ニ任セ何種ヲ相用

第七 証券印紙之部

中判全

全五厘

小判全

全三厘

百六十五



フルモ適宜タルヘキ事

第二則 諸証書

第一條 諸証書ヲ分テ三類トス

○第一類諸証書

一賣品並職業ニ管スル金錢受取書

右ノ受取書ハ金高拾圓以上總テ一錢ノ印稅拾圓未滿ハ印紙界紙ヲ用フルニ及ハス

一預リ金(○証文○手形) 一耕地小作證文 一遺金証文

右ノ證書類ハ金高拾圓以上ハ總テ一錢ノ印稅拾圓未滿ハ界紙ヲ用フヘシ

一質物(○預リ書○小札) 一稅界紙ヲ用フルニ及ハス

右ノ證書ハ金高拾圓以上ハ一錢ノ印稅拾圓未滿ハ印稅界紙ヲ用フルニ及ハス

一諸會社株手形 一荷物送り狀 一(○地所(○建家)讓與證書

一荷物預リ証書 一物品讓與証書 一公債證書類讓與証書

一跡式讓狀

右ノ證書類ハ金高ニ拘ハラヌ總テ一錢ノ印稅

一預リ米(○證文○手形) 一預リ雜穀(○證文○手形)

右證書ハ(米高五石雜穀石高拾石)以上ハ總テ一錢ノ印稅(米高五石雜穀石高拾石)未滿

ハ界紙ヲ用フヘシ(明治八年第百廿六号)

○第二類諸証書

一借用金證文 一預リ金(○證文○手形)但使用ヲ爲サ、ルノ明文無之分

一地所並建家賣渡證文 一地所並建家(○質入○書入)證文

一公債證書類賣買證文

一諸請負證文

一金錢約定爲取換證文

一米借用證文

一賣買用諸品(代價拾圓以上)借用證文

一借家證文

一諸賣買證據金預リ手形

一預リ米(○證文○手形)但使用ヲ爲サ、ル明文無之分

一預リ雜穀(○證文○手形)但使用ヲ爲サ、ル明文無之分

右ノ證書類ハ

金高拾圓未滿ハ

書而 米高五石未滿ハ 界紙ヲ用フヘシ

雜穀高拾石未滿ハ

同斷 米高五石以上拾石未滿ハ 印稅 一錢

雜穀高拾石以上二拾石未滿ハ

同斷 米高二拾圓以上三拾圓未滿ハ 全 二錢

命高二拾圓以上三拾圓未滿ハ

同斷 米高拾石以上拾五石未滿ハ 全 三錢

雜石高二拾石以上三拾石未滿ハ

同斷 金高三拾圓以上四拾圓未滿ハ

米高拾五石以上二拾石未滿ハ

雜穀高三拾石以上四拾石未滿ハ

右以上幾許ノ高ニ至ルトモ總テ之ニ準シ印税増加イタスヘシ

一 諸品賣買仕切書

但シ買仕切トハ荷主ヨリ輸送シ又ハ輸送セントスル物品ヲ問屋仲買又ハ其他ニ於テ仕切リ其價等ヲ荷主ニ證明報告スル書類ヲ云ヒ賣仕切トハ荷主ヨリ他ニ物品又ハ輸送スルニ方テ其物賣却ノ價額ヲ荷受主ニ向テ證明報告スル書類ヲ云フ  
(明治十二年第三十一号御布告)  
ヲ以テ但書ヲ追加ス

右ノ仕切書ハ

書面金高拾圓未滿ハ

界紙ニ及ハス

同斷金高拾圓以上二拾圓未滿ハ

印税 一錢

同斷金高二拾圓以上三拾圓未滿ハ

同 二錢

同斷金高三拾圓以上四拾圓未滿ハ

同 三錢

同斷金高四拾圓以上五拾圓未滿ハ

同 四錢

右以上幾許ノ高ニ至ルトモ總テ之ニ準シ印税増加スヘシ

第三類 諸證書

一 諸酒切手

右ノ切手ハ

升目一升未滿ハ

界紙ニ及ハス

同一升以上一斗未滿ハ

印税 一錢

同一斗以上二斗未滿ハ

全 二錢

同一斗以上三斗未滿ハ

全 三錢

右以上幾許ノ高ニ至ルトモ總テ之ニ準シ印税増加イタス可シ

一 食類切手

右ノ切手ハ

代金高貳拾五錢未滿ハ

界紙ニ及ハス

同貳拾五錢以上貳圓五拾錢未滿ハ

印税 一錢

同貳圓五拾錢以上五圓未滿ハ

全 二錢

同五圓以上拾圓未滿ハ

全 三錢

右以上幾許ノ高ニ至ルトモ總テ之ニ準シ印税増加致スヘシ

一 米油醬油其外諸品賣買切手

右ノ切手ハ

代金高貳拾五錢未滿ハ

界紙ニ及ハス

同貳拾五錢以上五圓未滿ハ

印税 一錢

同五圓以上拾圓未滿ハ

全 二錢

同拾圓以上貳拾圓未滿ハ

全 三錢

右以上幾許ノ高ニ至ルトモ總テ之ニ準シ印税増加致スヘシ

一 荷物請取書

右ノ受取證ハ送狀附添ハサル分ハ界紙ニ及ハス送狀附添之分ハ界紙ヲ用フル歟又ハ印

紙貼用ノ荷物別取帳ニ記スベシ

一 金高記載無之(○約定證書○入幕請狀)類

右ノ證書類ハ總テ界紙ヲ用フベシ

一 爲換手形

一 荷爲換手形

右ノ手形ハ

書面金高五拾圓未滿ハ

界紙ニ及ハス

同斷金高五拾圓以上百圓未滿ハ

印税 一錢

第七 証券印紙之部

同斷金高百圓以上百五拾圓未滿ハ 全 二錢  
 同斷金高百五拾圓以上二百圓未滿ハ 全 三錢  
 同斷金高二百圓以上二百五拾圓未滿ハ 全 四錢  
 右以上幾許ノ高ニ至ルモ總テ之ニ準シ印稅增加致スヘシ  
 (明治七年第三百三十六号御布告ヲ以テ本項ヲ追加ス)

一 銀行當座預リ金小切手  
 右ノ小切手ハ金高ニ拘ハラズ總テ一錢ノ印紙ヲ徵收シ大藏省ニ於テ稅印ヲ押捺スルモ  
 ノトス

第二條 證書ハ總テ證書渡主ニテ印紙貼用ノ上必ス實印ヲ以テ其印紙前面滅却セサル様  
 第一号圖ノ通調印致スヘキ事○第三條 院省使府縣ノ官印或ハ諸官吏ノ公務ニ依リ調印  
 セル受取書證書類ハ印紙界紙ヲ用フルニ及ハサル事○第四條 租稅並ニ賦金及ヒ區入費  
 取立ノ節區戶長ヨリ相渡候受取證ハ界紙ヲ用フルニ及ハサル事○第五條 官祿家祿賞  
 典救助受取書又ハ裁判請書及ヒ訴訟濟口証文等ハ都テ印紙界紙ヲ用フルニ及ハサル事  
 一 院省使府縣廳ニ於テ銀行又ハ爲換方等へ貢金其他官金相預ケ候節預リ金証文並ニ預リ  
 金通帳ハ印紙界紙ヲ用フルニ及ハサル事  
 (明治七年第八十九号御布告ヲ以テ第二項ヲ追加セラル)

第三則 諸帳簿

第一條 諸帳簿類分テ三類トス

○第一類諸帳簿

- 一金錢判取帳 一 質物通帳
- 一金錢當座預リ通帳
- 右ノ帳簿類ハ 附込見積金高百圓未滿ハ 印紙貼用ニ及ハス
- 同斷金高百圓以上貳百圓未滿ハ 印稅 一錢

同斷金高二百圓以上三百圓未滿ハ 全 二錢  
 同斷金高三百圓以上四百圓未滿ハ 全 三錢  
 右以上幾許ノ高ニ至ルトモ總テ之ニ準シ印稅增加致スヘシ

○第二類諸帳簿

- 一 質物寄帳 一金錢一時(○貸○借)通帳
- 一 諸品捐料帳 一 商賣品當座(○貸○借)通帳
- 一金錢預リ通帳但使用ヲ爲サ、ルノ明文無之分
- 右ノ帳簿類ハ 附込見積金高百圓未滿ハ 印紙貼用ニ及ハス
- 同斷金高百圓以上二百圓未滿ハ 印稅 五錢
- 同斷金高二百圓以上三百圓未滿ハ 全 拾錢
- 同斷金高三百圓以上四百圓未滿ハ 全 拾五錢
- 右以上幾許ノ高ニ至ルトモ總テ之ニ準シ印稅增加致スヘシ

○第三類諸帳簿

一 荷物判取帳 一 諸品判取帳  
 右ノ帳簿ハ附込ノ箇數ニ拘ラス一ケ年ニ付印稅貳拾錢  
 第二條 (○第一類○第二類)帳簿へ印紙貼用ノ儀ハ一ケ年以上附込ヘキ見積金高ヲ以第  
 三号書式ノ通帳簿ノ初丁へ自身ニ相記シ其金高ニ應シタル印紙貼用ノ上必ス實印ヲ以調  
 印致スヘキ事但帳簿初丁へ記シタル附込見積金高相滿候迄ハ何ケ年相用候モ苦シカラサ  
 事○第三條 第三類ノ帳簿へ印紙貼用ノ儀ハ其帳簿可相用年限ヲ見積リ第四号書式之  
 通帳簿ノ初丁へ自身ニ相記シ其年限ニ應シタル印紙貼用ノ上必ス實印ヲ以テ調印致スヘ  
 キ事但シ帳簿ノ初丁へ記シタル年限相滿候迄ハ何箇數附込候トモ苦シカラサル事○第四  
 第七 証券印紙之部 百七十一

條 一旦印紙貼用ノ(○第一類○第二類)帳簿附込見積金高相滿候歟又ハ第三類帳簿年限相滿餘白ノ紙數アリテ再用セント欲スル者ハ尙其帳簿ニ應シ(○第三号○第四号)書式ノ通改テ書記シ印紙貼用致スヘキ事○第五條 第二類ノ証書ヲ若シ便利ノ爲メ帳簿ニ相綴リ書載候儀不苦候得共其帳簿ハ其附込ノ廉毎ニ第二則第一條ノ通印紙貼用致スヘキ事○第六條 印紙貼用ノ諸帳簿ハ其掛リ官員巡廻調査ヲ遂ケ候儀モ可有之尤其節ハ巡廻日限前以可相達候條印紙貼用ノ帳簿ハ無遺漏調査ヲ受クヘキ事○第七條 (○第一類○第二類)附込見積金高相滿候歟又ハ第三類帳簿ノ期限相滿候節ハ其帳末ニ第五号書式ノ通與書ノ上調印致シ置キ前條官員巡廻ノ節差出檢印ヲ受シヘキ事

第四則 賞罰例

第一條 証券界紙相用フヘキ証書類ニ証券界紙ヲ用サル者ハ脱稅高(界紙定價三種平均五厘)ノ貳拾倍(則拾錢)其証書ヲ受取タル者ハ脱稅高ノ十倍(則五錢)過料タルヘキ事○第二條 (○第一類○第二類○第三類)ノ証書類ニ証券印紙ヲ貼用セサル者ハ脱稅高ノ二十倍其証書ヲ受取タル者ハ脱稅高ノ十倍過料タルヘキ事○第三條 (○第一類○第二類)ノ諸帳簿ニ証券印紙ヲ貼用セサル者ハ脱稅高ノ高貳十倍過料タルヘキ事○第四條 (○第一類○第二類)証券印紙貼用ノ帳簿見積金高附込相濟餘白ノ紙數之レアルトテ第三則第四則ヲ犯シ更ニ証券印紙ヲ貼用セス猶附込候者ハ脱稅高ノ十倍過料タルヘキ事○第五條 第三類ノ諸帳簿ニ証券印紙ヲ貼用セサル者ハ脱稅高(幣ハ無印紙ニ一ケ年未滿相用ナル者ハ則貳拾錢ノ脱稅一ケ年未滿相用ナル者ハ則四十錢ノ脱稅ニ當ル類ナリ以上之ニ準シ一ケ年以内貳拾錢ツ、ノ割合ヲ以テ之ヲ算ス)ノ十倍過料タルヘキ事○第六條 第三類證券印紙貼用ノ帳簿期限相滿餘白ノ紙數之レアルトテ第三則第四條ヲ犯シ更ニ証券印紙ヲ貼用セス猶附込候者ハ脱稅高(幣書上同斷)ノ四倍過料タルヘキ事○第七條 諸証券帳簿ニ証券印紙不足ニ貼用セシモノハ其減稅高ノ拾倍其証書受取タル者ハ減稅高五

倍ノ過料タルヘキ事(明治八年第五十一号御)○第八條 規則ニ從テ貼用セシ諸証券帳簿ノ証券印紙ニ調印セサル者ハ三十圓以下ノ過料タルヘキ事但其調印セサル証書ヲ受取タル者ハ渡主ニ科スル半高ノ過料タルヘキ事(明治八年第五十一号御布)○第九條 証券印紙ヲ貼用セサル歟又ハ印紙不足ナル歟或ハ貼用ノ印紙ニ調印セサル歟又ハ界紙可相用諸

證書ニテ界紙ヲ用ヒサル證書へ證人ニ相立又ハ與書等致シ候者ハ貳拾五圓以下ノ過料タルヘキ事○第十條 官許賣捌所ノ外ニ於テ第一則第四條ニ背キ證分(○印紙○界紙)ヲ賣捌致シ候者ハ其品取揚ケ既ニ賣捌キタル(○印紙○界紙)代ノ百倍其情ヲ知テ之ヲ買フ者ハ其品取揚ケ(○印紙○界紙)代ノ五十倍過料タルヘキ事○第十一條 証券印紙貼用致スヘクシテ全ク貼用無之諸帳簿ニ調印イタシ候者ハ其人毎ニ帳簿主ヨリ取立候過料高自分ノ一ツ、各過料タルヘキ事○第十二條 一旦相用ヒ調印セシ証券印紙ヲ再用セントシテ之ヲ剥取リ調印ヲ洗滅スル者或ハ洗滅シタル者ト知テ之ヲ再用スル者又ハ之ヲ賣買スル者ハ六十圓以下ノ過料タルヘキ事○第十三條 証券(○印紙○界紙)ヲ贗造スル者又ハ贗造セシ品ト知テ是ヲ賣買スル者ハ都テ九十圓以下ノ過料タルヘキ事○第十四條 前數條ニ掲ケル處ノ犯則人ヲ見届ケ訴出ル者アルキハ事實取糾ノ上相違ナキモ於テハ其賞トシテ其過料金ノ半高ヲ下サルヘキ事○第十五條 証券印紙貼用スヘキ界紙ニ認メ渡ス者ハ減稅高ノ十倍其受取タル者ハ減稅高五倍ノ過料タルヘキ事(明治八年第五十一号御布)告ヲ以テ増補ス

第五則 附錄

第一條 諸証書ニ外國貨幣ヲ以記載セル分ハ其節ノ相場ヲ以テ內國通貨ニ計算シ其高ニ應シ印紙貼用致スヘキ事○第二條 公債証書類ハ其証書面ノ金高ニ拘ハラヌ賣買ノ正金高ヲ以テ計算シ其用ニ應シ印紙貼用致スヘキ事○第三條 官ノ金銀諸拜借証文ノ儀衆庶一般ノ災厄ヨリ起レル救助ニ關スル分ハ(○印紙○界紙)ヲ用フルニ及ハサレヒ其餘ノ諸拜借ハ總テ借用令發証文規則ノ通タルヘキ事 第四條 印紙貼用アル諸証書へ事故アリ

第七 証券印紙之部

テ書改候節ハ新證書へ更ニ印紙貼用致スヘキ事○第五條 凡ソ諸證書帳簿ニ誤リテ過剩  
ノ印紙ヲ貼用セル者ハ其證ニ於テ妨ケナキ事○第六條 諸證書ヲ差戻シ又ハ諸切手類現  
品引替ノ節戻シ主ニテ嘗テ調印アル印紙面ヲ塗消シ或ハ引裂キ相戻スヘキ事○第七條  
各所問屋ヲ經テ送致スル荷物送狀ヲ途中(宿湊問屋)ニ於テ其儘繼送候節ノ添狀ハ印紙貼  
用ニ及ハサレモ右荷物ヲ引分ケ各別ニ差送候節ノ新規送狀ハ規則ノ通印紙貼用致スヘキ  
事○第八條 爲取換約定書ノ類ハ雙方トモ印紙貼用致スヘキ事○第九條 明治七年第八  
ナ以テ)第十條 明治八年第四號御  
削除ス)第十條 明治八年第四號御  
受致候儀相願レ規則ノ通り過剩金差出シ候後ニ至ツテモ其證書帳簿ハ取揚ケ裁判不相成  
候事○第十二條 前條ニ掲クル證書ヲ以テ公裁ヲ仰カント欲スル節ハ受取主ニ於テ相當  
ノ紙印貼用シ調印濟ノ上ハ取揚ケ裁判可致事○第十三條 第十一條ニ掲ル證書ノ内  
界紙可相用處他紙ヲ相用候證書ヲ以テ公裁ヲ仰ント欲スル節ハ受取主ニ於テ其證書ヘ一  
錢印紙ヲ貼用シ調印濟ノ上ハ取上ケ裁判可致事○第十四條 第十一條ニ掲ル帳簿ヲ以テ  
公裁ヲ仰ント欲スル節ハ帳簿主ニ於テ相當印紙ヲ貼用シ調印濟ノ上ハ取揚裁判可致事○  
第十五條 甲乙等ノ號ヲ各帳ヘ記付シ同金高ヲ記載シ彼我ニ各一帳ツ、所持シテ相互ニ  
交換致ス通帳ノ類ニ冊ニ後証トナルヘキモノハ甲乙トモ印紙貼用致スヘキ事○第十六條  
旅行ニテ相用候帳簿ハ其管轄地ニテ官員巡廻ノ節調査ヲ受候トモ又ハ出先ニテ官員  
巡廻ノ節調査ヲ受候トモ便宜ニ任スヘキ事○第十七條 最初帳簿附込見積金高百圓以內ト  
見込印紙貼用セス官員ノ調査ヲ受サルモノ漸々附込相嵩ニ誤テ百圓以上ニ及ヒ候者ハ附  
込金高貳百圓以內ニテ他ヨリ發覺セサル以前ニ印紙貼用調印ノ上其管轄地ヘ差出調査ヲ  
受候ニ於テハ犯則ノ限ニ無之事○第十八條 印紙多數用フル節證書面狹隘ニテ貼用シカ  
タキ分ハ證書裏面ヘ貼川致シ第二號圖ノ通調印イタスヘキ事 (書式附録ニ掲シ)

紙都任(廿二)委  
界狀ハ  
認都任(廿二)委  
紙界狀ハ  
認都任(廿二)委

明治七年十二月廿五日御布告第三百二十七號

認シ(廿三)財

授受  
際並  
用候  
簿ニ付  
御布達

本年七月第八十一号布告証券印稅規則第五則中へ左ノ一ヶ條追加候條此旨布告候事  
一委任狀ノ儀ハ都テ界紙ヲ相用ヘキ事  
明治八年三月十七日大藏省御布達第八号

應ヨリ(廿四)各

者受書  
類差出  
節証券  
印紙貼  
用ノ義  
御布告

諸商業又ハ諸職業ニテ各應ヨリ用向被申付候者ヨリ差出候受書類ノ中其事柄受負並約定  
筋ニ相涉リ候モノハ自今証券印稅規則第二則第一條第二類諸證書中諸請負計文及ヒ金錢  
約定証文ニ照シ証券印紙界紙可相用此旨布告候事但本文同様ノ受書ニシテ金高記載シサ  
ル分ハ同規則中第三類金高記載無之約定証券ニ準シ證書界紙可相用事

○第八 戶籍之部

(一) 戶籍 明治四年四月四日御布告

今般府藩縣一般戶籍ノ法別紙ノ通改正被仰出候條管内普ク布告致シ可申事  
戶籍檢査編制ハ來申年二月一日ヨリ以後ノ事ニ候ヘ共右ニ關係スル諸般ノ事ハ今ヨリ處  
置致ス可ク尤三都府及各開港場ハ人民輻湊ノ地ニテ取締向違ニ不相立候テハ難相成ニ付  
送籍入籍並旅行寄留ノ者ヘ鑑札渡方寄留表取調方等當六月廿九日ヨリ後ル可ラサル事但  
不審ノ廉ハ民政部省ヘ可承合事  
右之通被仰出候事

○ 人生始終ヲ詳ニスルハ切要ノ事務ニ候故ニ自今人民天然ナリテ終リ候者又ハ非命ニ死シ  
候者等埋葬ノ處ニ於テ其時々其中ヲ記録シ名前書員數共毎歲十一月中其管轄廳又ハ支配  
所ヘ差出サセ十二月中辨官ヘ可差出候事  
右之通管内社寺ヘ可觸達候事

○ 戶數人員ヲ詳ニシテ撰ナラザラシムルハ政務ノ最モ先シ重スル所也夫レ全國人民ノ保護  
ハ太政官ノ本務ナルヲ索ヨリ云フヲ待タズ然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセズ何ヲ以テ其  
保護スヘキヲ施スヲ得ンヤ是レ政府戶籍ヲ詳ニセサルヘカラサル儀ナリ又人民ノ各安  
康ヲ得テ其年ヲ遂ル所以ノモノハ政府保護ノ庇蔭ニヨラサルハナシ去レハ其籍ヲ逃レ其  
數ニ漏ル、モノハ其保護ヲ受ケサル理ニテ自ラ國民ノ外タルニ近シ此レ人民戶籍ヲ納メ  
サルヲ得サルノ儀ナリ中古以來各方民治趣ヲ異ニセシヨリ僅ニ東西ヲ隔ツレハ忽チ情態  
ヲ殊ニシ聊カ遠近アレハ則チ志行ヲ同フセズ隨テ戶籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レヌ或ハ

此籍ヲ逃レ或ハ彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往來規ニヨラヌ浴襲ノ習人々自ラ度外ニ附スル  
ニ至ル故ニ今般全國總體ノ戶籍法ヲ定メラル、ヲ以テ普ク上下ノ通義ヲ辨ヘ宜シシ粗略  
ノ一ナカルヘシ

第一則 戶籍舊習ノ錯雜アル所以ハ族屬ヲ分ツテ之ヲ編製シ地ニ就テ之ヲ収メサルヲ以  
テ遺漏ノ事アリト雖也之ヲ檢査スルノ便ヲ得サルニ依レリ故ニ此度編製ノ法臣民一般  
(華族士族卒祠官僧侶平民迄ヲ云以下准之)其住居ノ地ニ就テ之ヲ收メ專ラ遺スナキヲ  
旨トス故ニ各地方土地ノ便宜ニ隨ヒ豫メ區畫ヲ定メ每區戶長並ニ副ヲ置キ長并ニ副ヲ  
シテ其區内戶數人員生死出入等ヲ詳ニスル事ヲ掌ラシムヘシ

第二則 戶長ハ必ス長ト副トニ限ルヘカラス時宜ニヨリ長副數名アルモ妨ケナシトス但  
戶長ノ務ハ是迄各處ニ於テ庄屋名主年寄觸頭ト唱ル者等ニ掌ラシムルモ又ハ別人ヲ用  
ルモ妨ケナシ

第三則 凡ソ區畫ヲ定ムル譬ハ一府一郡ヲ分テ何區或ハ何十區トシ其一區ヲ定ムルハ四  
五丁モシクハ七八村ヲ組合スヘシ然レ共其小ナルモノハ數十ニ及ヒ大ナルモノハ一二  
ニ止ルモ都テ其時宜ト便利トニ任セ妨ケナシ(華族士族住居ノ地從前武家地屋敷地ト  
唱フル類モ同様タル素ヨリ云テ待ス)但急ニ區畫ヲ定メ難キ所ハ假ニ便宜ニ從ヒ一村  
一町ニテ檢査セシムルモ妨ケナシ官ノ學校兵隊屯所等又ハ大社大寺ノ別ニ區域ヲナス  
ハ其官司ノ吏員其社寺ノ執事等ニテ戶長ノ事ヲ扱ハシムルモ妨ケナシ

第四則 戶長其區内ノ戶籍ヲ式ノ如ク之ヲ集メ二通ヲ清書シ更ニ第一号ト第二号ノ式ノ  
如ク其區内總計ノ戶籍表ト職分表トヲ作り其集ル所ノ籍ハ戶長ニ備ヘ置清書二通りト  
共ニ其支配所ニ差出スヘシ支配所之ヲ其廳ニ差出シ其廳之ヲ第五号第六号ノ式ノ如ク  
其管内總計ノ戶籍表ト職分表トヲ作り戶籍一通ハ其廳ニ備置キ一通ニ廳印ヲ押シ表ト  
共ニ六ヶ年目ニ改メ太政官ヘ差出スヘシ(支配所トハ管轄内廣遠ノ處別ニ一小部ヲ置  
第八 戶籍之部 百七十七

支配セシムル所ヲ云フ總テ出張所ト云ノ類ナリ但支配所ナキ所ハ直ニ其應ニ出スヘシ以下准之

第五則 編製ハ爾後六ヶ年目ヲ以テ改ムヘシト雖モ其間ノ出生死去出入等ハ必ス其時々戸長ニ届ケ戸長之ヲ其應ニ届出テ(支配所アル者ハ支配所ニ届支配所ヨリ其應ニ届ク)其應之ヲ受ケ人員ノ増減等本書ヘ加除シ毎年十一月中戸籍表ヲ改メ十二月中大政官ヘ差出スヘシ(加除ハ生ル、モノト入ルモノヲ加ヘ死者ト出ルモノヲ除ク類チ云フ)

第六則 管轄廳ニ於テ戸籍專任ノ吏員ヲ置キ其事ニ擔當セシムヘシ若シ遺漏粗略ノ事アルニ於テハ其吏員並ニ戸長(戸長ナキ大社大寺ハ執事)ノ責タルヘシ

第七則 區内ノ順序ヲ明ニスルハ番号ヲ用ユヘシ故ニ每區ニ官私ノ差別ナク臣民一般番号ヲ定メ其住所ヲ記スニ都テ何番屋敷ト記シ編製ノ順序モ其号數ヲ以テ定ルヲ要ス但區内ノ屋敷亡所トナリ又ハ一戸ヲ割テ二戸トシ二戸ヲ合セテ一戸トナスコアルモ其由ヲ戸籍ニ記シ番号ハ其儘据置六ヶ年目ニ至リ改ムヘシ

第八則 各地方貫屬或ハ平民等事務アリテ全戸他ノ管轄所ニ引移ルモノハ其由ヲ本貫管轄廳ヘ願出其應ヨリノ送りヲ取り在留地ノ應ニ届ケ出其所ノ籍ニ編入スヘシ又故アリテ元ノ管轄所ヘ引移ル時ハ之ヲ戻スコト其始メ出ル時ノ如クシ其所ノ籍ニ編入スヘシ但當時全戸既ニ引移リシ官員ノ如キハ其官省ヨリ名前書ヲ在留地ノ應ニ達シ夫ヲ證トシ其住居ノ地區ニテ其籍ヲ収ムヘシ又本貫管轄廳ニハ其由ヲ其官省ヨリ達シ其應之ヲ聽キ其所ノ籍ヲ除クヘシ尤此ヨリ後引移ルモノハ此限ニアラス送籍スルコト本條ノ如クスヘシ(第八則チ云)若シ全戸引移ルト雖モ情故アリテ本貫管轄廳ノ籍ニアルヲ願フモノハ其地寄留ノ部ニ入レ情願ニ任スルモ妨ケナシ

第九則 他ノ管轄地ニ引移ル時元ノ應ヨリ送籍スルニハ其當人ヨリ元住所ノ組合并ニ戸長ニ其由ヲ届ケ長副連印シ其應ニ届ケ其應之ヲ受ケ其應聽知ルノ證ヲ押シ當人ニ渡ス

ヘシ但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ之ヲ達セシメ往來困却ノ弊ナカラシムルヲ要ス

第十則 他ノ管轄所ヨリ此管轄所ニ入籍スル時ハ元ノ管轄所ノ證ヲ持參シ其入ル所ノ戸長ニ其由ヲ通シ戸長其相違ナキヲ糺シ其所ノ籍ニ入ルヘシ而シテ戸長其元應ノ證ト其入籍セシ事ノ由ヲ時々其應ニ届クヘシ

第十一則 管轄内甲ノ區ヨリ乙ノ區ニ移ルカ如キモ第八則ヨリ第十則迄ノ例ヲ見合スヘシ但管轄内ナルヲ以テ送籍ハ戸長ヨリ之ヲ致シ入籍ノ上其入ル所ノ戸長ヨリ其應ニ届ケ其應之ヲ聽キ即チ本書ニ加除スヘシ(加除ハ甲ノ籍ヲ除キ乙ノ籍ニ入ルノ類チ云フ)但其區ニ於テ時々加除スルハ亡論ナルヘシ

第十二則 全戸引移ラス又ハ一時公私ノ用ニテ寄留スルモノハ其本貫管轄廳ノ鑑札ヲ持參シ寄留地戸長ニ通シ其寄留スル所ノ應ニ名前書ヲ添ヘ鑑札ヲ差出シ其應之ヲ受ケ即チ其應ノ鑑札ト引替道スヘシ(鑑札ニハ當人名住所職分ヲ記スヘシ名住所職分ヲ變スル時ハ引替ヘシ)而シテ其者歸國スル節ハ同様ノ例ヲ以テ元ノ鑑札ト引替歸國スヘシ但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ引替シムヘシ故ニ鑑札ハ豫メ支配所ヘモ備ヘ置テ要ス 鑑札引替ノ節其戸長(官ノ學校兵隊屯所ノ如キハ其役場大社大寺ハ執事)ニ差出ス名前書ニハ官員ハ當人兵隊ハ隊長證印シ自餘ハ戸主備主請人等證印スルヲ要ス(名前届書式ハ第三号見合スヘシ) (明治四年七月廿二日御達)

第十三則 修行又ハ奉公ノ爲メ他國ニ寄留スルモノモ第十二則ノ例タルヘシ、全戸引移リシ官員等ノ内寄留情願ノ者モ第十二則ノ例タルヘシ(第八則但書ト見合スヘシ)但是迄修行又ハ奉公致シ寄留スル者及ヒ事務アリテ寄留スルモノ其本貫ノ應ニ届ケ鑑札請取第十二則ノ例ヲ以テ引替ヘシ若シ道路懸隔リ當人ヨリ本貫ノ應ニ届ケ難キ事故アルモノハ其寄留地ノ應ニ於テ戸主備主請人等ノ證書ヲ出サシメ其應ヨリ直ニ其本貫ノ應

第八 戸籍之部

ニ掛合鑑札受取ヘシ但自今以後ハ此例ニアラス

第十四則 凡ソ旅行スルモノ官員ハ其官省等ノ鑑札ヲ所持シ自余ハ臣民一般其管轄廳ノ鑑札ヲ所持スヘシ(寄留ノモノハ其所持スル鑑札ヲ用ユヘシ)故ニ旅行ヲ以テ渡世トスルモノ、如キハ急速ノ便ヲ得ル爲メ豫メ其鑑札ヲ申置モ妨ケナシトス(第十二則但書ノ通處置シ急速ノ便ヲ得セシムヘシ)但其管轄廳ノ鑑札ニハ當人名住所ト職分ヲ記スヘシ通名住所及職分ヲ變セシ時ハ右鑑札ヲ引替ヘシ(明治四年七月廿二日御達)

第十五則 驛遞旅宿ニ於テハ其鑑札ヲ認メ之ヲ宿帳ニ記シ止宿セシムヘシ此証據ナキモノハ止宿セシムヘカラス

第十六則 宿帳ハ七日目毎ニ驛遞ハ其驛出張驛遞掛ノ改ヲ受自余ハ其戸長ヘ出シ改ヲ受クヘシ旅籠屋ニ限ラヌ都テ逗留三日以上ハ其戸長ニ届ケ(人民輻湊スル三都府ノ如キハ其時々戸長ヨリ其廳ニ届ヘシ)九十日以上ハ寄留トシ第十二則ノ手續ヲナズヘシ旅人病氣又ハ異變ノ節速ニ届ケ出ルハ勿論ナリ但戸籍改ノ節滞留スルモノハ其所持ノ鑑札ニ突合セ檢査スヘシ

第十七則 各地ニ出張スル官員出入トモ其管轄廳ニ届ケ其出張先ノ地方廳ヘモ届クヘシ但地方ノ廳懸隔リシ場所一時出張シ或ハ急遞ノ事務等アレハ其手續ナキアアルヘシ

第十八則 僧侶ハ其得度ノ地ヲ以テ本貫トシ他寺ニ轉住スル時ハ送齋シ行脚遍參スルモノ寄留地ニ於テ鑑札引替ル事第十二則ノ例タルヘシ

第十九則 鑑札ヲ所持シテ出奔死亡シ或ハ刑ニ處セラレ歸國セサルモノハ其所ノ官司ヨリ其由ヲ本貫ノ廳ニ達シ鑑札ヲ送り還スヘシ

第二十則 六ヶ年目毎ニ戸籍ヲ改ムルニ當リテ其戸籍取集メシ上ハ日限ヲ定メ其區々ニ於テ長并副區内一戸毎ニ其差出ス處ノ戸籍ト現在ノ人員ニ突合セ相違ナキヲ點檢スルヲ以テ法トスヘシ寄留ノモノハ會テ届ケ出シ名前書ヲ以テ人員及所持ノ鑑札ニ突合セ

相違ナキヲ證スルヲ以テ法トスヘシ(凡テ寄留ノモノハ戸籍改ノ前第十二則第十三則ノ例ニ從ヒ鑑札ヲ受ケ名前書ヲ差出置ヘシ)氏神ノ守札モ其時檢査スヘシ但其土地ノモノニテ其土地ニ修行又ハ奉公シテ他家ニアルモノハ戸籍改ノ日限ニハ歸宅シテ改テ受クヘシモシ體ナル證據アリテ其日限ニ歸宅シ難キモノハ其證據ヲ以テ證トスルモ不得巳ヘシ(明治六年第八十号御布告)

第二十一則 凡ソ戸籍ヲ檢査スルハ遺漏アルヘカラス又重複スヘカラスニツノ者ノ弊アレハ檢査ノ要ヲ失フ尤甚シトイフヘシ故ニ戸長ヲ設ケ地ニ就テ戸籍ヲ收ムルハ遺漏ノ弊ヲ防ク所トイヘトモ其戸籍ヲ出入スルニ當リテ(出入ハ他ノ管轄内ヲ出此管轄内ニ入り甲ノ區ヲ出乙ノ區ニ入ル類ヲ云)深ク注意セサレハ又重複ノ弊ヲ免ル能ハス故ニ六ヶ年目毎ニ戸籍ヲ改正スルニ當リ其戸籍ヲ檢査スルノ日ハ天下府藩縣一般二月一日ヨリ五月十五日ヲ以テ終ルヲ法トスヘシ(此間凡百日)

第二十二則 六ヶ年目毎ニ二月一日ヨリ五月十五日迄凡百日ノ間ハ戸籍ノ出入ヲ止ムヘシ但不得止事故アルニ由リ其人ハ移轉セシメ他ノ所ニ行カシムト雖モ戸籍ノ調ハ其本住所ノ廳ニテ之ヲ取集ムヘシ此百日ノ間ニ一般ノ戸籍調終ルヲ待テ五月十六日ヨリ送籍入籍ノ事ヲ所置スヘシ但戸籍檢査ノ日ニ當リテ(二月一日ヨリ五月十五日迄凡百日ノ間不得已移轉セシ者ハ送籍入籍ノ時(五月十六日ヨリハ)必ス其由ト其月日トヲ本書ニ書顯スヘシ(明治六年第二百四十二号御布告ヲ以テ第二十則第二十二則)

第二十三則 六ヶ年目毎ニ五月十六日迄ニ戸籍檢査既ニ終リ其廳ニ於テ六月中第四則ノ例ノ如ク其管轄内總計ノ戸籍表ヲ作り(第五号式ノ如ク)本書共ニ七月中太政官ヘ差出スヘシ(第四則ト見合スヘシ)但一紙ハ其廳ニ留置キ毎年出ス所ノ表ノ基トスヘシ

第二十四則 寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ(支配所ナキ者ハ其廳)其時々之ヲ記録シ寄留表ヲ第七号式ノ如ク製シ出入人員増減ヲ隔月檢査シテ其廳ニ出シ其廳之ヲ受



- ケ毎年十二月太政官へ差出スヘシ但支配所アルハ某支配所ト表ノ左傍ニ記スヘシ
- 第二十五則 三都府ハ人民輻湊ノ地ナルヲ以テ寄留表ハ他ノ藩縣ニ拘ラス隔月検査ノ時々即チ太政官へ差出スヘシ
- 第二十六則 民産調ノ如キハ一般ノ御布告アルヘシト雖此迄地方官ニテ戸籍中家産等書載サセ來リシハ其儘出スヘシ
- 第二十七則 戸籍表ノ用紙ハ厚紙ヲ用ヒ戸籍ノ用紙ハ美濃紙ノ寸法ヲ準トシ公用ノ郵紙ヲ用ユヘシ戸長ト其廳へ収ムル分ハ其土地求メ易キ適宜ノ品ヲ用ユヘシ故ニ每區戸長へ本書分ノ公用郵紙ヲ其廳ヨリ下ケ渡スヘシ
- 第二十八則 各地ノ戸籍一例ナルヲ要スレハ字ノ細大行ノ高低ハ其記事ヲ標別スル爲メナルヲ以テ能々注意シ成丈ケ細字ニ記スルヲ要ス
- 第二十九則 此迄厄介ト號セシモノ或ハ縁故アリテ養育スルモノ等ハ其族屬ト續柄ヲ肩書ニシ其事由ヲ其名前ノ上ニ記スルヲ式ノ如クスヘシ
- 第三十則 華族等ノ從僕其邸内ニ住居シテ一戸ヲナセルモノハ式ノ如ク其主人ノ次ニ記シ社中寺内ニアルモノ此例ニ準スヘシ
- 第三十一則 凡ソ僧尼ハミナ式ニ依テ其本貫得度ノ年月及ヒ其所ヲ記シ院内受職ノ外ハ皆弟子ヲ以テ記スヘシ(明治九年第九十六号)  
御布告ヲ參照スヘシ
- 第三十二則 穢多非人等平民ト戸籍ヲ同フセサルモノ、如キハ其最寄ノ區ニテ其戸長へ名前書ヲ出サセ(年齢癡疾等ヲモ認ムヘシ)其人員男女ヲ分チ戸籍表ニ書入レ差出シ廳ニテモ戸籍表ニ入ル、式ノ如クスヘシ但生死出入其最寄戸長ニテ取扱寄留旅行ノ規則等平民同様ノ例ニ從ヒ名前書ヲ六ヶ年目ニ出サシムル戸籍ノ如クスヘシ(明治四年八月御布告ヲ以テ穢多非人ノ稱ヲ廢シ)
- 第三十三則 都テ書式ハ臣民凡體裁一ナレハ彼此相通シ參用シテ妨ケナシ(表式略之)

(二) 僧尼族籍編入ノ御布告

明治七年七月十日御布告第七十四号

- 今般華士族分家候者ハ總テ平民籍ニ編入相成候ニ付本年一月第八号僧尼族籍編入ノ御布告自今左ノ通更定候條此旨僧侶へ布告スヘキ事
- 一 僧尼ノ輩族籍被相定候條各自其原籍ニ復スヘキ事
- 一 原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現在地へ別ニ本籍相定若シ現在地ノ外へ本籍相定度望ノ者ハ一旦現在地へ定籍ノ上其地ヨリ望ノ地へ送籍スヘシ但別ニ本籍相定候者ハ元身分ニ拘ハラス總テ平民籍タルベキ事
- 一 眞宗(維新以來華族ニ列セラレシ者ヲ除クノ外)并ニ舊修驗等世襲ノ者モ一般平民タルヘキ事
- 一本宗寺共其住職タル者宗教事務管理ノ儀一般職分同様タルベキ事但一寺住職ノ者ハ平民ヲリ共總テ身分取扱士族ニ準シ候儀ハ從前ノ通タルヘキ事
- 一 戸籍法中右等ニ抵觸ノ廉ハ總テ廢止候事

明治十一年十一月十一日御達第四十七号

使 府 縣

(三) 逃亡ノ義者付御達

逃亡失踪ノ者尋方ノ儀ハ明治四年四月達脫籍無産ノ輩復籍規則第七條ニ照シ六ヶ月毎ニ模樣申立三十六ヶ月後永尋申付候處自今不及其儀候條此旨相達候事但本人逃亡失踪ノ始未及復歸ノ節届出方ノ儀ハ從前ノ通タルヘキ事

(四) 行旅死亡人取扱規則

明治十五年九月三十日御布告第四十九号

- 行旅死亡人取扱規則
- 第一條 凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルトキハ所在戸長ハ之ヲ最寄墓地へ假埋葬スヘシ其例死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クベシ
- 第二條 死亡人ノ本籍氏名詳ナルハ

第八 戸籍之部

戸長ハ死亡ノ狀況並ニ埋葬其他死亡人ニ属スル費用ノ計算書ヲ本籍戸長へ通報スヘシ本籍戸長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルキハ三十日限差出サシメ埋葬地戸長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルキハ其本籍地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ○第三條 死亡人ノ本籍氏名詳ナラサル戸長ハ其相貌狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄掲示場へ掲示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ該費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ○第四條 死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其地死亡人ニ属スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルヲ能ハサルキハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ○第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘屬アルキハ之ヲ本籍へ送付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ヶ年間戸長役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方稅雜收入ニ組入ルヘシ

右奉 勅旨布告候事

明治十六年四月廿四日御布達第十号

(五)北海  
道轉籍  
移住者  
手續

北海道へ轉籍移住者手續別紙ノ通相定メ本年七月一日ヨリ施行ス但明治十五年五月第十号同年七月第十五号布達及同七年七月舊開拓使第二号布達第一第二第三條ハ本文施行ノ日ヨリ廢止ス

右布達候事

北海道轉籍移住者手續

第一條 北海道へ轉籍移住スル者ニシテ資力ナキモノニ限り此手續ニ依テ保護スルモノトス○第二條 渡航ノ保護ヲ出願スルモノハ其願書ニ移住ス可キ國郡名(町村名)詳ナル者ハ之ヲ記入スヘシ)並產業ヲ營マントスルノ目的ヲ詳記シ猶左ノ各項ヲ附屬書トナ

原籍戸長及ヒ郡區長ヲ經由シテ管轄廳へ出願スヘシ

一 戶籍寫

二 從來ノ營業及家産ノ程度

三 荷物ノ噸數但携帶スヘキ農具及家具品類ノ大概ヲモ記載スヘシ

第三條 郡區長ハ轉籍移住出願者へハ移民心得ノ旨趣ヲ懇篤ニ示諭シ尙ホ願書ノ事情目的ノ當否ヲ審査シ意見ヲ具シテ之ヲ府知事若シハ縣令ニ開申スヘシ府知事縣令ハ之ヲ事實適當ノモノト認ルトキハ其旨ヲ副書シ農商務省へ進達スヘシ○第四條 渡航ノ保護ハ左ノ制限ニ依ル

一 三菱會社共同運輸會社運漕社ノ船舶開帆ノ港ヨリ乘船ヲ許可スヘシ但到着スヘキ港ハ函館江刺濱都小樽室蘭浦河幌泉大津岩内増毛宗谷根室厚岸釧路濱中網走擇捉(單冠灣)ノ十七港灣トス○二 渡航票ハ函館港迄ノモノト移住地最近ノ港灣迄ノモノトノ二葉ヲ下付スヘシ故ニ其出發港ヨリ移住地最近ノ港灣マテ直航ノ船便アルトキハ二葉ノ渡航票ヲ併セ乘船切符ト引換乘船スヘシ直航ノ船便ナキトキハ先ツ函館港迄ノ渡航票ヲ乘船切符ト引換同港ニ着シ函館縣廳へ殘一葉ノ渡航票ヲ持參シ更ニ渡航ノ儀ヲ出願スヘシ○三 函館著港ノ上船都合ニ依リ陸行セントスルモノハ函館縣廳へ出願スヘシ但陸行ヲ許可スルトキハ持參スル所ノ渡航票ニ換ヘテ其運賃ニ當ル金額ヲ支給スヘシ○四 陸行ノ場合ニハ其旨ヲ函館縣廳ヨリ沿道ノ縣廳及ヒ郡區役所警察署へ通達スヘシ沿道ノ郡區役所警察署ニテハ宿泊其他注意ヲ加ヘ特宜ヲ斟酌シ及フ丈ケ保護ヲナスヘシ但別途費用ヲ給セス○五 手荷物ノ外一戸ニ付五拾才以内ノ荷物運賃ヲ支給スヘシ

第五條 制限外ノ荷物ハ勿論發著ノ解賃船待滞在中ノ費用ハ總テ自辨スヘシ○第六條 渡航願ノ許可指令並渡航票ハ管轄廳ヲ經テ下付スヘシ又事宜ニ依リ郡區役所ヲ經テ下付スルコトアルヘシ但郡區役所ヨリ願人ニ下付シタルトキハ渡濟ノ上其郡區長ヨリ府知事縣令ニ其旨ヲ開申スヘシ○第七條 渡航者ハ下付ノ渡航票ヲ以テ三菱會社共同運輸會社運

第八 戶籍之部

漕社漁船ノ開帆スル各港ノ内便宜ノ場所ニ至リ乘船切符ト引換乘船スヘシ 渡航票ハ乘船切符ト引換タル後ハ總テ漁船會社ノ規則ニ從フモノトス若シ引換後乘船時間ヲ過キ乘後レ又ハ事故アリテ乘船ヲ止メタルトキハ右會社定ムル所ノ時間内ニ再ヒ乘船切符ト渡航票ト引換ノ手續ヲナスヘシ右切符引換ニツキ該會社ニ對スル償金ハ自辨スヘキモノトス 渡航中不得止事故アリテ上陸シタルトキハ其事由ヲ詳記シ其他郡區長(郡區役所アササル地ニテハ戶長)ノ公認ヲ請ケ其趣ヲ原籍郡區長府知事縣令ヲ經由シ農商務省ヘ届出且其際渡航票面ノ金額ヲ農商務省ヘ辨償スヘシ但急劇ナル病難ニ罹リ乘船ヲ止メ又ハ乗後レ若クハ航海中上陸スル場合ニ於テモ總テ此手續ヲ爲スヘシ尤モ該地醫師ノ診察書ト郡區戶長ノ公認ニ依テハ費用ノ辨償ハ特別處分スルコトアルヘシ○第八條 渡航者許可ヲ得タル後事故アリテ原籍地若クハ乘船スヘキ港ニ於テ滞留三十日ヲ超ルトキハ其事由ヲ詳記シ其地ノ郡區長(郡區長アラサル地ニテハ戶長)ノ公認ヲ副農商務省ヘ届出ツヘシ猶ホ滞留百六十日ヲ過シルキハ本人ヨリ直チニ渡航票ヲ農商務省ニ返付シ其旨原籍郡區長ヲ經テ管轄廳ニ届出ツヘシ○第九條 渡航者其乘船スヘキ港ヘ着シタルトキハ其地ノ郡區役所(郡區役所アラサル地ハ戶長役場)ニ其旨ヲ届出ツヘシ此届出ヲ受ケタル郡區役所戶長役場ニテハ注意ヲ加ヘ乘船ニ關シ及フ丈ケノ保護ヲ加フヘシ但別途費用ヲ給セス○第十條 函館港ヨリ更ニ渡航ヲナストキハ函館縣廳ニテ渡航者ノ願ヲ審査ノ上許可スルモノトス○第十一條 漁船會社ハ渡航者ヨリ受取タル所ノ渡航票ヲ以テ金額受取方農商務省ヘ申出ヘシ函館港ヨリ乘船スルモノハ函館縣廳ヘ申出ヘシ○第十二條 第四條第一項ニ記載スル處ノ港灣ノ内移住地最近ノ港灣ヨリ移住地ニ到ル距離三里以上ニ涉ルモノハ滿三歳以上ノ人員ニ應シ每一里一人ニ付金五錢ノ手當ヲ給與ス但滿三歳未滿ノ幼兒及距離三里未滿ノモノハ給與ノ限ニ在ラス○第十三條 移住地到着ノ上他ノ雇人稼人ノ類ニ非スシテ自ラ營業ヲナス者ヘハ一戸ニ付假家作料金十圓及營業器具代金八圓五

(六)失踪

明治十七年一月十日番外御達

者等ノ財産ヲ戶長ニ於テ保管スルニ付御達

拾錢特ニ農業者ヘハ種物代金壹圓五拾錢宛ヲ給與スヘシ○第十四條 保護ヲ受ケ移住シタル者其移住後滿五ヶ年以内ニ北海道ヲ去リ他ニ轉籍又ハ寄留スルトキハ既ニ保護支給シタル金額ハ戶主若クハ本人ヨリ之ヲ辨償セシムヘシ

失踪逃亡死亡及絶家ノ財産ヲ戶長ニ於テ保管スルキハ財産目錄ヲ作り郡區長ニ差出候様可致此旨相達候事

衛生之部

(七)種痘

明治三年四月廿四日御布告

種痘ノ儀ハ濟生ノ良法ニ候處僻陋ノ地ニ至テハ今以不相行向モ有之趣ニ付於府藩縣末々迄行届候様厚ク世話可致事但施行ノ法則等取調度向ハ大學種痘館ヘ申出傳習可致事

(八)傳染病豫防規則

明治十三年七月九日御布告第三十四号

明治十二年八月第三十二号虎列刺病豫防假規則ヲ廢シ傳染病豫防規則左ノ通相定候條此旨布告候事

傳染病豫防規則

總則

第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎列刺腸窒扶私赤痢實布埤利亞發疹窒扶私及ヒ痘瘡ノ六病ヲ云フ但六病ノ外流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アルキハ地方長官ハ内務省ニ具申シ豫防法ヲ施行スヘシ○第二條 醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ週クモ二十四時間ニ之ヲ患者所在ノ町村衛生委員ニ通知スルヲ要ス衛生委員ハ速ニ之ヲ郡區長及ヒ最寄警察署ニ

第八 戶籍及衛生之部

百八十七

通知シ郡區長ハ速ニ之ヲ地方廳(東京府下ハ府廳及ヒ警察本署)ニ届出ヘシ但土地ノ便宜ニ依リ醫師ヨリ直ニ警察署ニ届出警察署ヨリ衛生委員ニ通知スルモ妨ナシ 地方廳ハ一週間毎ニ新舊患者及ヒ治愈死亡ノ數ヲ内務省ニ申報スヘシ○第三條 地方長官ハ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルキハ其性狀ヲ記シテ速カニ之ヲ内務省ニ申報シ且ツ其管内及ヒ隣接若シハ船舶交通ノ府縣最寄兵營其他船舶ノ軍艦等ニ報告スヘシ○第四條(明治十五年第四十四号御布)○第五條 諸官廳兵營軍艦監獄及官立ノ學校病院製作所等ニ於テ傳染病者アルキ其主長ハ該地方官ト協議シ此規則ニ從ヒ豫防方ヲ施行スヘシ○第六條 虎列刺赤痢發疹室扶私痘瘡ノ流行ニ際シ地方長官ニ於テ豫防ノ爲メ避病院ヲ要スヘキト認ルキハ内務卿ニ具狀シテ之ヲ設クルヲ得但人民協議ヲ以テ避病院ヲ設クルハ地方長官ノ許可ヲ請フヘシ○第七條 醫師並ニ衛生委員ニ於テ傳染病者ノ看護行届カス若シハ病者ノ傳播ヲ防キ難シト認ムル者ハ避病院ニ入ラシム可シ○第八條 掛リ官吏ハ傳染病者アル家ニハ其病名ヲ書シテ門戸ニ貼付シ要用ノ外人ト交通ヲ絶タシムベシ但患者治愈死亡又ハ避病院ニ入りタル後相當ノ消毒法ヲ行ハサルノ間ハ仍ホ本條ヲ遵守セシムヘシ(明治十五年第四十七号御布告ヲ以テ病名票貼付ノ義當分ニ之ヲ施行セス)

第九條 虎列刺病者ノ排泄物及ヒ汚穢物ハ其運搬夫ヲ設ケ一定ノ場所ニ運輸シ燒棄若シハ埋却セシムヘシ○第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘカラス且他ニ改葬スルヲ許サス但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシ其遺骨ハ改葬スルモ妨ケナシ○第十一條 虎列刺病者ニ用ヒタル臥具衣服器具及ヒ病室船室等ハ消毒法ヲ行フニアラサレハ再ヒ之ヲ用ヒ又ハ受授賣買スルヲ許サス○第十二條 虎列刺流行ノ際ニハ井泉河流水道及ヒ厠園芥溜下水溝渠等總テ病毒萌生ノ因トナルヘキ場所ニ注意シ掃除清潔ノクヘシ○第十三條 虎列刺流行スルキハ船舶交通ノ地方ニ於テ流行地ヨリ來ル所

ノ船舶ヲ検査シ患者若クハ死者アルキハ此規則ニ從テ處分スヘシ○第十四條 虎列刺流行ノ勢猛烈ナルキハ地方長官ハ内務卿ニ具狀シ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ撰ヒ検査委員ト爲シ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムルヲ得此場合ニ於テハ醫師タル者吐瀉ノ二症ヲ兼備スル病ヲ診斷スルキハ總テ検査委員ニ届出ヘシ但本項施行ノ終始ハ地方廳ヨリ之ヲ管内ニ告示シ内務省ニ申報スヘシ(明治十五年御布告ヲ以テ第)○第十五條 前條ノ場合ニ於テハ地方長官ハ祭禮劇場等人民ノ群集ヲ差止ルヲ得 虎列刺已ニ市街村落ノ全部若クハ一部分ニ於テ蔓延ノ兆候ヲ顯ハシ其他ノ部分ニ及ホサル様遮斷シ得ヘキモノト見認ムルキハ地方官ヨリ内務卿ニ稟議シ交通ヲ絶タシムルノ處分ヲ爲スヲ得但要用ノ者ハ掛官吏検査ノ上交通ヲ許スヲ得(明治十五年第五十八号御布告ヲ以テ第二項ヲ追加ス)

第十六條 腸室扶私病 腸室扶私病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

第十七條 赤痢病 赤痢病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

第十八條 實布埤里亞病 實布埤里亞病流行ノ際ハ第十一條ヲ適用シ患者ノ痰唾及ヒ之ニ汚穢スル物ハ燒棄若シハ埋却セシムヘシ

第十九條 發疹室扶私病 發疹室扶私病者アルキハ第十條第十一條ヲ適用シ其流行ノ際ニハ第十二條第十三條第十四條及ヒ第十五條ヲ適用スヘシ(明治十三年第五十四号御布告ヲ以テ改正セリ)○第二十條 發疹室扶私病者若クハ其死屍ヲ載セタル車輿等ハ毎回消毒法ヲ行フニアラサレハ他用ニ供スヘカラス

痘瘡病

第二十一條 痘瘡病者アルキハ第十條第十一條及第二十條ヲ適用シ患者ニ未痘者ヲ接近セシムヘカラス其流行ノ際ニハ第十二條ヲ適用スヘシ

罰則

第二十二條 醫師衛生委員此ノ規則ニ違背シタルキハ五十圓以内ノ罰金ニ處ス○第二十三條 官吏其管掌ノ事務ニ於テ此規則ニ違背シタルキハ百圓以内ノ罰金ニ處ス○第二十四條 人民此規則ニ違背シタルキハ壹圓五十錢以内ノ科料ニ處ス

(九) 檢疫

停船規則

明治十二年七月廿一日御布告第二十九号  
明治十二年七月第二十八号布告海港虎列刺病傳染豫防規則別冊ノ通更正シ檢疫停船規則ト改稱候條此旨布告候事

別冊

檢疫停船規則

第一條 日本政府ハ虛列刺病ノ蔓延ヲ防カン爲メ茲ニ左ニ掲ケル規則ヲ開港場ニ施行スルコトヲ布告ス而シテ更ニ其施行ノ停止ヲ令スル迄ハ之ヲ實施スルモノトス○第二條 中央衛生會ニテ決スル處ノ開港場ニ官吏及ヒ至當ノ教育ヲ受ケ能ク職任ニ堪ユヘキ日本又ハ外國醫士化學士及ヒ相當ノ助役ヲ以テ地方檢疫局ヲ設置スヘシ而シテ其局員ノ數ハ其港人船ノ多寡ニ應ジテ増減アルヘシト雖モ檢疫一切ノ事務ヲ速ニ整理スルニ差支ナキヲ以テ足レリトスヘシ 都テ此地方檢疫局ハ中央衛生會ノ管轄ニ屬スヘシ○第三條 政府ハ檢疫停船規則ヲ施行スル各開港場ニ於テ停船場ヲ定メ且虎列刺患者ヲ容ルヘキ病院並ニ該病ノ疑アル患者ヲ容ルヘキ病院ヲ建設シ且遺骸ヲ處置スヘキ地消毒法ヲ施行スヘキ場所並ニ停置セラレタル人ノ爲メ都テ必需ノ具ヲ備ヘタル屋舎ヲ設置スヘシ○第四條 檢疫信号旗ヲ掲ゲタル番船ヲ各港口ノ近傍ニ置キ各船入港ノ前檢査ノ爲メ之ヲ停止シ地

方檢疫局ノ人員少ナクハ二名ヲ派出シテ之ヲ檢査スヘシ但シ右局員ノ内一名ハ必ス醫士タルヘシ而シテ船長醫士或ハ船内ノ人ハ誰ニテモ檢疫官吏ノ尋問ニ對シ都テ之ニ應答シ又所定ノ式紙ニ事項ヲ記入シ其氏名ヲ記シタル明告書ニ調印シテ差出ヘシ 船長ハ檢疫官吏ノ求ニ應ジ船内ノ各部ヲ開キ檢査ヲ受クヘシ但ハ船中船客又ハ乗組人ニテ占居シタル所又ハ他ノ事故ニ依テ病者ニ感染シタル恐レアルキハ其檢査ヲ受クヘシ 檢疫官吏ハ該船ノ航海日記ヲ査閱シ乗組人及ヒ船客ノ人名錄ヲ船内現在ノ人員ト引合ハスコトヲ得ヘシ 第五條 虎列刺病流行ヒサル港又ハ其疑ナキ港ヨリ來航スル客ノ船長ハ明告書及ヒ其他ノ手續ヲ以テ該船有病ノ港又ハ其疑アル港ニ立寄ラス又有病ノ船泊若クハ其疑アルモノト直チニ交通セス且航海中眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲモ船内ニ發シシモノナキ旨ヲ証明シテ檢疫官吏ヲ満足セシムルキハ該船ハ直チニ入港スルコトヲ得ヘシ 軍艦ハ其艦長及ヒ醫官ニテ調印セル書面ヲ以テ前條ノ趣ヲ明告スル迄ニテ足レリトスヘシ而シテ該船ハ檢査ヲ經ス入港スルヲ得ヘシト雖モ若シ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ檢疫停船規則ニ從フヘシ○第六條 船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ニ罹リタル者ナシト雖モ有病ノ港又ハ疑アル港ヨリ來ルカ又ハ其航海中直ニ有病ノ船若クハ其疑アルモノト交通シタル船舶及ヒ船内ノ人員ハ其港ヨリ出帆ノ日又ハ有病若クハ其疑アル船舶ト交通ノ日ヨリ起算シテ七日ノ期滿ル迄ハ停留セシムヘシ但地方檢疫局ニ於テ右ノ期間ヲ短縮スルモ其差支ナキヲ認ムルキハ此限ニアラス 右七日ノ期該船來着ノ上又ハ其前既ニ過キ去ルキハ消毒法ヲ行ヒシト速ニ船客ノ上陸ヲ許スヘシ 一般ノ積荷ハ消毒法ヲ施スニ及ハス自餘ノ物品ハ檢疫官吏ノ見込ヲ以テ消毒法ヲ行ヒ或ハ行ハサルヘシト雖モ爛布古衣夜具ハ勿論其他檢疫官吏ニ於テ殊ニ危険ナリト見込ムモノハ消毒法ヲ行フヘシ 消毒法ヲ行ヒタル物品ハ速カニ陸揚スルコトヲ得ヘシト雖モ消毒法ヲ行ハサル物品ハ停船ノ定期滿ル迄陸揚スヘカラス若シ停船中眞性虎列刺及ヒ疑似症ヲ發スルキハ其船及ヒ人員物品ハ都テ第八條

第八

衛生之部

第九條ニ從ヒ處分スベシ○第七條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ル軍艦ハ其艦長及ヒ  
 醫官ヨリ書面ヲ以テ該艦來港前七日以内艦内ノ者有病ノ港或ハ其疑アル港ニ上陸セシ  
 ナク又ハ病毒感染ノ恐レナリ且ツ航海中艦内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發セシナキ  
 旨ヲ明告スルキハ直ニ入港スルヲ得ヘシ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ該艦ハ檢疫停船規則  
 ニ從ハシムヘシ○第八條 船舶來港ノ上其船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者  
 アルキハ檢疫官吏ニテ指示シタル停船場ニ移シテ要用ノ消毒法ヲ行ヒシヨリ起算シテ  
 七日ノ間停船セシムヘシ 船舶來港前病毒消滅シ而シテ檢疫官吏ノ満足スヘキ方法ヲ以  
 テ消毒法ヲ施行セル上ハ地方檢疫局ニ於テ可トスル程停船ノ時間ヲ短縮シ得ヘシ 消毒  
 法施行後停船中眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルキハ地方檢疫局ノ必要ト考斷  
 スル程消毒法ヲ反復施行シ其施行ノ時ヨリ起算シテ尙三日間停船セシムベシ但最初定メ  
 タル時限猶三日以上アルキハ最初定メタル時限ニ達スル迄停船セシムベシ 患者及ヒ死  
 者ノ遺骸ハ第九條ニ從ヒ處置スベシ○第九條 前條ニ記スルカ如キ船舶ノ來著スルニ方  
 リ其乗組ノ患者未ダ癒エサレハ其容体ニ依リ之ヲ避病院ニ移シ若シ已ニ死シテ遺骸ノ處  
 置未ダ濟マサルキハ其爲メニ設ケタル場所ニ於テ火葬スルカ又ハ其關係アル者ノ望ミニ  
 任セテ十分消毒法ヲ行ヒシ後埋葬スベシ患者及ヒ遺骸ヲ船中ヨリ他ニ移シタル後夜具衣  
 類其他ノ物品及ヒ船内何レノ部分ニテモ病毒感染ノ恐アル者ハ地方檢疫局ニ於テ指示セ  
 ル如ク十分ニ消毒法ヲ施スヘシ而シテ消毒法ヲ施ス爲メ要用ノ人ト船中ヲ取締ル可キ人  
 トノ外都テ船内ノ人員ハ其人ノ爲ニ特ニ設ケタル所ノ家屋ニ移シ消毒法ヲ行フヘシ船内ニ  
 殘リタル人員ハ船内ニテ消毒法ヲ受ケルカ又ハ交代シテ陸上ニアル適當ノ家屋ニ於テ之  
 ヲ受ケヘシ○第十條 有病ノ港或ハ其疑アル港ヨリ出帆シ途中ノ港ヲ經ルト雖モ其港ニ  
 於テ檢疫處置ヲ受ケサル船舶ハ直チニ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルモノト認メ處置  
 スベシ○第十一條 定期郵便ヲ運搬スル諸船ハ若港ノ上陸ニ其郵便物ヲ運送スルヲ得

ヘシ而シテ政府ハ右ノ郵便物ヲ運送配達ノ爲メ至當ノ方法ヲ設クヘシ○第十二條 病院  
 ニ入ル患者ハ治療及ヒ必要品ヲ受ケルヲ得ベシ 病院又ハ停泊ノ船内ニ在ル患者ヲ尋訪  
 セント欲スル人ハ地方檢疫局ニ於テ定メタル方法ニ從フヘシ 避病院ニ關係ナキモ醫業  
 ニ達シタル醫士ハ患者又ハ其代理人ノ請ヒ由テ診察協議スルヲ得ヘシ 患者ハ醫士ヨ  
 リ退院ヲ許ス迄ハ病院ヲ退去スルヲ得ス○第十三條 船中ニ於テ眞性虎列刺病若クハ  
 疑似症ヲ發スルコトナキキハ停泊セラレタル人ト船中ニ停メ置クヲ得ヘシ又ハ地方檢疫  
 局ニ於テ衛生上ノ見込ニ從ヒ特ニ陸地ニ設ケアル避病ノ場所ニ移サル、コトアルベシ○第  
 十四條 檢疫停船規則施行ノ港ニ來着スル船舶ニ於テ檢疫官吏之ヲ虎列刺病ノ源因ナラ  
 ヲト思考スル疑似ノ病徵ヲ發スル者アルキハ其患者ハ病院ノ別室ニ移シ船ハ醫士ニ於テ  
 其病症ヲ診斷スルニ充分ノ時間ヲ終ル迄停泊セシムヘシ但其時間ハ四十八時ニ過クヘカ  
 シテ而シテ地方檢疫局ハ醫士ノ報告ニ依リテ該規則ノ内其場合ニ適スル條款ヲ實施スヘ  
 シ○第十五條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヲ發シ船舶用品或ハ荷物積込ノ爲メニ途中檢疫所  
 ノ設ケアル無病ノ一港ニ立寄タル船舶ハ豫メ檢疫官吏ノ検査ヲ經且ツ必要ト認メタル消  
 毒法ヲ行ヒ船用品或ハ貨物ヲ積入ル、毎ニ地方檢疫局ヨリ指示スル方法ニ從フ可シ 又  
 該船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發シタルキハ該船又ハ其乗込人及ヒ物品ヲ處置ス  
 ルハ第八條第九條ニ準スヘシ但シ該船内ヨリ上陸スル者アルキハ他船ニテ到着シタル人  
 ニ行フヘキ同一ノ處置ヲ爲スヘシ○第十六條 船舶ノ検査ハ其來着後成ルヘク速カニ施  
 行スヘシ若シ來着後十二時間ヲ過キテ検査ヲ爲サ、ルキハ入港スルヲ得ヘシ但其遲延天  
 氣惡キカ爲メカ又ハ避ケ難キ事情アルカ爲メカ又ハ船長若クハ該船ニ關係アル人ノ所行  
 或ハ詐偽ニ出ツルカノキハ此限ニ在ラス其場合ニ於テハ其遲延シタルノ事故終リタルキ  
 検査ヲ爲スヘシ○第十七條 地方檢疫局ヨリ指圖シタル消毒法ハ檢疫官吏之ヲ施行シ其  
 船ノ士官及ヒ船員之ヲ補助スヘシ但消毒法ハ之ヲ命シタル時ヨリ成ルヘク二十四時ニ完  
 第八 衛生之部 百九十三

了シ而シテ其入費ハ船主又ハ其責アル者ヨリ辨償スヘシ○第十八條 檢疫停船規則ヲ施行スル港内ニ碇泊中船内ニ異性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發シタル船舶ハ直ニ第八條第九條ノ規則ニ從フヘシ 然リト雖モ若シ其船既ニ本港ニ於テ停留ヲ經タルキハ檢疫官ハ地方檢疫局ニテ必要ト考斷スル丈ケノミノ消毒及ヒ検査ノ方法ヲ反復施行スヘシ○第十九條 虎列刺病既ニ流行スル港内ニ來着スル船舶検査消毒法患者及ヒ死者ノ處置ヲ爲スハ前記ノ規則ニ從ハシムヘシ右ヲ施行スル爲メノ豫備ハ政府ニ於テ爲スヘシト雖モ船及人員停留ノ規則ハ休止スヘシ○第二十條 第六條第八條及ヒ第九條ニ記スル船舶ノ景狀地方檢疫局ニ於テ特ニ公衆ノ健康ニ危險ナリト思慮シ非常ノ處置ヲ必要トスルキハ此規則外ニ豫防ノ嚴制ヲ施スコトヲ得ヘシ其場合ニ當リテ地方檢疫局ハ直ニ中央衛生會ニ臨時ノ報告書ヲ差出スヘシ而シテ右報告書ノ寫ハ請求ニ依リテ地方檢疫局ヨリ之ヲ該船ノ船長船主又ハ其用達ニ付與スヘシ○第二十一條 検査中又ハ停留中ノ船舶又ハ停留人ノ寓所ニハ凡ソ何ハテ問ハス地方檢疫局ノ許可ナクシテ往クコトヲ許サス○第二十二條 前條ノ規則ヲ施行スルニ就テ其人ニ係ル所ノ食料醫藥其他欠クヘカヲナル費用ハ其本人又ハ代理人ヨリ辨償スベシ○第二十三條 此規則ニ背キ或ハ從フコトヲ拒ム者ハ犯ス毎ニ貳百圓以内ノ罰金ヲ科スベシ若シ其船長船主若シハ其船ノ用達又ハ其各人若クハ一人ノ命令又ハ利益ノ爲メ此規則ニ背キ或ハ從フコトヲ拒ムキハ每犯罰金五百圓ニ至ルマテ増加スルコトアルヘシ 此規則ニ就テ拂フヘキ費用ヲ辨償セサルモノアルキハ民事ノ訴訟ヲ以テ之ヲ要求スヘシ但シ罰金ハ科セザルヘシ 此規則ヲ犯シ停留場ヲ脱去スル者ハ(船又ハ人)罰金ヲ科シ且即時停留場ニ返ラシムヘシ

(十)虎列刺病船舶検査規則

明治十五年六月二十三日御布告第三十一号  
 虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則左ノ通制定ス  
 虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則

第一條 凡ソ虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶ハ檢疫官ノ検査ヲ受ケ其記名セル許可ノ証書ヲ得タル後ニ非レハ他港ニ進港シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲スベカラス○第二條 其船中該病患者又ハ該病死者ナキトキハ檢疫官直ニ其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並積荷ノ陸揚ヲ爲スノ許可ヲ與フ可シ○第三條 若シ其船中ニ該病患者又ハ該病死者アルトキハ檢疫官其船舶ヲ陸地及ヒ他船ニ傳染ノ虞ナシト認ムル距離ニ於テ其指定スル場所ニ碇泊セシム可シ 該病患者ハ之ヲ避病院若シハ其住居若シハ其他檢疫官ノ適當ト認ムル場所ニ送致ス可シ其死者ハ若シ縁故人ノ望アル 地方官所定ノ場所ニ火葬シ若シハ十分ノ消毒法ヲ施シタル後之ヲ埋葬スヘシ 前項ノ手續ヲ終リ檢疫官ハ其乗組人船客ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後上陸ノ許可ヲ與ヘ其船舶及ヒ傳染ノ虞アリト認ムル積荷ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ積荷ヲ陸揚ケスルノ許可ヲ與フヘシ○第四條 此規則ニ違背シタル者若シハ此規則ノ執行ヲ妨害シタル者ハ刑法ニ依テ之ヲ處分スヘシ○第五條 此規則施行始終ノ期日並ニ場所ハ其都度内務卿ヨリ之ヲ指定スヘシ

(十一)醫師犯罪等分告御布告

右奉 勅旨布告候事  
 明治十五年八月十一日御布告第三十九号  
 醫師タル者醫業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經内務卿ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトヲ得但其事開業免許ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本項ニ準シテ處分スルコトアルヘシ  
 右奉 勅旨布告候事

○第九 公債証書之部

(一)中山道鐵道公債証書條例

明治十六年十二月廿八日御布告第四十七号  
中山道鐵道公債証書條例左ノ通制定ス

中山道鐵道公債証書條例

第一條 中山道鐵道公債証書ハ群馬縣下上野國高崎ヨリ岐阜縣下美濃國大垣ニ至ルマテ中山道ニ沿ヒ鐵道ヲ敷設シ及ヒ其事業ヲ經營スルノ資金ニ充ナルカ爲メ發行スルモノトス

○第二條 此公債証書發行高ハ貳千萬圓ヲ限リ大藏卿工業ノ都合ヲ計リ漸次之ヲ發行スルコトヲ得其發行ノ手續ハ大藏卿時々之ヲ定ムルモノトス

○第三條 此公債証書ハ無記名利札附ニシテ千圓五百圓百圓ノ三種トス

○第四條 此公債ノ利子ハ年七分トス

○第五條 此公債証書引受ノ申込高ハ大藏卿ノ需用スル金高ヨリ超過スルキハ其超過高ニ比例シ各申込人ヘ對シ証書渡方ヲ減少スルモノトス但價格ヲ定メテ發行シタル場合ニ於テ其價格以上ニテ申込ム者ヨハ其渡高ヲ減少セサルヘシ其價格ハ大藏卿之ヲ定ムルモノトス

○第六條 此公債証書ノ見本ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

○第七條 此公債証書ノ元金ハ証書發行ノ年ヨリ五ヶ年据置其翌年ヨリ向フ二十五ヶ年ヲ限リ毎年抽籤法ヲ以テ償還スヘシ但償還ノ金高ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ六十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

○第八條 此公債ノ利子ハ元金償還ニ至ルマテ毎年六月十二月ノ兩度ニ拂渡スモノトス但元金ヲ償還スルトキハ月割ヲ以テ右抽籤ヲ行フ月マテノ利子ヲ拂渡スヘシ滿期ニ至リ償還ノ証書ニ屬スル利子ハ償還ノ月マテノ分ヲ拂渡スモノトス

○第九條 此公債ノ元金償還ハ總テ通貨ヲ以テ任拂フモノトス

○第十條 此公債ノ利子ハ其元金拂込ノ日ニ從ヒ各月十五日以前後ヲ以テ區別シ十五日以前ナレハ其下半年分ヨリ十六日以後ナレハ其翌月分ヨリ拂渡スモノトス

○第九條 此公債ノ元金償還利子拂渡ノ事務ハ總テ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハ

(二)金札引換無記名公債

明治十六年十二月廿八日御布告第四十八号

右奉 勅旨布告候事  
第九 公債証書之部

シムヘシ其時期及ヒ場所等ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ三十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

○第十條 此公債ノ利子ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ利札ヲ切取リ之ヲ引換ニ拂渡スヘシ

○第十一條 此公債証書ハ何人ニテモ授受賣買スルコトヲ得

○第十二條 此公債ノ元金償還ノトキハ日本銀行ニ於テ抽籤配賦計算ノ割合ヲ定メ東京橫濱居住人ニテ此公債証書ヲ多額所持スルモノ拾名以上並大藏省國債記録局ノ官員五名以上立會ノ上抽籤ヲ執行シ其當籤証書ノ記號番号種類金高等ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

○第十三條 此公債証書ノ所有者其証書ヲ亡失セシトキハ其事由並証書面ノ金高記号番号及所有セシトキノ手續ヲ詳記シ其亡失セシ地ノ官廳ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ大藏卿ハ其証書ノ授受賣買ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同様ノ手續ヲ以テ届出ヘシ

○第十四條 亡失ノ証書ヲ發見セシ其償還年限ノ末期ニ至リ証書消滅セシト認ムヘキ場合ニ於テハ該証書ノ元金金額ヲ其届出人ヘ拂渡スヘシ

○第十五條 此公債証書當籤ト爲リ元金ヲ拂渡スヘキ場合ニ於テ其証書ノ亡失セシコトヲ覺知シタルトキハ其當籤ノ効ヲ失フモノトス

○第十六條 此公債証書汚染又ハ毀損セシトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ証書ノ引換ヲ大藏省ヘ請求スヘシ但其証書面金高記号番号及大藏卿ノ印章ヲ檢査シ其真正ナルヲ認シ得ヘキモノニアラサレハ引換サルベシ

○第十七條 此引換ヲ得タルモノハ本人ヨリ相當ノ手数料ヲ銀行ヘ拂フヘシ

○第十八條 此公債証書引換又ハ償還ノトキ其証書汚染毀損シ金高記号番号及大藏卿ノ印章ヲ認メ難キモノハ其元金トモ償還方總テ亡失証書ト同一ナルヘシ

○第十九條 此公債ノ元金受取方申出テス其拂期月ヨリ滿十五ヶ年ヲ過ルトキハ一切之ヲ償還セサルヘシ

○第二十條 政府ノ都合ニ依リ要用ノ事アレハ利子ノ割合及元金償還年限ヲ除クノ外此條例ヲ增補改正スルコトアルヘシ



例証書

金札引換無記名公債証書條例左ノ通制定シ明治十三年十月第四十七号布告金札引換公債條例第三條ヲ停止ス

金札引換無記名公債証書條例

第一條 金札引換無記名公債証書ハ政府發行ノ紙幣ヲ交換支消スル爲メ發行シ其元利金共銀貨ヲ以テ仕拂フモノトス 此公債証書ト交換シタル紙幣ハ大藏省ニ於テ之ヲ燒却スルモノトス

第二條 此公債証書ハ望人ノ申込ニ任セ大藏卿隨時之ヲ發行スルモノトス但大藏卿ハ財政ノ都合ヲ計リ其申込ヲ拒ムコトアルヘシ

第三條 此公債証書ハ無記名利札付ニシテ千圓五百圓百圓ノ三種トス

第四條 此公債ノ利子ハ年六分トス

第五條 此公債証書ハ証書額面百圓ニ付發行價格紙幣百圓ト定ム 此証書ヲ引受ケンコトヲ望ムモノハ隨時日本銀行本支店又ハ代理店ニ申出ヘシ

第六條 此公債証書ノ見本ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第七條 此公債ノ元金ハ其証書交付ノ年ヨリ五ヶ年据置其翌年ヨリ向フ三十ヶ年ヲ限リ毎年抽籤法ヲ以テ償還スヘシ但償還ノ金高ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ六十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス 此公債ノ利子ハ元金償還ニ至ルマテ毎年五月十一月ノ兩度ニ拂渡スモノトス但元金ヲ償還スルトキハ月割ヲ以テ右抽籤ヲ行フ月マテノ利子ヲ拂渡スヘシ

滿期ニ至リ償還ノ證書ニ屬スル利子ハ償還ノ月マテノ分ヲ拂渡スモノトス

第八條 此公債ノ利子ハ其元金拂込ノ日ニ從ヒ各月十五日前後ヲ以テ區別シ十五日以前ナレハ其下半月分ヨリ十六日以後ナレハ其翌月分ヨリ拂渡スモノトス

第九條 此公債ノ元金償還利子拂渡ノ事務ハ總テ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシムヘシ其時期及場所等ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ三十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十條 此公債ノ利子ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ利札ヲ切取リ之ト引換ニ拂渡スヘシ

第十一條 此公債証書ハ何人ニテモ授受賣買スルコトヲ得

第十二條 此公債ノ元金償還ノトキハ日本銀行ニ於テ抽籤配賦計算ノ割合ヲ定メ東京横濱居住人ニテ此公債

證書ヲ多額所持スル者十名以上并大藏省國債記録局ノ官員五名以上立會ノ上抽籤ヲ執行シ其當籤證書ノ記号番号種類金高等ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十三條 此公債証書ノ所有者其証書ヲ亡失セシトキハ其事由并証書面ノ金高記号番号及所有セシトキノ手續ヲ詳記シ其亡失セシ地ノ官廳ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ大藏卿ハ其証書ノ授受賣買ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同様ノ手續ヲ以テ届出ヘシ

亡失ノ證書ヲ發見セズ其償還年限ノ末期ニ至リ証書消滅セシト認ムヘキ場合ニ於テハ該證書ノ元利金額ヲ其届出人ニ拂渡スヘシ

第十四條 此公債証書當籤ト爲リ元金ヲ拂渡スヘキ場合ニ於テ其証書ノ亡失セシコトヲ覺知シタルトキハ其當籤ノ効ヲ失フモノトス

第十五條 此公債証書汚染又ハ毀損セシトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ證書ノ引換ヲ大藏省ニ請求スヘシ但其証書面金高記号番号及大藏卿ノ印章ヲ檢査シ其真正ナルヲ証認シ得ヘキモノニアラサレハ引換サルヘシ

此引換ヲ得タルモノハ本人ヨリ相當ノ手数料ヲ銀行ニ拂フヘシ

第十六條 此公債証書引換又ハ償還ノトキ其証書汚染毀損シ金高記号番号及大藏卿ノ印章ヲ認メ難キモノハ其元利金トモ償還方總テ亡失證書ト同一ナルヘシ

第十七條 此公債ノ元利金受取方申出テス其拂期ヨリ滿十五ヶ年ヲ過クルトキハ一切之ヲ償還セサルヘシ

第十八條 政府ノ都合ニ依リ要用ノ事アレハ利子ノ割合及元金償還年限ヲ除ク外此條例ヲ増補改正スルコトアルヘシ

右 奉勅旨布告候事

○第十 俸 給 之 部

(一)官吏 明治十七年一月四日御達第一号 官吏恩給令左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏恩給令

第一條 官吏恩給ハ文官勅任官奏任官判任官其本奉官職ノ年數及ヒ其年齡ニ依リ退官後之ヲ支給ス但出仕ハ本官ニ準ス○第二條 恩給ハ官吏滿十五年以上奉職シ年齡六十歳ニ至リテ退官ヲ許シタル者又ハ年齡六十歳ニ至ラズト雖モ滿十五年以上奉職シタル後廢官廢廳若クハ不治ノ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘザル確證アル者ニ終身之ヲ給ス 大臣參議各省卿元老院議長參事院議長ハ滿二年以上奉職シタルノ後退官スル時ハ特旨ヲ以テ終身恩給ヲ支給スルコトアル可シ○第三條 在職滿十五年以内ト雖モ公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重病ヲ負ヒ其職ニ堪ヘズ退官セシメタル者亦終身恩給ヲ支給ス○第四條 公務ニ依リ重傷ヲ負ヒ若クハ不治ノ病ニ罹リ開業醫ノ診斷書ヲ具ヘテ其職ニ堪ヘザル旨ヲ證明スルコトヲ得ル時ハ其退官ヲ許シ在職年數ニ拘ハラズ終身恩給ヲ支給ス 第三條及ヒ前項ノ場合ニ於テ盲聾或ハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ不治ノ症ニ罹リタル者ハ其退官ヲ命ジタルト又ハ退官ヲ許シタルトニ拘ハラズ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ現官相當恩給ノ外ニ猶其最下金額十分ノ七官ヲ増給スルコトアル可シ 開業醫ノ診斷證ニ就キ疑フ可キモノアルトキハ本局長官ハ更ニ醫員ヲ派遣シ其診斷ニ依リ事實ノ當否ヲ判定ス可シ○第五條 恩給ハ○官現時ノ俸額ニ依ル其給額ハ奉職滿十五年ニシテ俸給年額ノ四分ノ一即チ二百四十分ノ六十トシ爾後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿三十五年ニ至リ二百四十分ノ八十即チ俸給年額ノ三分ノ一ニ至ツテ止ム但非職中退官スル者ト雖モ恩給ハ其在職俸給ノ年額ニ照シテ之ヲ支給ス 第二條ノ第二項并ニ第三條第四條ニ掲グル所ノ十五年未滿ノ奉職者

ニ恩給ヲ支給スルコトアルトキハ其給額ハ俸給年額二百四十分ノ六十ニ當ルノ額ヲ以テス 進級後一年未滿ニシテ退官シタル者ハ前官ノ俸給ニ依リ恩給ヲ支給ス但公務ニ起因スル傷疾疾病ノ爲メ退官シタル者ハ此限ニ在ラズ○第六條 奉職滿十五年ニ超ル者ト雖モ年數未タ六十歳ニ至ラズシテ自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及ヒ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシメ者ハ恩給ヲ支給セス○第七條 奉職年數ノ計算ハ明治四年八月ヨリ起算ス其以後任官ノ者ハ其拜命ノ月ヨリ起算ス但年齡二十歳未滿ノ奉職年數ハ算入セズ 明治四年八月以前ヨリ奉職シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス○第八條 武官ヨリ文官ニ轉シ若クハ退官後再ヒ任官シタル者ハ前官後官ノ奉職年數ヲ通算ス但御用滯在中ノ年月及ヒ嘗テ滿年賜金若クハ退官一時賜金ヲ受ケタル者ノ前官年數ハ算入セズ○第九條 恩給ヲ受ケル者再ヒ官ニ就キ再後退官ノ節其俸額前官ヨリ少キトキハ仍ホ前官ノ俸額ニ依リ恩給ヲ支給ス○第十條 勅奏任官奉職中既ニ恩給ヲ受ケ可キ期ニ至リタル者及ヒ其退官恩給ヲ受ケル者死去セシトキ又ハ其期ニ至ラズト雖モ公務ニ依リ死去セシトキハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ其寡婦ニ扶助料トシテ死去生存中ノ恩給年額四分ノ二以内ヲ終身支給スルコトアル可シ寡婦ナケレハ其繼嗣ノ孤兒 養子ヲ問ハズ 滿二十歳ニ至ル迄之ヲ給スルコトアル可シ但寡婦ハ其本夫ノ在官中ニ入籍シタル者ニ限ル 判任官ハ奉職中既ニ恩給ヲ受ケ可キ期ニ至リタル者ニシテ公務ニ依リ死去セシトキニ限リ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ本條ニ準スルコトアル可シ但其扶助料ハ寡婦ニ止マリテ孤兒父母祖父母兄弟姉妹ニ及ハズ○第十一條 寡婦復籍若クハ再嫁シ又ハ死去シタルトキハ其扶助料ハ更ニ繼嗣ノ孤兒 滿二十歳未ニ給ス 扶助料ヲ受ケル孤兒既ニ嫁娶シ若クハ官廳ニ奉職シ俸給ヲ受ケ又ハ諸官立學校ノ官費生徒ト爲リタルトキハ其扶助料ヲ給セス○第十二條 扶助料ヲ受ケ可キ寡婦孤兒ナク又ハ

第十 俸給之部

扶助料ヲ受ケタル寡婦復籍若クハ再嫁シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキトキハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二以内ヲ終身支給スルコトアル可シ○第十三條 其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スルトキハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死没若クハ其恩典ヲ失フコトアルハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齡五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者孰レモ本人死没ノ際年齡五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在リシ者ニ限ル○第十四條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾不具ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル額ヲ一時限リ支給スルコトアル可シ○第十五條 恩給ハ在官者退官ノ翌月ヨリ支給ス扶助料ハ恩給ヲ受ケ又ハ受ク可キ者死去ノ翌月ヨリ支給ス其轉給スル者亦同シ○第十六條 恩給及ヒ扶助料ノ給否ハ本屬長官若クハ其所管地方長官ノ証明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ太政大臣之ヲ裁定ス 恩給及ヒ扶助料ノ給與ニ關シ若シ適當ナラサル廉アルコトヲ覺知シタル者ハ之ヲ其本屬長官若クハ地方長官ニ請願シ而シテ猶ホ穩當ノ指令ヲ得サルトキハ本人ヨリ直ニ之ヲ太政官恩給局ニ請願スルコトヲ得但之ヲ裁判所ニ訴ルコトヲ許サス○第十七條 恩給若クハ扶助料ヲ給スル本人ニハ太政官ヨリ其証書ヲ下附ス○第十八條 恩給ヲ受クル者公權ヲ剝奪セラレタルトキハ全ク之ヲ止メ又左ノ各項ニ該ルトキハ其時間ノミ之ヲ停ム

- 一 公權ヲ停止セラレタル時
- 二 再ヒ官ニ就キ俸給ヲ受クル時
- 三 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時
- 四 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第十九條

扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラルトキ又ハ第十八條ノ第三項若クハ第四項ニ該ルトキハ之ヲ止ム○第二十條 恩給ヲ支給ス可キ退官者アルトキハ本屬長官ハ本人ノ履歷書其傷痍疾病ニ起因スルモノハ其證書ヲ具シ且事實ヲ證明シテ之ヲ太政官ニ進達シ以テ恩給ヲ下附ヲ請求ス可シ○第二十一條 扶助料ヲ願ハントスル者ハ本人主名ヲ以テ親族二名後見人アレハ其親族ナキトキハ同郷ノ戸主二名連署セシ願書ニ其戸籍ノ寫ノ給恩若クハ扶助料給與又公務ニ依リ死亡セル者ハ其原因症候等照査ニ供ス可キ證據書ヲ添ヘ之ヲ所管地方廳ニ出願ス可シ地方長官ハ其事實ヲ證明シテ之ヲ太政官ニ進達シ以テ扶助料ノ下附ヲ請求ス可シ但一箇年經過ノ後出願スル者ハ之ヲ受理セス○第二十二條 恩給若クハ扶助料ノ支給ヲ止ムルトキハ恩給局ヨリ所管地方廳ニ達シ二週日以内ニ其給與ノ證書ヲ収メシム又恩給若クハ扶助料ヲ受クル者死去又ハ除籍シ扶助料ヲ繼承スル者ナキトキハ遺族若クハ親族ヨリ其死亡又ハ除籍ノ證書ヲ添ヘ一箇月以内ニ之ヲ所管地方廳ニ届出テ該長官ハ事由ヲ具シ其證書ト共ニ之ヲ恩給局ニ進達ス可シ○第二十三條 恩給及ヒ扶助料ノ金額ハ毎年六月十二月ニ於テ其前半年分半年ニ滿タサルモノヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經由シテ之ヲ交付ス○第二十四條 恩給若クハ扶助料ノ金額ヲ受領セントスル者ハ其證書及ヒ本人生存證書ヲ表證シ別ニ受領證書ヲ差出ス可シ○第二十五條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスルキハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス○第二十六條 恩給并ニ扶助料ハ一箇年以上其受領ヲ請求セサルトキハ其期間ノ金額ハ支給セス○第二十七條 恩給并ニ扶助料ニ關スル願書ハ郡區長戸長證書ハ戸長ノ與印ヲ要ス○第二十八條 盜難若クハ水火災等ニテ恩給若クハ扶助料給與ノ證書ヲ失ヒタルトキハ速ニ所管地方廳ヲ經テ恩給局ニ其旨届出可シ

第十 俸給之部

(二)陸軍 明治十六年九月十一日御達第三十七号 陸軍恩給令別冊ノ通改正候條此旨相達候事但陸軍罷役俸並ニ恤金令ハ廢止ス

別冊

陸軍恩給令

陸軍恩給令目錄

- 第一章 總則
- 第二章 恩給及ヒ増加
- 第三章 寡婦(孤兒)扶助料
- 第四章 服役年算則
- 第五章 從軍年算則
- 第六章 恩給支給順序
- 第七章 賑恤金
- 第八章 給助金

陸軍恩給令

第一章 總則

第一條 陸軍恩給ハ陸軍諸種ノ勤勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項トス

一 退職恩給

二 免除恩給

三 寡婦(孤兒)扶助料

四 賑恤金

五 給助金

第二條 退職恩給免除恩給寡婦扶助料ハ本人終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至ル迄之ヲ給シ賑恤金給助金ハ一時限リ之ヲ給ス○第三條 軍人ハ年限ノ年齢ニ達スレハ現役ヲ辭シテ恩給ヲ受クルヲ例トス其年限左ノ如シ

- 會計監督 軍醫監 藥劑監 六十
- 憲兵大中佐 會計副監督 軍醫正 藥劑正 馬醫監 五十七
- 步騎砲工輜重兵大中佐 憲兵少佐 會計監督補 會計一等軍吏 五十四
- 一等軍醫 一等刺官 一等馬醫 五十一
- 步騎砲工輜重兵少佐 憲兵大尉 會計二等軍吏 二等軍醫 二等刺官
- 二等馬醫 砲工兵上等監護

- 步騎砲工輜重兵大尉 憲兵中少尉 會計三等軍吏 三等軍醫 三等刺官 四十八
- 三等馬醫 軍樂長 砲工兵監護 砲兵監守 砲兵監査 諸工長 諸工下長 四十五
- 步騎砲工輜重兵中少尉 憲兵下士 會計書記 看護長 四十
- 馬醫生 軍樂次長 軍樂士 三十五
- 步騎砲工輜重兵下士 憲兵卒 會計卒 看病卒 樂生
- 步騎砲工輜重兵卒

第四條 軍人年限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特拔又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルヲ得但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス○第五條 上長官士官准士官未ダ年限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ士官以上ハ陸軍卿准士官ハ其所管長官旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ○第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

一 公權停止ノ時

二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス○第八條 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死歿ノ日 戰地等ニテ死没ノ者ハヨリ一箇年間願出サル者ハ其權利消絶ス 恩給及ヒ扶助料ハ一ケ年以上其金額ノ受領ヲ怠ル時ハ其怠リタル年間ノ金額ハ之ヲ給セス○第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メケ金額ヲ受領セシ日ヨリ三ヶ月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ陸軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ年限ノ年齢ニ達シ又ハ疾病ニ

第十 俸給之部

罹リ査問會議ノ處決若クハ陸軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メニ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスルヲ非常ノ勞働及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ従事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス 其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲号表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル○第十一條 免除恩給ハ下士及ヒ卒服役實期十一年以上ニシテ年限ノ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ疾病ノ爲メ免官若クハ免役スル者ニ之ヲ給ス 前條第二項ニ掲グルカ如キ傷痕疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證據明亮ニシテ免官若クハ免役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス 其免除恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙号表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル○第十二條 准士官以上傷痕ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス○第十三條 傷痕疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候トモ詳細之ヲ開陳ス可シ○第十四條 傷痕疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證々書又ハ公文若クハ査問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ證明ス可シ○第十五條 傷痕疾病不治ノ狀ハ陸軍病院長及ヒ主任醫官(地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長并ニ主任醫師)ノ診斷證書ヲ以テ之ヲ證スヘシ 其診斷證書ハ傷痕疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ 病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ陸軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷書ヲ要ス○第十六條 傷痕疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ證書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤハ當該所管ニ於テ檢査判定シ尙ホ監軍部長ノ審査ヲ經テ之ヲ陸軍卿ニ移ス可シ陸軍卿ハ更ニ軍醫本部ニ下シテ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス○第十七

條 恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但下士以上其官階ニ進ミ未ダ進級條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラスシテ退職免官ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ或ハ戰地ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス○第十八條 准士官以上退職恩給ヲ願フ時所管長官ハ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命ス下士卒免除恩給ヲ願フ時亦該長官同上ノ日ニ於テ直ニ免官若クハ免役ス可シ○第十九條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙号表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

- 一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者 二 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
- 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者
- 四 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者
- 六 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

第二十條 傷痕疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左項ノ期限内ニ願出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルノ際其傷痕ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二ケ年
- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者現役ヲ離レシ日ヨリ三ケ年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十一條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ緣故トニ依リテ差アリ

第十 俸給之部

一 戰闘或ハ公務ノ爲メ死没シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死没シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ルコト能ハスシテ非常ノ勞働及ヒ困苦ヲ忍ビ勸務ニ従事シ爲メニ發病死没シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シ死没シタル軍人ノ寡婦

二 退職若クハ免除恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死没シタル軍人ノ寡婦

其扶助料ノ額第一項ニ該ル者ハ丁号表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊号表面ニ依ル○第十二條 戰闘及ヒ公務ノ爲メ傷痕ヲ受クルト雖モ其傷痕ニ原因セサル他病ニテ死没シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス○第二十三條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十一條第一項ヲ適用ス○第二十四條 寡婦ハ陸軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セス負傷又ハ發病前ニ婚配セル者ニ限ル○第二十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス○第二十六條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハラズ家名ヲ繼承スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼承ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス○第二十七條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス○第二十八條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ク可キ者ニ之ヲ給ス○第二十九條 軍人死没シ扶助料

ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ終身給スルヲアル可シ 其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死没若クハ權利消絶スルヲアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年滿五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ且孰レモ軍人死没ノ際年滿五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル○第三十條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長戸長ノ與印セル願書ヲ以テ之ヲ地方廳ニ呈ス可シ 其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ者ハ見証々書若クハ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痕疾病ニ基ク者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷證書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死没ノ原因ヲ證明ス可シ

第四章 服役年算則

第三十一條 服役年ノ始期及ヒ終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ總テ同月ヲ以テ始トス但明治四年八月以前ヨリ勤仕シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス

二 下士以上ハ其初任當日ヨリ起算ス

三 徵兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算ス

四 壯兵其他諸種ノ方法ヲ以テ軍籍ニ入りタル者ハ其就役ノ當日ヨリ起算ス

第十

俸給之部

五上長官士官准士官ハ退職恩給ノ願書該長官ヨリ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ヲ以テ終期トス

六下士卒ハ免官免役ノ日ヲ以テ終期トス

第三十二條 十七歳未満ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス 士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス○第三十三條 海軍々人轉シテ陸軍々人トナル者ハ海軍服務ノ年月ヲ通算ス又文官轉シテ陸軍々人トナリタル者並ニ陸軍々人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六ヶ月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス○第三十四條 豫備後備ニ在ルノ月日ハ服役實期ニ算セスト雖モ復習ノ外現役ニ徵集スルコアル時ハ前後ノ現役ヲ通算ス○第三十五條 退職免役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス○第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其歸營以後ノ現役ニ通算ス○第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス○第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス○第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一日本國外ノ戰地ニ於テ服役スル時ハ二箇年ヲ増加ス
- 二出征軍ニ編入セラレ或ハ合圍若クハ臨戰地境內ニ於テ服役セシ時又戰時平時ヲ論セズ日本國外ノ地ニ於テ鎮戍ノ軍隊ニ在リシ時及ヒ海戰ニ當リ其船中ニ在リシ時ハ一箇年ヲ増加ス

三海戰ニ當リ海岸防禦ニ從事セシ時ハ半箇年ヲ増加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニアラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ陸軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス○第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ檢閱監軍部長ヲ經テ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ太政官ニ上申ス 寡婦(孤兒)扶助料ノ願書ハ居住地地方廳ヨリ內務卿ニ呈シ內務卿之ヲ陸軍卿ニ移シ陸軍卿ヨリ太政官ニ上申ス○第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大藏陸軍三卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金員受領ノ証トナサシム 恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ陸軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス○第四十五條 退職及ヒ免除恩給並ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル

- 一准士官以上ハ計算書日附ノ翌日
- 二下士卒ハ免官免役ノ翌日
- 三寡婦(孤兒)扶助料ハ該軍人死去ノ翌日

第四十六條 恩給及ヒ扶助料ハ一月四月七月十月ニ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戶長ノ證セル本人生存書及ヒ金額受領證書ト引替ニ其金額ヲ交付ス 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスルモハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ期日ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス○第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ収メテ內務省ニ出シ內務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省陸軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫

第十 俸給之部

帖ヲ収メス更ニ扶助料請願ノ證ト爲サシム○第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ失亡ズル時ハ速ニ其旨ヲ届出ヘシ此場合ニ於テハ内務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官除隊スト雖

モ第十九條末項ヨリ輕傷ニシテ免除恩給ヲ受ケザル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表

第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表

第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニアラスシテ傷痍疾病ヲ受ケ全

ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受

ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラ

ス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 扶助料ヲ受ケ可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナリシテ從來死者ニ依リ生活セル二十歳

未滿又ハ二十歳以上ト雖モ廢疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親類ナキ者ハ其寡

婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ陸軍卿之ヲ詮議シ太政

官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役或ハ免官トナ

リ恩給若クハ扶助料ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ已号表面ニ依ル但懲戒ノクメ免

官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス

(恩給金額表略之)

(三)海軍 明治十六年九月十一日御達第三十八号

恩給令 海軍恩給令別冊ノ通相定候條此旨相達候事但從前ノ海軍退隱令ハ廢止ス

別冊 海軍恩給令

海軍恩給令目錄

第一章 總則

第二章 寡婦(孤兒)扶助料

第三章 從軍年算則

第七章 賑恤金

海軍恩給令

第一章 總則

第一條 海軍恩給令ハ海軍諸種ノ勤勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項ト

ス

一 退職恩給

四 賑恤金

第二條 退職恩給退役恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至ル迄之ヲ給シ賑恤金給助金ハ一時限リ之ヲ給ス○第三條 軍人ハ年限ノ年齢ニ達スレハ退

職退役シテ恩給ヲ受ケルヲ例トス其定限左ノ如シ

軍醫大監 主計大監

機關大監 機關中監 軍醫中監 軍醫少監 主計中監 主計少監

第十 俸給之部

二百十三

六十五 六十



- 大佐 中佐 機關少監 大軍醫 中軍醫 大主計 中主計 掌砲上長 機關工長 五十五
- 水兵上長 木工上長 機關工上長 掌砲長 水兵長 木工長 機關工長
- 少佐 大機關士 中機關士 少軍醫 少主計 下士 五十
- 大尉 中尉 少機關士 卒 四十五
- 少尉 軍尉補 主計補 四十
- 少尉補 機關士補 三十

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特抜又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルコトアル可シ但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス○第五條 軍人未ダ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ海軍卿旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ○第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

一 公權停止ノ時

二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時  
第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス○第八條 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ日(戰地等ニテ死歿ノ者ハ海軍官憲ヨリ報告ノ日)ヨリ一箇年間願出サル時ハ其權利消絶ス 恩給及扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ忘リタル時ハ其意リタル間ノ金額ハ之ヲ給セス○第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スルトキハ初メテ金額ヲ受領セシ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ海軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ疾病ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ海軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メニ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰時ニ於テ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス 其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲号表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル○第十一條 退職恩給ハ下士退役恩給ハ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ疾病ノ爲メ退職若クハ退役スル者ニ之ヲ給ス 前條第二項ニ掲グルカ如キ傷疾疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證據明亮ニシテ退職若クハ退役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス 其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙号表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル○第十二條 軍人傷疾ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職若クハ退役スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス○第十三條 下士以上ノ恩給願書ハ所管長官ヲ經テ海軍卿ニ卒ハ所管長官ニ其履歷書ヲ副呈ス可シ○第十四條 傷疾疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候等詳細之ヲ開陳ス可シ○第十五條 傷疾疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見証々書又ハ公文若クハ査問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ証明ス可シ○第十六條 傷疾疾病不治ノ狀ハ海軍病院長並ニ主任醫官(地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長並ニ主任醫師)ノ診斷証書ヲ以テ之ヲ証ス可シ 其診斷証書ハ傷疾疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ 病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ海軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷証書ヲ要ス○第十七條 傷疾

第十 俸給之部

疾病不治ノ狀ハ軍醫若シハ地方醫師ノ証書ニ依ルト雖也其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤ當該ノ所管ニ於テ檢査判定シ之ヲ海軍卿ニ呈スヘシ海軍卿ハ臨時調査委員ヲ選定シ更ニ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス○第十八條 下士以上恩給ヲ願フ時ハ所管長官其海軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命ジ卒恩給ヲ願フ時亦所管長官同上ノ日ニ於テ直ニ免役ス可シ○第十九條 凡恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但其官階ニ進ミ未タ滿十八箇月ニ至ラスシテ退職若シハ退役ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘又ハ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ或ハ戰地若クハ航海中ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス○第二十條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙号表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者 二 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者

四 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者

六 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

第二十一條 傷痕疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ願出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルノ際其傷痕ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二箇年

二 二肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十二條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ緣故トニ依リテ差アリ

一 戰闘或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰地ニ於テ非常ノ勞動及ヒ困苦ノ勸務ニ服シ爲メニ健康ヲ害セラレ發病終ニ死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ

廣染死歿シタル軍人ノ寡婦

二 退職若シハ退役恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料第一項ニ該ル者ハ丁号表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊号表面ニ依ル○第二十三條 戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケタル雖也其傷痕ニ原因セサル他病ニテ死歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス○第二十四條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ノ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十二條第一項ヲ適用ス○第二十五條 寡婦ハ海軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若シハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セテ負傷又ハ發病前ニ婚配セシ者ニ限ル○

第二十六條 寡婦其家ヲ去リ若シハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受ケルノ權消絶ス○第二十七條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故有リテ扶助料ヲ受ルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒

(適子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ラス家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼襲ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス○第

廿八條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少ナル者ニ及フ但二十歳未滿ト雖也官署ニ奉職シ奉給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ男女共

第十 俸給之部 二百十七

ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス○第二十九條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラル  
 時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ク可キ者ニ之ヲ給ス○第三十條 軍人死歿シ扶助料ヲ受  
 ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者  
 ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ  
 終身寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ給スルコトアル可シ 其扶助料ハ父母祖父母共ニ存  
 在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スルコトアルハ轉シテ之ヲ母ニ給ス  
 以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齡  
 五十歳以上其未滿ハ癡疾及ヒ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ  
 者ニシテ其孰レモ軍人死歿ノ際年齡五十歳以上ニシテ其戶籍ニ在ル者ニ限ル○第三十一  
 條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親屬二名及ヒ後見人アレハ其後見人若シ  
 親族ナキ時ハ同郷ノ戶主二名連署シ其郡區長戶長ノ與印セシ願書ヲ以テ地方廳ニ進達ス  
 可シ但恩給登錄簿帖アレハ之ヲ添附スヘシ 其夫若クハ父戰鬪其他公務ノ爲メ直ニ死亡  
 セシ時ハ死亡報告若クハ死亡證書若クハ他ノ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痍疾病ニ起  
 因スル者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ  
 診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ詳細證明ス可シ海軍  
 卿ハ之ヲ調査委員ニ下シ其實情ヲ調査セシメ以テ決定ス

第四章 服役年算則

第三十二條 服役年ノ始期及終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ  
 一 准士官以上ニテ四上長四長及ヒ樂長ヲ除クノ外ハ初任ノ日四上長四長及ヒ樂長以下  
 ハ四等卒及ヒ樂生タルノ日ヲ以テ服役年ノ始期トス但准士官以上ハ明治四年八月以  
 前下士以下ハ明治二年五月以前准卒ハ海軍定員ニ准セサル以前ノ服役年ニ算入セス  
 然レトモ其以前ヨリ勤止シタル者ハ其算入期ノ前月ニ於ケル現官等ニ對スル俸給ノ

半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ  
 一時賜金トシテ給與ス

二 下士以上ハ退職恩給ノ願書ヲ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈スル進達書ノ日卒ハ退役ノ日  
 ナリテ終期トス

第三十三條 十七歳未滿ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス 士官以上待命及ヒ非職中ノ月  
 日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職  
 俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス○第三十四條 陸軍々人轉シテ海軍々人トナル者ハ陸軍  
 服役ノ年數ヲ通算ス又文官轉シテ海軍々人トナル者并ニ海軍々人ノ現役ニ在ラスシ  
 テ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月  
 ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス○第三十五條 退職若クハ退役ノ後再ヒ現役ニ就  
 ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス○第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其復歸以後ノ現  
 役ニ通算ス○第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス○第三十八條 戰時虜  
 獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シシ之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ軍服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服  
 役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス○第四十條 從軍年加算ノ法ハ左  
 ノ各項ニ依ル可シ

- 一 日本國外ノ戰役ニ從事中ハ二箇年ヲ増加ス
- 二 出征艦隊ニ編入中及ヒ合圍若クハ臨戰地境內ニ服役中ハ一箇年ヲ増加ス
- 三 戰時平時ヲ論セス外國航海中ハ半箇年ヲ増加ス
- 第四十一條 出征軍ノ定メコラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ  
 於テハ海軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス○第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法

第十

俸給之部

ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス 寡婦若クハ孤兒扶助料ノ願書ハ居住ノ地方廳ヨリ內務卿ニ呈シ內務卿之ヲ海軍卿ニ移シ海軍卿ヨリ太政官ニ上申ス○第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大藏海軍ノ三卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓受領ノ證ト爲サシム 恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ海軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス○第四十五條 退職及ヒ退後恩給並ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 下士以上ハ計算書口付ノ翌日 二 卒ハ免役ノ翌日

三 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ翌日

第四十六條 恩給扶助料ハ一月四月七月十月ニ於テ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ証セル本人生存書及ヒ金額受領証書ト引替ニ其金額ヲ交付ス可シ 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス○第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ収メテ內務省ニ出シ內務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省海軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ收メス更ニ扶助料請願ノ証ト爲サシム○第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ亡失スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ內務卿ヨリ証ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官除隊スト雖モ

モ第二十條末項ヨリ輕傷ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表

第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表

第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニ非スシテ傷痍疾病ヲ受ケ全ク

服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ

若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス

五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ其寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生

活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ廢疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ救育スルノ親族

ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金

額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ海軍卿之ヲ詮議シ太政

官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役或ハ免官トナ

リ恩給若クハ扶助料ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ已号表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ

免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス

(恩給金額表ハ略之)

第十 俸給之部 二百廿一

(四)陸海軍大將等恩給支給方御達

明治十七年一月四日御達第四号  
陸海軍大將滿二年以上在官ノ者退職若クハ死亡スル時ハ特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ  
陸海軍中將少將并ニ同等ノ軍人ニシテ特別ノ功績アル者ハ服役實期十一年未滿ト雖特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ  
陸海軍武官ヨリ文官ヲ兼任スル者武官現役十一年以上十五年(十一年以上ニハ從軍年ヲ合算ス)未滿ニシテ退官若クハ死亡スル時ハ陸海軍恩給令ニ依リ恩給ヲ支給シ其現役滿十五年以上ノ者ニハ本兼官ノ内ニテ其俸給ノ多キ額ニ就テ恩給ヲ支給ス可シ  
恩給金額ノ増加年數四十年及寡婦孤兒等ニ轉給スルコトハ總テ陸海軍恩給令ノ例ニ依ル

(五)月俸規則

明治七年五月十日御達第六十一号  
月俸規則別冊ノ通相定候條此旨相達候事

月俸規則

第一條 一諸官員月俸ハ毎月十七日支給スルヲ定規トス但免職病死旅行其他非常ノ事故アル時ハ此限ニアラス○第二條 一月俸ハ一月ヲ前後ニ分テ新任十五日以前ニ在ル者ハ其全額ヲ給シ十六日後ハ半額ヲ給ス昇等増給モ亦之ニ準ス降等及ヒ免職十五日以前ニ在ル者ハ猶舊等ノ俸半額ヲ給シ十六日後ハ其全額ヲ給スヘシ但免職ノ者其擔當セシ事務引渡シニ付時日ヲ要スルモ別ニ俸ヲ給セス尤モ更ニ引渡事務ヲ命スル者又ハ後日調査等ノ爲メ出應ヲ命スル者ノ如キハ此限ニアラス 一新任ノ者宣旨拜受書差出置出仕セサル内辭表差出スモノハ月俸一切給セザルヘシ○第三條 上下半月内ニ免職ノ者再任スレハ前官ノ俸ハ勿論後官ノ俸ヲ併セ給ス譬ヘハ十四日免職即日再任スルトモ前官ノ俸半額并後官ノ俸全額ヲ支給スルノ類ナリ但官等給額ヲ改正スルコトアレハ新舊比較シテ其寡額ヲ給ス十三條十四條モ亦之ニ準ス○第四條 一月内再三轉任スル者ハ月俸支給ノ定日在職ノ應ニ於テ十五日前後ノ區分ヲ以テ通算シ其官相當ノ俸ヲ給ス若シ十八日後轉任昇等ノ者ハ新任ノ應ニ於テ其増額ヲ給スヘシ但シ武官月俸ハ日割ヲ以テ給ス故ニ武官ヨリ文官ニ轉任スルモハ總テ其月給同様に做シ十五日前後ヲ以テ區分シ其多キ方ニ因テ之ヲ給ス右ノ外日給ヨリ月給ニ轉シ月給ヨリ日給ニ轉スルノ如キハ總テ此例ニ準スヘシ○第五條 一外國並ニ内國トモ遠隔ノ地ニ在留ノ者轉任黜陟スルモハ宣旨其地ニ達シ當人受書ヲ出シタル日ヲ推シ十五日前後ノ區分ヲ以テ本官ノ月俸ヲ給シ又ハ給セザルヘシ○第六條 一數官ヲ兼任ノ者ハ月俸ノ多キ方ニ就キ其應ニ於テ之ヲ給シ同等ノ兼任ハ本務ノ應ニ於テ之ヲ給ス兼任ノ月俸ハ別ニ給セザルヘシ但文武官兼任ノ者ハ文官月俸ノ内職稅ヲ除キ武官ノ俸給ニ比較シ其多キ方ヲ以テ支給ス可シ 一作業ニ關スル者ニ限リ月俸ハ現ニ勤務スル所ノ應ヨリ支給スヘシ第十一條 一兼之ニ準ス○第七條 一他所出張又ハ在勤命セラレ其地ニ於テ月俸支給スヘカヲサル者ハ公務ノ長短ヲ置リ發程ノ節月俸三ヶ月迄ハ繰上ケ支給スルモ妨ケナシトス三ヶ月ヲ經テ仍ホ滞在ヲ要スルモハ亦右例ニ隨テ送致スヘシ○第八條 一外國出張ノ者ハ發程ノ節月俸六ヶ月マテハ繰上ケ支給スルモ妨ケナシトス六ヶ月ヲ過テ仍ホ在留スヘキモハ亦右例ニ隨テ送致スヘシ但六ヶ月ヲ過キ猶在留スル者留守宅ニ於テ受取ント欲スル者ハ名代人ヲ定メ發程前其旨申立置ヘシ 一在留中免職ノ者ハ其月十五日前後ノ區分ヲ以テ計算シ過給ノ分ヲ返納セシム第七條モ亦同シ○第九條 一公使領事書記官書記生等ハ轉任及同官ヨリ他ニ轉任スルモハ月十五日前後ニ拘ハラス月俸ハ其月ノ日數ニ分割シ轉任前日迄而官廳轉任當日ヨリ後官廳ニ於テ支給スヘシ尤公使領事書記官書記生等ヲ拜命シ出發前他ニ轉任スル者ハ十五日前後ノ區分ヲ以テ後官相當ノ月俸ヲ後官廳ニ於テ支給スヘシ○第十條 一轉任ニ就キ前官ニテ擔當セ

第十 俸給之部  
二百廿三

シ事務引渡シノ爲メ時日ヲ經未タ當官ノ事務ニ着手セサルモ月俸ハ當官ヲ以テ新任ノ  
 廳ニ於テ給スヘシ○第十一條 一公事ノ便宜ニ因リ雙方示談ノ上甲廳ノ官員ヲ乙廳ニ借  
 用スルコトアルモ其月俸ハ甲廳ヨリ給スヘシ○第十二條 一廢廳廢官ノ節遠隔ノ地ニ在勤  
 又ハ出張ノ者ハ違書拜承在廳ト見做ス。迄在官ト同視ス尤引渡事務ヲ命スル者ハ仍舊  
 官ノ俸ヲ給ス但引渡事務取扱中官等給額ヲ改正スルコトアルハ比較シテ其寡額ヲ給ス第十  
 三條第十四條モ亦之ニ準ス 一内外國派出ノ者廢官ノ節復命ノ爲メ歸廳セシムルキハ引  
 渡事務取扱ノ例ニ準ス○第十三條 一免職ノ者事務引渡シ濟ノ後任職中ノ事件ニ付更ニ  
 出張ヲ命スルキハ舊官俸給半額日割ヲ以テ之ヲ給スヘシ但在職中自己不正ノ事件ニ付  
 キ出張セシムルキハ給セサルヘシ○第十四條 一免職ノ上御用滞在ヲ命スル者ハ滞在手  
 當トシテ舊官月俸三分ノ一ヲ給ス但シ右手當ハ上半月内免職ノ者ハ下半月ヨリ之ヲ給シ  
 下半月内免職ノ者ハ翌月ヨリ之ヲ給ス滞在中再任上半月内ニアル者ハ其月分ヲ給セズ下  
 半月内ニアル者ハ上半月分ヲ給シ下半月分ハ給セサルヘシ○第十五條 一許可ヲ得テ歸  
 郷スル者ハ休暇中月半額ヲ給スヘシ但計算方法譬ヘハ十五日前奉職地ヨリ發足スル者ハ下  
 半月分ヨリ減給シ十六日後發足スル者ハ翌月ヨリ減給スヘシ 一公事旅行中 行ノ如キ一  
 日行程定メ 許可ヲ得テ歸郷スル者公事旅行日積間片路一日十里計 中ハ月俸ヲ減スルコトナ  
 アルノ類 許可ヲ得テ超過スレハ其日ヨリ前項ノ區分ニ據リ支給スヘシ○第十六條 一病氣引ノ  
 シ若シ日積ヲ超過スレハ其日ヨリ前項ノ區分ニ據リ支給スヘシ但病氣引十五日ニ至ラハ必ス  
 者ハ四ヶ月ノ間月俸全額ヲ給シ其後ハ三分ノ一ヲ給スヘシ但病氣引十五日後ニ至ラハ必ス  
 醫案ヲ副ヘ届ケ出賃ホ在再數月ニ暨フキハ六十日毎ニ更ニ其病狀ヲ届ケ出ヘシ病氣引日  
 數ハ引籠ノ日ヨリ起算スヘシ 一若シ醫案ニ因リ奉職ノ地ヲ離レ郷里又ハ他方ニテ治療  
 セント欲スル者ハ病狀ノ輕重ニ從ヒ療養ノ日限ヲ定メ出願スヘシ尤モ許可日限滿テ未タ  
 全癒ニ至ラサルキハ更ニ其狀ヲ具シ延期ヲ追願スヘシ此場合ニ於テハ奉職地出發前後ノ  
 日數ヲ合算シ本條ニ據テ給スヘシ 一歸郷中發病續キテ療養セント欲スル者ハ右同様上

請スヘシ此場合ニ於テハ其月俸仍ホ第十五條ノ通り給スヘシ尤モ歸郷許可ノ日限ヲ除キ  
 四ヶ月以上ニ及フキハ本官月俸三分ノ一ナルヘシ 一右病氣引四ヶ月計算ノ方法譬ヘハ  
 十五日前引籠ノ者ハ下半月ヨリ之ヲ算シ十六日後引籠ノ者ハ翌月ヨリ之ヲ算スヘシ○第  
 十七條 一奉職ノ地ニ於テ父母病氣看護ノ爲メ休暇ヲ與フル者ハ第十六條ニ準ス○第十  
 八條 一官吏職務上ノ事件ニ關シ訴訟ノ原告人又ハ証人引合人トナリ審判中ハ月俸全  
 額ヲ給ス其自己ニ關スル訴訟ノ原告人又ハ証人引合人トナリ缺勤ヲ爲ス者或ハ事故ア  
 リテ出仕差止ル者ハ其月十五日前後ヲ區別シ減シテ五分ノ一ヲ給 明治十六年第五十四  
 ○第十九條 忌引中ハ月俸全額ヲ給ス且父母忌中藥參ノ爲メ歸郷ヲ請フ者ハ其忌日限中  
 ハ同ク之ヲ給シ其餘ノ日數ハ十五日前後ノ區分ヲ以テ第十五條ノ通りタルヘシ但歸郷給  
 暇中父母ノ喪ニ遭フ者モ亦本條ニ據ルヘシ○第二十條 各廳ノ適宜ニ因テ御用掛無等ノ  
 出任或ハ雇抱并書記等ノ名義ヲ以テ出仕セシムルモ其他巡卒門番等給料ノ多寡ニ不拘  
 月給ノ者ハ總テ前各條ニ準據スヘシ○第二十一條 一同上ノ内日給ノ者及ヒ小使諸職人其  
 他小者ノ類ハ給料ノ多寡ニ不拘雇入并放免等ノ月端日數ハ總テ日割ヲ以テ給與スヘシ○  
 第二十二條 官吏滿五年以上十五年未滿奉職ノ者死去又ハ廢官廢廳若シハ諭旨退官セシ  
 メタルトキハ左ノ金額ヲ一時限リ支給ス可シ但恩給ヲ受クル者及ヒ等外吏御用掛雇又ハ  
 罪ヲ犯シ官職ヲ失フ者并ニ懲戒ニ因リ免官ノ者ハ之ヲ支給セズ  
 滿五年以上十年未滿ニシテ死去又ハ退官ノ者 現俸給 三箇月分  
 滿十年以上十五年未滿ニシテ死去又ハ退官ノ者 同 四箇月分  
 第二十三條 等外吏奉職滿五年以上ニシテ死去又ハ退官シタルトキハ其月俸半額ヲ以テ  
 奉職年數ノ一箇年ニ當テ勤續年數ニ應スルノ金額ヲ一時限リ支給ス可シ但犯罪若シハ懲  
 戒ニ因リ免官ノ者ハ之ヲ支給セズ 明治十七年第五号御達ヲ以テ  
 第二十二條ヲ追加セラル

(六)旅費 明治九年六月十三日御達第六十四号 第十 俸給之部

明治五年十月第三百九号達旅費定則及爾後追々改正増加ノ分共本年六月二十日限り相廢  
シ更ニ別冊ノ通相定七月一日ヨリ施行候條此旨相達候事

別冊 旅費定則 内國之部

第一章 一陸路水路トモ渾テ旅中一切ノ費用トシテ表面ノ通旅費日當ヲ支給ス可シ  
第二章 一陸路旅費ヲ三分シテ並旅行赴任旅行晝夜急行トナシ各一日十里詰ヲ以テ表面  
ノ日當ヲ支給ス可シ 十里以上ノ端里數滿一里以上ハ日當  
第一項 並旅行ハ該應ヨリ片道六里以上ヨリ之ヲ給ス 片道六里未滿ハ 〇第二項 赴任  
旅行ハ在勤 本應支應ノ別ナク總テ其 及新任轉任ノ節該應ヘ三里以上ヨリ 一切給セス  
ヲ給ス尤モ新任ノ者ハ第十七章ノ相當ヲ以テ支給ス 新任轉任ノ者旅費ハ其採用ノ官應  
應又ハ在勤ノ管轄應ニテ繰替渡スモ退テ其採用ノ官應ヨリ返付ス 〇第三項 晝夜急行  
可シ但甲應ノ官吏ヲ乙應ヘ借用スルノ類モ乙應ニ於テ給ス 〇第四項 該應ヨリ片  
晝夜ヲ兼テ急行スル云 第一項ニ準シ急行ノ日當ヲ給ス 一日或ハ半日間急行 〇第五項 該應ヨリ片  
道六里未滿ノ旅行ハ總テ 出張巡廻ニ 近方派出トシ片道三里未滿ニシテ日歸ナレハ日當  
ヲ給セス一泊スレハ片道三日以上六里未滿ハ日歸一泊ノ別ナク往返ニ  
テ並旅行日當一日分ヲ給シ滞在スレハ片道三日以上六里未滿ハ日歸一泊ノ別ナク往返ニ  
里以上ノ地ヘ派出ノ節ハ第四項ニ準シ並旅行ノ日當ヲ給ス尤モ三里未滿ノ地ヘ同勤ノ節  
ハ第三章滯留日當ノ外一切給與セス 事業中縱橫奔走ノ 〇第六項 行旅中渡海ニ非ラサ  
レハ至リ難キ場所ハ海路二十里 海路一里ハ陸路十ヲ以テ陸路十里全概見做シ本章ニ準  
シ並旅行日當ヲ給ス 海路二十里未滿ノ端里數ハ本 尤官船乘組渡海ノ節ハ第四章ニ準據  
項ノ割合ヲ以テ陸路ヘ通算ス

ス 〇第七項 巡回 檢田測量其他巡回 視等ノ類ヲ云フ 總テ日數ニ應シ 里程ハ 並旅行日當ヲ給ス但近方派  
出ハ第四項ニ準シ滞在ノ節ハ第三章ニ準ス 〇第八項 十里外ヨリ始ル巡回及ヒ此地ヨ  
リ彼地ヘ移ルトキ十里以上ノ場所ハ本章ニ準シ並旅行日當ヲ給シ即日巡回スルトモ其  
日ハ別ニ日當ヲ給セス尤モ十里未滿ハ第七項ニ準シ日數ヲ以テ給ス 〇第九項 測量或ハ  
堤坊等ノ事業ニテ巡回滯在中旅宿ヨリ其測量等ノ場所ヘ日々派出スルモ日歸ナレハ里  
ニ拘別ニ旅費ヲ給セス滯留日當ノミヲ給ス 一泊以上ハ里程ニ拘 〇第十項 並旅行ハ一  
日十里詰ト定ムルト雖 御用柄ニヨリ百里ノ行程ヲ十二三日ニ旅行スルカ如キ事實不  
得止節ハ右増日數ニ應シ表面ノ通滯留日當ヲ給スヘシ 〇第十一項 地方出張ノ者甲乙  
丙ノ各地ヘ兼行スルハ都テ本應ヨリ丙地迄ノ中道里程ヲ通算シ途中尙各地ヘ寄  
モ別段區分セス丙地迄ノ里程ヘ合算シ十里詰ノ割ヲ以テ旅費日當ヲ給スヘシ 〇第十二  
項 各應及ヒ支應又ハ出張所ニ三里以上ノ地ヨリ採用シ該應在勤ヲ命セス一時滯留セ  
シメ追テ任所ヘ赴ク者ハ本人現住ノ地ヨリ滯留ノ地迄ハ第十七章相當ノ赴任旅費ヲ給  
シ夫ヨリ任所迄ハ直路里程ニ應シ官等相當ノ赴任旅費ヲ給シ滯留中ハ拜命前後ヲ區分  
シテ滯留日當ヲ給ス其三里以内ノ地ヨリ採用セシ者ハ滯留地ヨリ任所迄同様赴任旅  
費ノミヲ給スヘシ但官ノ都合ニ因リ支應又ハ出張所ノ近傍ヘ特ニ止宿セシムル時ハ滯  
留日當ヲ給ス

第三章 一他方出張 本應支應ヘ臨時出張支應在勤ハ着翌日ヨリ滯留日當ヲ支給スヘシ  
第一項 晝夜急行或ハ便船等ニテ陸路日積ヨリ早着スルトモ本章ニ準シ滯留日當ヲ給  
ス 〇第二項 行旅中川留雪支或ハ病氣等ニテ延滞セシ向ハ増日數ノ分滯留日當ヲ給ス  
但川留雪支ハ其所長ノ証書病氣ハ醫師ノ診察書ヲ差出ス可シ 〇第三項 出張先病氣  
ニテ許可ヲ得事務半途ニシテ本應ヘ歸ル者ハ旅費ヲ給シ重症ニテ一時其地ニ滞在ナク  
ン者ハ醫師ノ診察書ヲ以テ願出レハ滯留日當及歸應ノ節ハ旅費ヲ給ス 〇第四項 三里  
以上ノ地ヨリ採用ノ向ハ着翌日ヨリ拜命ノ前日マテ第十七章ノ相當ヲ以テ滯留日當ヲ  
第十 俸給之部 二百廿七

給ス○第五項 歸省或ハ養病ニテ他所滞在中轉任ノ者ハ其滞在地ヨリ新任廳マテノ旅費ヲ給シ滞在地ヨリ前官廳マテノ旅費ハ給セズ

第四章 一官船或ハ各廳ノ僱船等ニテ國內航海並海路巡回ハ日數ニ應シ日當及ヒ賄料ヲ支給スルシ

第一項 官費ヲ以テ仕賄ノ節ヲ旅費ノ等級一二等ニ該ル者ハ主從ヲ合セテ上下一人下等二人同三等ハ上下一人下等一人マテ現員ヲ以テ賄ヒ全四等ハ上等全五等ハ中等

下等ハ給仕小使諸職人等ハ下等各一人ノ割ヲ以テ仕賄フ可シ故ニ本章ノ賄料ハ給與セズ

○第二項 各廳へ便宜ニヨリ便船乘組渡海ヲ命スル節船賃ハ旅費ノ等級一等ヨリ四等但シ中等無之キハ五等下等トシ悉皆官費ヲ以テシ別ニ本章ニ準シ乘組日當ヲ給ス尤

給仕小使諸職人等ハ下等トス 從者召連ル節旅費ノ等級一二等ハ下等二人全三等ハ下等一人ノ船賃ノミヲ支給スル自己便宜ニヨリ乘船スル向

ハ本項ノ例ニアラス 第五章 一東京橫濱及ヒ京都大坂神戸間ノ瀛車賃ハ表面ノ通支給シ時ニヨリ一日間ニ往來シ又ハ二日ニ往來スルトモ日數ニ應シ別ニ賄料トシテ滞留日當ノ額ヲ給ス若シ到着ノ上滞留アラハ第三章ニ準據スヘシ

第一項 京都ヨリ神戸ニ至ル瀛車ハ一線路ニ付滞留日當ハ本章ニ準シ支給スヘシ○第二項 赴任ノ者ハ表面而赴任瀛車賃及賄料トシテ滞留日當ノ額ヲ支給ス○第三項 東京

橫濱并京都大坂神戸間ノ線路中間ノ「ステーション」ノ東京ヨリ神奈川迄大坂ヨリ西行旅スルモノ赴任ハ陸路三里以上ヨリ并旅行ハ片道六里以上ヨリ本章ニ準シ六里未満ハ

第二章第四項ニ準シ往返ニテ表面而瀛車賃及ヒ滞留日當一箇ヲ給ス尤下車ノ上陸路一里以上經過スルモノハ此例ニアラス

第六章 一使府縣管内旅行ハ表面ノ通旅費日當ヲ支給ス可シ 第一項 管内旅行ノ簡道路ノ便宜ニヨリ他ノ管轄地ヲ通過スルノ類モ管内ニ準ス九管

内ト雖モ支廳等へ在勤并管外派出其他晝夜急行及ヒ任免轉任ノ節旅費等ハ總テ管外ニ準シテ之ヲ給ス○第二項 各廳ノ官員本廳支廳ヲ論セズ其在勤地府縣ノ管内旅行ノ節

ハ本章ニ準據ス 內旅行ノ節モ亦全シ ○第三項 開拓使管内ハ本廳支廳各其所管ノ部内ヲ以テ管内トシ管外トス 本章ニ準シテ旅費ヲ給ス

第七章 一他方在勤ノ者免職ノ節復命セシムル時ハ其地ヨリ復命スル地迄ハ前官相當ノ旅費ヲ給ス

第八章 一神官ハ總テ左ノ等級ヲ以テ支給ス可シ 神官祭主 旅費等級 三等

神宮宮司 官幣 大社宮司 神宮禰宜 官幣 中社宮司 四等

官幣 小社 官幣 大社禰宜 神宮主典 官幣 小社 官幣 中社禰宜 神宮宮掌 五等

官幣 中社禰宜 官幣 小社 官幣 大社主典 官幣 小社 官幣 中社主典 別格官幣社 別格官幣社

第一項 神官ヨリ教導職兼務教導職ヨリ神官兼務ヲ命シ或ハ免スル節旅費ハ總テ神官相當ノ額ヲ給ス尤說教ノ爲メ各地方へ出張ノ旅費ハ一切之ヲ給セズ

第九章 一御用掛 任准等外ハ各其本官ニ準シテ支給シ無等ノ出仕又ハ術業其他備抱等ノ名義ヲ以テ出仕セシムル者ハ月俸金額ノ多寡ヲ以テ左ノ通支給スヘシ

月俸金額 旅費等級



三百五拾圓以上

三百五拾圓未滿三拾圓迄

三拾圓未滿

三等  
四等  
五等

第一項 日給ハ三十日分ヲ積算シ月俸同様見做シ本章ニ準據ス○第二項 該廳へ三里以外ノ地ヨリ呼出セシ向ニ限リ雇入フ旅費ヲ給ス

第十章 給仕小使諸職人ノ類 陵墓丁・雜丁・左ノ通支給ス可シ

六拾錢

並旅行日當

三拾錢

滯留日當

壹圓五拾錢

晝夜急行日當

三拾錢

官船渡海日當

五拾錢

全上膳料

五拾錢

東京橫濱  
大坂神戸  
間瀛車賃

六拾錢

京都  
大坂  
間瀛車賃

第一項 諸職人等出張先ニテ其業ニ就キ相當ノ賃錢ヲ支給スル分ハ該地滯在中日當ハ給セス

第十一章 一外國人ニ附添旅行ノ節乘馬ヲ用ル時等外ハ旅費日當ノ外馬飼料一日六拾錢ヲ給シ口附ノ者召連ル節ハ別ニ第十章ニ準シ旅費日當ヲ支給ス可シ

第一項 判任ハ馬飼料ヲ給セズト雖モ口附ノ者召連ル節ハ第十章ニ準據ス

第十二章 一官用荷物運搬費ハ勿論總テ現費支給ノ分ハ証書ヲ添へ詳細勘定書ヲ以テ申請ス可シ証書之レナキ分ハ一切支給セサル可シ

第十三章 一他方在勤或ハ出張ヲ命スル後其廳ノ都合ニヨリ免セシ者又ハ出發前死去ノ者ハ片道里程三分一ノ旅費ヲ給シ巡回ハ見積リ總日數十里外ヨリ始ル巡回及ヒ此地ヨリ

者ハ片道里程三分一ノ旅費ヲ給シ巡回ハ見積リ總日數十里外ヨリ始ル巡回及ヒ此地ヨリ彼地ニ移ルルノ並旅行里程ハ日數

ニ直シ算入シ滯留 六分一ノ旅費ヲ給ス尤願ニ因リ免シタルモノハ一切支給セサルヘシ日數ハ算入セズ

第一項 並旅行ノ者出發後半途以內ヨリ呼戻セシ者ハ片道分ノ旅費ヲ給シ半途ヲ過キ同様に者ハ其里程ニ應シ相當ノ旅費ヲ給シ○第二項 巡回ノ者出發後半途 見積リ總日數四分ノ一ヲ云 以內ヨリ呼戻セシ節ハ見積リ總日數 計算法本 半數ノ旅費ヲ給シ半途ヲ過キ同様に

節ハ日數又ハ里數ニ應シ相當ノ旅費ヲ給ス

第十四章 一廢廳ノ節人撰ノ上事務引渡シテ命シ旅行セシムル者ハ仍ホ舊官相當ノ旅費ヲ支給ス可シ

第一項 免職ノ者事務引渡濟ノ後在職中ノ事件ニ付更ニ出廳ヲ命スルトキハ第十七章ノ相當ヲ以テ給ス尤當時在職ノ者ハ其官相當ヲ以テ支給ス○第二項 往時奉職中ノ公務ニ付訴訟ノ被告人又ハ証人引合人トナリテ出廷スルトキモ第一項ニ準ス但刑事被告

人トナルモノハ此限ニアラス

第十五章 一並旅行ヨリ晝夜急行ニ轉スル如キハ総里數ヲ十里毎ニ區分シ其十里ノ内互ニ相跨ル里數ハ總テ旅費額ノ多キ方ヲ以テ支給スヘシ十里未滿ノ旅行モ亦之ニ準ス

第一項 一日ノ内陸路ヨリ官船等へ乗組又ハ上陸ノ節陸路片道一里以上ノ分ハ本章ニ準シ陸路ノ旅費日當ヲ給シ其日ノ乗組日當ハ之ヲ給セズ餘之レニ準據ス

既ニ官費仕賄セシ分ハ 賄料モ籠ル備 別ニ返償スルニ及ハス 船等ニテ當日

第十六章 一數官兼任ノ者ハ比較シテ各旅費ノ多キ方ニ從ヒ支給ス可シ

第十七章 一華族及ヒ有位ノ士民公用ニテ旅行ノ節ハ旅費ノ四等ヲ以テ給シ無位ノ士民

生徒モ 僧侶等同斷ノ節ハ旅費ノ五等ヲ以テ支給ス可シ

第十八章 一外國行ノ者發程並歸朝ノ節内地陸路通行ノ旅費ハ前各章ニ準シ國內ノ定規

ヲ以テ支給ス可シ 航海ノ都合ニヨリ内地陸路ノ

第十九章 一歸省其他養病等許可ヲ得ル者ト雖モ私事ニ涉ル旅行ハ一切支給セサルヘシ

第十

俸給之部

第二十章 一各廳ノ便宜ニ依リ此定則ニ基キ適宜減少ノ方法ヲ設クルハ若シカラス

第二十一章 一百里外 行幸行啓ノ節供奉ノ者ハ支度料左ノ通支給スヘシ  
太政大臣 金三百圓 一等官 金二百圓  
左右大臣 金二百圓 二等官 金一百圓  
三等官 金五十圓 奏任官 金百圓  
判任官 金五十圓 等外吏 金十五圓

但五拾里外供奉ノ者ハ本文金額ノ三分ノ二ヲ給ス 一供奉ヲ命スル後其應ノ都合ニヨリ免シタル者又ハ出發前死去ノ者ハ半額ヲ給ス願ニ依リ免シタルモノハ之ヲ給セス 一供奉出發後途中ニ於テ免セシ者又ハ死去セシ者ハ全額ヲ給スヘシ

外國之部

第一章 一外國在勤又ハ出張ノ者ハ支度料日當表面ノ通り支給ス可シ

第一項 在勤又ハ出張中事務ノ都合ニ依リ一旦歸朝再ヒ出發シ又ハ外國ニ於テ此國ヨリ彼國ニ移轉スルモ別ニ支度料ヲ給セス尤御用濟歸朝ノ後更ニ在勤出張ヲ命スル節ハ此限ニアラス○第二項 日當ハ渡航ノ初日ヨリ内地ニ歸着ノ日マテヲ通算シテ之ヲ給ス○第三項 在勤又ハ出張ヲ命スル後其應ノ都合ニヨリ免シタルモノ又ハ出發前死去ノ者ハ支度料半數ヲ給ス尤願ニ依リ免シタル者ハ之ヲ給セス○第四項 在勤又ハ出張先ニ於テ死去ノ節ハ該地ヨリ内地開港場マテハ第二章ニ照シ陸路旅費及船客料ノ額夫ヨリ郷里マテハ內國ノ部第七章ニ準シ手當トシテ之ヲ給ス

第二章 一外國航海船客料并着船ノ港ヨリ出張或ハ在勤ノ都府マテ瀛車瀛船或ハ馬車賃其他私屬荷物運賃等表面ノ通定額又ハ概額ヲ以テ之ヲ給ス尤定額ハ過不足精算ニ及ハス概額ハ實費過不足ヲ精算スヘシ

第一項 陸路旅費ハ表面ノ通概額ヲ以テ給ス故ニ瀛車賃ハ判任以上上等々外ハ中等其

他諸費トモ右ニ準シ實費仕拂ヲナスヘシ

第三章 一外國出張中旅舎賄料ハ日數ニ應シ表面ノ通支給ス可シ

第一項 賄料ハ着港ノ日ヨリ給シ航海中ハ之ヲ給セス○第二項 航海中郵船ノ都合ニヨリ不得止上陸スルトキハ其日數ニ應シ賄料ヲ給ス

第四章 一公用荷物運賃并本國其他ハ公信郵便電信料公事交際ノ費用等ハ現場仕拂ノ高ヲ以テ官費トナスヘシ

第五章 一私屬ノ荷物運賃ハ勅奏判任一人ニ付三十五貫目等外一人ニ付貳拾貫目マテハ官費ヲ以テ之ヲ給シ以上ハ自費タルヘシ尤航海中ハ別ニ支給セサルヘシ

第六章 一官船或ハ各廳ノ備船等ニテ航海スル者ハ船客料ヲ給セス內國旅費日當表官船渡海ノ賄料ヲ支給スヘシ

第一項 官費ヲ以テ仕賄ノ節ハ勅奏任ハ主從ヲ合セテ上等一人下等一人マテ現員ヲ以テ賄ヒ判任ハ上等外ハ中等中等ナキト其以下ハ下等各一人ノ割ヲ以テ賄フヘシ

第七章 一華族及士民等公用ニテ航海スルトキハ內國ノ部第十七章ニ照シ御用掛無等ノ出仕又ハ術業其他備抱等ノ名義ヲ以テ出仕セシムル者ハ同斷第九章ニ準シ內國旅費ノ三ノ奏任同ノ四等ハ判任前各章ニ據リ支給スヘシ

第八章 一諸職人ト使ノ類支度料及渡航ノ初日ヨリ内地ニ歸着ノ日マテ左ノ日當ヲ給シ其他船客料旅舎賄料瀛車賃ハ等外ニ準シ支給ス尤私屬荷物ノ運賃ハ別ニ給セサルヘシ

第九章 一從者ハ願ニヨリ勅奏任官ニ限リ一人ヲ許可シ往返并在留國內外公用旅行ノ節船客料及瀛車賃行旅中賄料共等外ニ準シ支給スルト雖モ支度料日當滯在中賄料ハ總テ支給セサル可シ

第十章 一全權大使等ノ如キ重大ノ御用ニテ出張ノ向並各國公使領事館在勤ノ者及朝鮮

第十

俸給之部

二百卅三

行船客料賄料等ハ此定則ノ外タルヘシ  
(内外國旅費日當表ハ別ニ載之)

### 賞與賑恤之部

#### (七)褒章 條例

明治十四年十二月七日御布告第六十三号  
褒章條例別紙ノ通相定來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス  
右奉 勅旨布告候事

別紙

#### 褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者 孝子順孫節又  
ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者 疏河築堤修路墾田ノ業或ハ 貧院學校設立ノ類ヲ云フ  
種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フコト  
アルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ

其都度飾板一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セ  
ラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與  
セス

#### 佩用式

一 褒章ハ左肋ノ邊ニ佩フヘシ但勳章及從軍記章ヲ有スル者ハ其章ノ左ニ列シ帶フヘシ  
(褒章ノ圖略之)

明治十五年十一月十二日御達第六十七号

#### (八)人民 ニテ巡 査同僚 ノ働ラ ナシ死 傷セシ 者吊祭 料等支 給方ニ 付御達

一般人民ニテ巡査同様ノ働ヲナシ死傷セシ者吊祭扶助療治料支給方左ノ通相定候條此  
旨相達候事

#### 吊祭扶助療治料

一 吊祭料 重傷死ニ至ル者へ金三拾圓ヲ給ス親族故舊ナキモノハ戶長役場ニ付シ便宜處  
分セシム○一遺族扶助料 父母妻子若クハ死去ニ依リ産來生計ヲナセシモノへ金五拾圓  
ヨリ少カラズ百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス○一傷痍扶助料 一等傷 終身不具トナリ自用  
ニ金六拾圓ヨリ少カラズ百圓ヨリ多カラザル額ヲ給ス 二等傷 終身不具トナルモ  
圓ヨリ少カラズ五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス○一療治料 傷痍ノ輕重ニ依リ其適度ヲ  
量リ之ヲ給ス

### 規則類纂 大日本官民必携 上卷 尾

諸官令諸規則類纂 大日本官民必携 下卷

朝野文三郎編輯

○第十一 神社之部

(一) 社寺 樹木伐採

明治六年七月二日第三百三十五号御布告  
社寺境内ノ樹木ハ假令其社寺修繕等ニ相用ヒ候共猥ニ伐木不相成候若シ難止事情有之節ハ其地方廳ニ願出許可ヲ可受事

(二) 社寺 樹木伐採取調

明治六年十月廿二日第三百五十四号布達  
社寺境内伐木ノ儀ニ付本年七月第三百三十五号布告候處官國幣社ヨリ若シ難止事情有之伐木願出候節ハ該廳ニ於テ篤ト取調致部省ニ伺出處分可致此旨更ニ相達候事

(三) 社寺 樹木私分有ノ伐採件

明治七年十二月十日内務省甲第三十一号布達  
社寺境内樹木ノ儀ハ昨六年第三百三十五号公布ノ通可相心得等ニ候得共社寺ノ私有タル確証有之有稅地ニ係候者及ヒ其村町ノ買得候確証有之候有稅地ニ係リ候モノニ限リ無餘儀入用有之伐木致度節ハ所有主ヨリ其事故管轄廳ニ申立事實取糺相違ナキニ於テハ可聞届候此旨布達候事

(四) 社寺 樹木社人僧侶伐木不相成

明治七年十二月十日内務省乙第七十五号達  
社寺現境内上地相成候山林ハ外官林同様可相心得現境内ニ屬シ上地不相成場所ハ太政官昨六年二百三十五号同二百九十一号公布ノ通り可相心得處萬一舊社人僧侶ノ族心得違ニテ樹木伐採致シ刑典ニ罹リ候モノ有之候テハ不都合ニ候條各地方於テ厚注意可致此旨相達候事

(五)式內 明治八年六月十九日第百七号御達  
 明治六年(七月)第百三十五号ヲ以テ社寺境内伐木ノ儀布告候處自今延喜式内並國史見  
 在神社境内ノ分ハ同年(十月)第百五十四号達書官國幣社ニ準シ若シ難止事情有之伐木  
 願出候節ハ教部省ニ伺出處分可致此旨相達候事

(六)招魂 明治七年三月十七日內務省乙第二十二号達  
 戊辰己巳ノ際從軍衛國ノ者戰歿ノ地及其他各所ニ於テ舊藩主或ハ人民共私設致候招魂塲  
 ノ儀ハ永ク忠士ノ魂魄ヲ御吊慰禮爲在候御趣意ヲ以テ自今其所在ノ地稅ヲ免シ祭祀並修  
 繕共一切官費支給可致旨被仰出候ニ付此旨相達候事  
 但招魂塲敷地反別地稅ノ有無并從前祭祀修繕ノ費額別紙雛形ニ照準箇所限リ明細取調  
 實地景况繪圖面並實測繪圖面共一通ツ、相添來ル五月三十一日限リ當省ニ伺出最右  
 塲所無之向ハ來ル四月十五日限リ其旨可届出申雛形ハ略之

(七)社寺 明治六年七月十七日第百四十九号御布告  
 神社佛寺共古來所傳ノ什物衆庶寄附ノ諸器並ニ祠堂金等ノ類ハ神官僧侶ハ勿論氏子檀家  
 ノモノナリ且自儘ニ處分可致筋無之候條若不得已儀有之候ハ、悉詳具狀ヲ以テ教部省ニ  
 可中立候此旨布告候事

(八)社寺 明治九年二月二日教部省第三号達  
 神社佛寺古來所傳ノ什物等處分ノ儀明治六年(七月)第百四十九号公布ノ趣有之ニ付テ  
 ハ持添ノ田畑山林並寄附金又ハ古文書類共總テ右公布ニ照準シ處分可致ハ勿論ニ候條此  
 旨爲心得相達候事

(九)府縣 明治十年七月五日內務省甲第十三号布達  
 府縣社以下神社什物之儀自今左ノ通相心得取締可致此旨布達候事  
 一什物ハ各部類ヲ分チ其品柄員數等詳細簿ニ記載シ尙他ノ寄附ニ係ルモノハ其年月姓

名ヲモ記入スヘシ

第一類 寶物古文書 第二類 祭具什器并持添之田畝附屬之建物等  
 右牒簿二部ツ、編製神官並氏子(氏子無之向ハ該地ノ崇敬人)總代二名以上尙該地之區戶  
 長選舉調印一部ハ區戶長役所ニ一部ハ其社ニ藏メ置ヘシ  
 明治九年十月廿三日教部省第五号布達 府縣

(十)黑住 黑住講社之儀自今神道黑住派ト相唱別派差許候條此旨布達候事  
 明治九年十月廿三日教部省第六号布達 府縣

(十一)修成 權少教正新田邦光結集之修成講社自今神道修成派ト相唱別派差許候條此旨布達候事  
 明治九年十二月十五日教部省第二十八号達 府縣

(十二)人 從來人民私邸内等ニ自祭ナル神祠佛堂ニ衆庶參拜爲致候向モ有之自然一般社寺同様之姿  
 ニ相成不都合候條自今總テ參拜可差停候尤其建物等更ニ信向人共有ノ筋ヲ以尙參拜之儀  
 願出候ハ、永續方法并神官僧侶之受持等夫々取調爲申出候上管轄廳見込相立可伺出此旨  
 相達候事但從前願濟ノ分ト雖且建物等一己私有ニ屬スル向ハ本文ニ準シ詳細取調處分方  
 可伺出事 府縣

(十三)社 明治十年十月廿九日內務省丁第十二号達 神宮并官國幣社神官  
 用金穀 借入禁 各社々用アリト雖且氏子及其他ヨリ金穀借入候儀ハ不相成等ニ付此旨相達候事  
 (十四)前 明治十年十月廿九日內務省乙第百一号達 府縣

(十五)社

寺取扱  
概則創  
定ノ達

別紙丁第十二号之通神宮并官國幣社神宮へ相達候條此旨爲心得相達候事  
明治十一年九月内務省乙第五十七号達

府縣

四

社寺取扱概則  
社寺取扱之儀左之通概則相定候條此旨相達候事

第一條 社寺ノ創建ハ(民有地ニ建設スルモノ)神宮住職氏子檀徒若クハ信徒ト爲ルヘキモノ(寺院ハ本寺法類トモ)連署戸長與書ヲ以テ願出永續財産ノ用途且其地所建物社寺ノ體ヲ具フル者ニ限リ允許スルヲ得ヘシ再興復舊等總テ之ニ準ス但別紙書式ニ倣ヒ其都度當省へ届出ヘシ(明治十二年六月廿三日乙第)第二條 同上移轉廢合并社寺号改稱ハ前條ノ手續ニ準シ其事由ヲ詳記シ願出ルモノニ限リ開届毎月未取調當省へ届出ヘシ尤廢合社寺址地并建物等處分方ノ儀ハ従前ノ通但式内神社并文明十八年以前ノ創立ニ係ル社寺ノ向ハ前以テ當省社寺局へ照會ヲ經ヘシ第三條 邸内社堂并掛所道場引直及寺号公稱等ハ總テ第一條ノ手續ニ從ヒ願出ルモノニ限リ開届別紙書式ニ倣ヒ毎月未取調當省へ可届出第四條 前條々ノ外社寺例格ノ改定并社寺ニ關スル條件中例規ナキモノハ其都度當省へ届出ヘシ 別紙書式ハ略之

明治十三年六月廿三日内務省乙第二十八号達

府縣

(十六)社  
寺取扱  
概則中  
第一條  
及第三  
條中增  
補

明治十一年當省乙第五十七号達社寺取扱概則第一條及第三條左ノ通增補候條此旨相達候事  
第一條 其地所建物社寺ノ跡ノ下(社ハ本殿拜殿寺ハ本堂庫裏)ノ註文拾貳字〇第三條手續ニ從ヒ願出ノ下(永續目途并建物ノ跡(堂宇ハ方六尺以上)ヲ具フノ註文共貳拾字)  
明治十二年六月廿八日内務省乙第三十一号達

下

寺明細  
帳調製

各管下神社寺院明細帳之儀最前進達ノ分脱誤不少候條別紙書式ニ照準更ニ精密取調且境外遙拜所招魂社祖靈社明細帳ヲモ調製本年六月三十日ノ現況ヲ以テ取調同十二月限リ可差出此旨相達候事但眞宗寺院明細帳ノ儀ハ十年當省乙第六十九号達之趣候處今般取調ニ付テハ各宗寺院同様取調差出スヘキ事 別紙明細帳書式ハ略之

府縣

寺院之部

(十八)住  
職ノ繼  
目ハ地  
方廳へ  
届出ヘ  
シ

明治三年八月九日御布告  
寺院住職繼目等從來本寺本山ニ於テ取扱來候處自今管轄地方官へ一應掛合之上可取計事  
○但住職不行跡不正ノ儀等有之候節ハ地方官ヨリ可及掛合候條其本寺本山ヨリ入撰進退可取計事

諸寺院

(十九)寺  
院附屬  
什物取  
締

明治五年八月三日教部省第十二号達  
各管内寺院之向建物ヲ除之外一寺附屬之佛器什物等一切簿帳へ記載シ檀家總代法類等與印之上兼テ其寺院へ備置可申旨相達候事

府縣

(廿)無住  
無檀ノ  
寺院取  
締ノ達

明治五年十一月八日第三百三十四号御達  
諸寺院中總本寺本山ヲ除クノ外無檀ニシテ無住ノ向ハ自今テ淨被廢止候條各地方官ニ於テ夫々廢寺處分ノ上宗名寺号共詳悉取調教部省へ可届出候事但佛像什器等ハ本寺法類ノ内最寄寺院へ合附爲致堂宇建物ノ儀ハ最初營造ノ次第ヲ追ヒ官營ハ公収シ私造ハ其人民處分ニ可相任官私ノ別不分明ノ向ハ適宜ニ取計ヒ址地處置ノ儀ハ總テ大藏省へ可届出候事

第十一 寺院之部

五

(廿一)融 明治七年二月十二日教部省第二号布達

府 縣

法相宗其他夫々相當望之宗内へ所轄被仰付候旨壬申第二百七拾四号公布相成候處融通念

佛宗之儀ハ詮議之次第有之特立差許候條此旨布達候事

府 縣

(廿二)臨

濟曹洞 禪宗之儀者臨濟曹洞黃檗共併而一宗ニ相定候處自今臨濟曹洞者更ニ兩宗名相稱シ黃檗派

者臨濟宗へ合併爲致候條爲心得此旨相達候事 (九年同省達書四号ヲ以テ黃檗派ハ宗復舊別立テ許ス)

(廿三)教

導職試 明治七年七月十五日教部省第三十一号達書

府 縣

自今教導職試補以上ニ無之向ハ寺院住職不相成候條此旨相達候事 (任免ノ部同年三十五号達參看)

(廿四)不

受不施 明治九年四月十日教部省第三号布達

府 縣

日蓮宗中不受不施派之儀自今派名再興布教差許候條此旨布達候事

(廿五)興

立差許 明治九年九月十五日教部省第廿八号達書

府 縣

真宗本願寺末派與正寺之儀今般別立差許候條此旨相達候事

(廿六)難

未本寺 明治十一年二月一日内務省乙第八号達書

府 縣

離未本寺換之儀是迄各寺ヨリ管轄廳へ出願致管轄廳ヨリ當省へ伺來候處自今同宗派内之分ハ本未寺協議濟之上新舊本寺承諾之書面相添管轄廳へ爲届出其都度當省へ届出候儀ト可心得此旨相達候事但宗派へ附屬候向ハ從前之通ナルヘシ

(廿七)無

住無檀 明治十二年一月十一日内務省乙第一号達書

府 縣

無檀無住ノ寺院廢止處分之儀ハ明治十一年當省乙第五十七号達第二條ノ手續ニ準シ其本寺法類等ヨリ廢合出願ノ上處分可致此旨更ニ相達候事 (乙第五十七号達ハ神社ノ部參看)

(廿八)僧

僧 侶 之 部

明治五年四月廿五日御布告第百三十三号

自今僧侶肉食妻帶蓄髮等可爲勝手事但法用ノ外ハ人民一般ノ服ヲ着用不苦候事

(廿九)丘

明治六年一月廿二日第二十六号御布告

壬申第百三十三号布告僧侶肉食妻帶蓄髮等可勝手旨被仰出候ニ付テハ自今丘尼ノ儀モ蓄髮肉食自

(三十)僧

明治十年五月十六日内務省甲第十号達書

僧業相廢者其都度管轄廳へ可届出旨八年(十二月)第五十三号ヲ以テ元教部省ヨリ及布達候處自今不及届出候條此旨布達候事

陵 墓 之 部

(卅一)從

明治七年一月三十一日御達

内 務 省

戊辰己巳ノ際從軍殉國ノ者各所戰歿ノ地等ニ於テ其骸骸埋葬之墳墓自今官費ヲ以テ修繕

(卅二)前

明治七年二月十五日内務省乙第十二号達書

第十一 僧侶並陵墓及祭典之部

府 縣 七

務省達

戊辰己巳之際從軍殉國ノ者各所戰歿ノ地等ニ於テ其遺骸埋葬之墳墓自今官費ヲ以テ修繕シ朽腐穢蕪無之様可致注意旨被仰出候間此旨相達候事但即今朽腐穢蕪等難耐久分ハ即修繕費用積並ニ後來每一箇年内修繕掃除常費高無洩明細取調來ル四月三十日限當省へ届出ヘク尤右箇所無之向モ右日限迄ニ其旨可届出候事  
明治十三年十一月十五日宮内省乙第三号達

府 縣(沖繩縣ヲ除ク)

(卅三)陸 墓不分  
明古墳 等見當  
リシキ  
ハ繪面  
摸樣ヲ  
記シ届  
出ヘシ

上世以來御陵墓所在未定ノ分即今取調中ニ付云々ノ件去ル七年(五月)第五十九号ヲ以テ公達ノ趣有之就テハ古墳ト相見候地ハ人民私有地タリトモ猥リニ發掘不致等ニ候ヘル自然風雨等ノ爲メ石榔土器等露出シ又ハ開墾中不圖古墳ニ掘當リ候様ノ次第有之候ハ、口碑流傳ノ有無ニ不拘凡テ詳細ナル繪圖面ヲ製シ其地名並近傍ノ字等ヲモ取調當省へ可申出此旨相達候事

祭典之部

(卅四)佛 像ヲ他  
管へ開  
帳禁止  
(卅五)春 秋季皇  
靈祭

府 縣

明治九年六月十四日教部省第四号布達  
各寺院之佛像地管内へ持出シ開帳候儀自今令停止候條此旨寺院へ布達スヘキ事  
明治十一年六月五日第二十二号御達

官院省使府縣

綏靖天皇以下後櫻町院天皇迄御歴代御式年御正辰祭共被廢更ニ春秋二季祭ヲ被置神武天皇ヲ御正席トシ先帝迄御歴代並ニ后妃以下皇親御合祭被執行候條此旨相達候事但神武天皇及ヒ後桃園院天皇以下御近陵御式年御正辰祭並ニ其后妃皇親御配享ノ儀ハ猶從前ノ通被執行候事

春季皇靈祭

春分日  
秋分日

明治十二年十一月十二日内務省番外達

東京警視本署

府縣(東京府除之)

(卅六)勅 使參向  
ノ時内  
規創定  
ノ達

勅使參向之節内規別紙ノ通り候條自今宮内省ヨリ通報次第警備方可取計此旨相達候事  
別紙 正式勅使參向内規

第一條 此内規ノ管スル期限ハ詔書祭文ヲ受ケ皇居ヲ出ルヨリ復命迄ノ時間又各地方ニ於テハ其當日旅館ヲ出ルヨリ旅館ニ歸ル迄ノ時間トス○第二條 使並隨員大禮服ヲ着用ス○第三條 詔書祭文ハ錦ノ袋ニ納テ隨員首ニ掛シ若シ隨員ナケレハ勅使自ラ之ヲ捧持スル等ハ総テ時宜ニヨル○第四條 下乘ハ皇族下乘所ニ於テス○第五條 乗用ハ馬車又ハ騎馬タルヘシ○第六條 警備トシテ警部四騎ヲ付ス二騎前ニアリ二騎後ニアリ○第七條 途上常備ノ巡查ヲシテ一層注意セシム

葬儀之部

明治五年六月廿八日第百九十二号御布告

近來自葬取行候者モ有之哉ニ相聞候處向後不相成候條葬儀ハ神官僧侶ノ内へ可相頼候事

明治五年六月廿八日第百九十三号御布告

從來神官葬儀ニ關係不致候處自今氏子等神葬祭相頼候節ハ喪主ヲ助ケ諸事可取扱候事

明治七年二月廿九日第十三号御布告

葬儀ハ神官僧侶ノ内へ可相頼旨壬申六月第百九十二号布告候處自今教導職ノ輩へハ信仰寄葬儀相頼候儀不苦候此旨布告候事

第十一 葬儀之部

(卅七)自 葬禁止  
(卅八)神 官葬儀  
關係  
(卅九)教 導職へ  
葬儀依  
頼



(四十)火 明治八年五月廿三日第八十九号御布告

葬勝手

明治六年(七月)第二百五十三号火葬禁止ノ布告自今廢シ候條此旨布告候事

(四十一)火葬場 明治八年六月廿四日內務省乙第八十号達

火葬場ノ儀ニ付達

火葬ノ儀第八十九号ノ通御布告有之候ニ付テハ燒場ノ儀左ノ心得ヲ以テ取扱可申此旨相達候事(地所ノ部參看)

一燒場ハ東京府下ハ朱引外其他ノ地方ハ市街村落ノ外渾テ人家遠隔ノ地ニ於テ薄稅地又ハ借地料等無之地ヲ撰ミ最寄市邑申合共用致サスヘク尤官有地又ハ民有地ノ内新規相設ケ候積リ取調可伺出事

一人民所有ノ確証アル舊燒場及ヒ新規拂下ノ地所ハ民有地第二種ニ組入其他ハ官有地第三種ニ可組入事(九年同省百二十三号ヲ以テ第二條ヲ更正ス參看)

一燒場ノ臭煙ハ人ノ健康ヲ害セサル機專ラ注意シ火爐烟筒(但三府五港等ハナルヘク烟管ノ高キヲ要スト雖モ大凡曲尺二十四尺ヨリ低カルヘカラス)及ヒ牆壁等ノ如キ適宜ノ方法ヲ可設事(十三年同省乙第五十号ヲ以テ第三條更正ス)

一燒場造築修繕等一切ノ入費ハ人民ノ自辨勿論ニ候得共都テ不都合無之様區戶長於テ注意取附可爲致事

一遺骨ヲ此場中ニ場葬候儀ハ不相成候事

(四十二)燒場心 明治九年十月十九日內務省乙第二百二十三号達

燒場心得書第二條改正ノ達

昨八年(六月)當省乙第八十号達燒場取扱方心得書第二條左ノ通更正候條此旨相達候事

一舊燒場(官民有地ヲ論セス)從前ノ儘使用スル土地及新規拂下タル土地ハ民有地第二種ニ可組入事

明治十三年十二月六日內務省乙第五十号達

(四十三)燒場心得書第三條改正

燒場心得書第三條改正

明治八年當省乙第八十号達燒場取扱方心得書第三條左ノ通更正候條此旨相達候事

一燒場ハ火爐烟筒及ヒ牆壁等ヲ設ケヘシ尤人家遠隔ノ山野等ニ於テハ適宜簡易ノ裝置ヲナスモ不苦候事

(四十四)轉宗改式ノ達

轉宗改式ノ達

明治十一年三月四日內務省乙第二十号達

忌服之部

(四十五)僧尼忌服人民

僧尼忌服人民

明治五年六月十二日御布告第百七十六号

僧尼服忌ノ儀ハ是迄御制度モ無之候處自今人民一般ノ服忌ヲ可受事

(四十六)奏任官除服出仕

奏任官除服出仕

奏任官ノ輩御用ノ都合ニ付除服出仕ノ儀ハ是迄宣下相成候處自今其管轄長官ニテ相達シ其時々可届出事

(四十七)遺地出張在勤

遺地出張在勤

明治六年十月十五日御達第三百四十七号達

第十一 忌服之部

ハ勿論同様ノ儀ト可相心得事

(四十八) 地方官  
員除服  
出仕ニ  
付御達

使 府 縣

地方官員除服出仕ノ儀幸未十二月中相達候趣モ有之候處自今左ノ通相定候條此旨相達候事

一奏任以上ノ官員忌服中事務差支有之節ハ其長官ヨリ忌日數半減ニテ除服出仕相達長官同様ノ節ハ代理ノ者ヨリ相達其旨届出ヘシ

一同上在東京ノ節ハ出張所ヨリ正院へ申出ヘシ

一同上出張ノ節ハ明治六年第三百四十七号達ノ通タルヘシ (八年一月廿日十一号達ヲ以テ府縣東京出張所ヲ廢ス)

(四十九) 産穢廢止

自今産穢不及憚候事

明治五年二月廿五日御布告第五十六号

(五十) 混穢廢止

自今混穢ノ制被廢候事

明治六年二月廿日御布告第六十一号

(五十一) 華族子細忌服

明治六年二月廿日御布告第六十三号

(五十二) 重服朝賀

元日朝拜重服者憚ニ不及候事

(五十三) 死葬者當日憚拜神

三日神祇省行幸ニ付御祭式被爲濟候迄服者參朝可憚事 (六年四月二十二号布告ヲ以テ取消ス)

(五十四) 死葬者當日憚拜神

明治五年六月十三日御布告第七十七号

(五十五) 死葬者當日憚拜神

神社參詣ノ輩自今死葬ニ預リ候モノト雖モ當日ノニ可相憚事但服忌ノ者ハ従前ノ通相心得ヘキ事

○第十二 行政警察之部

(一) 警部

明治七年七月十二日御達第八十八号

等搜索

東京府管下兵隊屯營ヲ除クノ外官廳地官用地構内ニ住居ノ者有之ニ付テハ警察上取調ノ儀

立入達

爲警部又ハ巡查等其守門者へ申通シ臨時立入候儀可有之候條爲心得此旨相達候事

(二) 前文

明治十年十月廿八日御達第三十号

達ハ各

明治七年(七月)第八十八号ヲ以テ東京府管下各官廳地官用地構内ニ居住ノ者警察上取調ノ爲メ該官吏其守門者へ申通シ臨時立入候儀相達候處右ハ各地方ニ於テモ同様ノ儀ト可

地方同

必得此旨相達候事

様

使 府 縣 東京府

(三) 鴨内

明治十三年二月廿五日御達第十四号

官工場

官省院使府縣

ノ變死

明治十二年(三月)第十二号達左ノ通改正候條此旨相達候事

人警察

官廳内並ニ官有ノ工場及ヒ船艦等ニテ變死ニ係ル者及ヒ重傷死ニ至ル者ハ近傍ノ警察所

署ニ檢

〜報知シ檢視ヲ受クヘシ但軍人軍屬ニシテ陸海軍官限り處分ヲ了シ警察官ノ檢視ヲ要セ

視ヲ受

サル分及ヒ遠洋航海中ニ係ル者ハ此限ニアラス

(四) 巡查

明治十五年十二月二日御達第六十三号

帶劍ノ

自今巡查ニ帶劍セシムルヲ得ヘシ此旨相達候事

御達

廳 府 縣

(五) 巡查

明治十五年十二月廿二日內務省達乙第七十一号

帶劍調

警 視 廳 府 縣 東京府

費ノ費

用及帶

第十二 行政警察并憲兵及巡查配當之部

十三

劍心得  
方ノ達

今般第六十三号ヲ以テ巡查ニ帶劍セシムル儀公達相成候ニ付テハ左ノ二項可心得此旨相達候事但調製費用ハ警察費ヲ以テ支辨ス可シ  
一劍ハ日本刀ニシテ製作及ヒ革帶ハ圖ノ如シ但シ從來各署ニ備置ク洋刀ノ分モ當分取雜セ帶用シ若シカテス  
一帶劍者ハ明治八年第廿九号公達行政警察規則第四章第十五條ノ旨趣ニ基キ尙ホ一層慎重シ兇賊逮捕ノ際ト雖モ不得已場合ニ在リカレハ拔劍スルヲ得ス

憲兵之部

(六)憲兵  
明治十四年十月二十五日內務省達乙第五十二号

警視廳府縣 東京府 除ク

職掌中 行政警察事務ノ儀別紙ノ通及達示候條爲心得此旨相達候事  
憲兵職掌中行政警察事務ノ儀別紙ノ通及達示候條爲心得此旨相達候事  
別紙 憲兵本部

規程ノ達

行政警察ニ關スル事務別紙規程ノ通相心得執行可致此旨相達候事

別紙

行政警察事務規程

第一條 行政警察ハ人民ノ凶害ヲ豫防シ安寧ヲ保全スルニアリ其事務ヲ大別シテ左ノ四項トス○一人民ノ妨害ヲ防護スルヲ○二法律ノ遵奉ヲ視察スルヲ○三健康ヲ看護スルヲ○四國事ニ關スル犯罪ヲ未萌ニ搜索警防スルヲ○第二條 行政警察事務執行ノ際司法警察事務ニ牽連スル事アリト雖モ其事務ヲ混同ス可ラス○第三條 行政警察ノ事務ヲ執行スルニ當リ他ノ警察事務官吏其場ニ臨ミタルモ其處分ヲ專務官吏ニ讓ルヘシ

巡查配置之部

(七)銀行  
明治十四年四月十八日內務省御達乙第二十二号

警視廳府縣 東京府 除ク

諸會社  
町村等  
巡查ヲ  
請願ス  
ルハ  
聞届

銀行又ハ諸會社又ハ町村協議或ハ人民一己ヨリ其費用ヲ納メ巡查ノ配置ヲ請願スル者ハ自今聞届請願ノ場所へ配借不苦候條該費收支方ハ國庫下渡金地方稅等ニ連帶セテ別ニ其帳簿ヲ製シ毎年地方稅收出精算書ト同時ニ報告スヘシ此旨相達候事但本文配置ノ巡查ハ一般ノ成規ニ從ヒ異同無之様取計フ可シ

暴發物取締之部

(八)暴發物取締  
明治十四年六月四日內務省乙第二十九号御達

警視廳府縣 東京府 除ク

暴發物(ダイマナー)ハ當分銃砲取締規則及火藥運搬規則ニ準シ取扱ヘシ此旨相達候事  
本年當省乙第二十九号達中(ダイマナー)ト(ダイナマイト)ノ誤

(九)前達  
明治十四年六月十一日內務書記官通知

銃砲彈藥取締之部

明治五年正月廿九日御布告第二十八号

(十)銃砲  
取締規則  
別紙

銃砲取締規則別紙之通被定候條來ル四月ヨリ規則之通可相守事

銃砲取締規則(八年百十一号達ヲ以テ銃砲彈藥取締ノ儀內務省へ) 管理替ニ付止規則中抵觸ノテ條ハ廢ス參看スヘシ

第一則

一大小銃并彈藥類商賣之儀ハ府縣共定員商賣ノ外取扱致問敷右定員ノ商賣ハ其地方管廳ニ於テ精選ノ上免許狀可差遣事但東京大坂ノ儀ハ武庫司ニ於テ管轄スヘキ事  
第十二 暴發物並銃砲彈藥取締之部

第十五

免許商賈ノ定員

一府下 各五員 一縣下 各三員 一鎮臺本分營下 各一員  
但府縣廳下開港場等ニアルハ別ニ設ケス  
一開港場 各五員

右免許差遣候商賈ノ姓名住所等京員武庫司へ届クヘキ事

第二則

一免許人ヲリトモ軍用ノ銃砲彈藥類ヲ鋸カヨ賣買不相成賣渡候節ハ買主ヨリ官ノ免手形ヲ受取其員數ヲ照シ賣渡可申又買入ノ節ハ其管廳へ願出免手形ヲ受其員數ヲ以テ買取可申事但東京大坂ノ儀ハ武庫司へ可願出申  
(五年二百八十九号御布告及七年九十九号御達等參看スヘシ)

第三則

一免許ノ商人其賣買ノ銃砲彈藥類ハ多少ヲ論セス買取賣渡共其主人ノ姓名其物品ノ員數等明細附記シ軍用ノ者ハ免手形相添毎月其管廳へ可差出其應ヨリ毎月十日ヲ限リ管轄鎮臺へ差送可申事但諸鎮臺ヨリ毎歲正月七月兩度半々年明細帳ヲ以テ東京武庫司へ差送り可申尤東京大坂ノ儀ハ武庫司ニ於テ取締可致事

第四則

一彈藥ノ儀ハ仮令些少ノ品ヲリトモ唯便利ノミヲ計リ勝手ノ場所へ差置間敷兼テ其地方管廳へ願出差圖ヲ受相圍可申事但東京大坂ノ儀ハ武庫司へ願出ヘキ事

第五則

一華族ヨリ平民ニ至ル迄免許銃類ヲ除クノ外軍用ノ銃砲并彈藥類ヒストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成就テハ是迄銘々所持致居候軍用銃砲ハ一々其管廳ニ持出(東京大坂ハ武庫司へ持出)別紙銃砲改刻印式ノ通番号官印ヲ受可申他人へ譲リ與ヘ候節ハ第二則ノ手續ニ從フヘシ但彈藥買入致シ度者モ亦二則ノ通りタルヘシ

銃砲改刻印ノ式

干支何番 武庫司或ハ何府縣

右所持ノ人名番号等逐一書記シ置管轄鎮臺へ届出鎮臺ヨリ東京武庫司へ可差出事

免許ノ銃類

一和銃四文目八分玉以下〇一各國諸獵銃〇但西洋獵銃ノ儀ハ其玉目稍大ナレトモ霰彈ヲ用ユルモノハ之ヲ許ス

右獵用銃所持ノ者ハ其銃名員數等巨細附記シ其管廳へ届出其應ヨリ東京武庫司へ差出可申(東京大坂ハ所持ノ者ヨリ)萬一軍用獵用銃ノ差別難相辨者官へ尋出候節ハ檢査ノ上免許ノ証印ヲ据ヘ可相渡事

第六則 (六年二十五号御布告鳥獸獵)

一免許獵人ノ外獵リニ銃獵致間敷銃獵致度モノハ其管廳へ願出候得ハ吟味ノ上別紙ノ通其應ヨリ免許獵札可差遣事但免許獵人ノ姓名ハ其管廳ヨリ東京武庫司へ可届出事  
免許獵札ノ式ハ略之

第七則

一銃砲彈藥下々ニ於テ猥リニ製造不相成候尤モ新ニ奇巧便利ヲ發明シ爲試製作致度者ハ其管廳へ相願管轄鎮臺へ届出免許ヲ可受事但製作其宜キニ適ヒ最モ便利ナル者ハ鎮臺ヨリ武庫司へ差送り檢査ヲ逐ケ採用可相成分ハ西洋免許ノ法ニ倣ヒ何分ノ御沙汰可有之事〇是迄砲銃並彈藥類賣買致來候者ハ現今所持ノ物品員數等無遺漏書記シ管轄廳へ爲指出其應ヨリ東京武庫司へ可差出事但東京大坂ノ儀ハ賣買ノ者ヨリ直ニ武庫司へ可届出事  
〇右之通ニ候事

(十一)銃 明治七年七月廿七日御達第九十九号

砲彈藥

第十二 銃砲彈藥取締之部

開港開市場有之使府縣 十七

類外國人ト賣買ノ件

銃砲並彈藥外國人ヨリ買入レノ儀ニ付明治五年(六月)第百八十五号布告ノ趣モ候處自今銃砲並彈藥外國人ヨリ賣買ノ儀免許商人ヨリ願出候節ハ其管廳ヨリ陸軍省へ申請ノ上可取前此旨相達候事

(十二)銃砲彈藥取締罰則

明治五年九月廿三日御布告第百八十二号

諸省府縣

銃砲取締ノ儀ニ付別紙ノ通被相定候條此旨相達候事(七年百三十二号御布告)別紙

(十三)銃砲彈藥取締罰則

銃砲取締規則ニ違ヒ銃砲彈藥類ヲ窃ニ所持シ且致取扱候者有之節ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五拾錢ノ過料可申付候事但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ於テハ犯人過料ノ半金ヲ可被下候事右取上候品東京大坂ハ武庫司其他ハ所管ノ鎮臺へ可差出事

(十四)銃砲彈藥取締罰則

明治八年六月廿八日御達第百十一号

使府縣

御達ノ理替ノ省へ管御達

今般銃砲彈藥取締ノ儀内務省へ管理被仰付候ニ付テハ追テ相達候儀モ可有之候得共差向キ從前規則ノ通相心得取締可致尤右現則中是迄陸軍省及各鎮臺等へ申出候分ハ總テ内務省へ可申出其他管轄替ニ付抵觸ノケ條ハ廢シ候儀ト可心得此旨相達候事

明治七年二月三日陸軍省御達第五十一号

府縣

(十五)銃砲規則

銃砲取締規則ニ違ヒ候者取上上品處分ノ儀去ル王申御布告ノ通所轄鎮臺へ可差出等ニ候處鎮臺遠隔ノ向ハ便宜ヲ以テ其最寄營所へ爲差出營所へモ相隔候場所ハ銃砲賣買免許商人へ賣却ノ上代價相納不苦候條此旨爲心得相達候事

(十六)銃砲規則

明治十一年五月廿四日御布告第十一号

及内射的營業者賣渡程限

銃砲取締ノ者及有害ノ鳥獸威シ銃室内射的場營業免許ノ者等需用ノ彈藥雷管ニ限リ賣買手續左ノ通相定候條此旨布告候事

西洋形獵銃用

彈藥(散彈(パト)ノ類)

二千發

同上用

雷管 四千粒

火繩銃用 威シ銃用

火藥 壹貫目

室内銃用

雷管 壹萬粒

右一次賣渡シ最多ノ程限トス若シ一次此程限外ノ彈藥雷管ヲ買ハント欲スル時ハ銃砲取

(十七)銃砲規則

明治十一年五月廿四日御達第十七号

開港開市場有之使府縣

獵免許ル外國人ノ賣買ノ儀

銃砲彈藥賣買免許商人ト外國人ト銃砲彈藥類賣買願出候節取扱方ノ儀ハ明治七年(七月)第九十九号八年(六月)第百十一号達ノ趣有之候處今般第十一号布告ノ趣モ有之ニ付自今銃砲免狀付與有之外國人ハ獵川ノ銃器彈藥類賣渡候儀ハ其應限リ開届候儀ト可心得此旨相達候事但免許商人ヨリハ其姓名數量等ヲ記載シ其時々爲届出候様可取計事

(十八)軍用銃所

明治十一年四月廿二日内務省御達乙第三十六号

東京警視本署府縣 東京府

第十二

銃砲彈藥取締之部

十九

有者他  
管移轉

管轄廳ニ於テ改印セル軍用銃所有者轉籍寄留等ノ故ヲ以テ乙管下ニ持越シタル后チ獻納  
廢棄讓渡等願出ル時ハ乙管廳ニ於テ開届其趣甲管廳ヘ報告シ甲乙兩廳ノ簿冊ヲ加除候様  
可致此旨爲心得相違候事

(十九)免

明治十三年三月廿五日御布告第八号

明治五年(正月)第二十八号布告銃砲取締規則中第二則左ノ一項増加候條此旨布告候事

許商人  
武官  
軍用  
銃買入

一免許商人ハ陸海軍准士官以上ノ武官ヨリ其所有ノ軍用銃並ニ其彈藥類ヲ買入ントスル  
キハ買入願書ニ其買主ノ連署ヲ爲サシムヘキ事

(廿)武官

明治十三年三月二十五日御達第二十二号

使府縣 東京府  
ヲ除ク

所有軍  
用銃買  
規則

陸海軍武官所有ノ軍用銃ハ明治五年(正月)第二十八号布告ニ依リ管轄廳ノ検査番号ヲ受  
來候處自今准士官以上ノ武官ハ左ノ規則ニ據ルヘシ此旨相違候事

武官所有ノ軍用銃買取規則

第一條 陸海軍省ニ於テハ武官所有ノ軍用銃並其彈藥類買入ノ節交付スヘキ買入免狀ヲ  
定メ置キ豫メ其印影等照會ノ爲メ使府縣廳(東京ハ警視本署)ヘ通知スヘシ○第二條 武  
官軍用銃并其彈藥類ヲ買入ル、時前款ノ免狀ヲ受取之ヲ該地ノ免許商人ニ交付シテ其買  
入ヲ爲スヘシ○第三條 武官轉任又ハ免職スル時ハ其奉職中所有セシ銃器ハ其銃名(檢  
印アラハ其番号)ヲ記載シ使府縣廳(東京ハ警視本署)ヘ届出常則ニ從ヒ其取締ヲ受クヘ  
シ○第四條 武官奉職中所有ノ軍用銃及ヒ其彈藥類ヲ人民ヘ賣渡サントスル時ハ買受人  
ヨリ其使府縣(東京ハ警視本署)ヘ差出スヘキ願書ヘ連署スヘシ

(廿一)陸

明治十三年四月十三日陸軍省御達甲第十一号

軍武官  
銃器彈  
藥火藥

別紙達乙第二十二号ノ通陸軍部内ニ相違候付其(府縣)下銃砲彈藥賣買免許商人共ニ無遺

買収順  
序

漏爲相心得置可申此旨相違候事  
別紙達乙第二十二号

武官所有ノ軍用銃賣買取規則今般第二十二号ヲ以テ太政官ヨリ御達相成候ニ付テハ銃  
器彈藥火藥買収順序ノ儀別紙ノ通相定候條此旨相違候事

別紙 銃器彈藥火藥買収順序

一陸軍准士官以上軍用銃器及彈藥火藥ヲ買収セントスルキハ左ノ順序ヲ履行スヘシ○一  
軍用銃器及彈藥火藥ヲ免許商人ヨリ買収セントスル者ニハ款末ニ掲ケル雛形ノ証票ヲ附  
與スヘシ○一此証票ハ陸軍省砲兵局ニ於テ之ヲ製シ豫メ各官廳ニ配賦シ置クヘシ○一其  
銃器彈藥火藥ヲ買収セントスル者ハ款末ニ掲ケル雛形ノ名刺ヲ其所管ヘ差出シ証票ヲ請  
取各自姓名下ニ調印シ之レヲ其買収スヘキ商人ニ付シテ現品ト交換スヘシ○一此証票ハ  
請求人ノレ有ル毎ニ其銃名擬數或ハ彈藥火藥ノ種類數量及ヒ請求人官姓名年月日等ヲ其  
所管ニ於テ記入シ別ニ扣帳ニモ記注シ割印ヲナシテ附與スヘシ○一官ノ不用兵器若クハ  
彈藥火藥等ノ拂下ケテ願フ者ハ定規ノ如ク所管長ヘ願書ヲ差出スヘシ○一官ノ所管長ハ之レニ添  
書シテ陸軍卿ヘ進呈シ願フ許可ヲ得テ其旨ヲ本人ニ達スルキ証票モ共ニ附與ス然シテ(一  
票中記載并扣帳ヘ記注ノ法前條ノ如シ)願人ハ此証票ヘ代價ヲ添其品ヲ請取ルヘキ廳ヘ  
差出シ現品ト交換スヘシ○一諸官廳ニ於テ下附シタル証票ノ數及ヒ銃器彈藥火藥ノ名稱  
數量ヲ詳記シ各年一月七月ノ兩度ニ報告スヘシ 証票雛形ハ略之

(廿二)海 明治十三年四月廿七日海軍省御達乙第六号

軍武官  
銃器彈  
藥買収  
順序

武官所有ノ軍用銃賣買取規則本年第二十二号ヲ以テ公達相成候付海軍准士官以上右買  
収順序別紙ノ通相定メ海軍一般ニ相違候條各管下銃砲彈藥賣買免許人共ニ無遺漏相違置  
可申此旨相違候事

第十二

銃砲彈藥并刀劍取締及遺失物取扱之部

廿一

別紙 銃器彈藥買収順序

一海軍准士官以上軍用銃器及彈藥ヲ買収セントスル時ハ左ノ順序ヲ履行スヘシ○一軍用銃器及彈藥ヲ免許商人ヨリ買収セントスル者ハ左ニ掲クル雛形ノ証票ヲ受領スヘシ○一此証票ハ海軍兵器局ニ於テ之ヲ授與スヘシ○一其銃器彈藥ヲ買収セントスル者ハ左ニ掲ル雛形ノ名刺ヲ兵器局へ出シ証票ヲ請取自己姓名下へ捺印シテ之ヲ買収スヘキ免許商人ニ附シ現品ト交換スヘシ○一官ノ不用ニ屬スル兵器彈藥ノ拂下ヲ願フ者ハ成規ノ如ク願書ヲ海軍卿へ進呈シ卿ノ許可ヲ得ルキハ其指令書ヲ以テ兵器局ヨリ証票ヲ受領スヘシ証票雛形ハ略之

刀劍取締之部

明治九年七月二十日敎部省御達達書甲第五号

神宮並官國幣社神官

(廿三) 神社祭例  
刀不苦  
御達

諸神社神輿渡御ノ節供奉ノ者共従前甲冑又ハ大紋素袍等着用ニテ帶刀致シ來リ候向ハ供奉中ニ限リ一社ノ古例ニ任セ帶刀不苦候尤其都度其筋へ届出候儀ト可心得此旨相達候事達書第二十四号

遺失物取扱之部

明治九年四月十九日御布告第五十六号

(廿四) 遺失物取扱規則

遺失物取扱規則左ノ通相定候條此旨布告候事

遺失物取扱規則

第一條 凡遺失物ト稱スルハ自ラ其遺失スルヲ覺ラヌ及ヒ其所在ノ明カナラサルモノ

ヲ云フ故ニ若シ其物ヲ得ルニ臨テ物主其場ニ就テ其主タルヲ証明スルニ於テハ直ニ之ヲ返還シ遺失物ヲ以テ論スルヲ得ス○第二條 凡遺失ノ物ヲ得レハ五日內ニ其主ニ還シ其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ榜示シ一年內其主ナキ時ハ之ヲ得者ニ給ス○第三條 凡遺失者ハ其遺失スル物品ノ摸樣員數并ニ遺失ノ日時場所等ヲ可成丈ケ詳細ニ記載シ速カニ官ニ届出ヘシ但得者ヨリ其返還ヲ得ル時モ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ○第四條 凡遺失ノ物ヲ得レハ之レヲ其主ニ還スト雖モ其費用ヲ償ハシムルヲ得且得者ニ報勞ノ爲メ其物價百分ノ五ヨリ少カラヌ武拾ユリ多カラサル金圓ヲ給スヘシ若シ物主得者ト其價額ヲ爭フ時ハ官之ヲ評置人ニ托シテ其價ヲ定ム○第五條 凡遺失物ヲ得ルニ其物品盜賊ニ係ルモノハ直ニ官ニ送ルヘシ官之ヲ其主ニ還シ止、其費用ノミヲ償ハシム○第六條 凡官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物ヲ掘得ル者ハ并ニ官ニ送リ地中分セシム但其主分明ナルモノ及ヒ盜賊ニ係ルモノハ此限ニ在ラヌ(十年內務省甲十号)○第七條 凡遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラサル時ハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ○第八條 凡家畜ノ類他所ニ逸走スル者ハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得スト雖モ其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與スルヲ第三條第四條ニ同シ若シ他人ノ財產ヲ毀損スル時ハ律ニ照シテ處分ス○第九條 凡逸走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ若シ八日內其主ナクシハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償ヒ仍ホ代金ノ剩餘アルモノハ之ヲ官ニ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ○第十條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給スルヲ私物ニ異ナルヲナシ○第十一條 凡警察官吏タル者ハ所部ノ内外ヲ問ハズ遺失物ヲ得レハ速カニ之ヲ官ニ送リ至ク其主ニ還附シ其主ナクシハ之ヲ官ニ沒ス○第十二條 凡一切應禁物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ論セズ并ニ官ニ沒ス○第十三條 凡公私債証書地券諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ論スルヲ

第十二

遺失物取扱之部

得以上離任物主ハ得者ニ其費用ヲ償フ可シ○第十四條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ヲ得者シ  
ツハ埋藏物ヲ掘リ得テ官私ニ全ク送還セズ或ハ物主ノ其主タルヲ証明スルニ冒認シテ  
返還セサル者ハ并ニ律ニ照シテ處分ス

明治九年十二月二十日內務省御達乙第百三十六号

府 縣(東京府ヲ除ク)

(廿五)遺失物取  
扱規則  
中官沒  
物品取  
扱方改  
正御達

本年(八月)當省乙第九十七号沒官ノ物品取扱方違書左ノ通改正候條此旨相違候事  
遺失物取扱規則中官ニ沒スル物品ノ中裁判ニ係ルモノハ裁判所ニ送附シ裁判ニ係ラサル  
モノハ之ヲ公賣シ其應禁物ハ一旦廢棄スルノ後ハ之ヲ公賣スルモ害ナキモノハ同様處分  
シ其金額毎六ヶ月分(七月ヨリ十二月迄一月ヨリ六月迄)取纏メ明細書相添大藏省ヘ納附  
可致事但本文ノ通納附候ハ、其段當省ヘ可届出事

明治十年九月廿七日內務省御達甲第二十号

(廿六)遺失物取  
扱規則  
中第六  
條ノ物  
品ニ付  
御達

明治九年(四月)太政官第五十六号ヲ以テ遺失物取扱規則中第六條埋藏掘得ル者處分ノ儀  
公布相成候處右物品ノ内古代ノ沿革ヲ徵スルモノモ有之候ニ付處分前一應當省ヘ届出檢  
査ヲ可受其品ニヨリ相當代價ヲ以テ購求シ官私中分ニ係ルモノハ其價格ノ半高ヲ發掘人  
ヘ下附シ該物品ハ永ク博物館ヘ陳列可致候條此旨布達候事但物品ハ先ツ掘出地名及形狀  
等ヲ詳記シ及ヒ摸寫スルモノヲ郵送シ其見込アルモノニテ遞送方相違候後本文ノ通可取  
計候事

### 第十三 諸業

#### 醫制之部

明治九年四月一日內務省御達乙第四十四号

各縣

(廿七)醫  
師ヨリ  
差出ス  
ヘキ患  
者死亡  
届ニ付  
御達

當省本年乙第十三号ヲ以テ患者死亡届ノ儀相違候處右届書差出方順序醫師ヨリ直チニ差  
出候テハ數醫ノ治療ヲ受ケタル患者死亡ノ節醫師各自届出重複シ或ハ互ニ讓リ合等開相  
成候儀モ可生ニ付主任ノ醫師ハ必ス届書ヲ死者ノ家人ニ付與スヘク家人ハ必ス之レヲ請  
求シテ該病家ヨリ區戸長或ハ醫務取締ニ爲届出候様可取計此旨更ニ相違候事

府 縣

明治九年一月十二日內務省御達乙第五号

別紙

醫師開業ノ儀別紙ノ通試驗法相定各管内醫師學術之現狀ニ據リテ緩急ヲ度リ施行可致候  
條此旨相違候事退テ施行之身及相違候向ハ時月取極メ可申出事

一自今新ニ醫術開業セント欲スルモノハ左ノ試験ヲ遂テ免狀ヲ授クヘシ但シ從來開業ノ  
醫師ハ試験ヲ要セス故ニ縣廳ニ於テハ新ニ免狀ヲ受ケ開業スルモノト混雜セサル様處分  
スニ尤從テ開業ノ醫師タリヒ志願ノモノハ試験ヲ遂テ免狀ヲ授クヘシ○(試験科目ハ  
十二年二月內務省御布達甲第三号ヲ以テ改定ニ付略之)○一産科産科口中科等專ラ一科  
ヲ修ムルモノハ各其届部ノ解剖生理病理ノ大意及手術ヲ檢シ免狀ヲ授クヘシ○試験ハ當  
分管廳ノ便宜ニ隨ヒ縣廳或ハ病院ニ於テシ其成績ヲ內務省ニ具狀シ免狀ヲ受ケ本人ニ交  
付スヘシ

第十三 醫制之部

廿五



(廿九)醫師免許規則

明治十六年十月廿三日御布告第三十五号

醫師免許規則別冊ノ通製定シ明治十七年一月一日ヨリ施行ス但明治十五年二月第四号布告同年八月第三十九号布告ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス  
右奉 勅旨布告候事

別冊

醫師免許規則

第一條 醫師ハ醫術開業試験ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ証ハ仍ホ其効アリトス○第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第証書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ○第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業証書ヲ得タル者其証書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントス願出ツルトキハ内務卿ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ○第四條 外國ノ大學醫學部若シハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術開業免許ヲ得タル者其卒業証書又ハ開業証書ヲ以テ開業免許ヲ得ントス願出ツルトキハ内務卿ハ其証書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ○第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ○第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告スヘシ○第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ○第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ○第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務省ニ返納スヘシ○第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若シハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經内務卿ニ於テ其業ヲ停止若シハ禁止スルコトアルヘシ但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ○第十二條 前條ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チ

(卅)醫師開業試験規則

明治十六年十月廿三日御布告第三十四号

今般第三十五号ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試験規則別冊ノ通り相定メ  
明治十七年一月一日ヨリ施行ス但明治十二年二月内務省甲第三号布達ハ同日ヨリ廢止ス  
右布達候事

別冊 醫術開業試験規則

第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試験ヲ受クヘシ○第二條 内務卿ハ毎年二回醫術開業試験ヲ舉行スヘシ但試験ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試験科目ハ六ヶ月前之ヲ内務卿ヨリ告示スヘシ○第三條 内務卿ハ醫術開業試験ヲ舉行スル毎ニ官立及ヒ府縣立醫學校病院ニ從事スル者又ハ地方ニ於テ學術名望アル醫師理化學者等ヲ選ヒ試験委員ヲ命スヘシ但齒科醫術開業試験ニ於テハ齒科醫一名ヲ試験委員ニ加フルコトアルヘシ○第四條 内務卿ハ主事者ヲ派遣シ試験一切ノ事ヲ監督整理セシムヘシ○第五條 醫術開業試験ハ之ヲ二期ニ分テ前期試験後期試験トス前後二期ノ試験ヲ同時ニ受クルコトヲ得ス但齒科醫術開業試験ハ全科一時ニ受クルモノトス○第六條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ 前期試験科目○第一 物理學○第二 化學○第三 解剖學○第四 生理學○後期試験科目○第一 外科學○第二 內科學○第三 藥物學○第四 眼科學○第五 產科學○第六 臨床實驗○第七條 齒科試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ○第一 齒科解剖部及生理第二 齒科病理及治療○第三 齒科用藥品○第四 齒科用器械○第五 實地試驗○第八條 前期試験ハ一ヶ年半年以上後期試験ハ更ニ一ヶ年半年以上修學セシ者ニ非レバ之ヲ受ケ

第十三 醫制之部

ルコトヲ得ス○第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前期試験及第ノ証書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス但履歷書ニハ其師若シハ他ノ開業醫師二名以上ノ保証アルヲ要ス○第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若シハ不正ノ行為アリト認ムル者アルトキハ之ヲ内務省ニ具狀スヘシ内務省ニ於テハ中央衛生會ノ審議ヲ經其情狀ニ因リ期限ヲ定メ試験ヲ許サ、ルコトアルヘシ○第十一條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ撰定シ試験場ニ臨ミ受験者ヲシテ筆答セシムヘシ但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ○第十二條 試験主事者ハ試験終ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ直チニ及第証書ヲ與フヘシ但及第証書ニハ試験主事者試験委員連署スヘシ○第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得ス○第十四條 醫術開業試験ヲ受ケル者ハ試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ○前期試験手数料 金三圓○後期試験手数料 金五圓○齒科試験手数料 金五圓○第十五條 受験中疾病及ヒ其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前條ノ手数料ヲ返付セス

(卅一)醫  
師轉籍  
寄留

明治十二年三月四日内務省御達乙第十一号

府 縣

從來開業醫師他管へ轉籍寄留ノ節ハ新規開業ト看做シ學術試驗可致旨及指令或ハ地方之見込ニヨリ適宜ノ處分ニ任セ候向モ有之候右ハ試験ニ不及候條自今他管ニ移住ノ節ハ元管廳ノ添書ヲ請ヒ從來開業ノモノナルヲ証シ移住ノ管廳へ爲願出開業許可候條可取計此旨相達候事

(卅二)醫  
明治十六年十月三十一日内務省御達乙第四十二号

府 縣

師規則  
實施

醫師免許規則來ル十七年一月一日ヨリ施行ニ付十年當省乙第七十六号達ニ依リ醫術開業免狀相受度者ハ本年十二月二十日限リ可爲願出此旨相達候事

(卅三)醫  
師受驗  
心得

今般太政官第三十四号ヲ以テ醫術開業試驗規則布達相成候ニ付右受驗人心得左ノ通相定候條此旨告示候事  
受驗人心得

第一條 醫術開業試験ハ當省ヨリ告示シタル試験舉行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ受ケルコトヲ得ヘシ○第二條 醫術開業試験ヲ受ケント欲スル者ハ本年第三十四号布達醫術開業試験規則第九條ニ準據シ其願書ヲ居住ノ地方廳へ差出スヘシ○第三條 前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期限迄ニ試験舉行ノ地ニ着シ宿所氏名ヲ其地方廳へ届出ツヘシ○第四條 試験手数料ハ試験舉行ノ前日迄ニ醫術開業試験場へ相納ムヘシ○第五條 試験場ノ取締上不都合ト認ムヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場セシムルコトアルヘシ○第六條 前期試験ニ於テ二日後期試験及齒科試験ニ於テ三日以上欠席スル者ハ其期ノ試験ヲ終フルコトヲ得ス

明治十六年十二月五日内務省御達乙第四十七号  
明治十年當省乙第七十六号達以後奉職セシ者ト雖モ該達ニ比準スヘキ者ハ特別ヲ以テ志願ニ依リ直チニ醫術開業免狀可致授與候條本年十二月限リ履歷書相添可爲願出此旨相達候事

賣 藥 之 部

(卅四)醫  
石ノ類  
明治五年五月三日御布告第百四十二号

第十三 賣藥之部

府 縣

廿九

賣買禁  
止  
(卅五)賣  
藥規則

鼠取或ハ蠅取藥ト唱ヘ礬石ノ類ヲ調合致シ世間ニ賣買致來候處自今令禁止候事  
明治十年一月廿日御布告第七号  
賣藥規則別冊ノ通相定候條此旨布告候事

別冊 賣藥規則

第一章

第一條 此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥散藥煎藥等家法ヲ以テ合劑ヲ販賣スルモノヲ云フ○第二條 此賣藥營業者ハ藥味分量用法最量功能ヲ詳記シタル書ニ族籍氏名ヲ記シ其管轄廳ヲ由シテ內務省ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ○第三條 內務省ニ於テハ願書ヲ檢査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ拘ハラヌ取扱上失誤ヲ生シ易キモノ及ヒ毒藥取締ニ關係スルモノハ之ヲ許サ、ルヘシ○第四條 第八條ニ記シタル期限中藥味分量用法最量能書ヲ改正セント欲スル者其由ヲ届出舊鑑札ヲ返納シテ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ○第五條 賣藥ヲ請賣セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タル者ハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持スル官許公文ノ寫及ヒ營業者ト取結ヒタル約定書トヲ其管轄廳ヘ願出內務省ノ免許鑑札ヲ受クヘシ(同年八十九號御布告)○第六條 賣藥營業者及請賣者共必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ○第七條 賣藥營業者及請賣者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ派出シテ行商ヲ爲カシメント欲スル者ハ其由ヲ管轄廳ヘ届出行商鑑札ヲ願受ケ行商スル者ハ必ス之ヲ所持スヘシ○第八條 營業鑑札請賣鑑札行商鑑札ハ其鑑札記載ノ月ヨリ滿五年ヲ以テ免許ノ期限トス此期限ヲ過キ尙ホ免許ヲ得ント欲スル者ハ舊鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ○第九條 第八條ニ記シタル期限中第四條ノ改正發賣ヲ願出之ヲ免許スル時ハ新鑑札記載ノ月ヲ以テ一期ノ初月トナスヘシ○第十條 免許期限內ト雖モ其製藥第三條ニ掲クル所ノ有毒品ナルヲ更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノ一アル時ハ直ニ鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルヲアルヘシ○第十一條 營業者廢業ス

ルカ又ハ禁止セラレ、キハ其請賣及ヒ賣子共其販賣ヲ許サス○第十二條 諸鑑札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタル時ハ其仔細ヲ詳記シテ管轄廳ヘ届出再ヒ之ヲ願受クヘシ○第十三條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡サント欲スル者ハ双方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出し名前書換ヲ請フヘシ○第十四條 賣藥營業者及ヒ請賣者免許期限中其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ免許鑑札ヲ改ムルニ及ハスト雖モ其由ヲ届出ヘシ○第十五條 賣藥營業者廢業シ若シハ禁止セラレタル者ハ營業者ハ勿論其請賣者ニ於テモ總テ諸鑑札ヲ返納ス可シ(同年八十九號御布告ヲ以テ第十四條改正アリ)

第二章

第十六條 賣藥營業者及ヒ請賣者ハ左ノ通税金並鑑札料ヲ上納スヘシ

賣藥營業稅 藥劑一方ニ付一ヶ年 金二圓

右鑑札料 藥劑一方ニ付一枚 金二十錢

賣藥請賣鑑札料 藥劑ノ方數ニ拘ハラヌ一枚 金二十錢

賣藥行商鑑札料 藥劑ノ方數ニ拘ハラヌ一枚 金二十錢

第十七條 水火盜難ニ因リ鑑札ヲ毀失シ更ニ新鑑札ヲ願受クル時ハ其鑑札料ノ半高ヲ納ムヘシ○第十八條 税金ハ毎年兩度ニ區分シ前半年分ハ七月三十一日限リ後半年分ハ翌年一月三十一日限リ鑑札料ハ其都度並ニ管轄廳ニ上納スヘシ○第十九條 税金ハ六月以前免許ノ者ハ前年分七月以後ハ半年分廢業ノ者ハ七月以後ハ前年分六月以前ハ半年分ヲ納ムヘシ但第十條ノ有毒品ナルヲ更ニ發見セシ時ニ限リ月割ヲ以テ税金ヲ納メシムヘシ

第三章

第二十條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者及ヒ之ヲ貸ス者又ハ期限過タル鑑札ヲ以テ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者ハ其鑑札ヲ取上ケ藥劑一方ニ付五圓ノ罰金ヲ科スヘシ○第二十一條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ又ハ期限過キタル鑑札ヲ以

第十三 賣藥之部

ヲ請買スル者及ヒ無鑑札ノ者ヲシテ請買セシメ又ハ鑑札ヲ取上ケ製藥  
 ヲ沒収シ藥劑一方ニ付十圓ノ罰金ヲ科スヘシ○第二十二條 免許ヲ受ケヌシテ私ニ藥味  
 分量用法能書等ヲ改更シ又ハ許可ヲ經スシテ無稽ノ妄說ヲ記載シ世人ヲ術惑スル者ハ其  
 鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ沒入シ藥劑一方ニ付十圓以上二十五圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ○第二  
 十三條 無鑑札ニテ營業スル者ハ其製藥及ヒ賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付二十五圓以上  
 五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ○第二十四條 諸鑑札ヲ偽造シ又ハ他人ノ賣藥ヲ贗造シテ  
 發賣スル者ハ其製藥及ヒ其賣得金ヲ沒入シ藥劑一方ニ付五十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科  
 スヘシ○第二十五條 私ニ有毒藥ヲ配伍スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥及ヒ其賣得金ヲ沒  
 入シ藥劑一方ニ付百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ○第二十六條 以上ノ犯則者ヲ  
 見届ケ訴出ル者アル時ハ事實取糺ノ上相違ナキニ於テハ其賞トシテ其罰金ノ半高ヲ與フ  
 ヘシ

(卅六)賣藥規則

實施

明治十年二月七日御布告第十六号  
 本年一月第七号ヲ以テ賣藥規則布告候處該規則第三章罰則ノ儀ハ來ル六月一日ヨリ施行  
 候條此旨更ニ布告候事但諸鑑札授受稅納其他手續等ノ儀ハ退テ內務省ヨリ可相違事

(卅七)賣藥規則

中改正

明治十年十二月廿八日御布告第八十九号  
 本年一月第七号布告賣藥規則中第一條第五條第十四條左ノ通改正候條此旨布告候事  
 第一條 此規則ニ稱スル所ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥浴劑散藥煎藥等ヲ調製シ効能書  
 ヲ附シ販賣スルモノヲ云フ○第五條 賣藥ヲ請買セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タルモ  
 ノハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持ノ免許鑑札寫及ヒ營業者ト取結ヒタル約定書  
 トヲ添ヘ其管轄廳ヘ願出免許鑑札ヲ受ケ管轄廳ハ之ヲ內務省ヘ届出ヘシ○第十四條 賣  
 藥營業者及ヒ請買者免許期限中其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ管轄廳ヘ鑑  
 札名前書換ヲ請フヘシ

(卅八)賣藥規則

手續

明治十年三月十二日內務省御達乙第三十二号

本年一月太政官第七号賣藥規則公布相成候ニ付テハ左ノ手續書及ヒ書式雛形ニ照準取計  
 可申此旨相違候事(手續書及ヒ書式雛形ハ略之)

(卅九)賣藥規則

中改正

明治十一年九月十九日御布告第二十七号

明治十年一月第七号布告賣藥規則中左ノ通改正候條此旨布告候事  
 第二條 其管轄廳ノ下(ヲ經由シテ內務省)ノ八字ヲ削ル○第三條 (內務省)ノ三字ヲ(管轄廳)ニ改メ(賣藥)ノ下ニ(劇藥)ノ二字ヲ加フ○第五條 免許鑑札ヲ受ケノ下(ケ管轄廳)ハ之ヲ內務省ヘ届出)ノ十三字ヲ削リ(シ)ノ一字ヲ加フ○第十條第十九條 但書(有毒)ヲ(有害)ニ改ム

(四十)賣藥規則

改正手續

明治十一年十一月八日內務省御達乙第七十号

本年九月太政官第二十七号ヲ以テ賣藥規則改正公布相成候ニ付テハ左ノ手續并雛形ニ照準取計可申此旨相違候事(賣藥規則取扱手續ハ略之)

(四十一)藥用阿片賣買并製造規則

並ニ製造規則

明治十一年八月九日御布告第二十一号

明治三年八月布告生阿片取扱規則ヲ廢シ藥用阿片賣買並製造規則左ノ通相定候條此旨布告候事但施行ノ時日ハ退テ內務省ヨリ可相違事  
 藥用阿片賣買并ニ製造規則  
 第一條 阿片ノ賣買及ヒ製造ハ藥用品ニ限リ此規則ニ依テ之ヲ許可ス○第二條 藥用阿片ハ其內國產及ヒ外國產ヲ論セス總テ內務省ニ其品位ヲ定メテ之ヲ買上ケ然ル後各同藥場ヨリ阿片卸シ賣特許藥舖ニ拂下ケ之ヲ賣捌カシムヘシ但司藥場ヲ置カサル地方ニ於テハ該地方廳ヨリ之ヲ拂下シヘシ○第三條 各司藥場ヨリ拂下クル所ノ阿片ハ量目一匁ヲ以テ一器トシ每器司藥場ノ印紙ヲ貼附スヘシ○第四條 地方廳ハ土地ノ廣狹位置ヲ度

第十三

賣藥之部

リ一管内相當ノ人員ヲ限リ藥舖ノ身元人物ヲ選ミテ内務省ニ稟議シ鑑札ヲ受ケテ之本  
 人ニ交付スヘシ但廢業ノ者アル節ハ其鑑札ヲ内務省ニ返納ス可シ○第五條 特許鑑札ヲ  
 受タル藥舖ノ住所姓名ハ該管轄廳ヨリ管内ノ公私病院醫師藥舖一般ニ報告スヘシ但廢業  
 ノ者アル節モ本人ニ速シ速カニ報告スヘシ○第六條 特許鑑札ヲ受ケタル藥舖ハ其店頭  
 ニ特許藥用阿片賣買所ト大書シタル看板ヲ掲ケ置クヘシ○第七條 特許ヲ受ケタル藥舖  
 ハ半年分賣捌ノ高ヲ豫算シ毎年兩度最寄司藥場(司藥場ナキ地方ハ該地方廳)ニ申立テ其  
 拂下ヲ請フヘシ但欠乏ノ節ハ臨時拂下ケテ請フヲ得○第八條 凡ソ醫師病院及ヒ一般  
 藥舖等ニ於テ藥用阿片ヲ要スルキハ其量目并ニ其住所姓名及年月日(病院ハ其名稱及院  
 長若クハ副長ノ姓名)ヲ記シ調印シタル證書ヲ以テ特許藥舖ニ就キ之ヲ購求スヘシ特許  
 藥舖ニ於テハ之ヲ賣渡スニ其量目一度ニ四十匁ヲ超ヘカラス但病院及醫師等ニ於テ便宜  
 ニ依リ一般藥舖ニ就キ之ヲ購求スルト一般藥舖相互ニ買賣スルトハ妨ケスト雖モ必ス本  
 條ノ證書ヲ以テスヘシ且其量目一度ニ八匁ヲ超ヘカラス○第九條 凡テ内外國人共醫師  
 ノ處方箋ヲ持參シタル者ノ外ハ特許藥舖并ニ一般藥舖ニ於テ一切之ヲ賣渡スヘカラス○  
 第十條 特許藥舖ハ每半年分阿片拂受并ニ一匁以上賣捌ノ高及ヒ買入ノ住所姓名並ニ一  
 匁以下賣捌ノ總高等明細表正副二通ヲ造リ其管轄廳ニ差出スヘシ尤一匁以下ノ分ハ平常  
 其明細簿ヲ記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ但管轄廳ハ其一通ヲ内務省ニ進達スヘシ○  
 第十一條 醫師病院一般藥舖ニ於テハ每半年必スシモ前條明細表ヲ差出スヲ要セスト雖  
 モ平常其明細簿ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ○第十二條 藥用阿片ヲ製造セント  
 欲スル者ハ罌粟ノ種類及ヒ培養採取製造ノ方法ヲ記ス管轄廳ヲ經由シテ内務省ノ免許鑑  
 札ヲ受クベシ○第十三條 阿片製造人ハ其製造シタル阿片ノ量目ヲ記シ署名調印シタル  
 願書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ内務省ノ買上ケテ願フヘシ右買上ケテ受クルノ外決シテ内外  
 人民ニ販賣スルヲ許サズ但司藥場ニ於テ其品位藥用ニ適セサル者トスルキハ地方廳ヨ

(四十二) 阿片賣買并製造規則  
 (四十三) 前條取  
 扱手續

リ其旨ヲ製造人ニ通知シ其阿片ハ其廳ニ預カリ置クヘシ○第十四條 阿片買上ケ及ヒ拂  
 下ケノ代價ハ歲ノ豊凶及ヒ外國一般之相場等ニ因テ高低アルヘシト雖モ其品位ニ應シテ  
 價格ヲ定ムルハ該藥主用ノ性分即チ「モルヒチ」ノ多少ニ因ルヘシ○第十五條 内務省ニ  
 買上ケ及ヒ拂下ケル所ノ阿片ハ百分中ニ「モルヒチ」六分以上十一分ニ至ルマテヲ含有ス  
 ル者ニ限ルヘシ○第十六條 此規則ニ違反スルモノハ其犯情ニ從ヒ阿片賣買若クハ製造  
 チ禁シ其所有ノ阿片ヲ沒收シ百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ  
 明治十一年十一月二日內務省御布達甲第廿七号  
 本年八月太政官第二十一号布告阿片賣買並ニ製造阿片規則之儀ハ來ル明治十二年五月一  
 日ヨリ施行候條此旨布達候事  
 明治十一年十一月四日內務省御達乙第六十八号

府 縣

本月二日當省甲第二十七号ヲ以テ阿片賣買並製造規則施行ノ日限布達候ニ付テハ豫メ左  
 件ノ通可取計此旨相達候事 取扱手續ハ略之

明治十三年一月十七日御布告第一号

藥品規則左ノ通相定來ル二月十五日ヨリ施行シ明治十年(二月)第二十号布告毒藥劇藥取  
 扱規則ハ右同日限リ相廢候條此旨布告候事

藥品取扱規則

第一條 凡ソ藥品中最モ注意シテ精撰スヘキ者ヲ第一類(注意藥)トシ其性効峻烈ニシテ  
 僅少ノ分量ト雖モ直チニ生命ヲ傷害スルニ足ルヘキモノヲ第二類(毒藥)トシ其性効第二  
 類ノ如ク峻烈ナラサルモ用量ニ因テ容易ニ危害ヲ來スヘキモノヲ第三類(劇藥)トス其類  
 目別表ノ如シ但新タニ發見及ヒ舶齎シタル藥品ハ先ツ最寄司藥場ニ出シテ試驗ヲ受ケ其  
 告示スル所ニ從フヘシ○第二條 第一類藥品ハ其性効ノ緩劇ニ拘ハラズ若シ精良ナラサ

第十三

賣藥之部

ルキハ醫師ノ目的ヲ誤リ以テ人命ヲ危フスルカ故ニ其粗製品（故意ニ他物ヲ混シタルニ  
 アラス全ク化學製造上或ハ採収ノ際其法粗漏ニシテ純精ナラサルモノ、類ヲ云フ）ハ之  
 ヲ藥用トシテ販賣スヘカラス但藥舖ニ於テ自ラ其否ヲ鑑別シ能ハサルキハ最寄司藥協  
 ニ請ヒ無費ニテ其試驗ヲ受クルコトヲ得○第三條 第一類中ノ粗製品ト雖モ仍ホ學術上  
 工職上等ノ用ニ供スルニ足ルモノハ粗製ノ字ヲ其器ニ明記シタル販賣スルコトヲ得○第  
 四條 第二類第三類ノ藥品ハ醫師ノ處方書ニ據テ調合スルノ外醫師藥舖化學者製藥者工  
 職者等ヨリ品名量數需用ノ目的年月日及ヒ住所姓名ヲ詳記シタル證書ヲ以テスルニアラ  
 サレハ決シテ販賣又ハ授與ス可ラス但証書處方書ハ之ヲ保存シ臨時ノ點檢ニ供スヘシ且  
 本條ノ手續ニ依ルモノト雖モ幼稚ノモノ其他不安心ト認ムルモノニハ一切交付スヘカラ  
 ス○第五條 第二類第三類ノ藥品ヲ販賣スルトキハ其器若クハ包紙ニ必ラス普通ノ名稱  
 ヲ記シ且第二類ハ海ノ字第三類ハ劇ノ字ヲ明書スヘシ但醫師ノ處方書ニ據テラスシテ封緘  
 ナ開キタル第二類第三類ノ藥品ヲ小賣若クハ授與スルトキハ本文ノ外更ニ適應ノ器ニ入  
 レ密封封印スヘシ○第六條 第二條第四條本文ニ背戻シ又ハ贗品（故意ニ他ノ物品ヲ本  
 品ニ混合シテ其容量重量ヲ増スモノ若クハ他ノ物品ヲ以テ本品ニ擬シ或ハ名號ヲ變換ス  
 ルモノ、類ヲ云フ）販賣（總テ酸敗、風化、或ハ潮解シ若クハ黴爛ヲ生シ陳敗ニ傾ク等ニ因  
 リ其藥品本性ノ効力ヲ變シ或ハ其効力ヲ失スルモノ、類ヲ云フ）ヲ販賣スルモノハ其贗  
 敗品ヲ没入シ三十圓以上五百圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年以下ノ懲役第一條但書第  
 四條ノ但書及第三條第五條ニ背戻スルモノハ一圓以上二十五圓以下ノ罰金若クハ一日以  
 上二十五日以下ノ懲役科シ又ハ罰金懲役ヲ併セ科スヘシ○第七條 右ノ罰則ヲ再犯スル  
 モノハ其本罰ノ最多限ニ貳倍以下ノ罰科シ三犯スルモノハ本罰ノ最多限ニ三倍以下ノ  
 罰科スヘシ（藥品類別表ハ略之）

(四十五) 明治十三年三月十七日內務省御達乙第十号

下

繪具藥  
料等藥  
品規則  
ニ包含

本年二月太政官第二号ヲ以テ藥品販賣規則公布相成候ニ付テハ繪具藥料等モ第二類並第  
 三類表中ニ掲載有之モノハ該規則ニ照シ賣買可致等ニ候條心得違ノ者無之様可取計此旨  
 相達候事

(四十五)

賣藥規  
則中刪  
除追加  
御告

明治十四年四月二十六日御布告第二十六号

事(十一年十月第五十二号)

第十六條 賣藥營業者ノ下(及ヒ請賣者)ノ五字並(賣藥請賣鑑札料)(賣藥行商鑑札料)ノ  
 二項刪除○第二十三條 無鑑札ニテ營業スル者ノ下(及ハ營業者)ニテ私ニ請賣者ニ藥  
 劑ヲ調製シムル者又ハ請賣者自ラ之ヲ調製スル者)ノ三十八字追加

(四十六)

賣藥取  
扱手續  
更改御  
達

本年四月太政官第三十二号公布相成候ニ付テハ明治十年三月當省乙第三十二号達賣藥取扱手  
 續中請賣鑑札料及ヒ行商鑑札料ノ廉並行商鑑札製作費云々ノ一項削除候條更ニ左ノ條項  
 ニ照準シ取扱可申此旨相達候事(取扱手續書ハ略之)

(四十七)

賣藥鑑  
札費ニ  
付御達

賣藥請賣鑑札並行商鑑札製作費ノ儀ハ自今明治十三年四月第十六号布告第三條第七項ノ内  
 ナ以テ支辨スヘシ此旨相達候事

(四十八)

賣藥取  
扱手續  
刪除

明治十一年當省乙第七十号達賣藥取扱手續末項刪除候條此旨相達候事但十二年乙第五十  
 第十三 賣藥并牧畜之部

(四十九)

賣藥規則追加御布告

五号達衛生課事務條項第六條中賣藥之件ハ從前ノ通可必得事  
明治十五年十月廿七日御布告第五十二号

明治十年一月第七号布告賣藥規則中左ノ通追加シ來明治十六年一月一日ヨリ施行ス

第二條ハ但書追加○但免許ヲ受ケタル者ニテ於テ之ヲ調製スル時ハ其箇所毎ニ免許鑑札ヲ受クヘシ○第十六條中右鑑札料云々ノ項ハ但書ヲ追加○但第二條但書ニ依リ免許鑑札ヲ受クル者ハ其箇所毎ニ本文ノ税金並鑑札料ヲ納ムヘシ  
右奉 勅旨布告候事

牧畜之部

(五十) 斃牛馬取

御布告

明治四年三月十九日御布告

府 藩 縣

從來斃レ牛馬有之節ハ穢多ヘ相渡來候處自今牛馬ハ勿論外獸類ナリト總テ持主ノ者勝手ニ所置可致事

(五十一)

屠牛取御達

明治四年八月大藏省御布達

一近來肉食相開候ニ付テハ屠牛渡世ノモノ屠場ノ儀ハ人家懸隔ノ地ニ取設ケ病牛死牛トモ不賣鬻樣嚴重取締可申就テハ左ノ二ヶ條相守各地方官ニ於テ雛形ノ鑑札製造致シ屠場取開ノ場所巨細取調ノ上相渡シ當省ヘ進テ可届出事  
一牝牛ハ番息ノ基本ニ付總テ屠殺不致樣取締可致事但十二三歳以上孕牛ニ難相成分不苦候事○一諸開港場ニ於テ輸出ノ節取締ノ儀ハ其地方官ニ於テ見込相立取締可致事但見込ノ趣進テ可申出事  
明治十一年二月四日內務省乙第九号

府 縣

(五十二)

種牛馬貸與規則

明治九年二月乙第二十号牛疫處分假條例中第八條牛主姓名頭數ノ下ニ年齡ノ二字增加候條此旨相達候事  
明治十五年二月九日農商務御達第二号

府 縣

自今種牛馬貸與候節ハ別紙規則ニ照シ貸渡候條此旨相達候事但從前貸與ノ分モ此規則ニ準據スヘシ

種牛馬貸與規則

第一條 一種牛馬貸與ノ主義ハ漸次種類ヲ改良シ良畜ノ蕃息ヲ謀ルモノトス○第二條 一種牛馬貸與請求スルニハ其畜養及ヒ蕃息ノ方法等ヲ詳記シ當省ヘ伺出ヘシ○第三條 一借受及返納ニ係ル一切ノ諸費ハ借主ノ自辨タルヘシ但當省ノ都合ニ依リ返納セシムルキハ其率付費ヲ下付スヘシ○第四條 一貸與中時々主務官吏ヲ派遣シ畜養等ノ實況ヲ視察セシムヘシ但當省官吏臨時派出檢査スルヲモアルヘシ○第五條 一牝牛馬貸與年限牛ハ三ヶ年馬ハ四ヶ年トシ滿期ニ至リ返納セシムルモノトス但牛ハ二十四ヶ月馬ハ三十六ヶ月未滿ノモノヲ貸與セルハ本條年限ニ算入セサルモノトス○第六條 一牝牛馬貸與中又ハ滿期ノ際其同種類ノ異血統ノ別異ナルモノハ甲乙借主示談ノ上交換貸與ヲ請スルキハ之ヲ許可シ其旨農務局ヘ通知スヘシ○第七條 一貸與牝牛馬ヨリ生産セシ價駒ハ初産ヨリ交互(第一初産一頭ヲ納メ第二産ハ借主專領シ第三ニ左ノ頭數ヲ上納セシムヘシ) 牛 七才以下ノモノ 全二頭  
七才以上ノモノ 全三頭  
馬 八才以下ノモノ 全二頭  
八才以上ノモノ 全三頭  
第八條 一前條上納ニ充ツヘキ價駒ハ生産後牛ハ十二ヶ月馬ハ二十ヶ月以外ニ於テスヘシ最其率付入費ハ下ヶ渡スモノトス但本文期限内ト雖上納ヲ命スルヲモアルヘシ○第九條 第十三 牧畜並畜之部 三十九

條 一第七條ニ掲クル牝駒ノ頭數ヲ上納シ了ルモノハ其母牛馬ハ借主ニ下與スルモノト  
 ス○第十條 一第七條ニ掲クル牝駒其管内ニ貸與ノ見込アルキハ其方法ヲ監査シ不都合  
 ナキニ於テハ本則ニ準據シ貸與ノ上農務局へ通知スヘシ○第十一條 一交尾ノ景況ハ每  
 年十二月限り別紙甲号雛形ニ據リ農務局へ報告スヘシ○第十二條 一分婉ハ其都度別紙  
 乙号雛形ニ據リ農務局へ報告スヘシ○第十三條 一死亡ハ別紙丙号雛形ニ據リ其景況ヲ  
 詳記シ獸醫ノ診斷書ヲ添へ其都度農務局へ報告スヘシ○第十四條 一傳染病ヲ除クノ外  
 斃牛馬ハ其借主ニテ適宜處分スヘシ○第十五條 一疾病ノ徵アルキハ速カニ治療ノ手當  
 ナ爲シ其都度農務局へ報告スヘシ但傳染病ニ係ルモノハ急報スヘシ○第十六條 一傳染  
 病流行ノ際ハ種牛馬及上納牝駒共其牽付ヲ見合スヘシ○第十七條 畜養ヲ粗略ニシ又ハ  
 交尾度數ヲ超過シ若シハ本則ニ違背スルキハ直チニ返納セシムヘシ○第十八條 一貸  
 與牛馬失踪シ若シハ畜養交尾等不注意ヨリ斃死セシムルキハ借主ヨリ相當代價ヲ辨償  
 セシムヘシ (別紙報告書雛形ハ略之)

蠶種之部

- (五十四) 廢止御 布告御 達
- 明治七年二月十三日御布告第十九号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ廢セラル故ニ略ス)
- 明治八年三月三十一日御布告第四十七号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ廢セラル故ニ略ス)
- 明治十年四月廿五日御布告第二十九号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ廢セラル故ニ略ス)
- 明治十年三月廿六日內務省御達乙第三十七号ハ○(十一年十号御布告ニ依リ消ル故ニ略ス)
- 明治八年二月廿二日御布告第三十二号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ廢セラル故ニ略ス)
- 明治八年二月廿四日御布告第六十五号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ廢セラル故ニ略ス)
- 明治八年六月十三日御布告第五号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ廢セラル故ニ略ス)
- 明治六年十一月十五日御布告第三百七十九号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ消ル故ニ略ス)

- (五十五) 蠶種原 紙賣下 御布達
- 明治五年七月廿九日大藏省御達第九十五号ハ○(十一年十号御布告ニ依リ消ル故ニ略ス)
- 明治六年九月五日大藏省御達第三百三十号ハ○(十一年十号御布告ニ依リ消ル故ニ略ス)
- 明治十年五月三日御布告第四十二号ハ○(十一年十号御布告ヲ以テ廢セラル故ニ略ス)
- 明治七年三月七日內務省御達乙第二十号ハ○(十一年十号御布告ニ依リ消ル故ニ略ス)
- 明治七年七月十八日內務省御達乙第四十八号ハ○(十一年十号御布告ニ依リ消ル故ニ略ス)
- 明治十一年五月六日內務省御布達第十一号
- 今般太政官第十号公布ノ趣モ有之蠶種原紙規則被廢止候ニ付テハ本年製造ノ蠶種ハ營業  
 人共各自勝手ノ紙相用不苦儀ハ勿論ニ候得共從前勸農局ニ於テ立候原紙買受方留ノ者  
 ハ本年限り左ノ價格ヲ以テ賣下候條來ル六月三十日限り各所從前ノ蠶種原紙賣捌所へ  
 申出買受候條可致此旨布達候事
- 一春蠶原紙千枚ニ付 金二十五圓 一夏蠶其外用原紙千枚ニ付 金八圓

生糸之部

- (五十六) 生絲改 會社ニ 付御布 達
- 明治六年十二月十八日大藏省御達第七十九号
- 生絲改會社追々各所へ設立相成候處間ニハ自余ノ商人共テ強テ加入爲致社外ノ者ヲモ東  
 縛致候哉ニ相聞ヘ右ハ畢竟協同立會ノ主意ヲ以テ設社候儀ニ付會社へ加入ハ各自勝手ニ  
 可有之ハ勿論社則ニ不背候ハ、致退社且社中社外ノ者内外人民ト自由ニ商業相營候トモ  
 不苦儀ニ有之又開港場へ荷物運輸ノ儀ニ付テモ社外ノ者營業ニ故障不相成候可致此旨布  
 達候事
- 明治十年四月廿五日御布告第三十七号
- 生絲取締規則明治六年一月第三十二号布告及同年四月第百三十五号明治九年三月第二十  
 六号追加共總テ相廢候條向後製造ノ生絲ハ其結紙へ繭眞綿出殼山繭等ハ其上包へ某使  
 第十三 生絲并古着古道具之部 四十一
- (五十七) 生絲上 包ノ儀 付御 布告



(府)(縣)管下國所姓名ヲ記シタル該製造人ノ印ヲ可捺此旨布告候事

古着 古道具之部

(五十八) 明治十六年十二月廿八日御布告第五十号

古物商取締條例

古物商取締條例別紙ノ通制定シ明治十七年二月一日ヨリ施行ス

右 奉勅旨布候告事

古物商取締條例

第一條 古物商トハ古道具古本古書畫古着古銅鉄鍍金銀ヲ賣買スル營業者ヲ云袋物屋小間物屋籠甲屋時計屋飾屋箔打屋煙管屋ニシテ其營業ニ屬スル古物ヲ賣買交換スル者及ヒ刀劍商ハ此條例ニ準據スヘシ○第二條 古物商ハ管轄廳(東京府ハ警視廳)ノ免許ヲ受クヘシ○第三條 古物商物品ヲ賣買シ又ハ交換シタル時ハ警察官ニ於テ其物品及ヒ賣主讓主ヲ調査スルニ差支ヘナキ様簿冊ニ記載シ且買主讓受主ヲ詳カニスルヲ得タルトキハ之ヲ記載スヘシ○第四條 身元詳カナラサル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス但身元詳カナル者其証人タルトキ又ハ警察官若シハ巡查ノ認可ヲ受ケタルトキ此限ニアラス○第五條 十五年未滿ノ者白痴風癪者及ヒ雇人(雇主ノ家ニアル者)ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス但シ父母後見人雇主又ハ身元詳カナル者其証人タルトキハ此限ニアラス官廳附村學校病院社寺會社ノ印章記号アル物品ハ其賣却シ得ヘキコトヲ証明スル証人貳名以上アルニ非ラサレハ之ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス前項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニヨリ無代價ニテ物品ヲ取戻サルコトアルヘシ○第六條 古物商ハ營業者タルト否トヲ問ハス盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換シ及ヒ寄藏スルトキハ警察官ノ許可ヲ受

ケヘシ違カフ者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮又ハ三拾圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス○第七條 古物商ハ自宅又ハ許可ヲ受ケタル市場及ヒ賣主讓主ノ居宅ノ外ニ於テ物品ヲ買取り又ハ交換スル事ヲ得ス○第八條 刀劍又ハ之ヲ仕込ミタル器具ハ身元詳カナラサル者及ヒ盜罪賭博ノ處斷ヲ受ケタル者ニ賣渡シ讓渡シ又ハ露店及ヒ路傍ニ於テ賣渡シ讓渡ス事ヲ得ス○第九條 古物商物品ヲ他府縣ニ運送セントスルトキ又ハ他府縣ヨリ受取りタルトキハ其物品ノ目錄ヲ所轄警察署ニ届出ツヘシ警察官ハ時宜ニ依リ荷作ヲ解キ物品ヲ検査シ之ヲ差押フルコトアルヘシ但シ費用ハ届出シタルトキ若シシハ其ノ以前ニ之ヲ得タルマ、所持シタルトキハ直チニ所轄警察署ニ届出ツヘシ若シ届出スシテ其理由ヲ辨解スルコト能ハサルモノハ第六條ノ刑ニ同シ○第十二條 物品ノ賣買交換ヲ記載シタル簿札及ヒ品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡失シタルトキハ直チニ所轄警察署ニ届出ツヘシ○第十三條 警察官ハ何時タリトモ古物商ノ店舗ニ臨ミ物品及ヒ簿冊ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其物品ヲ差押ヘ又ハ時々簿冊ヲ差出カシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ古物商ハ之レヲ拒ムコトヲ得ス○第十四條 第二條第三條第四條第五條第七條第八條第九條第十條第十二條第十三條ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ二百圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス○第十五條 第六條第十一條第十四條及ヒ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル古物商ハ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ於テ三月以上三年以下ノ特別取締ニ付スルヲ得○第十六條 特別取締ニ付セラレタル者ハ尙ホ左ノ項目ニ從フヘシ一、物品ヲ買取り又ハ交換シタル時ハ其賣主讓主ノ住所氏名年齢及ヒ物品ノ形状(徽章番号編柄模様損所ノ類ヲ云フ)價格年月日時ヲ簿冊ニ記載スヘシ二、日出前日没後ハ物品ヲ買取り又ハ交換シ及ヒ寄藏スルコトヲ得ス三、營業者ニアラサル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換シタル

第十三

古着古道具之部

ルトキハ其物品ノ原状ノ儘五日間保存スヘシ  
 四、物品ヲ賣渡シ又ハ交換シタルトキハ其物品ノ形狀價格年月日時ヲ簿冊ニ記載シ且買主讓受主ノ住所氏名年齢ヲ知り得タルトキハ之ヲ記載スヘシ  
 五、毎月一度物品賣買交換ノ簿冊ヲ所轄警察署ニ差出シ其檢査ヲ受クヘシ  
 六、住所ヲ移轉シ又ハ旅行シ又ハ他人ヲ宿泊同居セシメントスルトキハ所轄警察署ノ認可ヲ受クヘシ  
 ○第十七條 前條ニ違背シタル者ハ三圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 ○第十八條 特別取締ニ付セラレタルモノ第六條第十一條第十四條第十七條ニ依リ罰金ニ處セラレタルトキハ直ニ之ヲ納完セシム若シ納完セサル者ハ留置セラレ、事アルヘシ  
 ○第十九條 古物商一年内ニ此條例ヲ再犯シタルトキハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止又ハ停止スル事ヲ得○第二十條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス  
 ○第二十一條 此條例ヲ犯シテ買取り又ハ交換シタル物品贓物ニ係ルモノハ營業者ニ依ルト否トテ問ハヌ警察署ニ於テ之ヲ追徴シテ被害者ニ還付スヘシ若シ被害者知レサルトキハ之ヲ領置シ一年ノ後官沒ス○第二十二條 商業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ○第二十三條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事(東京府ヲ除ク)縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出スヘシ

(五十九)

八品商取締規

則廢止

(六十)

屋營業者如前規

者如前規

(六十一)

明治十七年一月廿五日警視廳御布達第五号

下

明治十七年五月二十五日警視廳御布達第六号

今般古物商取締條例公布相成候ニ付テハ明治九年(十一月)甲第八号布達八品商取締規則來ル二月一日ヨリ廢止ス依テ其鑑札ハ同月十五日迄ニ當廳ヘ返納スヘシ右布達候事

明治十七年一月二十五日警視廳御布達第七号

今般甲第六号布達ヲ以テ八品商取締規則廢止候處質屋營業者ノ儀ハ從前ノ規則ヲ遵守シ警察署一管内限リ組合ヲ設ケ其組合中ヨリ正副取締ヲ置キ諸事取締ヲナスヘシ右布達候事

古物商取締條例細則

古物商取締條例第廿三條ニ依リ細則左ノ通り之ヲ定ム右布達候事

古物商取締條例細則

第一條 古物商ノ免許ヲ得ノトスル者ハ其願書ニ組合取締加印ノ上區ハ區長郡ハ戸長ノ奥印ヲ受ケ正副二通ヲ警視廳ヘ差出スヘシ但シ特別取締期限内廢業シタル者又ハ廢業スルト否トテ問ハヌ其商家ニ同居スル者其期限内ハ免許セサルモノトス○第二條 屬籍住所氏名ヲ轉換シ又ハ廢業シタルトキハ第一條ノ手續ニ依リ警視廳ヘ届出ヘシ但シ便宜書留郵便ヲ以テスルモ妨ケ無シ○第三條 古物商ハ警察署一管内ヲ一組トシ各種類毎ニ組合ヲ設ケ正副取締ヲ置キ諸事取締ヲ爲スヘシ但シ組合ハ人数ノ多寡ニ依リ警視廳ノ認可ヲ受ケ他ノ警察署管内ト合併スルヲ得○第四條 古物商ハ左ノ看板ヲ製シ取締ノ烙印ヲ受ケ之ヲ店頭ニ掲クヘシ但シ廢業シタル時ハ取締ニ於テ其烙印ヲ消滅ス可シ(看板ノ離形ハ略之)○第五條 取締ハ組合名簿ヲ製シ住所屋号氏名年齢ヲ記載シ實印ヲ取置可シ○第六條 取締ハ取締ニ關スル諸達及ヒ贓物ノ品觸等組合中ヘ送達シ証印ヲ取置ヘシ但シ品觸レ發布手續ニ依リ送達スヘシ○第七條 古物商ハ左ノ各種ノ帳簿ヲ製シ置ク可シ但シ品觸簿ヲ除クノ外新調ノ都度所轄警察署ノ檢印ヲ受ク可シ○第一 物品買入讓受明細帳 此帳簿ニハ物品買入レ又ハ讓受ケタルモノ第一号書式ニ準シ記載スヘシ但シ條例第四條但書及ヒ第六條ノ場合ニ於テ警察官ノ認可若シハ許可ヲ得タルモノハ其檢印ヲ受クヘシ第二項第三項モ亦同シ○第二 物品賣讓渡明細帳 此帳簿ニハ物品賣渡又ハ讓渡シタル中第二号書式ニ準シ記載ス可シ○第三 物品預帳 此帳簿ニハ物品預リタルトキ第三号書式ニ準シ記載スヘシ○第四 品觸帳 此帳簿ニハ品觸到達シタル年月日時ヲ記入シ散逸セサル様順次綴リ置ク可シ○第八條 古物商ニシテ床店又ハ露店(刀劍商ヲ除ク)ニテ販賣若シハ行商ヲサントスル者ハ第一條ノ手續ヲ以テ左ノ雛形ノ木札ヲ製シ警視廳ノ檢印ヲ受ケ床店及露店ニ於テハ店頭ニ標出シ行商ハ之ヲ顯ハニ携帶スヘシ若シ雇人

第十三

古着古道具並鳥獸獵之部

四十五

ナシテ本業ヲ爲サシムルキハ尙ホ雇人ノ氏名年齢ヲ記載スヘシ但シ廢業シタルトキハ第一條ノ手續ニヨリ警視廳ニ届申鑑札ノ消印ヲ乞ヘシ(鑑札雛形ハ略之)○第九條 古道具及ヒ古銅鐵商ノ類ニシテ物品ヲ買廻ルトキハ其物品ヲ顯ハニ携帶スヘシ○第十條 商品ヲ他府縣ニ運送セントスルキハ一日前(特別取締ニ付セラレタル者ハ二日前)又ハ他府縣ヨリ受取リタルキハ到着後一日以内ニ所轄警察署ヘ届出ヘシ○第十一條 他府縣ヘ運送スル荷物ニハ差出人及ヒ受取人ノ住所氏名并ニ其物品ノ類名ヲ標記スヘシ○第十二條 此規則ニ違犯シタル者古物商取締條例ニ明文アルノ外ハ違警罪ノ刑ニ處セラレヘシ(第一号物品買入讓受明細帳書式第二号物品賣讓渡明細帳第三号物品預帳書式第四号他府縣下運送受取品届書式ハ之ヲ附録第 号ニ掲ク)

鳥獸獵之部

明治七年十一月廿五日御達第百五十七号

(六十二) 皇族方御遊獵ノ儀ニ付御達

内務省 大藏省 司法省  
開拓使 警視廳 府 縣  
皇族獸獵ノ儀別紙ノ通り宮内省ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

(六十三) 外國人銃獵免

御達

宮内省  
皇族遊獵被願出候節ハ從其省該地管廳ヘ照會シ鑑札受取可相渡尤銃獵規則遵守可有之ハ勿論ニ候得共納稅ニハ不及候條此旨相達候事  
明治十年一月四日内務省御達丙第一号  
警視廳 東京府 大坂府  
神奈川縣 長崎縣 新潟縣

(六十四) 禁區戶長職獵

御達

外國人銃獵免許ノ儀今般各國公使ヘ談判ノ上免狀並條約別紙甲乙号ノ通相定候條各地方居留ノ外國人銃獵免許申立候節別紙免狀取扱條例ニ照準可取計此旨相達候事(別紙略之)  
明治十年一月十九日内務省御達乙第三号

(六十五) 神官等職務中前同斷

御達

區戶長ト雖ヒ奉職中職獵之儀不相成候條爲心得此旨相達候事(十年同省乙第三十三号) 御達ヲ以テ但書ヲ增加  
本年當省乙第三号達左ノ通但書增加候條此旨相達候事但神官教導職郵便取扱役學區取締等總テ職務有之者本條之通可相心得事  
明治十年一月廿三日御布告第十一号

(六十六) 鳥獸獵規則

御達

鳥獸獵規則別紙ノ通改正候條此旨布告候事

鳥獸獵規則

第一條 小銃ヲ以テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノタメニスルヲ遊獵トス○  
第二條 銃獵免狀ナキモノハ總テ銃獵スルヲ禁ス但シ有害ノ鳥獸ヲ除クカタメニハ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ與フヘシ○第三條 銃獵免狀ヲ得ント欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ内務省其他ハ該地方管廳ヘ差出スヘシ○  
第四條 免狀ハ其効一期限ニ止ルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若クハ授受スルヲ禁ス○  
第五條 免狀ヲ願受ル者ハ左ノ通り免稅ヲ納ムヘシ○一 職獵稅 金壹圓○一 遊獵稅 金拾圓○第六條 水火盜難其他ノ事故ニヨリ免狀ヲ毀失スル時ハ速ニ東京府下ニ於テハ内務省其他該地方管廳ニ届出ツヘシ再ヒ免狀ヲ願受ル者ハ更ニ稅金ヲ納ムルニ及ハスト雖ヒ手數料トシテ金二十五錢ヲ納ムヘシ○第七條 左ニ記列シタル者ニハ免狀付與  
第十三 鳥獸獵之部 四十七

セサルヘン〇一 十六歳未満ノ者〇一 白痴風癲等ノ者〇一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者〇第八條 左ニ記列シタル場所ニ於テハ獵銃ヲナスヲ禁ス〇一 都府市街ハ勿論衆人羣集ノ場所〇一 銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所〇一 禁獵制札ノ場所但制札ハ獵銃ニ挺ヲ交叉シタル圍ノ下ニ銃獵禁制ノ四字ヲ記シ掲ケ置クヘシ〇一 作物植付アル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニアラス〇第九條 獵銃ハ和銃玉目四匁八分以下並ニ西洋獵銃ニ限ルヘシ軍銃ヲ用フルヲ禁ス(十年第八十五号御布告ヲ以テ)第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ一期トス是時限ノ外ハ銃獵ヲ禁ス但地方ノ景況ニヨリ已チ得ス此時限ヲ伸縮スル時ハ其理由ヲ内務省ヘ届出ヘシ〇第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス〇第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帶スヘシ出獵中警察官吏區戸長村役人等免狀ヲ見ント請フ者アル時ハ直ニ之ヲ示スヘシ〇第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害トスル時ハ第八條ニ所示ノ如キ制札ヲ建テ其周圍ニ繩張又ハ仮圍ヲナスヘシ〇第十四條 凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘシ〇第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスシテ職獵ノ免狀ヲ受ケ遊獵スル者ハ五十圓ノ罰金ヲ科シ免狀取上ケ其期内銃獵ヲ禁スヘシ〇第十六條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ証跡ヲ取リ訴ヘ出ルルハ犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フヘシ〇第十七條 第十四條第十五條ノ外此諸規則ヲ犯ス者ハ三圓ヨリ少ナカラス二十圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ(十年第八十五号御布告ヲ以テ)

(六十七) 明治十年十二月十七日御布告第八十五号  
 本年(一月)第十一号布告鳥獸獵規則第九條但書同第十八條左ノ通追加候條此旨布告候事  
 第九條 一獵銃ハ云々但開拓使管内ニ限リ和銃玉目拾匁以下ヲ用フルヲ得ヘシ〇第十八條 一開拓使管内ニ入り鹿獵ヲ爲ス者ハ該使施行ノ規則ニ遵フヘシ

(六十八) 明治十年二月八日内務省御達乙第十一号

銃獵免狀渡方條例

府縣

太政官第十一号布告鳥獸獵規則改正相成候ニ付明治八年當省乙第三十六号達銃獵鑑札渡方條例別冊ノ通改正候條右ニ照準可取計此旨相達候事

別冊 銃獵免狀渡方條例

第一條 鳥獸獵免狀ハ別紙雛形ノ通り相製シ當省ヨリ相渡スヘシ〇第二條 免狀ハ兼テ凡ソ積ヲ以テ東京府下ハ當省其他ハ地方管廳ヘ可相渡置ニ付管内限リ總計取調毎年六月三十日迄請取方申立ツヘシ〇第三條 免狀下渡ノ節ハ毎年其管轄廳於テ帳簿ヲ製シ置番号並住所姓名身分年齢共詳細登記スヘシ〇第四條 管轄廳ニ於テ免狀ニ記スヘキ期限郡姓名年齢住所共雛形ノ通記入押印ノ上下ケ渡スヘシ〇第五條 定規テ伸縮スル場所ニ於テ免許スル免狀ハ其年七月ヨリ翌年六月迄ヲ一期トシ新舊引替相渡スヘシ〇第六條 銃獵滿期ノ分ハ免狀収却ノ上總テ該管轄於テ斷裁スヘシ〇第七條 凡積ヲ以テ相渡置候免狀殘余有之節モ前條ニ同シ〇第八條 鳥獸獵免狀渡濟ノ上ハ別紙雛形ノ通總計表ヲ製シ翌年七月限リ當省ヘ差出スヘシ〇第九條 定期ヲ伸縮スル場所ハ勿論定期ノ場所ト雖實際取調其時々届出ツヘシ(同年同省第五十六号御達ヲ以本條中勿論以下ノ九字ヲ削除アリ參看)第十條 銃獵犯則ノ者罰金上納方ハ明治八年司法省第四十号達ノ通相心得ヘシ〇第十一條 禁獵制札ノ儀ハ別紙雛形ニ照シ製作可致最其大小ハ適宜ニ任スヘシ但官設ハ府縣費民設ハ民費又ハ自費タルヘシ〇第十二條 銃獵免狀ヲ毀失セシ者再應請取方申立候節ハ事實取糺ノ上更ニ下ケ渡方取計規則ノ通手數料収入スヘシ(別紙雛形ハ略之)

(六十九) 銃獵鑑札渡方條例第十三

府縣

本年乙第十一号達銃獵鑑札渡方條例第九條中(勿論定期ノ場所ト雖)ノ九字削除候條此旨

九條中  
削除  
相違候事

印紙之部

(七十)印  
明治十五年十二月二十日御布達第二十七号  
印紙類賣捌手續別紙ノ通相定明治十六年一月一日ヨリ施行ス但從前賣捌免許ヲ受ケタル者ハ當分ノ内是迄ノ通心得ヘシ右布達候事

別紙

印紙類賣捌手續

第一條 印紙類ノ賣捌ハ陸軍恩給令海軍退隱令海軍退隱令巡查看守給助例ニ依リ恩典ヲ受ケル者ニ限リ之ヲ許可スヘシ但賣捌ノ出願者少クシテ需用人ニ支障ヲ生スル地方ニ於テハ當分從前ノ手續ヲ以テ許可スヘシ○第二條 印紙類ノ賣捌ヲ爲サントスル者ハ其旨地方廳へ願出テ賣捌所看板ヲ受ケヘシ○第三條 此手續ニ依リ賣捌シヘキ印紙類左ノ如シ○一 証券印紙○一 煙草印紙○一 訴訟用紙○一 賣藥印紙○第四條 印紙類代金ハ其下ケ渡チ乞フ時三分ノ一ヲ納メ其余ハ左ノ期限ニ從ヒ納ムヘシ○第一期 二月二十八日限○第二期 五月三十一日限○第三期 八月三十一日限○第四期 十一月三十日限○第五條 賣捌手数料ハ賣捌代金高十分ノ一ヲ支給スベシ○第六條 賣捌人ハ保証人ヲ立テ第四條ノ期限ニ從ヒ印紙代金ヲ納ムルハ勿論印紙類ヲ亡失又ハ損傷スルモ該代金ハ辨納スヘキ旨ノ記載シタル証書ヲ作り保証人連署ノ上之ヲ地方廳ニ差出スヘシ但避リヘカテサル事變ニ遭遇シタル者ハ事狀ヲ具シテ處分ヲ乞フヘシ○第七條 賣捌人恩典ノ定期盡キタル時又ハ其停止ヲ受ケタル時又ハ廢業シタル時ハ第四條ノ期限ニ關セズ其賣捌キ殘余ノ印紙類及ヒ賣捌代金ヲ完納スヘシ但賣捌所看板ハ其節之ヲ返納スヘシ○第八條 印紙類ノ損傷汚染シタルモノアル時ハ其代價百分ノ五ノ金額ヲ添ヘテ返納ヲ許スコトアルヘシ

(七十一)賣藥印紙稅規則  
明治十五年十月廿七日御布告第五十一号  
賣藥印紙稅規則左ノ通相定來明治十六年一月一日ヨリ施行ス(同年十一月第二十四号御布達アリ參看スヘシ)

賣藥印紙稅規則

第一條 賣藥ニハ必ズ定價ヲ附記シ其定價ニ從ヒ營業者ニ於テ左ノ割合相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ○印紙稅ノ割合○一 定價壹錢迄 印稅壹厘○一 全貳錢迄 全貳厘○一 全三錢迄 全三厘○一 全五錢迄 全五厘○一 全拾錢迄 全一錢○以上總テ五錢毎ニ五厘ヲ增加ス(同年十一月十三日内閣書記官ヨリ「以上總テ五」)○第二條 印紙種目ハ左ノ如シ(同年第二十八号御布達ヲ以テ)○壹厘 淡黑色○二厘 青色○三厘 黃色○五厘 茶褐色○壹錢 赭色○貳錢 綠色○三錢 濃青色○四錢 橙黃色○五錢 紫色○拾錢 深紅色○第三條 印紙ハ藥品ノ容器又ハ包紙等ニ貼用シ營業者ニ於テ之ヲ消印スヘシ但印紙面ノ中心ヨリ他所へ掛ケ消印スヘシ 第四條 賣藥印紙ハ官ノ許可シタル賣捌所ニ限リ賣捌クモノトス○第五條 營業者ニシテ無印紙ノ藥品ヲ發賣シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ印紙不足ノ藥品ヲ發賣シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス○第六條 請賣者行商者ニシテ無印紙ノ藥品ヲ所持シ若クハ之ヲ販賣シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス○第七條 貼用印紙ニ消印セサル者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス○第八條 印紙賣捌所ノ外ニ於テ印紙ヲ賣捌ク者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス○第九條 其品ヲ沒収ス其情ヲ知テ之ヲ買受ケタル者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其品ヲ沒収ス

(七十二)賣藥印紙稅規則  
明治十五年十一月十三日内閣書記官御告知  
本年十月第五十一号布告賣藥印紙稅規則第一條末項「以上總テ五錢」ノ下「迄」ノ字ヲ脱ス

第十三 印紙並古金銀取扱様式之部 五十一

(七十三)

明治十五年十一月十七日御布告第二十四号

五十二

賣藥請  
賣行商  
印紙稅  
規則  
(七十四)  
賣藥印  
紙見本

本年(十月)第五十壹号布告賣藥印紙稅規則施行ニ付テハ賣藥者ニ於テ必ス印紙ヲ貼用ス  
ヘキ等之處該稅則施行以前既ニ請賣者又ハ行商者ニ渡シタル賣藥ハ此際ニ限リ請賣者又  
ハ行商者ニ於テ印紙ヲ貼用スルコトヲ得ヘシ右布達候事  
明治十五年十二月二十一日御布達第二十八号  
今般第五十一号ヲ以テ賣藥印紙稅規則布告候ニ付テハ印紙別紙ノ見本ノ通相定ム右布達  
候事(見本ハ略之)

古金銀取扱之部

(七十五)

明治五年三月四日御達第六十八号

古金銀  
分析

金銀分析ノ儀自今無願營業禁止候條地方官ニ於テ不取締無之様可致候尤開業致度段願出  
候者有之候ハ、其者ノ身元並ニ開業ノ規則等詳細取調大藏省ヘ可伺出事  
明治十五年三月十一日大藏省御達第六号

府縣

昨十四年七月當省乙第十二号ヲ以テ當省大坂國債支局相廢シ候旨相達候處明治九年七月  
當省乙第六拾号達同十一年九月當省乙第四十二号達ニ據リ古金銀ヲ交換シ及同十一年二  
月當省乙第十一号達古金銀立會路解代金立替拂渡方大坂ニ於ケルモノハ從前之手續ヲ以  
テ同地出納局出張所ニ於テ可取扱候條此旨相達候事

株式之部

(七十六)

明治十一年五月四日御布告第八号

株式取  
引條例

明治七年(十月)第七号布告株式取引條例相廢シ更ニ別冊之通相定候條此旨布告候事  
別冊

株式取引條例

第一章

株式取引所創立及開業ノ事

第一條 株式取引所ハ株式仲買人ノ集會シテ日本政府ノ諸公債證書及日本政府ノ條例ヲ  
遵奉シテ發行シタル銀行并ニ諸會社ノ株券等ヲ賣買取引スル所ナリ而シテ之ヲ創立セシ  
トスルモノハ其創立願書ヘ其地方長官ノ與印ヲ受ケ之ヲ大藏省ヘ差出シ大藏卿ノ允許ヲ  
請フヘシ○第二條 此條例ヲ遵奉シテ株式取引所ヲ創立スルコトハ其發起人少シトモ十名  
以上ニシテ其資本金額ハ二十萬圓以上タルヘシ而シテ其資本金總高ノ半數以上ニ當ル金  
額ヲ右發起人總員ニテ出スヘシ○第三條 大藏卿ハ此創立願書ヲ受領シテ其許可スヘキ  
ヤ否ヲ考察シ或ハ之ヲ許可シ或ハ之ヲ許可セサルコトアルヘシ○第四條 發起人右創立許  
可ヲ受クルニ於テハ諸般之規程ヲ議定シテ創立證書及條款申合規則各二通ヲ製シ株主一  
同記名調印ノ上地方長官ノ與書調印ヲ受ケ之ヲ大藏省ヘ差出スヘシ但創立證書及條款等  
ハ創立許可ヲ得タル日ヨリ遅クトモ三ヶ月間ニ差出スヘシ若シ右期限內ニ差出サ、ルハ  
ハ其許可ハ無効ニ屬スヘシ○第五條 右創立證書及條款申合規則ハ左ノ主旨ニ從ヒ各  
取引所ノ便宜ニ依テ之ヲ制定スヘシ然レモ必ス此條例ノ旨趣ニ抵觸スルヲ得サルヘシ○  
創立證書ハ取引所ヲ創立スルニ付株主一同決定シタル綱領ノ條件及ヒ其責任ノ有限或ハ  
無限(有限責任トハ負債償却ノ義務ニ於テ該取引所ノ株券限リ或其株券ノ二倍等其)ヲ明  
記シ必ス之ヲ遵守專行スヘキ旨ヲ政府ニ對シ保副スルモノナリ○定款ハ取引所ヲ創立ス  
ルニ付株主一同其取引所ノ便宜ヲ商量決定シテ互相確守スヘキ約束條款ヲ記載スルモノ  
ナリ○申合規則ハ賣買取引ニ付賣買主双方ノ間ニ於テ取引所ニ對シ確守スヘキ規程ヲ記  
載スルモノナリ○第六條 大藏卿ハ右創立證書及定款申合規則ヲ檢案シテ不都合ナシト  
思考スルニ於テハ之ニ與書証印ヲ加ヘ免狀ト共ニ之ヲ其取引所ニ下付シテ開業ヲ許スヘ  
シ但爾后取引所ノ都合ニ依リ其創立證書及定款申合規則ヲ改正加除セントスルトキハ其

第十三

株式之部

五十三

時々大藏卿ノ認許ヲ受クヘシ○第七條 取引所ハ開業前ニ於テ其營業保証ノ爲メ資本金高ノ三分二以上ニ當ル現金又ハ公債証書(大藏省ヨリ指定スル價額ヲ以テ)ヲ大藏省ニ差出シ預置クヘシ但シ開業免狀ヲ得タル後滿五ヶ月ニ至リ猶ホ本文ノ手續ヲ爲サス又ハ開業セサルヲアルキハ其免狀ハ取消タルベシ○第八條 取引所ハ開業ノ日ヨリ滿五ヶ年ノ間其營業ヲ保續スルヲ得ヘシ右滿期ニ至リ尙ホ營業セント欲スルキハ更ニ允許ヲ受リヘシ○第九條 取引所ニ於テ開業免狀ヲ受ケタル上ハ其免狀并創立証書ノ寫ヲ添ヘ何月何日ヨリ其商業ヲ創ムヘキ旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告スヘシ

第二章 株主並ニ株手形ノ

第十條 各株主ヨリ入金シタル金額ハ分テ百圓以上一定ノ株式トナシ株手形ヲ制シ其株主タルモノヘ之ヲ交付スヘシ○第十一條 株主ハ其取引所ノ營業時間ハ何時ニテモ其金員及ヒ諸帖簿ヲ檢閲スルヲ得ヘシ○第十二條 株主ハ何等ノ事故アルトモ其取引所解散ノ期ニ至ラサル間ハ其株金ヲ取戻スヲ得ス○第十三條 株主ハ其取引所ノ承認ヲ得タル上其所持ノ株式ヲ賣渡シ又ハ讓渡シナラスヲ得ヘシ○第十四條 株主タルモノハ其取引所ノ役員タラサル時間ハ何時ニテモ仲買人タルヲ得ヘシト雖モ仲買人トナリタルキハ仲買人ノ規則ヲ遵守スヘシ而シテ賣買上ニ於テハ之ヲ仲買人ト稱スヘシ

第三章 仲買人ノ

第十五條 取引所ノ規定ニ從ヒ相當ノ身元金ヲ差入レ取引所ノ承認ヲ得テ自ラ株式賣買ノ取引ヲナスモノヲ其取引所ノ仲買人ト稱スヘシ但シ仲買人ニ於テ佞令他人ノ依頼ヲ受ケ賣買セシモノト雖モ取引所ニ於テハ都テ仲買人ノ賣買シタルモノト看做スヘシ○第十六條 仲買人ノ身元金ハ少クトモ百圓以上タルベシ○第十七條 仲買人ハ丁年者ニ限ルヘシ且ツ一度身代限ノ處分ヲ受ケタル者ハ其負債ノ義務ヲ免レタル實証アルニ非ラサレハ入社ヲ許サルヘシ

第四章 役員ノ

第十八條 取引所ノ役員ト稱スルモノ左ノ如シ○頭取○肝煎○其他支配人書記方計算方等ノ名義ヲ以テ役員ヲ定ムルハ取引所ノ便宜ニ任ス○第十九條 取引所ノ肝煎ハ少クトモ五名以上ト定メ株主ノ總會ニ於テ其取引所ノ規定ニ從ヒ現ニ三十株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ撰定シ又其肝煎ハ同條中ヨリ頭取一人ヲ推舉スヘシ而シテ支配人以下ノ諸役員ハ頭取並ニ肝煎ノ衆議ニ依リ株主又ハ株主外ヨリ之ヲ撰任スヘシ○第二十條 取引所ノ役員ノ在職年限ハ一ヶ年タルヘシ○第二十一條 頭取ハ取引所ノ事務ヲ總轄シ取引所ノ一切ノ責任ヲ任スヘシ○第二十二條 頭取肝煎ハ其仲買人賣買上ノ差違レヲ解キ違約者ヲ處分スルノ責任アリトス○第二十三條 取引所諸役員職務上責任權限等ハ其取引所ニ於テ適當ノ規程ヲ設ケ之ヲ定款中ニ記載スヘシ

第五章 一般ノ規程

第二十四條 外國人ヲ取引所ノ株主並仲買人ト爲スヲ得ス○第二十五條 取引所ニ於テ株式賣買取引ヲナス者ハ其取引所ノ承認ヲ經タル仲買人ニ限ルヘシ○第二十六條 取引所ニ關係アル政府ノ官吏ハ其取引所ノ株主タルヲ許サス○第二十七條 取引所ノ役員及仲買人ハ其取引所ニ於テ賣買本人又ハ仲買人トナルヘカラス○第二十八條 取引所ノ役員及仲買人ハ他ノ株式取引ヲ爲ス會社ノ役員又ハ仲買人或ハ他ノ銀行並ニ諸會社(官許ヲ經タル合本會社)ノ役員タルヲ得ス○第二十九條 取引所ハ其營業ノ爲メ緊要ナル地所家屋ヲ除クノ外地所家屋ヲ所持スルヲ許サス又之ヲ賣買スヘカラス○第三十條 政府ニ於テ賣買ヲ許シタル諸公債証書及ヒ政府ノ條例ヲ遵奉シテ發行シタル銀行並諸會社ノ株券等ヲ除クノ外此取引所ニ於テ一切他ノ物件ヲ賣買シ他ノ事業ヲ營ムヘカラス○第三十一條 取引所ハ第一章第七條ニ掲ケタル營業保証ノ爲メ大藏省ヘ預クヘキ公債証書ヲ除クノ外自ラ諸公債証書諸株券等ヲ賣買シ又ハ之ヲ所持スヘカラス○第三十二條 取引所ハ諸証據金ヲ使用スヘシ

第十三 株式之部

カラス又貸附金トナスヘカラス○第三十三條 取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其証據金及ヒ身元金ヲ以テ其違約ニ依リ相手方ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トテ償ハシムルニ止マルヘシ○第三十四條 取引所ハ其取引所ニ於テ株式等ノ賣買ヲ認許シタル銀行並ニ諸會社及ヒ新立會社ノ株式ヲ賣買スルノ依頼ヲ受ルト雖モ其事情ニ依リ之ヲ停止シ又ハ之ヲ許否スルノ權ヲ有ス○第三十五條 取引所ノ諸願何屆又ハ諸証書約定書及往復ノ文書等取引所一般ニ關スル事件ハ頭取肝煎等コレニ記名調印スヘキハ勿論ナレモ必ス其取引所ノ名ヲ署シ取引所ノ印ヲ捺スヘシ

第六章 賣買取引ノ

第三十六條 取引所ニ於テ爲ス所ノ賣買取引ハ現場ト定期ノ二種ニ分チ必ス現物ノ受渡ヲ爲ズヘシ但三ヶ月ヨリ永キ定期ノ約定ヲナスヘカラス○第三十七條 凡取引所ニ於テ賣買ノ約定ヲナシ其定期ニ係ルモノハ約定金高百分ノ五宛ニ下ラサル証據金ヲ賣買双方ヨリ差入ル可シ而シテ其期限中相庭ノ高低等ニヨリテハ追証據金増証據金等差入シムルコトヲ得ヘシ○第三十八條 約定取引ノ期限ニ至テハ其品種ニ依リ記名書替等其受渡シノ手續ハ政府又ハ諸會社ノ成規ニ照シ之ヲ履行スヘシ○第三十九條 約定期限内ニ於テ之ヲ轉賣スルヲ得ヘシト雖モ其期日ニ至レハ必ス現物ノ受渡ヲ爲スヘシ○第四十條 賣買主ニ於テ諸証據金ノ差入レヲ怠リ又ハ期限ニ至リテ其約定ヲ履行セサル者及ヒ私ニ賣買ノ約定ヲ爲シ之ヲ公ニセサルモノ等ハ都テ之ヲ違約人ト爲スヘシ

第七章 手数料ノ

第四十一條 取引所ニ於テ收領スヘキ手数料ハ(賣買双方ヨリ)其賣買金高現場取引ハ千分ノ一定期取引ハ千分ニ宛ニ超ユヘカラス○第四十二條 手数料ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關係スル他ノ債主ニ先ツテ之ヲ收受スルヲ得ヘシ

第八章 検査ノ

第四十三條 大藏卿ニ於テ要用ト思考スルモハ何時ニテモ官員ヲ派遣シ或ハ其地方長官ヘ達シテ其取引所ノ業休及ヒ金銀其他諸帖簿等ヲ検査セシムルヲアルヘシ

第九章 帖簿ノ

第四十四條 取引所ハ毎日取扱ノ事項ハ勿論金銀ノ出納等總テ之ヲ詳細正確ニ記載シ且其簿記ノ方法ニ於テ大藏卿ノ差圖アルトキハ其差圖ニ從フヘシ○第四十五條 取引所ニ於テ製定使用スル處ノ諸帖簿ハ其名目用法ヲ詳記シ之ヲ大藏省ヘ届出ツヘシ

第十章 諸報告ノ

第四十六條 取引所ハ賣買實際ノ報告及金銀出納表其他役員ノ進退並株主仲買人ノ姓名等ヲ大藏卿ノ指命スル處ニ從ヒ時々報告ヲナスヘシ

第十一章 納税ノ

第四十七條 此取引所ハ逕テ政府ニ於テ製定施行スル處ノ收税規則ニ從ヒ相當ノ税金ヲ納ムヘシ

第十二章 罰則

第四十八條 取引所ノ役員及株主並仲買人等此條例ヲ犯スカ又ハ役員タルモノ株主並仲買人ノ此條例ニ背戾シタルヲ不問ニ措キ又ハ背戾セシメタル實証アルモハ役員並ニ本人モ其事ノ輕重ニ依リ三十圓ヨリ少ナカラス千圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ○第四十九條 検査官員ノ命ヲ拒ミ帖簿書類等ヲ差出サ、ルカ又ハ其疑問ニ答辨ヲ爲サ、ル者アルトキハ頭取又ハ其主任者ニ拾圓ヨリ少ナカラス五十圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

明治十二年二月十三日御布告第八号

(七十七)  
洋銀取  
引ハ株  
式取引  
ニ準ス

從來神奈川縣下横濱港ニ於テ洋銀相場取引致シ候者有之候處右ハ一切禁止候條自今洋銀取引所設立營業致シ度者ハ昨十一年(五月)第八号布告株式取引所條例ニ照準シ大藏卿ヘ可願出此旨布告候事但資本金ハ十萬圓以上賣買証據金ハ百分ノ三以上タルヘシ

第十三 株式之部



(七十八) 株式取  
中加除  
御布告

明治十三年四月十四日御布告第二十号  
明治十一年(五月)第八号布告株式取引所條例中左ノ通改正加除シ又明治十二年(二月)第八号布告但書ヲ廢ス金銀買賣取引ノ証據金モ株式取引所條例ニ遵フヘシ此旨布告候事  
株式取引所條例第三章第十五條 丁年ニシテ仲買人トナラント欲スル者ハ次條ニ定ムル身元金ヲ差入レ取引所ノ承認ヲ得タル上仲買人トナラントスル願書ヲ大藏卿ニ捧ケ其認許ヲ受クヘシ仲買人ハ他人ノ委託ヲ受ケテ賣買取引ヲ爲スト自己ノタメニ爲スト問ハス取引所ニ對シテハ其賣買取引上一切ノ責任ヲ負フヘシ○全第十六條 株式仲買人ノ身元金ハ貳百圓以上金銀仲買人ノ身元金ハ千圓以上タルヘシ○全第四章第十九條 取引所ノ肝煎ハ五名以上トシ株主ノ總會ニ於テ取引所ノ定規ニ從ヒ現ニ三十株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ撰舉シ肝煎ハ其同僚中ヨリ頭取壹人ヲ推舉シ其住所姓名年齢等ヲ大藏卿ニ具申シテ其認許ヲ受クヘシ大藏卿ハ時トシテハ其改撰ヲ命スルヲアルヘシ支配人以下ノ役員ハ頭取肝煎ノ衆議ニ依リ株主又ハ株主ニアラサル者ヲ撰任スルヲ得○全第五章第三十三條 取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其證據金及ヒ身元金ヲ以テ其違約ニ依リ相手方ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トナ償ハシメ而シテ其違約人ヲ除名スルニ止マルヘシ

(七十九) 同例中  
改正追  
加

明治十三年十二月廿三日御布告第五十七号  
明治十一年(五月)第八号布告株式取引所條例第一章第二條中其資本金額ハ貳拾萬圓ヲ拾萬圓ト改正シ及ヒ第五章第三十條ヘ左ノ通但書追加候條此旨布告候事  
○但本條ニ掲載セサル諸會社ノ株券ト雖モ其營業確實ナリト認ムルモノハ大藏卿ニ於テ其賣買取引許可スルヲ得  
明治十四年五月六日御布告第二十八号  
明治十一年(五月)第八号布告株式取引所條例第二十六條削除候條此旨布告候事

(八十) 同  
例中削  
除

(八十一) 株式取  
引條例  
中改正  
追加

明治十五年十二月二十七日御布告第六十四号  
明治十一年(五月)第八号布告株式取引所條例中左ノ通改正追加ス  
○株式取引所仲買人納稅規  
則ヲ定メタル米商部參看  
第三十三條 取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ取引所ノ取引上ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トナ其者ノ證據金及ヒ身元金ヲ以テ償ハシメ其者ヲ除名スルニ止ルヘシ而シテ仍ホ其損失ヲ償フコト能ハサルトキハ取引所ニ於テ其責ニ任スヘシ○第四十條 賣買主ニ於テ諸証據金ノ差入レヲ怠リ又ハ期限ニ至リテ其約定ヲ履行セサル者ハ都テ之ヲ違約人ト爲スヘシ○第四十九條 官員檢査ノ節取引所役員及ヒ仲買人等簿冊書類ヲ差出スコトヲ拒ミ又ハ疑問ニ答辨ナ爲サ、ル者アルトキハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ○第五十條 取引所ノ規約ニ違背シタル役員及ヒ株主仲買人ヲ取引所限リ處分スルハ之ヲ除名スルカ或ハ過意料ヲ取立ツルニ止マルヘシ但其過意料ハ株金身元金ノ高ニ超ユルヲ得ス  
右奉 勅旨布告候事

(八十二) 株式取  
引條例  
中改正  
及ヒ實  
施

明治十五年十二月二十七日御布告第六十七号  
明治十一年(九月)第三十号布告株式取引所稅額ノ儀手数料其他現収セル總金高十分ノ一トアルヲ賣買手数料總金高十分ノ一ト改ム但來十六年四月一日ヨリ施行ス  
右奉 勅旨布告候事

銀行之部

(八十三) 銀行條  
例

明治九年八月一日御布告第六号  
明治五年(十一月)第三百四十九号布告國立銀行條例ノ儀詮議ノ次第有之別冊ノ通改正致シ舊條例ハ自今相廢シ候條新ニ國立銀行ヲ創立セント欲スル者ハ勿論舊條例ヲ遵奉シテ  
第十三 銀行之部  
五十九

創立シタル者ト雖モ右改定條例ニ根據シ大藏省へ願出ノ上其免許ヲ受候様可致此旨布告  
候事

別冊

國立銀行條例目次

第一章 (第一條ヨリ第十六條ニ至ル) 銀行創立ノ方法、創立證書銀行定款ノ差出方及ヒ  
開業免狀ノ下附並ニ諸役員撰任方法等ノ事ヲ明カニス○第二章 (第十七條ヨリ第二十七  
條ニ至ル) 銀行資本金ノ制限、公債証券銀行紙幣交収ノ割合並ニ其手續及ヒ引換ヒ備金等  
ノ事ヲ明カニス○第三章 (第二十八條ヨリ第四十四條ニ至ル) 株式ノ分割資本金入金ノ  
割合、株式没入、株主ノ記入、株式ノ賣買及ヒ資本金増減等ノ事ヲ明カニス○第四章 (第  
四十五條ヨリ第五十一條ニ至ル) 銀行紙幣ノ製造及ヒ種類、其通用ノ能力引換場所及ヒ燒  
捨テ等ノ事ヲ明カニス○第五章 (第五十二條ヨリ第六十一條ニ至ル) 銀行營業ノ本務、公  
債証券其他ノ賣買並ニ貸附金ノ制限、利息ノ制限、銀行紙幣並ニ株式抵當ノ制禁及ヒ預リ  
金預備等ノ事ヲ明カニス○第六章 (第六十二條ヨリ第六十六條ニ至ル) 銀行名号ノ掲牌  
社印ノ書體、諸手形ニ於ケル銀行ノ負債、所有物ノ明細帳及ヒ營業時間等ノ事ヲ明カニス  
○第七章 (第六十七條ヨリ第七十八條ニ至ル) 株主總會ノ定規並ニ格段決議ノ順序、諸簿  
冊ノ點檢及ヒ檢査ノ手續諸報告差出方等ノ事ヲ明カニス○第八章 (第七十九條ヨリ第八  
十條ニ至ル) 利益金分配ノ方法及ヒ積金割合ノ規定ヲ明カニス○第九章 (第八十一條ヨ  
リ第八十二條ニ至ル) 銀行ハ官廳ノ爲換方ニ從事スル事並ニ外國銀行ト聯合スヘカラサ  
ル事ヲ明カニス○第十章 (第八十三條ヨリ第八十七條ニ至ル) 銀行役員職務上一般ノ制  
禁及ヒ其負責ノ事ヲ明カニス○第十一章 (第八十八條ヨリ第九十條ニ至ル) 紙幣及ヒ  
諸手形類ノ發行並ニ銀行紙幣ノ製造措改及ヒ其版板ノ彫刻等禁止ノ事ヲ明カニス○第十  
二章 (第九十二條ヨリ第九十三條ニ至ル) 銀行ニ於テ其紙幣引換ヲ拒ミシ時ノ處分特例監

督役跡引受人等ノ取扱方並ニ公債証券ノ沒收及ヒ紙幣引換等ノ手續ヲ明カニス○第十三  
章 (第九十四條ヨリ第九十八條ニ至ル) 銀行平穩鎮店ノ手續及ヒ其紙幣引換方等ノ事ヲ明カ  
ニス○第十四章 (第九十九條ヨリ第一百條ニ至ル) 銀行訴訟ノ取扱及ヒ罰金處分ノ事ヲ明  
カニス○第十五章 (第一百一條) 銀行納稅ノ事ヲ明カニス○第十六章 (第一百二條)  
條例ノ更正及ヒ廢止ノ事ヲ明カニス (目次畢)

國立銀行條例

國立銀行ハ政府ヨリ發行スル公債証券ヲ抵當トシテ之ヲ大藏省ニ預ケ紙幣寮ヨリ銀行紙  
幣ヲ受取り引換ノ準備金ヲ設ケ之ヲ發行シ以テ其業ヲ營ムモノナリ今之ヲ創立スルニ付  
大日本政府ニ於テ制定シタル條々左ノ如シ

第一章 銀行創立ノ方法、創立證書銀行定款ノ差出方及ヒ開業免狀ノ下附並ニ諸役員

撰任方法等ノ事ヲ明カニス

第一條 此條例ヲ遵奉シ國立銀行ヲ創立セント欲スル者ハ何人ヲ論ゼス(外國人ヲ除クノ  
外)五人以上結合シタル人々成規第一條ニ掲ケル所ノ手續ヲ以テ其創立願書ヲ大藏省ノ  
紙幣寮へ差出スベシ紙幣頭之ヲ檢按シ相當ト思慮スルニ於テハ之ヲ大藏卿ニ稟議シテ其  
銀行創立證書及ヒ銀行定款ノ差出方ヲ命スベシ○第二條 右紙幣頭ノ命ヲ受ケタル人々  
ハ各其姓名ヲ創立證書ニ記入シ諸般ノ手續ヲ經テ其創立證書ニ紙幣頭ノ承認許可ヲ受ル  
ニ於テハ此條例ニ規定セル簡條ヲ遵奉シ以テ國立銀行ヲ創立スルヲ得ベシ而シテ其創立  
證書ニ掲載スベキ件々左ノ如シ○第一 銀行ノ名号但シ此名号ハ紙幣頭承認ノ許可ヲ  
得テ之ヲ公稱スヘシ○第二 銀行ノ本店及ヒ支店(若シ之アラハ)ヲ置ヘキ場所○第三 銀  
行資本金額及ヒ株數○第四 銀行營業ノ年限○第五 株主ノ姓名住所屬族職業若シ之ア  
ラハ)及ヒ其引受タル株式ノ番号箇數○第六 此創立證書ハ此條例ヲ遵奉シ銀行ノ事業ヲ  
營テモ株主一同ノ利益ヲ謀ルタメ取極メタル旨○第三條 右創立證書ハ其株主等各記名  
調印シ之ニ資錢ノ印紙ヲ貼用シ其管轄地方長官ノ與書鈐印ヲ受タルモノナルヘシ斯ノ從

第十三

銀行之部

事シタル創立證書ハ當人ハ勿論其相續人後見人タル者ニ於テモ右創立證書ノ箇條ヲ確守シ此條例成規ノ趣旨ヲ遵奉スル者トスヘシ○第四條 右創立證書ノ箇條ヲ更正スルニハ其社中ノ格段決議ヲ經テ紙幣頭ノ承認許可ヲ得ルニ於テハ之ニ從事スルヲ得ヘシ但其事件ハ即チ資本金ノ増減及ヒ本店轉移或支店開設等ノ如キ是ナリ而シテ右ノ如ク更正シタル箇條ハ最初右創立證書中ニ記載セシ箇條ト同シク確守スヘシ且右ノ箇條ハ其創立證書ノ本紙正寫ノ別ナク之ヲ綴リ込ミ又ハ添附シ置ヘシ但右ノ外創立證書中ノ箇條ヲ更正スルコトヲ得サルヘシ○第五條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ハ右創立證書ニ必ズ銀行定款ヲ添フヘシ而シテ此條款ハ即チ成規第六條ニ掲ケル所ノ雛形ニ準據シ其箇條ヲ悉皆(又ハ若干)記載シ創立證書ト同様株主一同之ニ記名調印シ壹錢ノ印紙ヲ貼用シタル者タルヘシ但シ此條款ハ唯紙幣頭ノ承認ヲ得紙幣察ノ官印ヲ受ケルノミニシテ其管轄地方長官與書鈐印ヲ乞フニ及ハサルヘシ○第六條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ハ社中ノ格段決議ヲ經テ紙幣頭ノ承認ヲ得ルニ於テハ銀行定款中ニ掲ケタル諸款ヲ更正増補シ及ヒ之ヲ廢止スルコトヲ得ヘシ而シテ右ノ如ク更正増補シタル箇條ハ最初右定款中ニ掲載セシ箇條ト同シク確守スヘシ且右ノ箇條ハ其定款ノ本紙正寫ノ別ナク之ヲ綴込ミ又ハ添附シ置クヘシ○第七條 創立證書并ニ銀行定款ハ本紙一通正寫二通都合三通宛ヲ製シ而シテ創立證書ニ其管轄地方長官ノ與書鈐印ヲ受ケ銀行定款ト共ニ之ヲ紙幣頭ニ差出スヘシ○第八條 紙幣頭ハ右創立證書及ヒ銀行定款ヲ領受シ其銀行株主等此條例第三十條ニ規定スル所ノ割合ヲ以テ資本金ノ入金ヲナセシヤ否ヤノ狀實ヲ檢査シ且株主等ノ不正其他百般ノ事務ヲ視察シ不都合アルニ非サレハ之ヲ大藏卿ニ稟議シ開業免狀ヲ下附スヘシ但シ創立證書銀行定款其本紙ハ記錄察ニ納メ正寫一通ハ紙幣察ノ簿冊ニ綴込ミ一通ハ紙幣察ノ官印ヲ鈐シテ開業免狀ト共ニ之ヲ其銀行ニ下附ス可シ○第九條 銀行ハ右ノ開業免狀ヲ得テ始テ一團ノ會社トナリ何々國立銀行ト公稱シ此條例成規ニ規定シタル箇條ヲ履行

シテ國立銀行ノ事業ヲ經營スルヲ得ヘシ○第十條 此條例ニ從ヒ紙幣頭ノ記名調印シタル開業免狀創立證書銀行定款ハ何レノ裁判所何レノ官廳ニ於テモ之ヲ正確ナル證據トシテ採用セラル、ヲ得ヘシ○第十一條 創立證書銀行定款ノ寫又ハ版本等(用意ノ手續了ルノ後)各株主ヨリノ要需アルニ於テハ銀行ニ於テ定ムル所ノ代價ヲ以テ之ヲ附與スヘシ若シ銀行右附與ノ事ヲ怠慢スルニ於テ銀行ハ其怠慢時間一日ニ付五圓ニ超ヘサル罰金ヲ納ムヘシ○第十二條 此條例ヲ遵奉シテ創立スル銀行ハ鎖店其他ノ事故アルニ非ラサレハ開業免狀ヲ受ケシ日ヨリ二十箇年ノ間其營業ヲ取續クコトヲ得ヘシ右期限ヲ過キ尙ホ營業セント欲スルニ於テ其趣キヲ紙幣頭ニ申請シテ更ニ免許ヲ受クヘシ○第十三條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役等ハ開業免狀ヲ得ルノ日ヨリ社印ヲ刻シ諸役員ノ印信ト共ニ大藏省ノ紙幣察國債寮出納寮ノ三寮ニ差出スシ而シテ銀行ノ諸出願ヲ始メ訴訟約定保證及ヒ報告往復其他一切ノ文書ニ至ルマテ都テ其社号ヲ用ヒ社印ヲ鈐スヘシ但シ報告約定保證等ノ如キ文書ニハ頭取取締役及ヒ支配人ノ名印ヲモ加用スヘシ○第十四條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ頭取取締役ヲ始メ支配人書記方出納方計簿方其他適宜ノ役員ヲ撰任シ其職制權限進退及ヒ頭取取締役交代ノ手續等諸般ノ規約ヲ取極メ之ヲ銀行定款中ニ掲載スヘシ○第十五條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ取締役ハ必ズ自力ヲ以テ成規第五十一條ニ規定スル所ノ規數ヲ所持シタル者ニシテ其總員ハ五人以上(内一人ハ頭取)タルヘシ而シテ其四分ノ三ハ其銀行創立ノ地ニ於テ上任期一箇年以上在任シタル者ニ限ルヘシ○第十六條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役ハ上任ノ節ニ其地方長官ノ面前ニ於テ誓詞ヲ爲シ其事務ヲ施行スルニ忠實公平ヲ以テシ且此條例中ノ要旨ニ決シテ背戾セサル旨ヲ認メ其管轄地方長官ノ與書鈐印ヲ受ケ之ヲ紙幣頭ニ差出スヘシ紙幣頭ハ之ヲ受領シテ寮中ノ簿冊ニ綴込ムヘシ

第二章 銀行資本金ノ制限公債證書銀行紙幣交収ノ割合並ニ其手續及ヒ引換準備金等  
第十三 銀行之部  
六十三

第十七條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ノ資本金額ハ千萬圓ヨリ下ルヘカラス尤人口十萬人以上ノ地ニ於テハ貳拾萬圓未滿ノ資本金ヲ以テ創立スルヲ許サス但シ時宜ニヨリ紙幣頭差支ヘナシト思考シテ大藏卿ヘノ稟議ヲ經ルニ於テハ五萬圓以上拾萬圓未滿ノ資本金ニテモ創立スルヲ許スアルヘシ○第十八條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ハ其資本金額十分ノ八(即チ拾萬圓ナレハ八萬圓)ヲ政府ヨリ發行スル所ノ公債証書ニテ此條例第廿二條ニ掲グル所ノ割合ニ從ヒ實價(即チ市中賣買ノ時相場ニシテ紙幣頭ノ時々指定スル所)ヲ以テ之ヲ出納察ヘ預クヘシ尤右公債証書ハ四米以上利付ノ者(即チ新公債証書金札引換公債証書秩祿公債証書及ヒ爾后政府ヨリ發行スヘキ四米以上利付ノ公債証書)ニ限ルヘシ但右ノ公債証書市中賣買ノ相場低下スル時ハ紙幣頭ハ更ニ之ヲ銀行ニ命シテ其不足ハ猶ホ他ノ公債証書ヲ納メテ本條規定スル所ノ割合額數ニ滿タシムヘシ○第十九條 右公債証書ハ此條例ヲ遵奉スル銀行ヨリ發行スル紙幣ノ抵當ナルヲ以テ出納頭ハ其銀行永續中ハ正ニ之ヲ預リ置クヘシ而シテ若シ此公債証書ノ内國債察ニ於テ施行スル所ノ公債支消ノ抽籤ニ當ル者アレハ銀行ハ他ノ公債証書ヲ納メテ之ヲ引換フヘシ○第二十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其資本金額十分ノ二ヲ通貨ヲ以テ銀行ニ積置キ前條ニ掲グル所ノ公債証書ノ代リトシテ紙幣察ヨリ受取ル銀行紙幣ノ取換準備ニ充ツヘシ故ニ其銀行紙幣發行ノ際ニ於テハ常ニ其流通高ノ四分一ノ割合ヲ以テ準備金ヲ現存スルヲ定度トス尤銀行紙幣發行ノ増減ニ從ヒ其準備通貨モ亦ク便宜之ヲ増減シ之ヲ費用スルヲ得ヘシ但シ右紙幣ノ引換多クシテ四分一ノ準備ニテ引換方差支フルアルハ別ニ通貨ヲ加ヘテ之ヲ引換ヘ決シテ之ヲ拒ミ又ハ之ヲ怠ルヘカラス○第廿一條 此條例第四十條第四十二條ニ掲グル所ノ手續ヲ以テ資本金額ヲ増減スルアルニ於テハ前條ニ掲グル所ノ公債証書並ニ銀行紙幣引換ノ準備金モ亦其割合ニ從テ之ヲ増減スヘシ○第廿二條 此條例ヲ遵奉スル

銀行ニ於テ資本金集合ノ手續了リタル後公債証書ヲ納メテ同類ノ銀行紙幣ヲ受取リ其引換準備金ヲ積立ルノ割合ハ即チ左ノ如シ例ヘハ資本金拾萬圓ヲ以テ創立スル銀行ナレハ○八萬圓ハ 四米以上利付ノ公債証書實價八萬圓ニ當ル高ヲ出納察ニ納メ即チ八萬圓ノ銀行紙幣ヲ紙幣察ヨリ受取ルヘシ○貳萬圓ハ 通貨ヲ以テ銀行ニ積置キ銀行紙幣引換ノ準備トナスヘシ但シ此條例第三十條ニ掲グル所ノ規定ニ從テ資本金ヲ集合スルキハ其入金毎ニ右ノ割合ヲ以テ公債証書銀行紙幣交換ノ手續ヲナスヘシ○第二十三條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取支配人ハ公債証書ヲ出納察ヘ納其受取証書ヲ領受シタル後同類ノ銀行紙幣ヲ各種ノ種類ニテ紙幣察ヨリ受取リ之ニ頭取支配人等ノ名印ヲ加用シテ以テ銀行注營業ノ資本トナスヘシ○第二十四條 右公債証書ノ受取証書ハ紙幣頭出納頭ノ連署調印シタル者タルヘシ尤此公債証書ノ勘査ニ付テハ該兩察頭互ニ其簿冊ヲ開ラキ須ラシ注意ヲ盡シ詳明ニ之ヲ記入シ又互ニ之ヲ點檢スルヲ得ヘシ○第二十五條 此條例第十八條ニ掲グル所ノ出納頭ニ預ケタル公債証書ハ毎年一度(又ハ數度)銀行ノ役員出納察ニ至テ之ヲ點檢シ其銀行ノ元帳ニ照シテ其種類員額等相違ナキニ於テハ改入ハ改濟ノ旨ヲ書面ニ認メ之ヲ出納頭ヘ差出スヘシ但シ右改入出納察ヘ出ル時ハ其銀行頭取ノ委任狀ヲ持參スヘシ○第二十六條 右公債証書ハ銀行ノ都合ニヨリ四米以上利付ノ他ノ公債証書ヲ以テ之ヲ引換テ申請シ紙幣頭ノ考案ニ於テ差支ナシトセハ其趣キヲ出納頭ヘ通知シテ之ヲ交換下付スヘシ但シ其引換ヘタル趣キ并ニ公債証書ノ種類金額等ハ紙幣出納面察ノ簿冊ニ詳記スヘシ○第二十七條 右公債証書ヨリ生スル年々ノ利息ハ其銀行之ヲ受取リ毎年銀行ノ利益精勘定ノ内ニ加ヘテ之ヲ株主一同ヘ分配スヘシ但シ銀行ニ於テ其銀行紙幣引換ノノ意カ又ハ此條例ニ背戾スルアルハ紙幣頭ハ其利息ヲ取押フルアルヘシ

第三章 株式ノ分割資本金入金ノ割合株式没入株主帳ノ記入株式ノ賣買及ヒ資本金増減等ノ事ヲ明カニス

第十三 銀行之部

第二十八條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ資本金ハ之ヲ株式ニ分割シ百圓又ハ五十圓又或拾五圓ヲ以テ一株ト定ムヘシ尤モ一株百圓ニ分配シタル銀行ノ株式ハ悉皆百圓ノ金高タルヘシ五拾圓或拾五圓ノ株式モ亦之ニ準スヘシ但シ拾萬圓以上ノ資本金ヲ以テ創立スル銀行ナレハ百圓又ハ五拾圓ヲ以テ一株ト定ムヘシ又拾萬圓未滿五萬圓マテノ資本金ヲ以テ創立スル者ナレハ五拾圓又ハ或拾五圓ヲ以テ一株ト定ムヘシ○第二十九條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ株主タル者ハ各自ノ望ニ任セ幾株ニテモ之ヲ所持スルヲ得ヘシ而シテ其株主ハ何レノ屬族何レノ職務アルコト拘ハラス總テ其所持株高相當ノ權利ヲ有シ其銀行營業ニ付テノ損益ハ株高ニ應ジテ之ヲ負擔スヘシ但シ大藏省ノ官員其他ノ官員トモ此銀行ノ事務ハ關係アル者ハ株主トナルヲ許サス○第三十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ株主等ハ開業免狀ヲ得其業ヲ始ムル前ニ於テ少ナクトモ資本總額十分ノ五ハ必ス之ヲ銀行ニ入金スヘシ而シテ他ノ十分ノ五ハ資本總額ノ十分一ヲ以テ月賦ト定メ開業免狀ヲ得タル月ノ翌月ヨリ入金スヘシ○第三十一條 右資本金ノ月賦入金毎ニ其銀行ノ頭取支配人ハ成規第十三條ニ準據シ資本金集合高屆書ヲ紙幣頭ヘ差出スヘシ○第三十二條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ株主等株金ノ月賦入金ヲ怠タル時ハ頭取取締役等ニ於テ其株ヲ沒入シ競賣其他ノ手續ヲ以テ三十日以内ニ之ヲ賣拂ヒ而シテ其入用ヲ差引キ尙ホ過金アレハ之ヲ元株主ヘ返還スヘシ尤此競賣ニ於テ右株式ヲ買取リタル株主モ亦他ノ株主同様ノ權利ヲ有スヘシ○第三十三條 右競賣ニ於テ其株ヲ買フ者アラサル時ハ是迄入金シタル金高ハ銀行ニ沒入シテ其株ヲ消スヘシ尤此消株ニヨリ資本金額此條例第十七條ニ規定スル所ノ制限ヨリ減少スルキハ頭取取締役等ハ三十日間ニ之ヲ補ヒ定限ノ高ニ滿タシムヘシ若シ頭取取締役等之ヲ怠ルキハ紙幣頭ハ其銀行ニ銀店ヲ申渡シ更ニ跡引受人ヲ命スヘシ○第三十四條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ株主帳ヲ製シ左ノ要件ヲ記載スヘシ○第一 各株主ノ姓名住所屬族職業(若シ之アラハ)○第二 各株主ノ所持セル株式ノ番号箇數○第三 入社ノ

年月日○第四 退社ノ年月日○第三十五條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ創立證書ニ記名スル者ハ即チ其銀行ノ株主タルカ故ニ前條ニ規定スル株主帳ニ各其姓名ヲ登記スヘシ且其他何人ニテモ(外國人ヲ除クノ外)爾後其銀行ノ株主トラント同意シ隨テ其姓名ヲ株主帳ニ登記シタル者ハ又同シク其銀行ノ株主タルノ權利アルヘシ○第三十六條 右株主帳ハ銀行其開業免狀ヲ受領スルノ即日ヨリ之ヲ其本店ニ備置クヘシ而シテ此株主帳ハ營業時間ナレハ何時ニテモ株主等之ヲ檢閱スルヲ得ヘシ若シ銀行其檢閱ヲ拒ミタルキハ株主ハ其趣キヲ書面ニ認メ之レヲ其地方管轄廳ヘ差出シ紙幣頭ヘノ照會ヲ乞フヘシ其照會ヲ得ルニ於テハ紙幣頭ハ直チ會ヲ得ルニ於テハ紙幣頭ハ直チニ官吏ヲ派遣シ其本店ヲ檢査セシムルヲアルヘシ但シ銀行ハ新聞紙又ハ其他ノ手續ヲ以テ其旨ヲ報知スルニ於テハ一箇年中日數三十日ニ過キサレハ何時ニテモ右檢閱ヲ停止スルヲ得ヘシ○第三十七條 右株主帳ニ何人カ故ナク姓名ヲ記入セラレ又ハ妄リニ除名セラレ又或ハ退社セシ所以ノ記載ヲ故ナク遷延セラレタル等ノ事アリテ其人ノレカ爲メ妨礙ヲ受クルニ於テハ其事由ヲ書面ニ認メ之ヲ其管轄地方官廳ヘ差出シ紙幣頭ヘノ照會ヲ乞フヘシ其照會ヲ得ルニ於テハ紙幣頭ハ直チニ銀行ニ命ジテ之ヲ修正セシムヘシ○第三十八條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ株式ハ成規第二十七條第三十條ニ規定スル所ノ手續ヲ以テ之ヲ賣買讓與スルヲ得ヘシ但シ銀行ハ新聞紙又ハ其他ノ手續ヲ以テ其旨ヲ報知スルニ於テハ一箇年中日數三十日ニ過キサレハ何時ニテモ其株式ノ賣買ヲ停止スルヲ得ヘシ○第三十九條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ株主死去スルノ際名代人ヲ以テ株式ヲ賣却讓與スル等ノ事アル時ハ法令ヒ此名代人ハ其銀行ノ株主ニ非ラスト雖モ記名調印等ノ事ニ至リテハ猶ホ株主同様ノ權利ヲ有スヘシ○第四十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ社中ノ格段決議ヲ經テ紙幣頭ノ承認ヲ得ルニ於テハ其資本金額ヲ增加スルヲ得ヘシ而シテ增加スヘキ資本金額ノ制限ハ大藏卿ヘノ稟議ヲ經テ紙幣頭之ヲ定ムヘシ故ニ其資本金額ヲ增加スルニハ紙幣頭ニ申請シ其承認ヲ得テ之

ニ從事スヘシ尤全ク入金濟ノ上ハ成規第十四條ニ準據シテ其増加証書ヲ差出スヘシ○第四十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行前條ニ掲クル如ク資本金ヲ増加セシニヨリ公債証書ヲ納メ銀行紙幣ヲ請取ルノ手續ハ現ニ其株主タル者ヨリ増加ノ總額ヲ全ク入金シタル後ニ非レハ之ヲ施行スルヲ許サス○第四十二條 此條例ヲ遵奉スル銀行若シ其資本金額ヲ減少セントスル時ハ社中ノ格段決議ヲ經テ紙幣額ノ承認ヲ得ルニ於テ之ニ從事スルヲ得ヘシ尤其減少ノ高ハ此條例第十七條ニ於テ規定スル所ノ員額ヨリ下ルヲ許サス但シ紙幣額ノ承認ヲ得テ此決議ヲ施行セントスルニ於テハ其施行ノ日限ヨリ少ナクトモ三箇月以前ニ於テ資本金ノ減少員額ト其残り資本金トヲ記載シタル報告ヲ製シ適宜ノ手續ヲ以テ之ヲ其預リ金アル得意先ヘ送達スヘシ且其減少セントスルノ趣ハ其銀行所在ノ地ニ行ハルハ三種以上ノ新聞紙ヲ以テ三箇月以上毎月之ヲ公告スヘシ○第四十三條 此條例ヲ遵奉スル銀行若シ前條ノ如ク其資本金額ヲ減少セントスルニ際シ其銀行ヘ貸金預金等アル者ハ未タ其仕拂期日至ラスト雖モ右減少ヲ施行ス可キ日限前一箇月ノ間ナレハ何時ニテモ左ノ定則ニ準據シ之カ償却ヲ乞フノ權利アルヘシ○第一 凡ソ定期預金アル者ハ其元金並ニ當日迄ノ利息ヲ受取ルノ權利アリトス○第二 其他期限前タリトモ凡ソ銀行ヨリ受取ルヘキ勘定アル者ハ時ノ相場ヲ以テ其仕拂期日迄ノ利息ヲ引去リ殘金高ノヨリ受取ルノ權利アリトス○第四十四條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ此條例第四十二條四十三條ニ掲クル所ノ諸般ノ手續ヲ了ルニ於テハ成規第十五條ニ準據シ其減少證書ヲ紙幣額ヘ差出スヘシ若シ右第四十二條四十三條ノ規定ニ背戻シ資本金減少ノ報告又ハ公告ヲ怠リ及ヒ期限未滿ノ勘定仕拂ヲ拒ムコトアルキハ紙幣額ハ右資本金減少證書ニ許可ヲ與ヘサルヘシ

第四章 銀行紙幣ノ製造及ヒ種類其通用ノ能力引換場所及ヒ燒捨等ノ事ヲ明カニス

第四十五條 此條例ヲ遵奉シテ發行スル所ノ銀行紙幣ハ大藏卿ノ命ヲ奉シ紙幣額其製造ノ事務ヲ董括シ極メテ其紙質ノ堅牢ト彩紋ノ精緻ヲ要シ深ク隱摸ノ弊ヲ豫防スルノ術ヲ

盡シテ以テ之ニ從事スヘシ但シ右銀行紙幣製造ノ入費ハ其銀行ヨリ現費ヲ以テ紙幣額ノ納ムヘシ○第四十六條 右銀行紙幣ノ種類ハ壹圓貳圓伍圓拾圓貳拾圓伍拾圓百圓五百圓ノ八種ト定メ銀行ノ望ミニ應ジテ製造下付スヘシ但シ五圓以下ノ銀行紙幣ハ其銀行發行總額十分ノ五ヨリ多カラサルヘシ○第四十七條 右銀行紙幣ノ表裏面ニハ政府ノ公債証書ヲ抵當トシテ發行スルノ旨及ヒ其他ノ要件ヲ摘載シ大藏卿並ニ出納頭記録頭ノ印ヲ鈐シ且大藏省并ニ銀行ノ記号番号ヲ捺捺シテ紙幣額之ヲ其銀行ヘ下付スヘシ而シテ銀行ニ於テハ之ニ其頭取支配人ノ名印ヲ加用スヘシ○第四十八條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル國立銀行ヨリ發行スル所ノ銀行紙幣ハ諸官廳又ハ銀行會社其他ヲ論セズ日本全國何レノ地ニ於テモ租稅運上貸借ノ取引俸給其他一切公私ノ取引ニ於テ都テ政府發行ノ紙幣同様通用スヘシ但シ公債證書ノ利息ト海關稅ニハ之ヲ用ウルヲ許サス○第四十九條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル銀行ヨリ發行スル所ノ銀行紙幣ハ其銀行ノ本店ニ於テ之ヲ引換フヘシ但シ支店ヲ設置スル銀行ハ其銀行ノ都合ニ依リ本店ノ外支店ニ於テモ亦其引換ニ從事スルヲ得ヘシ○第五十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ヨリ發行スル所ノ銀行紙幣通用ノ際其受授ヲ拒ミ或ハ之ヲ妨ケ其他不正ノ所爲ヲ爲ス者アルニ於テハ皆罰法ニ從テ之ヲ罰スヘシ○第五十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ヨリ發行スル所ノ銀行紙幣通用中敗裂汚染等ニテ通用シ難キモノアルニ於テハ其所持人ハ銀行ニ持參シテ之ヲ引換フヘシ而シテ銀行ハ之ヲ紙幣額ヘ差出シ其代リ銀行紙幣ヲ受取ルヘシ○尤右引換銀行紙幣ノ種類記号番号金額等ハ之ヲ紙幣額ノ公書及ヒ銀行ノ簿冊ニ詳明ニ記載シ其廢紙幣ハ大藏卿ヨリノ立會ヲ得テ紙幣額ハ其主任ノ官員ヲシテ銀行役員ノ立會ヲ要シ之ヲ燒捨ニ付スヘシ而シテ其趣キハ尙ホ右簿冊ニ登記シ各記名調印スヘシ但右燒捨ノ後ハ新聞紙又ハ其他ノ手續ヲ以テ其趣ヲ世上ニ公告スヘシ

第五章 銀行營業ノ本務公債証書其他ノ賣買並ニ貸附金ノ制限利息ノ制限銀行紙幣并

第十三 銀行之部

六十九

株式抵當ノ制禁及ヒ預リ金準備金等ノ事ヲ明カニス

第五十二條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ金銀ヲ(引受貸シ抵當貸シノ別ナク)貸付ク又ハ當座並ニ定規預リ金ヲ爲シ又ハ爲換ヲ取組ミ又ハ爲換手形約束手形代金取立手形其他ノ證書ヲ割引シ又ハ公債證書外國貨幣並ニ金銀銅ノ地金ヲ賣買シ及ヒ保薦預リ又ハ兩替等ノ事ヲ以テ營業ノ本務トナスヘシ○第五十三條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ本務タルヤ前條ニ掲ケル所ノ種類ナルヲ以テ公債證書ノ賣買ヲナスヲ得ルト雖モ附金預リ金爲換等ノ如キハ殊ニ銀行ノ主トシテ爲スヘキ營業ノ目的タルコトヨリ此等ノ事業ヲ經營セズシテ唯公債證書ヲ賣買ヲ專ラニスルヲ許サス○第五十四條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ前第五十二條ニ掲ケル所ノ營業本務ノ外地所家屋其他物件ノ賣買ヲ爲スヘカラス又職工作業ノ功ヲ與シ及ヒ此等ノ功ヲ與ス會社ノ株主トナルヲ許サス尤左ニ掲載スル所ノ條件ニ付テハ地所又ハ家屋物件等ヲ賣買シ又ハ之ヲ引取り又ハ之ヲ所持スル等ノ事ハ此條例ニ於テ之ヲ宥恕スヘシ但シ銀行所有ノ地所ハ勿論一般ノ地稅法ニ從フヘシ○第一 銀行ノ業ヲ營ムヘキ爲メ緊要ナル地所家屋ハ之ヲ買取り之ヲ所持シ之ヲ賣拂フヲ得ヘシ○第二 滯貸金ノ抵當トシテ賣物ニ取リタル地所物件ハ之ヲ引取り之ヲ所持シ之ヲ賣拂フヲ得ヘシ○第三 貸金返濟ノ約定日切トナリテ借主ヨリ返金ノ代リトシテ引渡サレタル地所物件ハ之ヲ引取り之ヲ所持シ之ヲ賣拂フヲ得ヘシ○第四 銀行ヨリ貸金ノ抵當又ハ賣物トナリシモノニシテ官廳ノ裁判ヲ經テ賣拂ヒトナリタルモノカ又ハ之ヲ引取りタルモノ又ハ右賣物入ノ流込ミトナリタルモノ又ハ銀行ヨリノ貸金ヲ返濟スル爲メニ賣物ニ出シタル地所物件ハ之ヲ買取り之ヲ引取り之ヲ所持シ之ヲ賣拂フヲ得ヘシ○第五十五條 前條ニ掲ケル所ノ款項中銀行營業ノ爲メ緊要ナル地所家屋ヲ除クノ外銀行ニ於テ引取り又ハ買取りタル地所物件ハ遅クモ十箇月以前ニ之ヲ賣拂フヘシ○第五十六條 此條例ヲ遵奉スル銀行ヨリ貸附ケル所ノ金額ノ制限ハ一口ニ付資本金總額ノ十分一ヲ限リトナスヘシ○第五

十七條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ貸附金ノ利息ハ年一割(元金十分ノ一)ヨリ超過スヘカラス若シ此制限ヲ超過シ不相當ノ利息ヲ要スルコトアルニ於テハ紅幣頭ハ大藏卿ヘノ稟議ヲ經テ其銀行ヲ督責シ以テ之ヲ其制限ノ割ニ合歸セシムヘシ○第五十八條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其銀行紙幣ヲ抵當又ハ賣物トシテ借金ヲナスヘカラス又其銀行ノ株式ヲ抵當ニ取リテ貸附金ヲナスヘカラス又其株主トナリ又ハ其株主トナルヘカラス然レモ貸附金ノ滞リコト銀行ノ損失トナルコトアレハ止ムヲ得ス其株主引當ニ取リ又ハ買取レトヲ得ヘシ尤其株主ハ遅クモ六箇月以内ニ於テ之ヲ賣拂フヘシ○第五十九條 此條例ヲ遵奉スル諸方ヨリノ預リ金ヲ他ヘ運轉流通スルコトハ須ラシク之カ制限ヲ立テ其預リ金總額ノ内少クモ十分ノ二五(即チ四分ノ一)ヲ引殘シ之ヲ返却ノ準備トシテ銀行ノ命庫中ニ積立置クヘシ尤内十分ノ一ノ員額ハ政府ノ公債證書ノ實價ヲ以テ積立ルヲ得ヘシ但シ此準備金ハ銀行紙幣引換ノ準備金ト混同スヘカラス○第六十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其營業ノ爲メ銀行紙幣ヲ發行スルニハ此條例第二十條ニ規定シタル準備金ノ割合ヲ超過スヘカラス若シ此ノ割合ヲ超過シテ發行スルキハ紙幣頭ハ之ヲ督責シテ速カニ其準備金ヲ増加シ規定ノ割合ニ滿タシムヘキコトヲ命スヘシ若シ此銀行ニ於テ此命ヲ受ケシ日ヨリ三十日ヲ過キテ尙ホ増加スルコトヲ怠ルキハ紙幣頭ハ其銀行ノ開業免狀ヲ取上ケ跡引受人ヲ命スヘシ○第六十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ニ於テ銀行紙幣ノ引換或ハ預リ金ノ返濟又ハ爲換手形約束手形ノ仕掛チナフニ當リ兼テ積蓄キタル準備金ヲ以テ右ヲ償フコト能ハサルハ其銀行ノ株主等ハ各其所持ノ株數ニ應ジ別ニ出金シテ一時之ヲ償辨スルノ責ニ任スヘシ但シ此出金ハ全ク一時償辨ノ爲メニシテ其株主ト異ナルヲ以テ其銀行ハ速カニ之ヲ各株主ヘ返濟スヘシ

第六章 銀行名号ノ掲牌社員ノ書體並ニ諸手形ニ於ケル銀行ノ負債所有物ノ明細帳及

營業時間等ノ事ヲ明カニス

第六十二條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ讀易キ書體ヲ以テ其名号ヲ掲牌ニ記載シ之ヲ其銀行ノ店前最モ見易キ所ニ掲クヘシ其社印ノ彫刻ヨリ諸報告並ニ諸公告諸証書諸手形諸切手ノ類ニ至ル迄凡其名号ヲ用フル所ノモノハ亦同シク讀易キ書體ヲ用フヘシ○第六十三條 此條例ヲ遵奉スル銀行若シ前條ノ如ク其社号ヲ掲ケサルキハ銀行ハ其時間一日ニ付五圓ヨリ多カラサル罰金ヲ納ムヘシ且其頭取取締役及ヒ支配人タルモノ知テ之ヲ爲サシメ或ハ故ラニ之ヲ見逃スニ於テハ是亦不問額ノ罰金ヲ納ムヘシ若シ又銀行ノ頭取取締役支配人其他ノ役員又ハ何人ニテモ前條ノ如ク彫刻セサル社印ヲ用ヒ或ハ人ヲシテ之ヲ用キシメ又ハ前條ノ規定ニ悖リタル社号ヲ以テ報告書ヲ出シ或ハ之ヲ出サシメ又ハ爲換手形約束手形切手証書注文書受取証書受合票等ニヨリ迄凡ソ其名号ヲ用フル者前條ノ規定ニ悖リテ記名調印シ又ハ記名調印セシムルキハ拾圓ヨリ少ナカラス五十圓ヨリ多カラサル罰金ヲ納メシメ且右等爲替手形約束手形切手注文書等ニ記載スル所ノ金額ヲ銀行ヨリ拂渡サハルキハ其規定ニ悖リタル役員等ハ自費ヲ以テ右持主ヘ辨償スルノ責ニ任スヘシ○第六十四條 此條例ヲ遵奉スル銀行其名号ヲ以テ爲替手形約束手形ヲ振出シ又ハ之ヲ引受ケ又或ハ之ニ裏書シタルモノ、如キハ假令ヒ右等之取扱ヒ何人ノ手ニ出ルト雖モ此入荷モ其銀行ノ命任ヲ受ケタル者ニ相違ナキニ於テハ一切之ヲ其銀行ノ爲メニ取扱ヒシ者ト見做スヘシ○第六十五條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其所有財產(動產不動產ノ別ナシ)ノ種類員數ハ勿論其受授買賣及ヒ質入書入委託其他ニ於ケル一切ノ事件ヲ記載セル簿冊ヲ製シ右等ノ舉アル毎トニ其事由並ニ其種數員數及ヒ質預人又ハ受託人等ヲ遺漏ナク其時々頭取々締役等之ニ捺印シ當ニ其銀行ニ備ヘ置キ以テ債主及ヒ株主等ノ檢閱ニ供スヘシ○若シ前段ノ記載ナシシテ銀行其所有財產ヲ質入書入シ又ハ之ヲ委託スル等ノ事アルニ當テ其銀行ノ頭取々締役支配人等知テ之ヲ檢査キ又ハ之ヲ故サラニ見逃スニ於テハ右役員ハ五拾圓ヲ除ヘサル罰金ヲ納ムヘシ但シ右所有財產ノ簿冊ハ即チ其事件ノ正確ナル證據トシテ何レノ裁判所何レノ官廳ニ於テモ採用セララル、ヲ得ヘシ○第六十六條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ營業時間ハ其本店支店共定式(又ハ臨時)休暇日ヲ除クノ外毎日午前第九時ヨリ午後第三時迄タルヘシ尤銀行ノ都合ニ依リ紙幣頭ノ承認ヲ得ルニ於テハ其營業時間ヲ變更スルヲ得ヘシ而シテ其趣キハ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告スヘシ但シ爲換並ニ預リ金等ノ仕拂期日若シ定式(又ハ臨時)休暇日ニ當ルモノハ其翌日之ヲ仕拂フヘシ

第七章 株主總會ノ定期並ニ格段決議ノ順序諸簿冊ノ點檢及ヒ檢査ノ手續諸報告差出方等ノ事ヲ明カニス

第六十七條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ總會ハ每年少クトモ兩度之ヲ執行スヘシ尤臨時ノ事件ヲ評決センカタクメ執行スル所ノ臨時總會ハ此ノ限ニアラス○第六十八條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ社中ノ總會ニ於テ次條ニ掲載セル方法ヲ以テ執行シ格段決議ニ於テハ其銀行定款中ニ記載シタル事件箇條ヲ變更訂正スルヲ得ヘシ○第六十九條 凡ソ社中評決スヘキ事件アリテ其議案ヲ出シ其銀行株主臨席ノ總員(本人代人ヲ論セス)四分ノ三以上ノ同意ヲ以テ一旦其大休ヲ決定シ其旨趣ヲ詳述シテ之カ報告ヲナシ後十四日以外一箇月以內ノ時日ニ於テ更ニ執行スル所ノ總會ニ於テ其臨席シタル株主總員ノ同意セル發言投票ノ多數ヲ以テ其事件ヲ確定スル者之ヲ格段決議ト稱スヘシ○第七十條 凡格段決議ニ於テ確定シタル事件ハ其趣旨顛末ヲ記載シタル書附ヲ刊行シ又ハ謄寫シテ右確定ノ日ヨリ日數十五日(郵便遞送日數ヲ除ク)ノ内ニ之ヲ紙幣頭ヘ差出シテ其承認ヲ受クヘシ○若シ銀行前段ノ書附ヲ右期日內ニ差出スコトナシタルハ右ノ日數以後(即チ十六日目ヨリ)ハ怠慢時間一日ニ付十圓ヲ越エサル罰金ヲ納ムヘシ且額取取締役等故サラニ之ヲナサシメ又ハ知テ之ヲ見逃セシキハ是亦右同額ノ罰金ヲ納ムヘシ○第七十一條 凡格段決議ニ於テ確定シタル事件ニシテ(此條例第四條第六條ニ準據シ)現ニ之ヲ施行スル者ハ

第十三 銀行之部

七十三



右ノ事件ヲ正シク記載シタル寫ヲ各株主ニ分賦スヘシ○若シ銀行此ノ簡條ヲ遵奉セズシテ詐偽ヲ記載スルカ又ハ寫ヲ分賦セサルニ於テハ右寫一通ニ付五圓ヲ越サル罰金ヲ納ムヘシ且頭取取締役等故ヲニ之ヲ爲サシメ又ハ知テ之ヲ見逃セシムハ是亦右同額ノ罰金ヲ納ムヘシ○第七十二條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ株主タル者ハ其銀行ノ營業時間中ナレハ何時ニテモ其銀行實際記入ナル所ノ諸簿冊及ヒ報告計表ヲ點檢スルヲ得ヘシ○若シ銀行此簡條ヲ遵守セズシテ株主ノ點檢ヲ拒ムキハ五圓ニ越ヘサル罰金ヲ納ムヘシ且頭取取締役支配人等故サラニ之ヲ爲スカ又ハ知テ之ヲ見逃スキハ右同額ノ罰金ヲ納ムヘシ○第七十三條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ營業實際ヲ詳知監督スル爲メ紙幣頭ハ大藏卿ヘノ稟議ヲ經テ定例臨時ノ別ナク官員ヲ派遣シ銀行一切ノ業体ヲ檢査セシムヘシ但シ紙幣頭ハ臨時ノ別ナク檢査セシムルコトアルヘシ尤右檢査ニ從事シタル地方官ハ其檢査シタル旨趣ヲ詳記シ速カニ之ヲ紙幣頭ニ報告スヘシ○第七十四條 右檢査ノ官員ハ各銀行ノ本店又ハ支店トモ其營業時間中ナレハ何時ニテモ其用所ニ至リ詳密ニ其簿冊計表其他銀行一般ノ業体ヲ檢査シ其銀行役員ノ處務此條例成規ニ規定スル所ノ簡條ヲ遵守スルヤ否ヤヲ觀察シ而シテ其檢査ノ實況ト考察ノ趣旨ヲ書面ニ詳記シ之ヲ紙幣頭ニ差出スヘシ○第七十五條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ總務五分以上ヲ所持スル株主等ヨリノ請願アルニ於テハ紙幣頭ハ官員ヲ命遣シ或ハ其管轄地方官ニ依托シ其銀行一切ノ業体ヲ檢査セシムルコトアルヘシ但シ其檢査ノ實況ト考察ノ旨趣ハ之ヲ書面ニ認メ紙幣頭ニ差出ヘシ而シテ紙幣頭ハ其寫ヲ其銀行ノ本店並ニ此ノ檢査ヲ請願セシ株主等ニ下付スヘシ○第七十六條 此條例ヲ遵奉スル銀行此條例第七十三條第七十五條ニ規定スル所ノ檢査官員ノ檢査ヲ除クノ外他ノ檢査ハ一切之ヲ受ケサルヘシ尤諸官廳ノ職掌上ニ於テ國法ヲ以テ檢査スルカ如キハ此限ニアラス○第七十七條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ半季及ヒ毎月其事務計等ノ

實際詳明ナル考課狀並ニ報告計表(成規第六十六條ニ規定スル所ノ種類)ヲ製シ本店ハ頭取支配人支店ハ支配人並ニ計算方之ニ記名調印シテ之ヲ紙幣頭ニ差出スヘシ尤其書式ハ紙幣頭ノ指圖ニ從フヘシ但シ右半季報告計表ハ銀行ヨリ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ之ヲ世上ニ公告スヘシ○第七十八條 右定例報告計表ノ外紙幣頭尙ホ要用ト思考スルコトアレハ銀行ニ命シテ臨時報告計表ヲ差出サシムルコトアルヘシ○若シ銀行ノ頭取取締役支配人等右定例或ハ臨時ノ報告計表ヲ怠リ紙幣頭ノ命スル日ヨリ(郵便遞送日數ヲ除ク)十日以内ニ差出サ、ルキハ十日外(即チ十一日ヨリ)ハ一日ニ付五十圓ヨリ少ナカラズ百圓ヨリ多クサル罰金ヲ納ムヘシ

第八章 利益金分配ノ方法及ヒ積金割合ノ規定ヲ明カニス

第七十九條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役等ハ半季毎ニ其銀行ノ總勘定ヲナシ其總益金ノ内ヨリ諸雜費並ニ損失補償ノ金額及ヒ滯貸金ノ金額(若シ之アラハ)ヲ引去リ其餘ヲ以テ純益金トナシ又此内ヨリ次條ニ規定セル積金ヲ引去リ其餘ノ金額ヲ以テ總株主ニ分配スヘシ○尤右利益ノ計算ハ株主ニ分配セサル前十日以内ニ(郵便遞送日數ヲ除ク)紙幣頭ニ差出シ其承認ヲ得テ後之ヲ株主一同ニ通知シ且新聞紙ヲ以テ世上ニ公告シ而シテ之レヲ株主一同ニ分配スヘシ但シ借カナル抵當物或ハ確實ナル引受人アル貸附金ヲ除クノ外其返済期限ヲ過クルコト六ヶ月以上ニ及フ者ハ都テ之ヲ滯貸金ト看做スヘシ○第八十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其資本金額十分ノ二ニ至ルマテ每半季其純益金ノ内ヨリ少ナク十分ノ一宛ヲ引分ケテ積金トナシ以テ非常ノ豫備ニ供スヘシ○右積金一旦十分二ノ員額ニ至ルノ後若シ損耗其他ノ事故アリテ右割合ノ金額ヨリ減少スルキハ尙ホ其後每半季純益金ノ内ヨリ少ナク十分ノ一宛ヲ積立到底右十分二ノ員額ニ復スヘシ

第九章 銀行ハ官廳ノ爲換方ニ從事スルコト及ヒ外國銀行ト聯合スヘカラサル事ヲ明カニス

第十三 銀行之部

第八十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其前常營業事務ノ外大藏卿ノ命令ニ依リ大藏省又ハ各地方官廳其他ノ爲換方ヲ勤ムルヲ得ヘシ尤其勤方ノ手續ハ爾時大藏卿ノ考案ニ依リ其筋ヨリ命スル所ノ規定ヲ奉シ以テ之ニ從事スヘシ○第八十二條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ大藏卿ノ命令ヲ奉スルカ或ハ其免許ヲ得ルカニ非レハ内外地ニ設置スル所ノ外國ノ銀行ハ勿論本邦ノ銀行(又ハ交換所等)ト雖凡ソ海外ニアルモノト相共ニ聯合シ以テ爲換ヲ取組又ハ其他ノ營業ニ從事スルヲ得サルヘシ

第十章 銀行役員職務上一般ノ制禁及ヒ其負責ノ事ヲ明カニス

第八十三條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役タル者ハ自ラ此條例ノ簡條ニ戻ルヘカラス或ハ銀行ノ役員其他ノ者ヲシテ之ニ戻ラシムヘカラス若シ背戻 事アルニ於テハ此條例ニ於テ其銀行ニ附與シタル所殊ノ權利ハ悉ク之ヲ取上クヘシ但右頭取取締役此條例ニ背戻スルキハ紙幣頭ハ其裁判所(又ハ其府縣ノ聽斷主任官員)ニ通達シテ之ヲ推止シ其罪ノ實アルニ於テハ即チ其銀行ヲ鎖店セシムヘシ○第八十四條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役等若シ此條例ニ違背スルヲアリテ夫レカ爲メ株主其他ノ人ハ損失ヲ受ケシムルキハ其損失ハ頭取取締役等之ヲ償辦スルノ責ニ任スヘシ○第八十五條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役支配人其他ノ役員タル者ハ銀行所有ノ金銀及ヒ諸証書預ル品等ヲ私用シ又ハ汚用シ又ハ之ヲ妄用スヘカラス又頭取取締役ノ承認ヲ得スシテ銀行紙幣及ヒ預リ証書ヲ發行シ又ハ諸貸付ヲナシ爲換手形ヲ振出シ又ハ証書及ヒ切手ノ引受ケヲナシ約束手形爲換手形諸証書及ヒ質物ニテ公裁ニテ引取タル者ヲ賣渡スヘカラス又銀行ノ諸簿冊計表報告書其他ノ要書ニ詐偽ヲ記載スヘカラス若シ右ノ簡條ヲ犯シテ其銀行又ハ他ノ銀行會社其他ノ者ヲ欺騙シ又ハ其銀行ノ役員或ハ檢査官員ヲ欺カント謀ル者ハ皆ナニ國法ニ從テ之ヲ罰スヘシ○第八十六條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役支配人其他ノ役員ハ社中申合せ規則ノ規定ニ從ヒ尋常借リ得ヘキ金額ノ外ハ自分又ハ仲人等ヲ以テ

一切銀行ヨリ借受クヘカラス又其銀行ヨリ借財ヲ爲ス者ノ爲メ其証人又ハ受人トナルヘカラス○若シ右等ノ役員右ノ規定ニ背戻シテ借財ヲ爲シ又ハ証人受人トナリ又ハ人ヲシテ之ヲ爲サシメ又ハ之ヲ承諾スル等ノ事アル時ハ此等ノ役員ハ十圓ヨリ少ナカラス五拾圓ヨリ多カラサル罰金ヲ納ムヘシ且其借財ノ金額ハ其規定ニ背戻セシ者ヨリ速カニ銀行ヘ返還スヘシ○第八十七條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役支配人其他ノ役員タル者ハ其銀行ノ名ヲ假リ以テ自己ノ利益ヲ圖ルハ勿論總テ私用ヲ辨スヘカラス若シ此等ノ役員之ヲ犯シ又ハ人ヲシテ犯サシメ又ハ知テ之ヲ見逃ス者ハ皆ナ國法ニ從テ之ヲ罰スヘシ

第十一章 紙幣及ヒ諸手形類ノ發行并ニ銀行紙幣ノ贋造描改及ヒ其版彫刻等禁止ノ事ヲ明カニス

第八十八條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル國立銀行ヲ除クノ外何人又ハ何會社ヲ論セス凡テ紙幣又ハ望次第持參人ヘ仕拂フヘキ約束手形又ハ右類似ノ証書其他政府發行ノ貨幣同様に通用スヘキ諸手形又ハ切手ヲ振出シ其引受ケヲナシ之ヲ製シ之ヲ發行スルヲ禁ス若シ之レ等ノ數件ヲ犯ス者アル於テハ何人ヲ論ヒス皆ナ國法ニ從テ之ヲ罰スヘシ○第八十九條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ヨリ發行スル銀行紙幣ハ何人ヲ論セス之ヲ贋造スヘカラス又ハ之ヲ贋造セシムヘカラス又ハ之ヲ通用セシムヘカラス又ハ其父字畫圖ヲ描改スヘカラスト知テ之ヲ通用スヘカラス又ハ之ヲ描改スルヲ助ケ又ハ之ヲ勸ムヘカラス描改セシ紙幣ト知テ之ヲ通用スヘカラス又ハ之ヲ通用セシムヘカラス○第九十條 右銀行紙幣ヲ印刷スルニ用ウル版板又ハ之ニ類似スル者ハ之ヲ私ニ彫刻スヘカラス又ハ私ニ彫刻シ命スヘカラス又右銀行紙幣ニ用ウル所ノ紙品又ハ之ニ類似スル紙品ハ之ヲ私ニ製スヘカラス又ハ人ヲシテ之ヲ製セシムヘカラス又ハ私ニ之ヲ所持スヘカラス若シ前第八十九條及ヒ本條ノ數件ヲ犯ス

者アルニ於テハ皆ナ國法ニ從テ之ヲ罰スヘシ○第九十一條 此條例ヲ違奉スル銀行ヨリ發行シタル銀行紙幣又ハ爲換手形約束手形其他諸証書ノ類ハ何人ニ限ラス之ヲ切抜キ又ハ切裂キ又ハ剝去リ又ハ塗抹シ又ハ孔ヲ穿チ又ハ糊付ニスル等ノ事ヲナスヘカラス又ハチシテ此等ノ事ヲナサシムヘカラス若シ此等ノ數件ヲ犯ス者アルキハ其裁判所(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)ニ於テ之ヲ裁判シ其金高十倍ノ罰金ヲ銀行ヘ拂ハシムヘシ

第十二章 銀行ニ於テ其紙幣引換ヲ拒ミシ時ノ處分特例監督役跡引受人等ノ取扱方并ニ公債證書ノ没入及ヒ紙幣引換等ノ事ヲ明カニス

第九十二條 此條例第六十六條ニ規定スル銀行ノ營業時間中其發行紙幣ヲ其本店又ハ支店(銀行紙幣引換ノ事務ヲ取扱フ)ニ持參シテ通貨ト引換ヘテ望ム者アルキ其本店又ハ支店ニ於テ之ヲ拒ミ又ハ之ヲ怠リテ其引換ヲ爲サハルニ於テハ右紙幣ノ持主ハ其趣キヲ書面ニ認メ之ヲ其管轄地方官廳ヘ差出シ其銀行ヘ掛合ヒ方ヲ乞フヘシ○尤頭取取締役其掛合方ヲ止ントスルキハ其引換ヲ拒ミシ趣旨及ヒ其金額月日等ヲ書面ニ認メ頭取又ハ取締役之ニ記名調印シテ之ヲ紙幣持主ヘ渡スヘシ然ルキハ其持主ハ其書面ヲ地方官廳ヘ差出スノミニシテ別ニ銀行ニ掛合方ヲ乞ハサルヘシ但シ預リ金ノ返却ヲ拒ミ又ハ怠リタル時モ亦其預ケ主タル者ハ本條ニ準シテ申請スルヲ得ヘシ○第九十三條 右地方官廳ニ於テ紙幣持主ヨリ銀行ヘ掛合方ノ書面ヲ領受スルキハ直チニ其銀行ヘ掛合フヘシ而シテ其掛合狀及ヒ持主ヨリ差出シタル書面ノ寫ヲ紙幣頭ヘ送達シテ其由ヲ報知スヘシ尤紙幣持主ヨリ頭取又ハ取締役ノ調印シタル書面ノミヲ受取タルキハ唯タ其書面ヲ紙幣頭ヘ送致スルノミニシテ銀行ニ掛合フニ及ハサルヘシ但シ紙幣頭ヘ報知セシ書面ノ寫ハ其地方官廳ヘ藏メ置クヘシ○第九十四條 右地方官ノ報知ヲ得ルニ於テハ紙幣頭ハ速カニ檢査ノ官員ヲ命遣シ其實事ヲ推知シ其背戻ノ事實相違アラサルキハ都テ其銀行ノ營業ヲ差止メ金銀其他ノ出納ヲ禁スヘシ○第九十五條 前條ノ如ク營業ヲ差止ラレタル銀行ノ頭取取締

役支配人其他ノ役員ハ諸手形諸証類又ハ抵當物地所等ヲ他人ヘ讓渡シ又ハ賣渡ス可カラズ又他人ヨリ金銀其他ノ物件ヲ預ルヘカラス若シ頭取取締役支配人其他ノ役員等此箇條ニ背キ或ハ讓渡シ又ハ賣渡シ又ハ預リ又ハ拂方ノ引受ヲ爲スアルニ於テハ紙幣頭ハ督促シテ其金額ヲ償ハシメ之ヲ其元ニ復セシムヘシ○第九十六條 紙幣頭ハ更ニ大藏卿ヘ稟議シ特例ノ監督役ヲ命遣シ其銀行ノ實際該般ノ取扱ヲ推究シテ其實事ヲ詳明ニ報知セシムヘシ而シテ其背戻ノ事實相違ナキニ於テハ紙幣頭ハ其銀行ヨリ出納寮ニ預ケ置キタル公債證書ヲ没入スヘキ旨(右報知ヲ得タル日ヨリ卅日以内ニ)申渡シ其公債證書ヲ取上クヘシ○第九十七條 右諸般ノ手續了リシ後紙幣頭ハ大藏卿ヘ稟議ヲ經テ凡此銀行ノ紙幣ヲ所持スル者ハ總テ之ヲ大藏省ニ出シテ其引換ヲ乞フヘキ旨ヲ公告シ相當ノ時日ヲ以テ之ヲ引換遣ハスヘシ而シテ其引換ヘタル紙幣ハ總テ此條例第五十一條之手續ニ從ヒ之ヲ燒捨テ其趣キヲ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告スヘシ○第九十八條 紙幣頭ハ出納頭債頭ノ兩頭ニ協議シ此條例第九十六條銀行ヨリ没入スル所ノ公債証書ヲ通貨又ハ其銀行紙幣ヲ以テ公賣又ハ私賣トモ爾時大藏省ノ便宜ニ從ヒ之ヲ世人ニ賣渡スヘシ尤其趣キハ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告スヘシ○第九十九條 此條例第九十六條ニ掲クル所ノ特例監督役ノ報知ヲ得之カ處分ヲナスニ於テハ紙幣頭ハ即チ右銀行ノ跡引受人ヲ命シ其銀行ノ諸簿冊及ヒ各種ノ資産等ヲ取押ヘ諸貸附金立替金ヲ取立タル上ニテ其裁判所(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)ニ謀リテ滞リ貸金類及ヒ銀行ノ所有物ヲ賣拂ヒ其集合金ヲ以テ其銀行ノ諸借財又ハ預リ金其外ヲ償却シ過金アレハ株高ニ應シテ之ヲ株主ヘ割返シ不足アレハ都テ銀行ノ株高及ヒ其所有物ヲ限リテ相當ノ分散ヲナサシムヘシ○第一百條 右借財又ハ預金等ヲ償却スルニハ紙幣頭ヨリ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ三箇月間世上ニ公告シ其銀行ニ貸金預ケ金等アル者ハ右時限中ニ申出シメ其事由ト証書類トヲ檢案シ紙幣頭ハ厚ク之ニ注意シ適正ノ處分ヲ以テ貸方ニ賦當償却スヘシ○第一百一條 此條例

第十三

銀行之部

ヲ遵奉スル國立銀行ノ株主等ハ仮令其銀行ニ損失又ハ其他ノ事故アリテ其銀行鎖店分散  
 スルコトアルハ其株主等ハ其創立證書ニ於テ掲載シタル株式金額等ノミヲ損失スルノ外其  
 鎖店分散ニ付テ別ニ賦當出金ヲ受クルノ責メ勿カルヘシ○第百二條 紙幣頭ハ此條例第  
 九十六條ニ掲ケル所ノ處分ヲナスニ際シ其銀行ヨリ尙ホ請願スルコトアリテ其狀實ヲ具陳  
 スル時ハ監督役ヲ出セシヨリ卅日以内(郵便遞送日數ヲ除ク)ナラハ其地方官廳ニ謀リ  
 更ニ其實況ヲ詳悉シテ全ク其背戻セサルノ實証アルニ於テハ紙幣頭ハ之ヲ大藏卿へ稟議  
 シ而シテ之ヲ宥恕スヘシ尤右ノ請願書ハ必ス其地方官廳ヲ經テ之ヲ紙幣頭へ差出スヘシ  
 但シ此宥恕ヲナス時ハ紙幣頭ハ速カク其趣ヲ出張ノ監督役ニ達シテ暫ク其處置ニ取掛  
 チ見合セシムヘシ○第百三條 此條例第九十二條ニ掲載スルカ如ク銀行紙幣ノ引換或ハ  
 預リ金ノ返濟ヲ拒ミ之カ爲メ生スル處ノ費用即チ紙幣持主或ハ預ケ金アル者ノ出願入費  
 及ヒ諸檢査推糺ノ入費跡引受人ノ入費等ハ都テ相當ノ處分ヲ以テ紙幣頭之ヲ取極メ其銀  
 行ヨリ之ヲ辨償セシムヘシ

第十三章 銀行平穩鎖店ノ手續及其紙幣引換方等ノ事ヲ明カニス

第百四條 此條例ヲ遵奉スル銀行三分二以上ノ株主等ノ協議ニ從テ平穩ニ分散又ハ鎖店  
 セントスルコトハ其銀行ノ頭取支配人ヨリ其銀行ノ名印ヲ以テ其決議ノ旨趣ヲ紙幣頭ニ申  
 牒シ其承認ヲ得テ後チ三箇月間新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告シ發行紙幣ノ引換方  
 其他銀行ニ屬スル取引ノ精算ヲ詳載シタル報告ヲ製シテ之ヲ世上ニ公告スヘシ○第百五  
 條 右ノ公告ヲ爲シタル日ヨリ其銀行ハ其引換ヘタル銀行紙幣ヲ以テ豫テ出納察ニ預ケ  
 置キタル公債証書ノ内ヲ取戻スコトヲ得ヘシ尤其公告ノ日ヨリ半箇年ヲ過キ其銀行ノ簿冊  
 上ニ於テ尙ホ世上殘在スル銀行紙幣アルコトヲハ其員額丈ケノ通貨ヲ出納頭ニ差出シ右  
 預ケ置キタル公債証書ノ全額ヲ取戻スコトヲ得ヘシ然ル上ハ其銀行紙幣ノ世上ニ殘在スル  
 分ハ大藏省ニ於テ之ヲ引換ヘ銀行ノ株主等ハ一切其引換ノ責ニ任セサルヘシ○第百六條

右鎖店シタル銀行ヨリ其殘在銀行紙幣引換ノ爲メ通貨ヲ差出スニ於テハ出納頭ハ之ヲ  
 領受シ其趣キヲ詳記シタル受取証書ヲ製シ之ヲ其銀行へ下付スヘシ但シ出納頭ハ右受取  
 証書ノ外ニ預リ証書ヲ製シテ之ヲ紙幣頭へ回附シ置キ其殘在銀行紙幣引換ノ爲メ右通貨  
 ノ受取方ヲ要スルニ於テハ何時ニテモ之ヲ紙幣頭へ渡スヘシ○第百七條 右預リ証書ヲ  
 受領スルニ於テハ紙幣頭ハ大藏卿ノ稟議ヲ經テ相當ノ期限ヲ定メ新聞紙其他ノ手續ヲ以  
 テ之ヲ世上ニ公告シ其殘在銀行紙幣ノ引換方ニ從事スヘシ○第百八條 右ノ手續ヲ以テ  
 引換ヘタル銀行紙幣ハ此條例第五十一條ノ規定ニ從テ之ヲ燒捨シ其趣ヲ世上ニ公告スヘ  
 シ尤右ニ屬スル諸計算其外トモ紙幣頭國債頭出納頭ハ各其簿冊ニ詳記スヘシ

第十四章 銀行訴訟ノ取扱及ヒ罰金處分ノ事ヲ明カニス

第百九條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル銀行若シ他ノ會社又ハ一般ノ人民ヲ相手取り訴  
 訟スルカ又ハ他ヨリ此銀行ヲ相手取り訴訟セラル、キハ都テ一般ノ訴訟法ニ從ヒ其裁判  
 所(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)之ヲ裁判處分スヘシ○第百十條 此條例ニ於テ規定セル罰  
 金ヲ以テ處置スヘキ罪科ニ付テハ裁判所(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)之ヲ裁判處分スヘシ  
 但シ此條例中現ニ罰金ノ明文無キ箇條ヲ犯スコトアルキ其時ニ當リ其裁判所(又ハ府縣  
 ノ聽斷主任官員)ニ於テ相當ト思考スル罰金(三圓ヨリ少ナカラズ五拾圓ヨリ多カラサル  
 額數)ヲ右犯罪ノ銀行又ハ頭取取締役其他ノ役員ニ命スヘシ

第十五章 銀行納稅ノ事ヲ明カニス

第百十一條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル銀行ハ追テ政府ニ於テ製定施行スル所ノ收稅  
 規ニ遵ヒ相當ノ稅金ヲ納ムヘシ

第十六章 條例ノ更正及ヒ廢止ノ事ヲ明カニス

第百十二條 此國立銀行條例ハ政府ノ都合ニ依リ要用ノ事アレハ何時ニテモ之ヲ増補シ  
 又ハ之ヲ更正シ又或ハ之ヲ廢止スルコトアルヘシ若シ右増補其他ノ節ハ直チニ其由ヲ世上

第十三 銀行之部